

「君の名は？！ ジャギ！！」略して「君ジャギ」

西…

日夏孝朗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

君の名は。

オレの名を言ってみろ。

「北斗の拳」と「君の名は。」のコラボな二次作品です。

両作品とも大好きですが、アンチ・ヘイトともとれる表現もあります。

作品のイメージを大切にされたい方は読まないでください。

目次

第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
230	167	138	102	66	37	17	1

第1話

「君の名は?! ジャギ!!」略して「君ジャギ」

西暦2020年、高校2年生の宮水四葉は89才になる祖母に揺り起こされて目を開けた。

「そろそろ起きんしゃい」

「…うう…」

四葉は可愛らしい声で、可愛くない仕草で、頭痛がする頭を押さえた。テイヤマト彗星の落下から7年、吹き飛んだ自宅を建て直すまでの仮住まいとして、高校にほど近い空き家に住んでいる。日本建築の和室で和布団に包まれていた四葉は可愛らしい顔を、大きく歪めて呻く。

「痛え……いつもの痛みと違うぜ……これは…」

「あんた……四葉やないね」

一葉は7年前にも上の孫娘に起こった現象を覚えていて、すぐに悟った。

「ああん? なんだ、この婆ア?」

四葉は起き上がると、一葉を睨みつけた。もう明らかに、いつもの四葉でないと誰の目にもわかる。

「婆ア、てめえ、死にたいか?」

「……」

一葉は少し考え、部屋にある鏡を指した。

「まずは鏡で自分の顔を見てみいや」

「っ! 貴様ア!! このオレの顔をっ!!」

四葉は立ち上がって一葉を見下ろそうとして、あまり身長差がないので、少し戸惑う。

「おっ? …婆アのくせに、デカイ婆アだな」

「それは、きつと、あんたが縮んどるんよ」

「なんだとお?!」

四葉は可愛らしい顔を、憎らしく歪め、一葉の頭髪をつかんで全身

を持ち上げようとしたけれど、腕力が足りずに一葉に手を払われた。

「こ、このオレ様の手を…っ?! な、なんだ、この手は…」

四葉は自分の手を見て愕然としている。

「この、ひ弱そうな手が…オレの…」

四葉は手のひらを見つめ、握ったり開いたりしている。

「まあ、落ち着いて聞きたいや。あんたは入れ替わったんよ」

「ああん?! やはり貴様、死にたいようだな。婆ア、オレの名を言ってみろ」

「…それを教えてもらえるとありがたいんよ。うちは宮水一葉います」

「そうか、お前、死にたいのか」

「案外と長生きでの。来年90になるんよ、あんたは、いくつのお人やったの?」

「もう一度だけチャンスをやろう! オレの名をいつてみる!」
「……………」

一葉は日本語を話しているのに、どうにも話が通じないので困った。四葉がパジャマの前を大きくはだけさせた。

「お前、オレの胸の傷をみても誰だかわからねえのか?」

「…………四葉…………可哀想に…………それ、絶対、外でせんといたってや」

一葉は少し涙ぐみ、ぷるんと可愛らしく成長した孫娘の乳房から目をそらした。そして、手鏡を取ると、四葉に向ける。

「まずは、お顔を見て、状況を知ったてや」

「なっ?!」

四葉は鏡に映る自分の顔を見て、再び驚愕する。

パシっ…ペタペタ…

手で自分の顔を触り、確かめている。

「な、なんだ、この女みてえな顔は?!」

「それが、今のあんたよ」

「この手…………この声…………っ、胸の傷もねえ! どうなってやがるんだ?!」

「せやから、あんたは、うちの孫、宮水四葉と入れ替わったんよ」
「黙れ婆ア!!」

四葉は威嚇するために拳を壁に叩きつける。

ドンっ!! グキっ…

「ぐっ…うう…痛えええ…こんな薄い壁に…」

叩きつけたときの自己イメージでは壁を粉砕するつもりだったのに、四葉は手首を捻挫して、かなり痛い思いをしていた。木造住宅の壁は少し凹んでいるけれど、四葉の手首は腫れてきている。

「四葉の身体を大事にしたってな」

「このオレ様の腕が…筋肉が…こんな、ひ弱な…」

四葉は腕や胸、お腹を触ってプルプルと震えている。

「戻れる方法はあるさかい、まずは落ち着いて、顔を洗ったってや」

「……………」

「こつちよ」

もう威嚇するのはやめてくれたので一葉は洗面所へ四葉を案内した。

「ほな、これが四葉の歯ブラシやけど…まあ、本人のもんやし、使こたって」

「……水道? おい、婆ア、ここは水道が使えるのか?」

「こんなド田舎でも、水道は使えるさかい。ほれ」

一葉が水道をひねると、水が流れ、四葉は感動した。

「水だ……………こんなに透き通った水が……………蛇口から簡単に……………」

「あんた、どこから来たんよ?」

「ここは、どこだ?」

「岐阜県やよ」

「岐阜だあ……………オレ様は関東あたりにいたはずだぞ」

「せやから、うちの孫と入れ替わつとるんよ。身体と心が」

「わ……………わけのわからねえことを…」

「まあ、顔を洗いいや。寝癖も、ちゃんと直したってな」

「ちっ……………」

舌打ちしたものの四葉は透き通った水に手を伸ばすと顔を洗った。

「……はあ……気持ちいいぜ……何年ぶりだ……」

「……………。タオル、ここにあるよ」

「おう」

顔を洗った四葉は寝癖のついた髪を手櫛で整える。オールバックに撫でつけた。一葉は大胆なオールバックになった孫娘を見て、タメ息をつく。

「まあ、今は、それでもええわ。朝ご飯を食べながら、細かいこと話ささかい、落ち着いて聞いたってな」

「……………」

四葉はお腹を撫でた。そして、天井を見上げる。

「電灯がついてる………ここには電気もあるのか？」

去年、節電のためにLED球にかえた電灯が洗面所を明るく照らしている。一葉は田舎暮らしという自覚はあったけれど、いくら何でもバカにされている気はするものの、相手の性格が乱暴そうなのは、もう十分にわかったので無難に答える。

「まあ、昔はダム建設に反対した地区も近くにあったよって、電化は遅れたけど、今は普通にあるよ」

「電気が……………」

四葉はスイッチを押して電灯をつけたり、消したりしている。

「こっち来てや」

「…おう……。……畳か、久しぶりだな……」

四葉は案内された和室の畳に座ると、懐かしそうに撫でた。

「いい感触だ……………」

「……………。ともかく、ご飯を食べんしやい」

「あ、ああ。……米か……米も作ってるのか？」

「わずかな平地しかないけれど、田んぼも少しあるんよ。衝撃波と降り積もった灰のせいで、何年も満足に収穫できんかったけれど、三年ほど前からようやくやくやね」

「そうか……………、美味しい……………」

四葉は箸を使って、白米を食べると噛みしめた。不意に町内放送が

始まり、壁掛け式の放送機器が音声を流してくる。

(こちらは糸守町選挙管理委員会です。現在、告示されております町議会議員選挙立候補者の政見放送をお送りします。今朝は勅使河原三葉さんから……)

「あのバカ娘が……」

苦虫を噛み潰したような顔で一葉は放送機器の音量を最小にした。

「選挙だあ？　ここでは選挙なんかで支配者を決めているのか？」

「くだらんことや、気にせんでええよ」

「ああ、くだらねえな」

そう言いつつ、四葉は美味しそうに鯖の塩焼きを頬張っている。一葉は静かな声で語りかけた。

「そんなことより、落ち着いて聞いてな。あんたは身体が入れ替わった。けど、そう長いことやない。そのうち、自然と戻るさかい、それまでは宮水四葉として生活してやってほしいのよ。学校にも行って、ごく普通に」

「学校まであるのか……」

「あと、あんたの名前、教えてくれる？」

「オレの名を聞きたいか？」

「……一応」

「オレ様は一子相伝の北斗神拳唯一の伝承者のケンシロ……いや、ジャギだ」

「ジャギさんやね。名字は？」

「北斗ジャギ」

「北斗ジャギさん……一子相伝か……あんたも、大変な家のお人なんかもしれんね。うちの神社も三葉が、ああなったからには、四葉に継承させるしか……血は争えんのかねえ……」

「ふっ、血で血を洗う戦いこそ、望むところよ。ようは勝てばいいのよ、勝てば」

四葉は不敵に微笑み、みそ汁を啜った。

「う……美味しいな……こんなに美味しい飯は本当に、いつから喰って……」

「お口に合って幸いやわ。ほな、ちゃんと四葉として生活してくれたら、お夕飯も提供するよって、頼むね」

「……………ちっ……………婆アが……………」

悪態をついたけれど四葉は食べ終えて、教えられた制服を着ると、外に出た。

「まぶしい……………空が澄んでやがる……………植物も、こんなに……………」

四葉はしやがみ込むと道ばたに生えている草花を見つめた。その背中に二人の級友が近づいてくる。

「おはよう、四葉」

「おはよう、四葉ちゃん」

勅使河原司と名取沙耶香だった。

「お前たち、オレの名を知っているのか？」

しやがみ込んでいる四葉はスカートなのに何も気にせず大きく脚を開いていたし、何より胸の前のボタンを一つも留めずに全開していたので司は赤面して目をそらした。幼女が砂遊びするときのような無邪気で無警戒な座り方なので、白いショーツの股間が司の目に焼き付いてしまっている。四葉は邪気のこもった視線で二人を見上げたまま、脚を開いているので、沙耶香が慌てて、二人の間に入る。

「四葉ちゃん、スカート！」

「あん？……………ああ、この身体、女だったな」

四葉が立ち上がると、スカートの裾はおりたけれど、今度は全開にしている胸元が白く輝いている。ブラジャーも着けていないようで、制服のブラウスだけだった。

「四葉ちゃん、前も留まってないから！」

沙耶香が急いでボタンを留めようとしてくれるけれど、その手を四葉が払った。

「うとおしいぞー！このアマ」

「っ……………ひどい……………、もしかして、四葉ちゃんは、いつもの四葉ちゃんじゃない。別の人のなの？」

「貴様、このオレを見て誰だかわからねえのか？」

「わかんないよ。また東京の人？」

「そうか、お前、死にたいのか」

「何言ってるか、わかんないから。それ東京のジョークなの？」

「もう一度だけチャンスをやろう。オレの名を言ってみろ」

「……タツ…なんとか、さん？ 7年前に来てたって話は、お姉ちゃんから聞いたことあるけど…」

「オレはウソが大嫌いなんだ」

四葉が右手で沙耶香の胸元をつかんだ。か細い女子高生の腕なのに、ぐいっと力を込められると、沙耶香の爪先が浮く。まるで筋肉の潜在能力を100%使っているかのような力強さで沙耶香は苦しくてもがいた。

「四葉、やめてやれよ！」

さすがに司が止めに入ると、四葉は疲れてきた手を離して、今度は司を睨む。

「お前、オレの名を言ってみろ」

「……、……宮水…四葉だったと思うけど……今は入れ替わって……誰かに？」

「そうか、お前も死にたいのか」

「だから、何が言いたいんだよ?!」

「お前、オレの胸の傷をみても誰だかわからねえのか？」

四葉が全開のブラウスを両手でグイっと広げると、乳房があらわになって司の脳裏に乳首が焼き付いた。

「…き……傷なんて……無いよ……四葉……」

「あん？」

言われて四葉は自分の胸を見る。

「……ない……なんだ、この胸は……あ、ああ、そうか。今は女の身体になっっているんだった」

四葉が顎に手を当てて悩む。

「うむむ……。まあ、とりあえず、今は様子見するしかねえか。おい、お前、このオレの身体についてる名前は、宮水なんだって？」

「四葉だよ」

「そうか。お前の名は？」

「ボクは勅使河原司。四葉は、テツツーって呼ぶけど」

「よーし。貴様は？」

四葉が沙耶香を見る。

「私は名取沙耶香、呼び名は……」

「サヤボボだよ」

司が笑いながら言うと、沙耶香が怒る。

「その名で呼ばないですよ！」

「お前らは、この四葉の何だ？ 手下か？」

「手下って……同じ学年の友達だよ。ちようど、ボクらの兄や姉が同じだけ歳が離れてて、よく行事ごとなんかで、いっしょに行動したからさ」

「兄弟か……ちっ……」

なぜか、舌打ちした四葉が胸元を開いたままなので、沙耶香がボタンを留めてやる。

「四葉ちゃんの中身が、別の人に入れ替わってるのは、わかったから、せめてボタンだけは留めさせて。女の子なんだから」

「……ちっ……」

四葉は今度は二つほどボタンを留められてから沙耶香の手を払った。

「四葉ちゃん、えっと……四葉ちゃんって呼んでいい？」

「……まあ、いいだろう」

少し迷って四葉は頷いた。気持ちのいい風が吹いて、四葉のオールバックにしている髪が揺れる。それを見て司がつぶやく。

「ツインテール……似合ってたのに……」

「あん？」

「な、なんでもないです」

「そろそろ学校に行こうよ。遅刻しちゃうから」

沙耶香に促されて歩き出した。しばらく歩いて四葉がつぶやく。

「ここは、ずいぶん復興しているんだな」

「そうだね、直撃だった、あっち側は、あのままだけど」

沙耶香の視線の先にはティヤマト彗星の直撃を受けた地区がある。大きなクレーターが残っていたし、道路も寸断されている。ちょうど、そのタイミングで選挙カーが通りかかった。

「いまだ復興は道半ばなのです!! なのに国と県は糸守町の人口が少ないといって補助金を削ろうとしてくる!! 私は糸守を守りたい!! 勅使河原三葉です!! 勅使河原三葉!! 勅使河原三葉に、どうか清き一票をお願いします!!」

大きな拡声器から響いてくる勅使河原三葉の声を聞いて、沙耶香が吐き捨てるように言った。

「……何が清きよ……不倫女が……」

「なんだ? 殺気立って、あいつを殺したいのか?」

「ええ! 殺せるものならね!!」

「サヤボボ、お前、そんなことを四葉の前で言って……」

司が止めるけれど、沙耶香が怒鳴る。

「いいじゃない! 今の四葉ちゃんは、四葉ちゃんじゃないんだから!」

「あん? わけのわからねえことを抜かしてると、お前を殺すぞ」

「ごめん……これには、わけがあつて……」

「ボクから説明するよ。うちの恥でもあるから。もともと、ボクの兄、勅使河原克彦とサヤボボの姉、名取早耶香は、この町にいた頃からの付き合いで東京で結婚したんだ。四葉の姉、今通った宮水三葉と東京の男性も同じ日に同じホテルで合同挙式したんだ」

「運命の出会いとか言いよつて、付き合いって間もないのに結婚しよつてんよ。そんなん、うまくいくはずあらへんやん。入れ替わってたときでも、しよつちゆうケンカしてバカだのアホだの顔に描いておつたのに。そんで、たった三ヶ月で離婚しよつて、寿退職しよつたから東京で行くあてもものうて、うちの姉ちゃんのマンションに転がり込んだかと思つたら、あの泥棒猫がっ!」

あまりに悔しいのか、沙耶香は電柱に拳を叩きつけた。さきほどの四葉と同じく手首を捻挫して腫れてしまうのも、痛いのもかまってい

ない。司が説明を続ける。

「ようするに不倫だよ。で、結局、兄は、あの三葉を選んで離婚して再婚、そういうことさ」

「両方の親の力に頼って、札束で人の顔を叩くような慰謝料を積んで、うちの姉ちゃんの気持ちをズタズタにしよってん。おかげで、姉ちゃんは声が出せんようになってしもて。そのくせ、自分らも離婚するときの泥沼のゴタゴタで仕事辞めてしもて。東京で再就職もできんで、田舎に逃げ帰ってきよったんよ。どのつらさげて選挙にまで出るんよっ！」

もう手が痛いので沙耶香は電柱を蹴った。

「ボクの家は土建屋、宮水のお父さんは多選の町長。そして今、この糸守町には市町村合併の話がきてる。東京は、金のかかる山間部の復興より、麓の市街地に住民を移住させて、この地区の復興は中止したいんだ。それで、合併賛成派と反対派に分かれての選挙に娘までかり出して。血筋なのかもね、ずいぶんと前向きに出馬したそうだよ。糸守を守るといえば、聞こえはいいけど、結局は地方の利権を守りたいのさ」

「……………」

四葉は黙って聞いていたけれど、難しい話は苦手なのか、首を回して、オールバックの髪を掻き、問う。

「ようするに女がらみの惚れた盗っただな。まあ、今は悪魔がほほえむ時代だからな」

「ホントそう！ 悪魔みたいな女！ 邪神の巫女よ！ 反吐が出るわ、あの反吐女！ ……あ、四葉のことじゃないよ……四葉のことは、そんな風に思ったこと無いから、ホント！」

沙耶香がフオローを入れたけれど、四葉は気にせず、手のひらを握り、拳に変えた。

「どどのつまり、殺したいほどムカつくってことだな。いいだろう。オレ様が殺してやる。ちようど、この身体で、どれほど戦えるか、試してみたいところだったんだ」

候補者名を連呼していた選挙カーは再び、四葉たちの前に戻ってき

ている。小さな町の選挙なので集落を回ると、同じ道に戻ってくるのが、パターンだった。通り過ぎようとする選挙カーの前に、四葉が立ち塞がった。

キーッ！

選挙カーは急ブレーキをかけ、低速だったおかげで四葉を撥ねずに衝突寸前で停車した。四葉はブレーキングを見切っていたように微動だにしない。

「気に入らねえヤツは、みんな殺してやる。それがオレのポリシーよ」

「危ないでしょ!! 何考えてるの?! バカっ!!」

助手席でマイクを握っていた三葉が、車窓から顔を出して四葉を怒鳴る。四葉は邪気に満ちた微笑みを浮かべた。

「フっ…これから貴様に生き地獄を味わわせてやろう」

「何を言って…まさか、四葉、あなた、入れ替わりがおきて…」

あまりに様子が違う妹を見て、すぐに三葉は悟った。妹の目は本物の殺気で光っている。とても危険な空気がした。その危険さは司も感じたので、あらかじめ告げておく。

「殺すって本気じゃないから! 殺したいほどって意味でさ! って
うか、トラブルは、うちの家も困るんだ!」

「あん? じゃあ、手足の二三本、引きちぎってやろう」

「そ、それもダメだって!」

「けっ…じゃあ、手足の一二本、へし折ってやろう」

「骨折も、ちよつと、マジで困るから!」

「ちっ…まあ、いい。それなら、いい秘孔がある」

「四葉! いい加減にしなさい! 選挙は、子供の遊びじゃないんだ
!」

選挙カーの後部に乗っていた三葉と四葉の父親が降りてくる。

「邪魔するんじゃない!!」

「邪魔は貴様だ」

四葉は近づいてきた父親の顎へ、飛び膝蹴りを入れた。

バコッ!

「あぐっ！」

鋭い蹴りで父親を失神させた四葉は舞い上がったスカート裾の裾を気にせず、選挙カーから降りてきた姉と対峙する。

「四葉っ?! なんてことするの?! いいえ、あなたは四葉じゃない!!」

「そうよ、オレ様は四葉ではない。オレの名を言ってみろ」
「えっ……」

「さあ、このオレ様の名を言ってみろ」

「……そんなの知るわけ……」

「お前、オレの胸の傷を見ても誰だかわからねえのか?」

四葉が胸をはだけさせると、三葉は妹のために怒鳴る。

「やめなさい!! わかったわ!! また、タキッ! あんたが入ってるのね!! 妹の身体でリベンジポルノなんて、どこまで最低なの?! 離婚して正解だったわ!! あなたの父親だって、そう!! 結婚生活の継続なんて、できない! もう血筋なのよ!! 何が胸の傷よ?! どっちが傷ついたと思ってるの?!」

「もう一度だけチャンスをやろう。オレの名を言ってみろ」

「チャンスっ?! 笑わせないで?! あなたと暮らすなんて二度とごめんよ!!」

「ほくく、それではオレの名を言ってみろ」

「バカタキ!! 二度と私の前に現れないで!!」

「オレはウソが大嫌いだ」

「あいかわらず人の話を聞かないのね!!」

「くらえ!」

四葉が鋭く右手を伸ばして、人差し指で三葉の胸のあたりを突いた。

「きやつ?!」

「フッフ……」

「この変態! また、私の胸を!!」

「胸椎の秘孔、龍領を突いた。貴様の身体は、むき出しの神経で包まれている」

「はあ?!」

「指で触れただけで全身に激痛が走る」

四葉が三葉の肩に触れる。

「触らないでー！ 変態…い、いぎややあ?!」

三葉が苦しみ悶えた。軽く触れられただけなのに、そこに激痛が走り、身悶えしている。

「ぐうううう！ 痛い痛い！ あぎややああー！」

「フフ…痛いか。痛いだろう。じっくりと痛みを味わうがいい」

「ああああ!! 痛い痛い痛い!!」

三葉は衣服や靴が触れているだけでも痛いようで、無理して履いていたパンプスを脱ぎ捨て、さらに立候補者らしいタイトなスーツを着るために、補整下着で締めつけていたウエストが焼けるように痛み、無我夢中で脱ぎ捨てている。

「ハア…ハア…うううう…」

ぽよんと白米の食べ過ぎで25才にしては膨らみすぎた腹部が揺れている。立候補中の女性が道ばたで半裸になるという事態に選挙カーの後続車に乗っていた運動員たちが慌てて出てきて、三葉を車に乗せるけれど、持ち上げられると身体に激痛が走り、また喚いた。

「いやあああああ！ 触らないで！ 触らないで!! 痛い痛い！

いぎぎいいいい!!」

「勅使河原先生、しっかりしてください！ しっかり！」

「ちよ、町長さんも運ぶんや！」

気絶している町長も車に乗せられ、選挙カーと後続車は急いで走り去っていった。

「フ…フフフ…ファツハツハハハ!! ハア…ツハツハツハハ!!」

勝ち誇って四葉が胸を張って高笑いしている。沙耶香も嗤った。

「あの女の悲鳴…：んくく、いい声ね…胸がスーッとする…」

「サヤボボ…：けど、こんなこととして大丈夫なのか？ かりにも町長と町議の立候補者に…」

司が不安そうに問うと、沙耶香は少し考えて答える。

「大丈夫よ。四葉ちゃんから見て、父親と姉だし。家族のケンカみたいなものやんか。何より、今の醜態、噂になる方が選挙に悪影響あるもん。絶対、黙ってるよ」

「そ……そういうものか……」

「この町の選挙、田舎のローカルルールで、本当やったら拡声器を使つての選挙活動は朝8時から夜8時って決まってるのを、町長選挙のときでも登校時間にやってたり、逆に日暮れ後の自粛は早かったりするし。だいたい、さつき町長が、いくら娘とはいえ立候補者の選挙カーに乗ってたのは、どう考えても問題やもん。絶対、黙ってるって」

「な……なるほど……」

「さあ、もう学校に急ごうよ」

三人で登校して、授業中も机の上に足をのせる四葉を注意しようとする教師を司と沙耶香で必死にフォローして、昼食はおとなしく食べしてくれたものの、体育の柔道では男子全員を投げ飛ばして手下宣言する四葉とクラスメートの関係を修復するのに、クタクタに疲れて、それでも目が離せないで帰り道も家まで送ることにして三人で歩いているときだった。

「あ、お姉ちゃん」

名取早耶香が、トボトボと静かに白い子犬の散歩をしているのに出会った。

「……」

妹に気づいて、早耶香は力なく微笑み、手を振ってくれる。

「なんだ、あのアマは」

「今朝、話したサヤボボのお姉さんだよ。ショックで声が出せなくなったんだ。けど、耳は聞こえているから、変なこと言わないであげてほしい。これ、ホントマジで頼むよ」

「ふーん……声がねえ……」

「もつとも無理ないけど。親兄弟より長く、いっしょにいた人間2人に目の前で裏切られちゃったんだ……生まれてこなかった方がよかった、なんて考えられると危ないから。以前は放送部で活躍するくらい、いい声の家系だったのに……」

「そうか…」

ふらりと四葉が早耶香に近づくと、連れていた子犬が吠えたけれど、四葉が一睨みすると怯えたように小さくなる。早耶香も恐れを感じてビクツとしたけれど、四葉は両手をゆっくりと伸ばした。

「大丈夫だ。動くんじゃないぞ」

そう言った四葉は早耶香の後頭部へ両手を回すと、かすかに指先で押した。心配になって司が問う。

「お…おい、何のマネだよ？」

「しゃべれるように、おまじないをしたんだ」

「おまじない……」

「あとは、この女の心しだいだ。心の叫びが言葉を誘う。まあ、もつと強く押せば即効性があるかもしれないねえが、オレはこの手の手加減が苦手だよ。兄者なら、一発かもしれないねえが、オレが強く突くと肉体を内部から破壊しちまうからな」

「内部から…」

「さて、腹が減った。さつさと飯が食いたいぜ」

四葉は玄関から土足であるが、一葉に問う。

「おい、婆ア！ 飯は何だ?!」

「飛田牛コロツケと葉包み寿司にしたね。四葉の好物じゃけん、あんなの口にも合うじやろう」

「コロツケか」

四葉が嬉しそうに微笑んだ。微笑み方が男っぽいで顔の可愛らしさと相殺されて、可愛いのか、不気味なのか、わからない表情になっている。

「コロツケみたいな大量に油を使う料理ができるんだな、ここでは」

「……」

一葉は、よほど貧しい食生活をしてきたのかと悟ったけれど、あえて口には出さない。

「せめて、靴は脱いでやってくれな」

「おう」

その場に靴を脱ぎ捨てた四葉はガツガツと夕食を平らげると、眠く

なった。一葉は、あえて風呂は勧めずに就寝を促す。

「今日は疲れたじやろう。もう、おやすみなされ」

「おう。そうする」

自分の部屋に入った四葉は制服のまま、布団に潜り込む。

「布団かあ……いい感触だ……」

柔らかい和布団に包まれて、四葉は幸せそうに目を閉じ、すぐに眠りに落ちた。

第2話

翌朝、四葉は悪夢から目覚めたようにガバツと起き上がると、冷や汗が浮いてきた。

「ハア…ハア…なんて悪夢…最悪の…」

汗と涙が流れてくる。

「…ハア…お母さん…私、…どうしたら…グスツ…泣いてる場合じゃない！」

制服のまま寝ていた四葉は布団から飛び出すと、机に向かった。ノートとボールペンを出して、自分が体験した出来事を書き出していく。

「忘れないうちに…魂の記憶を…脳の記憶に…」

四葉が起き出した気配を感じて、一葉が部屋に入ってきて声をかけてくる。

「四葉、起きたのかい？」

「…うん…」

「まずは、落ち着いて、お風呂にでも入りなさいな。まだ、時間が早いよって」

「……」

時計は、まだ6時過ぎだった。

「沸かしておいたでの」

「ありがとう。でも、今はいい。時間がないの、しばらく話しかけないで」

四葉はノートに書き記す作業を続け、それが終わると、待っていてくれた祖母に声をかける。

「昨日、私は、どんなだった？ なんかことをして、なんかことをしなかったの？ 些細なことも漏らさないように、彼の口調も態度も教えて」

ほぼ無意識で四葉は全開になっている胸元のボタンを留めながら問い、一葉は要望に応えて、昨日の言動を包み隠さず語った。

「……そう……そんなことをしていたの……」

「あんまり気に病まんときの」

一葉は絶望的なまでに暗く思い詰めた顔をしている孫を心配して胸が痛くなった。

「今度、あの男が勝手をしよつたら、懲らしめちやるき」

「お婆ちゃん、それは絶対にやめて。たぶん、私が入れ替わっていた男は山賊の頭目みたいな男で、手下が何人もいたわ。下手に逆らうと、本当に人を殺しかねない、いえ、普通に殺すわ。日常的に人殺しをしているようなヤツら。私が捕虜の処刑を止めたら、え？ 今日、そんな甘い処置でいいのか、殺すのが楽しみなのに、って顔で手下たちが不思議に思ってたくらい。幸いマスクをかぶっていたから、私の表情を見られることがなくて、なんとか乗り切れたけど、あまり甘い対応をしていると疑われそうだったから」

四葉は痛みの記憶が残っているかのように、左の前頭部を手で押さえた。

「四葉……」

「とにかく、もう一度、あの男、ジャギの言葉遣いや考え方、仕草を私に教えて。あと、お婆ちゃんが美味しい食べ物で、あいつを誘導したのは正解だと思うから、凶に乗らせない範囲で、美味しいものを与えておいて。あいつだって、この身体にいるときは少しは不安なはず、あんな筋肉隆々の身体から、この身体じゃあね」

四葉は少し痛い手首を撫でた。手首の痛みの次には全身の筋肉痛を自覚する。おそらく学校で何かしたのだと思い、そのあたりは沙耶香たちに訊くことにして立ち上がった。

「ちよつと早いうちに行くね。サヤボボとテツツーからも話を聞きたいから」

「四葉、朝ご飯は？」

「ごめん、食欲がないの」

あんな流血シーンを見た後じゃ、という気持ちは祖母を心配させるので口にせず、沙耶香はオールバックで寝たためにグチャグチャになった髪を一纏めにする、首の後ろで組紐で結んだ。玄関を出て、

すぐに沙耶香と司に出会った。

「…おはよう、四葉ちゃん？」

「四葉、だよな？」

「ええ」

「よかったあ…」

ホツとしている二人に問う。

「昨日、私が何をしたのか、どんなだったのか、細かく話してほしいの」

「四葉ちゃん!!」

急に感情的な大声で叫んだ沙耶香が迫ってきたので、四葉は叩かれるかと少し覚悟したけれど、抱きしめられて戸惑った。

「な、なな？ なに、サヤボボ？ なんなの？」

「ありがとう！ 四葉ちゃん！ お姉ちゃんが話せるようになったの!! 声が出るようになったの!!」

「サヤチンさんの声が？ どうして？」

「四葉ちゃんのおかげだよ!!」

「ぜ、ぜんぜん、わかんない。ちよつと落ち着いて！ ジャギは乱暴したりしなかったの？」

「ら…乱暴もしよったけど…」

「効いたんだよ！ あのおまじないがさ！ そんでサヤチンさん、以前みたいにキレイな声が出るようになったんだって！ あのと五百人を救った声がさ！ すごいぜ！ あのおまじない！」

「ごめん、二人とも落ち着いて。大事なことから話して、朝一番の昨日の私、つまりジャギのことから話して。お願い、とても大切なもの」

「朝一番…」

司が赤面して何かを思い出している。それを沙耶香が睨む。

「あんな、エロいこと思い出しとるやろ。最低や」

「な、なにも！ 何も無かったって！」

「話してみて」

「け…けどよ…」

「いいの。話して。どうせ、パンツ見えたとか、そんな話でしょ。そういうのも、細かく話して。癖とか、態度とか、全部。私がジャギと入れ替わってるとき、マネしないといけないから」

「じゃ……じゃあ……」

司は話そうとして、つい四葉の胸元を見てしまい、今日もノーブラなことに気づいた。ボタンはすべて留められているけれど、つんと乳首が立っているの、よくわかる。沙耶香も気づいたので小声で教える。

「四葉ちゃん、ブラ」

「あ……ちよつと待ってて」

とくに赤面することもなく、四葉は家に戻ってブラジャーを着けて出てきた。ブラジャーのことよりも時間を気にして、話を進めさせてくる。学校に行くまでに昨日のことを二人から聞いて、やはり四葉は思い詰めた顔になった。

「四葉ちゃん、……」

沙耶香が慰めようと、声をかける。

「あ……あのね、お姉ちゃんから聞いた話やけど、案外、入れ替わりも、楽しんでる様子もあつたみたいよ。東京観光できたりとか。男友達ができたりとか」

「……うん、……ありがとう、サヤボボ」

荒涼とした砂漠と化した東京や、邪気と元気に溢れている手下たちを思い出した四葉が棒読みで返答したので、ますます沙耶香は心配になる。

「な……なにより！ お姉ちゃんのこと、ありがとう！ ジャギさんにも伝えておいてよ！ ホンマありがとう！」

「うん……けど、もともと、サヤチンさんのこと、……うちの家の責任でもあるし」

「……四葉ちゃん……四葉ちゃんは何も悪くないんやから……そんな顔、せんといてよ」

「四葉、気にするなって。学校で何か言われても、守るから」

「……うん……ありがとう……」

思い詰めた顔のままの四葉と沙耶香、司の三人が校門まで着いたときだった。

「おい、宮水！」

クラスメートの男子が呼びつけてきた。明らかに敵対的な声色だったので、司と沙耶香が守るように前に出る。呼びつけてきた男子は朝練だったのか、柔道着を着ていた。

「昨日は油断しただけなんだ！ もう一度、勝負しろ！」

「え……？ なに？」

意味がわからないという風の四葉に沙耶香が耳打ちする。

「昨日、体育のとき、全員投げ飛ばしたこと、話したやん。それやと思うわ。彼、柔道部で全国大会にも出てるもん」

「ああ……その話……くだらない……」

四葉がタメ息混じりに言ったので、ますます男子が怒った。

「き……きさまあ！ オレを誰だと思ってるんだあ……!!」

グワツと男子が迫ってくると、四葉は据わった瞳で見つめ、右手の人差し指を相手の眉間にビタアツと向けた。

「うっ……くっ……」

あまりにも四葉の目が据わっていて静かな殺気さえ感じるので、男子は動けなくなる。

「死ぬよ」

ズンと据わった目で四葉に告げられると、男子は腰を抜かして座り込んだ。

「はっ……はぐっ……」

「昨日、私を手加減しなかった、とでも思うの？」

もう戦意を失った相手に背中を向けて四葉は昇降口へ向かった。沙耶香と司が追いかけてくる。

「四葉ちゃん、四葉ちゃんよね？」

「四葉なんだよな?! 四葉！ ジャギさんじゃなくて！」

「ええ、そう言ってるでしょ」

「だって、今の……」

沙耶香と司が顔を見合わせると、四葉は再びタメ息をついた。

「あんな世界に一日いれば、こうもなるわよ。ちよつと殺気を込めて睨んだだけなのに、大袈裟よ。無意味な戦闘をさせた私に感謝してほしいくらいなのに」

「……………」

一昨日までとは、存在感が違ってきた四葉に戸惑いつつも、三人で教室に入り授業を受ける。その授業中も、ずっと四葉は思い詰めた顔をしていた。中休みになって沙耶香が声をかける。

「四葉ちゃん、大丈夫？」

「……………」

そう声をかけられても返事もしない。

「ねえ、四葉ちゃん」

「…………え？ ……なに？」

「大丈夫なの？」

「……………さあ」

「授業、ぜんぜん聴いとらんよね。仕方ないと思うけど、テツツと学年の1位2位を争う四葉ちゃんが、そんなやと先生らも心配しよるよ」

「そうだけ。この分じゃ、次の1位はもらいだな」

あえて励ますために司が笑いながらいうと、沙耶香もその意図にのる。

「そうやね。よくできた弟さんがいて勅使河原建設も安泰やね」

「おうよ。兄貴には負けねえぜ。四葉にもな」

「……………」

何を言われても四葉は反応が鈍い。沙耶香が心配になって軽く抱きついた。

「気にせんときよ」

「そうだよ、気にするなよ」

沙耶香も司も、昨日ブラウスの前を全開にして胸を見せていたりしたことを四葉が思い詰めているのだと考えて慰めようとする。

「気にせんときよ。四葉ちゃんほどの美人やもん。お嫁のもらいてなんか、いくらでもあるよ」

「そうだ、そうだ。何なら、ボクがもらってやってもいいぞ」

「テツツーには、もったいないわ」

「どういう意味だよ?」

「その通りの意味よ」

気持ちが軽くなるように盛り上げてみたけれど、四葉は反応しない。

「……………」

沙耶香と司は、ますます心配になったけれど、もうチャイムが鳴ってしまふ。数学の授業が始まったのに、四葉は歴史の教科書を出したまま、表紙を見つめている。何十分も、ずっと動かなかつた四葉が目に涙を浮かべた。

「……………どうしたら……………」

か細い声で漏らしている。

「……………どうしたら……………いいの……………お母さん……………」

耐えられない悲痛に泣き出してしまい、額に当てた両手が、顔を覆うと、声を漏らさないように涙を流している。その様子をチラチラと見ていた女子たちは昨日のことで羞恥心が限界に達したのだと思つたし、男子も同じことを考えた。沙耶香が挙手して保健室に連れ出そうと決意した瞬間、チャイムが鳴つて昼休みになる。クラスメートたちは、あえて四葉には近づかず、そのフォローを沙耶香と司に任せてくる空気になり、二人も心得て四葉に声をかける。

「四葉ちゃん……………」

「四葉」

「……………」

四葉は沙耶香にもらつたハンカチで涙を拭くと、微笑みをつくつて言う。

「ごめん、何でもない」

「な……………何でもないだろう?!」

思わず、司が大きな声を出すと、教室がシーンと静かになってしまふ。

「…わ…悪い…。け、けどよ……………四葉が……………ボクは……………心配で……………」

「そう……ありがとう、でも、大丈夫」

「だ……大丈夫じゃないだろ……なんだよ、その……他人行儀な感じ……」

「大丈夫だよ、だから、テツツもサヤボボも心配しなくていいよ」

「四葉ちゃん……」

「四葉……ボクらは頼りないか？」

「……」

「っ……四葉！　だ……大事な話があるんだ！　来て、くれ！」

司が手を握って立たせようとすると、意外にも四葉は力強く手を払って、そして迷惑そうな顔になった。

「話って何？」

「そ……それは……ここでは……」

「そう。ここで、言えないような話なら、永遠に言わなくていいよ」

「っ……四葉……」

「四葉ちゃん……」

教室にいる誰にでも、司が四葉へ告白しようとしたのは伝わったし、司が四葉を好きなことも、沙耶香が司を好きなことも、だいたい全員が知っている事実だったので、昼休みの教室が図書室のように静かになっている。それでも、司は決意を固めた。

「……す……好きなんだ！　四葉のことが!!」

「……」

四葉と沙耶香が同時に顔を伏せた。知っていたけれど、言って欲しくなかったことを言われ、もう以前の三人の関係には戻れないことを、よくわかっている女の顔になる。けれど、司の決意は固い。すでに同じパターンで兄は大きな失敗をしている。歴史は繰り返させない、そう決意して告白を続ける。

「好きだ！　四葉が好きだ！」

「……そう……ありがとう……でも……」

「だから、頼ってくれ!!　あてにしてくれ!!　四葉が悩んでることなら、何でも協力する!!　いっしょに努力する!!　だから、絶望した顔で大丈夫なんて、言わないでくれ!!　微笑み忘れた顔なんて見たくは

ないさアア!!」

「……テツツ……」

断る気だった四葉が戸惑うほど熱い告白で、沙耶香が羨ましくて笑った。

「あはは……ほんとうに、ほんとうに、よくできた弟なのね。四葉ちゃん、よかったじゃない。お嫁のもらいて、悩まなくて済むよ」

「サヤボボ……」

思い詰めていた四葉の顔に少し明るさが戻った。

「四葉、明日を見失うことがあったら、ボクに頼ってくれ。明日、君が君じゃなくても、ボクは君が好きだ」

「……………本当に、頼っていい?」

「もちろん!」

「もし、私にめちやくちやなことを求めて頼んで、その意味が理解できなくても協力してくれる? うまくいかないかもしれない。うまくいっても、うまくいったことがわからないかもしれない。説明を求められても、それを拒んで、ただ実行だけを求めても、それでも、いい?」

「四葉の役に立つなら、何でもいい! やる!」

「ええよ! 私もあてにしてよ!」

「サヤボボまで……ありがとう」

感謝の涙を零した四葉は二人に頼む。

「1962年のキューバ危機から1982年のフォークランド紛争までの主要各国の核戦力および通常兵器の動向と配置、それらの指揮命令権をもっていた人物の推移、そして継続して以後の1992年頃、そうね、前後5年、この時期は主要国だけじゃなくて、まとまった軍隊のある国はすべて調べて。政治と経済の流れ、政府の高官、大企業家たち、現実に国家を動かしている連中、軍人を支配し命令するやつら、その実体が知りたいの。インターネットが普及したのは1999年頃だから、それ以前の情報は紙媒体で調べないとあがってこないけど、時間がかかりそうなの、この作業をしてくれると、とても助かるから、お願い」

「わかった」

「え？ キュー……フオーク？」

学年1、2の成績だった司は頷いたけれど、平均的な成績の沙耶香は戸惑っている。

「じゃあ、私は一人で考え事をしたいから、よほど大切じゃないこと以外は話しかけないで、お願い」

そう言うと、四葉は再び机に向かって座り、両肘をついて手で顎を支え、考え事を始める。ただ、さつきまでの思い詰めた絶望的な顔から、少しだけ未来が見えた表情になっていた。

「ボクは古川図書館に行くよ。サヤボボは四葉を見守っていて。この様子だと、お昼ご飯抜きそうだから、ちゃんと食べさせて。あと、ボクは早退したって先生に伝えておいて」

「え？ ちよ、ちよつと、テツツー！」
「じゃ」

司は教室を出て行き、沙耶香は困惑しつつも、言われたとおり四葉に昼食をすすめ、放課後まで見守った。

「テツツー、戻ってこんね」
「……………」

「ごめん、静かにしとるわ」

クラスメートが帰った静かな教室で、ずっと座っていた四葉は下校時刻を知らせるチャイムが鳴ったので立ち上がった。

「帰ろう」

「え、でも、テツツーは？」

「図書館に閉館まで居て、あとは帰るでしょ。私が頼んだこと、一日で終わるような作業じゃないし」

「そ…そうやね…」

二人で昇降口を抜け、校門まで来たときだった。

「兄貴、コイツです！」

「ずいぶんと待たせてくれたな」

今朝、四葉に因縁をつけてきた柔道部員と、さらに大きな体格をした3年生の男子が待ちかまえていた。

「昨日今日と、オレの弟分が、ずいぶんと世話になったそうじゃねえか」

「き、気をつけて！ 四葉ちゃん！ この人、三年生の空手部の主将よ！」

「ウワサじゃ、おっぱい丸出しにするんだってな。オレにも見せてくれよ」

三年生の男子はヒゲも生やしていて、腕自慢らしくボキボキと拳を鳴らすと、生温かい息を吐きながら四葉に顔を近づけてくる。

「四葉ちゃんは先に帰って！ ここは私が！」

「おっと！ お前は、こっちで静かにしててもらおうか！」

柔道部員の男子が沙耶香の腕をつかみ、組み伏せてくる。

「四葉ちゃん、逃げて！」

「…………。あなた、うちの学校、最強だったわよね？」

四葉が問うと、大柄な男子は下品に笑った。

「がはははっ、おうよ。中学までは柔道、高校からは空手で鍛えてる。この町でオレに勝てるヤツなんざいねえ」

「まあ、そうでしょうね。人口、少ないし」

「どういう意味だ、そりゃ？」

「私の、おっぱい、見たい？ 見せて、あげようか？」

四葉は質問に質問で返して、にっこりと微笑んだ。少しだけブラウスのボタンを外して、胸元を見せながら、相手に近づく。

「おお、話がわかるじゃねえか……」

完全に油断して、そして充血しつつある男根に四葉は全力で飛び膝蹴りを入れた。

ドツッ！

「はうっ?!」

急所を強打されてビクンと前屈みになった相手の喉元へ、さらに手を刀を撃ち込む。

ベグツッ！

正確に喉仏を撃った。四葉の小さな手と膝でも、急所を容赦なく撃ったことで相手は気絶して倒れる。

ドサア…

「ア…兄貴…」

沙耶香を捕らえていた柔道部員が一瞬の出来事にたじろいでいる。

「サヤボボを離しなさい」

「くっ…、う、動くな！ こっちには人質がいるんだぞ！ 不意打ちしやがって卑怯者が！」

「人質とつてる人が言うこと？」

「う、うるさい！ お前の方が卑怯だ！」

「そう、なら、卑怯比べね」

「何だと?!」

「私のパパ、町長なの。知ってるよね」

「うっ…、うぐ…」

「婦女暴行か、痴漢、立派な前科がつきそうね。岐阜県警って保守的だから、政治家とは癒着してるよ」

「くっ…くっくっ…」

「いいよね、110番で警察が来てくれる世界って、最高に素敵」

四葉は携帯電話を取り出して相手に見せた。

「ま、待ってくれ！」

「土下座」

四葉が命じると、すぐに沙耶香を放りだし、地面に這い蹲った。

「わ、悪かった！ もう二度と逆らったりしない！ だ、だから！」

「うん」

につこりと微笑んだまま四葉は近づくと、土下座している頭を全体重をかけて踏みつけた。

ドグチャッ！

「んぐうううー！」

「うざいんだよ!! 今の私の時間が、どれだけ貴重か!! オラっ!!」

四葉が豹変して、何度も頭を踏みつける。さらにサッカーボールのように頭を蹴り、転がった相手の腹を蹴り続ける。

「くだらないことで手間とらせて!! ああん!! 何とか言えよ、コ

ラっ?!」

ガッ！ ドカッ！ ガスガス！

もう悶絶しているのに蹴り続ける。

「わかるか、てめえ!! この重圧が!! 億だぞ!! 何十億の命だ!! それを、てめえが邪魔してんだ!! 死ねや!! お前だけ死んどけ!!」

「…よ……四葉ちゃ……や、やめて!! 四葉ちゃん、やめて!! ホントに死んじやう!!」

沙耶香が後ろから羽交い締めにして、ようやく四葉は落ち着いた。

「ハア…ハア…」

「…ハア…ハア…四葉ちゃん、本当に四葉ちゃんなの？ 一日単位じゃなくて、短時間でも入れ替わるの？」

「ごめん、サヤボボ、つい、あんまり腹が立ったから……」

そう言って謝る四葉の背後に黒塗りのクラウンが停まった。糸守町が所有する町長専用車だった。降りてきた宮水俊樹が苦々しげにつぶやく。

「こんな娘に育てた覚えはないのに……」

「育てられた覚えはないから」

ごく幼い頃に母を亡くし、なのに家を出て行った上で、町長選挙に出馬するという理解に苦しむ行動を取った男に対して、四葉は地面に転がっている男子へ向けるよりも冷たい視線で見据えた。

「っ…そんな目をするようになったのか…」

三葉が思春期だった頃よりも、はるかに空恐ろしい四葉の目に、俊樹は動揺したけれど、大切な用件があるので語る。

「お前に用事がある」

「そう。ちょうどいいわ。私も頼みたいことがあったから」

四葉は右手を出した。

「お金と自由に使えるクレジットカードを、ちょうだい。現金は10万くらいでいいわ」

「なっ?! ふざけるな!!」

「……………」

「うう…」

一喝したのに恐ろしい視線で睨まれ、俊樹は後退った。すでに長期に町長を務めてきた男の経験と胆力で、地元のヤクザ程度なら逆に気圧するほどの政治家ではあるのに、四葉がもっている雰囲気は神がかった恐ろしさがある。その迫力に俊樹は二葉の面影を見た。そして、三葉が無茶な要求をしてきた日のこと、そのおりに男のような雰囲気になったことも思い出した。

「もしや、また、なにか起こるのか?」

「ええ」

「それに、必要なのか?」

「ええ」

「何が起こるんだ?!」

「説明はしない。あなたは私に命令されたことを実行すればいいの。まずはお金とカード、出しなさい」

「つ……説明しろ!」

「時間とらせないですよ。うざいなあ」

四葉は思春期の少女が大嫌いな父親に取るような態度で髪の毛をいじった。

「説明してくれば、ワシも協力しないでもない!」

「しないでもない? 二重の否定ね。まあ、あなたは父親でないわけでもないからね」

「……四葉……」

「とりあえず、今は私がやろうとしていることを、あなたたちが知るとパニックになるかもしれないから、言えないの」

「パニックに……、また、何か、落ちてくるのか」

「空が落ちてくるといえば、そういう比喻も外れではないわ」

「だが、ティヤマト彗星の落下から、宇宙防衛も本格的に進み、弾道弾の開発も配備もされている。しかも、ここ数年先、接近する彗星もデブリも無いはずだ。カミオカンデ観測所だって完成している」

「……そっか……そっちの線もあるのね……無駄に配備したミサイル

……その暴発が、きつかけになる可能性だって……、あつちの世界だ
けじゃない、こつちだって、いつ起こるか……テツツに現代の情報
も……ううん、オーバーワークに……まだ、聞こえない……糸の音が
……まだ……」

「何をブツブツ言ってるんだ?!」

「あなたこそ、ブツブツ言わずに、さっさとカードと現金!!」

「何に使うんだ?!」

「まだ決まってるわい！ 使う必要があるとき迅速にいるかもしれない
いから確保しておくのよ!!」

「くっ……ワシの用件が先だ!!」

老練な政治家らしい話のそらしで方向を変える。

「お前は三葉に何をしたんだ?!」

「……。どうかしたの？ まあ、なにかしたとは、聞いたけど、どう
なってるの？ 言っておくけど、昨日の私は、私じゃないから、知ら
ないよ。で、どんな様子？」

「ずっと苦しんでいるんだ!! 立つこともできないほどにな!!」

「……………」

「このままでは死んでしまうかもしれん!! 選挙活動もできないんだ
!! この大切な時期に!!」

「娘の命と選挙活動、どっちが大切なんだか」

「この選挙には糸守町の運命がかかっているんだ!!」

「ずいぶん小さな運命ね。どうしても、いいんじゃない。人が死ぬわけ
じゃない」

「なんだと?! 高校生にはわからないのだ!! この重大事だ!!」

「重大事というより些事の典型的な……」

「四葉ちゃん!」

沙耶香が叫んだ。

「……なによ?」

「時間が無いんよね? お父さんとの口喧嘩に話が長うなつとるよ
!」

「……………」

他人に言われて、ようやく自覚した二人は、気持ちを落ち着けるために左手で左耳に触れる。その仕草が、まったく同時で、まったく同じだったので、沙耶香は、やっぱり同じ血筋の親子なのだと感じて、失笑しそうになったけれど、今は我慢する。

「それで、勅使河原三葉さんは、どうしているの？」

四葉は姉のことを他人を呼ぶように言い、俊樹も静かに答える。

「様子を見に来てもらえないか。話は、それからだ」

「わかったわ。ごめん、サヤボボ、付き合ってくれる。私が冷静でいられるように。さつきは、ありがとう」

「ううん、ええんよ」

「二人とも車に」

促されて、クラウンに乗り、小さな町なので、すぐに目的地だった病院に着いた。病院内で一番高価な個室に入ると、三葉が全裸で横になっていた。

「……ハア………ハア………」

三葉は、ごく浅い呼吸をして、大の字に寝ていた。寝ているのは低反発のマットレスを三重に重ねたベッドで、全裸の三葉はシーツさえかけられていない。俊樹は娘の裸体から目をそらしながら説明する。

「何に触れても、猛烈に痛がって、こんな姿なんだ。こうやって寝ていても、マットレスに触れている背中が痛いらしい。下着も着せると泣き喚くし、掛け布団など発狂しそうなほど痛がる。ようやく今の姿勢で、この状態が、もつとも痛みが少ないことがわかったんだ」

全裸でいる三葉のために室温は少し高めに空調されていて、俊樹はハンカチで汗を拭った。

「こうなったのは、昨日、四葉に何かされたことが原因らしい。どうか、ならないか？ 治してやってくれ、頼む」

「これは……」

あまりにも憐れな姉の姿を見て、さすがに四葉が鼻白む。

「食事はおろか、水さえ飲めない。医者は、このままだと脱水で死んでしまうというほどに」

「……………」

四葉が言葉を失い、黙り込んで深刻な顔をしていると、医師が入室してきた。医師は三葉に触れないように診察して、俊樹に告げる。

「もう今すぐにでも水分を補給しないと危険です」

「わかった。では、点滴を」

「はい」

医師の指示で看護婦たちが点滴を用意すると、三葉が気づいて喚いた。

「ちよつ…ちよつと待つて。まさか、その針を?!」

唇を動かして話すだけでも痛いのに、三葉は慌てて逃げようとしている。

「や…やめて!! た…頼むから!! そ…そんなもの刺されたら死んじゃう!! やっ!! や!」

三葉が拒否することを予め知っていた看護婦たちは手足を押さえつけると、すばやく点滴の針を刺した。

ブスッ!

「うぎやあく、ひひく!! はああ!! ひええ、ううわああ!! げうっ!!

うぐぎやあ、はあ、あぎやあく!! あくおごっ、ばわ!!」

ものすごい悲鳴をあげて三葉は点滴の針を刺されただけで苦しんだ挙げ句に気絶してしまった。死んだのかと思うほどの苦しみ方だったけれど、点滴された以外に傷はない。三葉は白目を剥いてガタガタと痙攣し、水を飲むこともできずに脱水していた者らしく濃くて匂いの強烈な尿を少しだけ垂れ流しているのが、全裸なのでマットレスの上に嘔きこぼれている。

「わかってくれたか。四葉、これほど、ひどい状態の姉をみて、どう思う?」

「……………助けてあげたいけれど……………、早ければ明日、この原因をつくった男と入れ替わるかもしれない。一応、なんとか助けてほしいと伝言は残してみる。ただ、聞いている彼の性格だと、半々というところよ」

「半々……………」

「サヤチンさんの声が出るようにしてくれたいという話もあるから望みはある。けど、そもその理由はサヤチンさんを苦しめたことで懲らしめようと思ったかららしいから、どう考えるかは彼しだい。気まぐれそうな性格だから無理かもしれない」

「それでは困る。この状態では、あまりに……」

「わかってる。だから、あなたは北斗神拳のことを調べて。政治力を使って」

「北斗神拳？」

「民俗学者なんだから、聞いたこと無い？」

「……………いや、知らない」

「あなたが民俗学者だったことで、役に立ったこと、一回もないわね」

「……………」

「四葉ちゃん」

「あ、うん、ありがとう。サヤボボ」

沙耶香に注意されて、父親への厭味で時間を浪費するのをやめた四葉は話を進める。

「とにかく、北斗神拳のことを調べて。それが、この状態を治療することにもつながるし、私に入れ替わりがおきたことから至る結果にとつても、とても大切なことなの。裏社会の暗殺にも関わることらしいから、政治家として、そういう筋のパイプでお願い」

「……………わかった。調べよう」

「……………」

四葉は無言で右手を出した。

「……………」

「……………」

俊樹も諦めて娘に現金とカードを渡して、クラウンで家まで送らせた。家に戻った四葉を心配で待っていた一葉が出迎える。

「おかえり。大丈夫やったか？」

「ええ」

「お夕飯、できとるよ。それとも、お風呂がええ？」

「……………」

四葉は時計を見る。もう9時を過ぎている。眠気も覚えている。

「ごめん、もう時間がないの。メッセージを残さなきゃいけない。私
が紙に書いたこと、何枚もコピーして家中に貼っておいて。ごめんな
さい。もう、歳なのに雑用に使って」

「ええんよ、四葉、頑張りや」

三葉の時に体験したことなので、四葉にも何かやるべきことがある
と感じている祖母は疲れた様子の孫娘が部屋に入っていくのを心配
そうに見上げた。四葉は部屋に入ると、カードと現金を引き出しの下
へ入れて、一万円だけはポケットに残しておく。

「彼にもお小遣いがあった方がおとなしいでしようし」

そして机に向かい、ジャギへ残すメッセージを書き始めた。

「……………殺人は、もちろん……………暴力も……………あと盗みも……………」

四葉は暴力についてや警察と銃の存在について、生活の注意事項と
盗まなくても一万円もあれば美味しい物が買えること、そして逆に自
分がジャギになっているときに注意すべきことがあるなら、身近に書
き残しておいてほしいこと等を書いていく。ジャギの性格を考えて、
聞き入れてくれるようにへりくだった文章で、あまり賢く無さそうな
人なので難しい漢字はさけて、かりにジャギの肉体なら警察に対抗す
ることはできるかもしれない、とおだてつつ、こちらでは四葉の肉体
なのだから機動隊に勝つことは難しいし、かりに勝っても自衛隊も存
在し、機関銃などもあることを書き暴走しないよう伝える。忘れずに
早耶香の声が出るようになったことの礼と、三葉を治してほしいこと
も書く。何度も書き直して、気を遣った文章を仕上げるのに、かなり
の時間を要してしまった。

「はあああ……………できたあ……………」

書き終わると疲れ果てて、そのまま眠った。

「四葉……………大変なんやね……………」

一葉は心配そうに孫娘を布団に寝かせると、残されていたメッセー
ジをコンビニへコピーに行く。すでに9時で閉店していたのを頼み

込んで開けてもらい、何枚もコピーして家中に貼りつけた。

「……………ふーっ……………」

　　齡89にして、いつもは四葉に手伝ってもらっている家事と、コンビニへの往復で疲れた身体で、つまずかないように注意しながら寝間まで行くと、目を閉じた。

第3話

翌朝、四葉が目を覚ますと、顔にシートがかかっていた。

「……うう……痛い……」

意識がはつきりすると、左前頭部に痛みを覚える。

「この感じは……」

起き上がると、パラッとシートが落ちる。四葉はリクライニングシートに寝ていた。

「ジャギさんになってるのね」

すぐに四葉は自分の状況を把握した。逞しい腕、分厚い胸板、立ち上がると視点が高い。

「……この痛さ……うう……」

部屋に鏡は無いけれど、手で触れると左前頭部が金属パーツで圧迫されているのも、ジャギの特徴だった。その左前頭部がズキズキと疼いて痛い。すぐ近くにマスクが置いてあった。

「この顔じゃ隠すのは当然……」

四葉はマスクをかぶり、それからメッセージなどが残っていないか、注意深く室内を探した。一度目にジャギになった日に、また入れ替わりが起こった場合に自分がジャギとして行動することについて、何か注意することがあったら教えてほしい、というメッセージを残しておいたので、その返答を期待して探している。

「あった」

顔にかかっていたシートに処刑された人間の血でメッセージが書かれていた。

「……………」

余計なことしやがったら、ぶっ殺す、と大きく書いてある。

「だから、その余計なことが何なのか、具体的に書いてよ……あ……」

大きな字に続いて、小さな字でもメッセージがあった。

「……………」

ケンシロウという男に出会っても絶対に戦うな、お前では勝てな

い、と書いてある。

「……ケンシロウ……たしか、おびき寄せするために、自分で名乗っていた感じだったけど……わざわざ、そんな作戦を取るあたり、相当に強いよね」

四葉は手下たちの言動から、初日で大まかなことはつかんでいた。手下たちは村人などの外部の人間がいるところではケンシロウ様と呼び、仲間内だけのときはジャギ様と呼んでくるので初めは混乱したけれど、もう慣れていく。戦い方も身体が覚えている感じもあって、これといって拳法らしい技もない手下たちには負けない気はする。なにか、奥義のようなものも出せそうな気はするけれど、あと少しの感覚がつかめず、身体にもどかしさを覚えたりもしている。この状態では、それなりの使い手と戦えば、圧倒されて負けるのは四葉にもわかった。

「まだ、続きがあるみたい、意外とマメね」

さらに小さな字で続きを書こうとして、やはり血では書きにくいからか、椅子の下にあるメモも見ろ、という指示があつて四葉はメモを見た。

「……なるほど……」

メモには、もしもケンシロウに出会ってしまったら、屋上にあるヘリポートへ誘導して、そこにある燃料タンクのパイプを腕力で破壊して、タンクの上に飛びのつてから着火して丸焼きにしてやれ、と書いてあった。

「タンクの上つて……、そんなことしたら、自分も丸焼きに……、あ、なるほど」

メモは裏まで続いていて、燃料タンクの上にはケーブルが用意してあるので、それで脱出しろ、と書いてあった。

「ちゃんと逃走経路も確保してあるわけね。さすが、暗殺拳を名乗るだけあって、ただの拳法バカというわけじゃないみたい。意外と話も通じるかも。こんな世界で手下を統率していくだけの人物なんだし」

少し四葉はジャギを見直した。さらに、メモが続き、腰にもつてい

る銃は不発が多く、主に威嚇として使い、発射しても弾が飛ぶ可能性は、それほど無いことなども書いてあった。

「ありがとう、ジャギさん。さてと、言葉遣いに気をつけなきゃ。ハアア〜……すーっ……」

四葉は深呼吸して気持ちを集中する。男らしい歩き方、乱暴な言葉遣い、そして、朝起きたジャギは何をするだろう、そう考えていると部屋の外から声をかけられる。

「ジャギ様、食事の用意が……」

「おう」

男らしく返事した四葉は手下に案内されて隣の部屋に入った。テーブルには缶詰が並んでいた。開けられた缶詰が5つと、あとはテーブルに山積みになっている。

「ごゆっくり、どうぞ」

そう言って手下は退室してしまった。

「……………おう」

食事も睡眠も、いつも一人、仕方ないかな、マスクを外さないと食べられないから、それにしても食事の用意って、缶詰を開けただけなの、一昨日いた掠ってきた女性は殺してしまったのかな、そうなるよ男ばっかりのグループみたいだし、こんな食生活になるわけね、と四葉は重い気持ちでテーブルに着いてマスクを外したけれど、食欲が湧かない。

「……………」

開けられている缶詰の蓋を見ると、賞味期限が1994年となっている。

「……………」

たぶん核戦争があったのが1992年だとしたら、それ以前に製造された缶詰よね、缶詰の賞味期限って2年か、3年だから……っついていうか、今は正確には何年なのかな、97年から99年くらいだと思っただけど、と四葉は悩む。悩むと左前頭部がズキズキと痛み、余計に食欲が無くなった。

「……………」

食べないと食欲がないって手下に不審がられるかもしれないし……、けど不味そう、見た目は普通だけど、どうしよう、口噛み酒よりはマシかな、製造過程は衛生的なはずだし、と四葉はフォークで中身をいじって匂いを嗅いでみる。

「……………」

ううく…、やっぱり、無理、そうだ、外で食べるってことにしよう、それなら不審がられないかも、と四葉は開いていない缶詰いくつか持つと、マスクを着けて部屋を出た。

「ジャギ様、もう、よろしいのですか？」

「おう、今日は外で喰いたい気分だぜ。お前、開いている分は喰っておけ」

「よ、よろしいのですか?! あ、ありがとうございます！」

「……………」

賞味期限切れの缶詰が、そんなに嬉しいわけね、と四葉は憐れみの表情を浮かべてしまったけれど、マスクのおかげで気づかれずに済む。建物の外に出ると、手下たちが手斧をもつて、たむろしていた。

「「おはようございませす！ ジャギ様」」

「おう」

「「……………」」

明らかに手下たちはジャギからの指示を待っている空気が漂い、四葉は考える。けれど、考えてもジャギとしての命令など思いつかない。不審がられないよう、いつそ間を開けずに訊いてみることにした。

「ちつ……、すっかり今日の予定を忘れちゃったぜ。おい！ 今日は何をする予定だった?！」

「はいっ！ ……………とくに予定は決まっております。昨日、東の村を襲って缶詰と飲料水を確認しておりますので、いつも通りケンシロウをおびき寄せるため、ヤツの悪名を触れ回るか、西の村を襲ってガソリンでも手に入れておきますか？」

「…………うくむ…」

予定が無いんだつたら私にはしたいことが山ほどあるのよ、と四葉は口を開く。

「お前ら、このあたりで図書館か、資料館が残っているのを知らないか？」

「…と？ 図書館ですか？」

「おうよ。本がいつぱいあるところだ。図書館でなくても、前の戦争のことが知れる場所があるなら、そこへ行く」

「は…はあ……。シリョウ館って、なんだ…、おい？ 知ってるか、お前…」

手下が他の手下に訊いている。

「…そりゃ…死霊が出る館なんじゃ…ねえのか…」

「…な、なぜ、そのような、ところへ行かれるのですか？ ジャギ様」

手下たちが顔を見合わせて不思議がっている。四葉は、余計なことをしたら、ぶつ殺す、というジャギからのメッセージを忘れていないので、彼らしくない振る舞いにフォローも入れておく。

「なぜ、そんなところへ行くか、訊きたいか？」

四葉は腰にさげている銃を抜いた。それだけで手下たちに緊張が走り、ざわついていた空気が静まりかえる。本物のジャギなら銃口を手下に向けて詰問したかもしれないけれど、不発が多いということは暴発もありうると思った四葉は信頼度の低い銃を天に向けて質問を繰り返す。

「もう一度だけチャンスをやろう。なぜ、そんなところへ行くか、訊きたいか？」

「「……………」」

余計な返答をして銃口を向けられたくない手下たちは直立不動で立っている。

「そうか。そんなに訊きたいか。いいだろう、教えてやる」

四葉は銃を腰に戻すと、話を続ける。

「オレは拳法がすべてだとは思っていないねえんだ。ようは強ければいいんだ。どんな手を使おうが勝てばいい！ それがすべてだ!! だか

ら、オレは戦い方を研究するんだ。前の戦争を知り、次の戦いにそなえる。これこそが、兵法というものよ」

「おおつ、さすがはジャギ様！」

「やはりジャギ様は素晴らしいお方だ！」

「真の北斗神拳伝承者だ！」

手下たちが口々に賞賛し、そして一人が半壊した図書館が残っている場所を知っていると言い出してくれる。

「よし、これから、そこへ……」

「ジャギ様ア！ ジャギ様ア〜！」

うまく理屈をつけて図書館に行こうとしたのに、別の手下が遠くから駆け寄ってくる。

「ご報告します!!」

「どうした？ 急ぎの用事か？」

「はっ！ ……とうとう像が完成したそうです！ ……じきに、こちらへ！」

「……そうか。……よくやった……」

像って何？ 何の像なの？ なにか造らせたのかな、と四葉は意味がわからないけれど、とりあえず頷いておく。しばらくして手下が四人、重そうな銅像を御輿に載せてもってきた。それはマスクをかぶったジャギの銅像だった。胸像で胸に七つの傷痕も再現されていて、肩の刺々しい防具やマスクの形も見事な銅像だった。

「……ほオオ、これは……見事だな……うむ、よくやった……」

とりあえず誉めておく。

「……」

こんなの何に使うのかしら、そのへんに飾っておけばいいのかな、と四葉は銅像の行く先を思案するけれど、良案がない。仕方がないので忘れ作戦を再び使う。

「うむむ……そういえば、なにかアイデアがあっただけはなんだが、この銅像、どう使う予定だった？ ……すっかり忘れてしまった。おい、覚えてるヤツいるか?!」

「はっ！ ……このジャギ様の像をケンシロウに見立て、悪名を触れ回る作戦をジャギ様本人以外でも遂行するためです」

「ああ、そうだった、そうだった。で、具体的に、どうする感じだった？」

「はい、まずは人通りの多い街道に、この像を設置して、そのあたりにいる住民を捕まえ、首だけを出して地面に埋め、他の捕まえた住民に首をノコギリで切断させる作戦です。そのとき、像を指して、あのお方の名をいつてみるオー！ と問い、答えられないヤツを処刑していくのです」

「……たしかに、……それなら、ケンシロウの悪名は広まるだろう……」

もしかして、それだけ？ たった、それだけのために、この物資欠乏の時代に、こんな立派な像を造らせたわけ？ いくらなんでも無駄すぎじゃないの、こんなもの造るくらいならボウガンの矢でも量産するとかあるじゃないの、と四葉は軽い目まいを覚えたけれど、ふらつかずに踏みとどまり頷いた。

「そうだった、そうだった。よし……うむ！ その作戦も実行するぞ！ お前たちを二手に分ける！ さっきの図書館を知ってると言ったヤツ！ お前はオレと来い！ あとは、その像をもって……：そうだな、西の村へ行け！」

ジャギとして命令すると手下たちは動き出す。すぐに四葉の前には、よく磨かれた大型バイクが用意された。

「整備しておきました」

「うむ……」

ドツ…ドツ…ドツ…

四葉は暖機運転も終わっているバイクを前に、少し緊張したけれど、当然という態度で跨った。

「……………」

きつと身体が覚えてくれるはず、そう祈って、先導に立つ手下と同じ操作を試みる。

ドルウウン！

バイクが動き出し、一瞬、バランスを崩しそうになったけれど、反射的に身体が動いてくれて、あとは自転車と変わらない感覚だった。

ただ、道路のアスファルトが破損していたり、場合によっては道などない荒野を走りながら、目的地の図書館に着いた。

「ここです、ジャギ様」

「うむ」

半壊した図書館を見上げ、それから手下に命じる。

「お前は、ここで待て」

「はっ！」

ほっとした感じの手下を置いて、四葉は図書館に入ると、早歩きで館内を巡る。なぜ、核戦争が勃発したのか、その寸前の状況や理由、とにかく多くの情報がほしかった。持ってきた缶詰を食べるのも忘れて、資料に見入り、本を開き、古い新聞を精査する。だんだんと、四葉を中心にして円陣のように古い紙々が並んでいった。そんな作業に何時間も没頭していた後だった。

「ジャギ様あく!! ジャギ様あああ!!」

急に、待たせておいたはずの手下が図書館に走り込んでくると、怯えきった顔でジャギに助けを求めてくる。

「助けえおぼおうあが！」

バシユウウ!!

悲鳴が途中で奇声に変わり、その手下の頭部が膨張すると、弾け飛んで上半身は肉片に変わり、下半身だけが3歩ほど進み、そして倒れた。

「……これは……まさか……」

カツ…カツ…カツ…

足音だけが図書館の玄関から響いてくる。そして、四葉は一人の男を見た。

「っ……………」

「場所を選べ！　そこが、貴様の死に場所だ!!」

深い怒りに、太い眉をしかめた精悍な美男子とっていい顔立ちの筋肉隆々の男が、こちらを睨んでいる。

「…ケ……、…ケンシロウさんですか？」

思わず、四葉は自分を出して訊いてしまった。

「…………。……そうだ。よもや、忘れたとは言うまい」

さん付けで呼ばれたケンシロウは一瞬、闘気を乱されたけれど、すぐに強い闘気を取り戻して、四葉を睨んでくる。ビリビリと空気が凍てついているかのような闘気が伝わってきて、四葉は戦慄する。

「……うう……」

どうしよう…、と四葉は困り、腰の銃に手を伸ばすと、ケンシロウが見下げた視線を送ってくる。

「あいかわらず、そんな物に頼っているのか」

「……」

「早く死に場所を選べ!! 貴様は死ぬべき男だ!!」

「……………」

すでに四葉も相手の強さを推し量ることが少しはできた。とても戦って勝てるとは思えないし、逃げることもできない気がする。この半壊した図書館は背後は出入口がない。ケンシロウが立っている玄関方向しか、逃げ道はないし、ジャギがメッセージで残してくれた作戦を取るには、アジトまで戻る必要がある。

「貴様の命も、ここまでだ!」

「っ……………」

殺される、ここで殺されるわけにはいかないのに、と四葉は不本意な結末を避けるために、ジャギを演じることを諦めた。

「まっ、待ってください!」

「……」

「私はジャギさんでは、ありません!」

「……………あいかかわらず、騙し討ちが得意のようだな」

あまりにも、かつての兄と雰囲気が違うのでケンシロウは闘気を半減させられたけれど、気を取り直して闘気をまとう。思い直してみれば、騙し討ちこそ兄の真骨頂であったと考え、この少女のような雰囲気こそが擬態であると、自戒して油断しない。

「どこで、そんな芝居を身につけた」

「信じてもらえるとは思いませんが、私の名前は宮水四葉といいます」

「……………」

「そして、私には、やるべき使命があるのです」

「言いたいことは、それだけか」

ケンシロウが拳を鳴らしながら近づいてくる。

「いえ、言いたいことは山のようにあります」

「それは地獄で語るがいい」

ケンシロウは四葉の言葉を無視して、目に見えないほど速い拳を撃ってくる。

「あたあ！」

「っ……」

その拳は寸止めで止まり、ケンシロウが四葉の目を見てくる。

「……………」

そして、ケンシロウが一步さがった。

「……………こんなことが……………、たしかに、お前はジャギ！ かつて兄と呼んだ男……………だが……………なぜ、その貴様がユリアのような目をしている?!」

「この身体は一時的にお借りしているものです」

「……………」

「ですから、今は見逃してください」

「お前の、その身体、ジャギという男が、今まで何人の命乞いをする罪のない者を殺したか、知っているか？」

「百とも万とも思います。ですが、今の私は数十億という人の命を救いたいのです。そして、そのために、この身体を借りているのです」

「数十…億…」

「どうか、見逃してください」

四葉は頭を下げて礼をした。

「……………」

ケンシロウが迷い、そして数秒の間があつて、背中を向ける。

「……………」

「……………」

カツ…カツ…カツ…

少し歩いてケンシロウは振り返った。ここでジャギなら、必ず背中を襲うために銃を抜くなり、襲ってくるなりするはずなのに、四葉は頭を下げたまま、何もしてこない。

「……………」

ケンシロウは図書館の外に出た。

「……………ジャギ……………お前は、どこに……………」

旅の目標を見失いそうになり、困っている。

「……………」

くすんだ空を見上げ、荒野を見据え、とりあえず歩き出した。ある程度、ジャギのアジトがありそうな位置はつかんでいる。

「……………行ってみるか……………人に聞けば、なにか、わかるかもしれない……………」

しばらく歩き、西の村に着くと、ジャギの銅像が広場に建立され、そばに手下たちがいて住民を虐殺している。

「……………」

これだ、ケンシロウの迷いが晴れる。

フラ：フラ：フラリ…

吸い寄せられるように手下の背後へと歩いていった。

お昼休みの高校で、ジャギは四葉の身体で保健室のベッドに寝そべっていた。そばに沙耶香が座っている。

「……………机の上に足をあげんでもええよね」

どうお願いしても、授業中に机へ足をあげて、ふんぞり返るので教師との折り合いをつけるのが大変で、いつそ気分が悪いということだ。保健室に連れてきたのだった。

「これ、美味しいなア」

今は上機嫌でコンビニから買ってきた唐揚げ棒を食べている。保健室は飲食禁止だったけれど、もともと生徒数の少ない学校なので保健室専任の教諭はおらず、運良く自由に使っていた。

「あんまり食べると、太って四葉ちゃんが悲しむよ」

「この身体、すぐ腹いっぱいになっちゃうぜ」

食べ終わった棒を投げ捨てるので、沙耶香が拾って袋に入れる。

「じゃあ、ここで放課後までおとなしくして…ちよっ?!」

沙耶香は四葉の手に乳房をつかまれて驚いた。

「な、なんすんのよ? 四葉ちゃん?!」

「腹もふくれたし、男と女、やることといったら決まってるだろ」

四葉の瞳が沙耶香を見つめてくる。沙耶香の唇を見て、乳房を見て、腰を見て、そして腿を見ながら、四葉の手が触ってくる。スカートの中に四葉の手が入ってくると、さすがに沙耶香は危機を感じる。

「ちよっ?! ま、待ってよ! おちついて!」

「抵抗しなければ、痛い思いはさせねえぜ」

「抵抗とか、そんな話やなくて、女の子同士で…」

「うゝむ、いいなあ。やはり、乳は、こうやって揉むに限る」

四葉は右手で沙耶香の乳房を揉みながら、左手で自分の乳房も揉んでいる。やはり、自分の身体の一部である四葉の乳房より、目の前にいる沙耶香の乳房を揉む方が格段に気持ちが高ぶるようだった。

「ちよっ…、四葉ちゃん、もう、やめて」

「すぐに、やめてなんて言えなくしてやるぜ。最高に気持ちよくな」

乳房を揉んでいた四葉の手が、指先で沙耶香の胸のあたりと、トンと音調をとるように打ってきた。

「はうん…」

ほんの少し指先で突かれただけなのに、沙耶香は全身の皮膚に温かい電気が走るような刺激を受けた。

「な…なにを……したの…」

「胸椎の秘孔、龍領を、ほんの軽くな。これで、お前の身体はむかれかけた神経で包まれている。ほんの少し愛撫するだけで、ほれ」

四葉の両手が、沙耶香の左右の乳房を揉んでくる。

「ああああ…」

皮膚感覚を鋭敏にされた沙耶香は身体の芯が熱くなって、喘ぎ声を漏らしてしまった。

「くくっ、さらに。北斗有情拳。秘孔、牽正への北斗有情破顔拳で天国

を感じさせてやるぜ」

四葉の手が、ゆっくりと沙耶香の顔の上にくる。祭りのさいに、新米をつかむ四葉の指先が、ゆっくりと沙耶香の額に触れ、そして下がっていく。額から鼻、唇を通り過ぎて、顎、喉元、胸、お腹、下腹部、陰部から肛門まで、触れるか触れないかの軽いタッチで指先が流れていった。

「ああ…あは…いい気持ちいい…ちにや…」

脳から脊髄神経の末端まで快感で満たされて身体が勝手に動いてしまう。身を守るようにしていたはずの両腕が沙耶香の意志とは関係なく、大きくあがって乳房を四葉へ晒すように後頭部まで手を回して、汗ばんだ両腋をみせて、首もそり返って首筋を晒して息を乱している。

「ハア…ハア…はにやあ…」

さらに沙耶香の両脚が関節の限界まで開脚してスカートがまくれ、いつのまにか濡れてしまったショーツを晒して、足首も攣りそうなほど反らして、足の指先までキュウツと閉じたり開いたりしている。腰が勝手にクネクネと物欲しそうにうねってしまい、もう四葉の愛撫を受けたくて仕方ない身体になってしまった。

「…ハア…ハア…よ…四葉ちゃ…」

「やめてほしいか？」

四葉の唇が意地悪な問いを放ってくる。

「…うう…」

沙耶香は恥じらって目をそらした。

「ん…？ 聞こえんなあ？」

「そ…そんな…」

切なくて沙耶香が両目から涙を溢れさせると、四葉の手が、沙耶香の乳房を揉んでくれる。

「ああうううん！」

片方の乳房を揉まれただけで沙耶香は絶頂に達して腰が折れそうなほど、背中を反らして喘いだ。

ピュウピツ…

沙耶香の陰部から熱い迸りが噴き出してショーツに染みを造っていく。

「潮吹きしたな」

「ああ…い…言わないで…」

初体験だったけれど、沙耶香は自分が潮吹きしたことがわかり、恥ずかしくてたまらない。まさか、幼馴染みの四葉の手によって、こんなことをされてしまうとは思ってもみなかったし、四葉の瞳は沙耶香の変化を楽しむように、じっと見つめている。

「ハア！ ハア！」

沙耶香は気持ちよすぎて、息をする度に唇から舌が出てしまう。ヨダレが顎に零れて滴っていた。

「フフっ、もう欲しくてしかたないメス犬の顔になったな」

四葉の唇が得意げに笑い、語る。

「この龍領と牽正をうたれた女は、みんなこうなっちゃう。あの不感症みたいな顔したユリアだって、そうだろうよ。もつとも、兄貴たちも秘孔、龍領と牽正の、この使い方は思いつくまい。あのチェリーども。できの悪い弟もふくめて、あのチェリー三兄弟には一生かかっても到達できない、頂点の一つ、まさに天。女にとっては天国だろう？」

「あはああああああ…」

沙耶香は両の乳房を揉まれると何度も絶頂が襲ってきて、もう話は聞いていない。四葉の唇は語り終わると、ペロリと小さな舌を出した。そして、沙耶香のブラウスを開いてブラジャーを押し下げると、ピンと勃った乳首を露呈させた。

「可愛い乳首だな。お前…えくつと、名前、なんだった？」

「さ…沙耶香…ハア！ ハア！」

忘れられていたことも意識にのぼらず、喘ぎながら沙耶香が答えた。

「そうだったな。沙耶香」

「っ…ああっ…」

沙耶香は名前を呼ばれて嬉しくて絶頂した。ちゃんと名前を呼ば

れた記憶は、ほとんどない。もともと、名取の両親が早耶香にするか、沙耶香にするかで話がまとまらず、両方にするという無茶な決断をして、まず姉が早耶香になり、それから沙耶香が生まれた。けれど、周囲は呼ぶときに差をつけないと混乱するという理由で、姉をサヤチン、そして沙耶香は郷土の人形にちなんでサヤボボという変な名が定着してしまい、ひどいときは姉は単にチン、沙耶香はボボと呼ばれたり、姉妹を合わせてチンボボと呼ばれたりする。二人とも美人と聞いていい顔立ちで声も可愛らしいのに、この名のせいで男子からの扱いも軽いのがコンプレックスだった。

「可愛いぞ、沙耶香。とくに、お前の喘ぎ声はいいな」

「ああんっ！ ああああんうううー！」

ほめられた犬が喜ぶように沙耶香は腰をふってしまい、乳房が揺れる。四葉の瞳が沙耶香の乳首を見つめ、舌先で自分の唇を舐めた。その動作で沙耶香は乳首を舐められると予感して恐れる。

「ちよっ…ちよつと待って…まさか…その舌を…や…やめて…た…頼むから…そ…そんなことされたら…死んじゃう…ね…ね？」

乳房を揉まれるだけでも絶頂してしまうのに、名前を呼ばれるだけでも絶頂しているのに、温かくて柔らかそうな四葉の舌に舐められたら、快感で死んでしまうかもしれないと沙耶香は涙ながらに懇願したけれど、口噛み酒を造る四葉の唇と舌は、ゆつくりと沙耶香の乳首に近づいてくる。

パクっペロペロ…

「うきやあああん!! ひひくくんううー！」

沙耶香は身体がバラバラになるような快感を覚えて絶叫したのに、快感の波が止まらない。舐め続けられるので次々と快感が襲ってくる。

「はああああんう!! ひええううわあああんうう!! けうつうきやああんっ!! あきやあくん!! あくおおこおお…はわっ!!!」

快感すぎて沙耶香はショーツの中に、おしっこを漏らしていく。

ショオワアアア!

温かい小水が皮膚を濡らす感覚も気持ちよくて、また絶頂してしま

うし、尿道を小水が駆け抜ける排尿感も気持ちよくて何も考えられなくなる。四葉の舌が乳首を舐めるのをやめてくれると、やっと息が静まってくる。

「ハア！　ハア！　ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……うう……」

沙耶香は高校生にもなつて、おもらししてしまった自分を自覚して恥ずかしくて泣いた。なのに、四葉の唇は笑っていて容赦ない。

「ぐちよ濡れになったな」

「っ……うう……」

「いい頃合いだ」

四葉の両手が沙耶香のショーツを脱がせてくる。もう抵抗する気力もなくして沙耶香はスカートはそのままにショーツを脱がされて、四葉の瞳に膺を晒した。さらに四葉の手は自分のショーツもおろしていく。そして、思い出した。

「あ、そうか…無いのか……まあ、いい。擦りつければ、なんとかかなるだろう」

すっかり忘れていたけれど、こだわらないことにして頷くと、脱ぎ捨てられた四葉のショーツは沙耶香のショーツと重なっておかれた。

「沙耶香」

「っ……はい……」

「脚を開け」

「……うん……」

開脚すると、少し治まっていた秘孔の効果が再燃して、また股関節の限界まで脚が広がっていくし、両腕も勝手にあがつて乳房を吸って欲しそうに晒した。

「いくぜ」

「っ……」

沙耶香も四葉の身体も少女らしく柔らかいので下半身を絡み付け合おうと陰部が吸いつくように密着する。

クチュ！　クチュ！　又チュヨ！

陰唇と陰唇がキスをして、四葉の勃起したクリトリスが沙耶香のク

リトリスを突いてくる。

「はううん…」

「おおっ…おおっ…いいいぜ」

「ああっ！ あああんううううー！」

快感が高まってくる。沙耶香は自覚しないうちに四葉の背中に抱きついて、爪を立てて喘いだ。秘孔の効果がある沙耶香は何度も絶頂し、ガクガクと仰け反って潮吹きしたけれど、四葉のクリトリスは満たされずに離れた。

「よーし、次はフェラだ」

「…え…？」

「舐めろ。歯を立てるなよ」

上になつていた四葉の身体がベッドに寝転がると、開脚している。

「さっさとしろよ」

「は…は…は…」

命じられるまま沙耶香は四葉の股間に顔をうめた。沙耶香の唇が四葉の陰唇に触れる。ふんわりと、いい香りがする。何日か、お風呂に入っていない感じなのに、とても不思議な香りがして沙耶香は酔ったような気持ちになった。

ペロ…ペロペロ…

沙耶香の舌先が熱く勃起している四葉のクリトリスを舐めている。

「おおっ…いいいぞ、その調子だ」

「はい。ハア…ハア…」

舐めている沙耶香も、また興奮してくる。触覚神経が研ぎ澄まされているので、舐めている舌先も快感だったし、四葉の股間に押しつけている顔全体も気持ちいい。はじめての経験だったけれど、女性器なので、どこを舐めれば気持ちいいのか、検討がつきやすい。沙耶香は舌先で四葉のクリトリスを転がして吸い、ときどき尿道も舐めている。

「…おおっ…ハア…おおっ…」

四葉の可愛らしい声が、だんだん熱っぽくなってくる。

「…ハア…ハア…」

「……………」

イかせてみたい、と素直に沙耶香は思った。

チウウウウ…

沙耶香の唇が強く四葉のクリトリスを吸いながら甘噛みする。唇で甘噛みして固定したクリトリスの先端を舌尖で激しく舐め回した。

「おおっ…うう！ で、出るぞ！ 飲めよ！」

四葉の身体が潮吹きして、沙耶香の口の中に熱い迸りが拡がった。

「ハア！ ハア…ハア…」

「……………美味しい…」

不思議な味がして、ますます沙耶香は酔ったような顔になる。もう四葉の身体は満足している様子なのに、沙耶香は、もっと欲しくなって舐め続ける。陰部の全体を舐めるとスカートをまくって下腹部も舐めるし、お臍に舌も入れた。

「おい、くすぐりたいぞ」

もう性交は終わった気分でののか、コンビニで買ってきたポテトチップスを食べ始めているけれど、沙耶香は興奮が冷めない。四葉の身体を舐め続ける。いつも全開になっているブラウスの前から顔を埋めて、おっぱいを舐め、汗で濡れた四葉の腋を舐めると、酪酊していく。

「美味ちい〜ちにゃ〜…」

ろれつが怪しい声を漏らしている沙耶香の頭を、四葉の手が子犬を撫でるように触れる。

「ちよつと、強く秘孔を刺激しすぎたか…：まあ、そのうち冷めるだろ。やっぱり、手加減が難しいなあ…」

「美味ちいの」

「そうか、そうか」

なつく犬が舐めてくるのを任せておくように、四葉の手は沙耶香の

頭をポンポンと叩いた。沙耶香は四葉の腋から味がしなくなるまで舐め尽くすと、次は四葉の首筋や耳を舐める。そこも舐め終わると、またスカートをめくって内腿を舐める。膝の裏も舐めて、四葉の靴下に手をかけた。

「ハア…ハア…」

四葉の靴下から、いい香りがして沙耶香は脳が痺れた。靴下を脱がせると、もう無我夢中で四葉の足を舐める。親指から順番に吸っていき、指のまたの味を楽しみ、爪の垢を飲み込み、足の裏に頬ずりする。片足を舐め尽くすと、もう片方の足を見つめながら、沙耶香の唾液で濡れた四葉の爪先を股間に押しあてた。ずっと熱く濡れている沙耶香の膧は四葉の爪先に吸いつくと、四葉の親指を膧で包んだ。

「あうんうん…ハア！ ハア！」

そして、もう片方の靴下を脱がせて、四葉の親指を吸う。気を利かせてくれたのか、膧で包んでいる四葉の親指が軽くピストン運動してくれると、沙耶香は口と膧で四葉の親指を感じて何度も絶頂した。ずっと、このまま、四葉の身体を舐め続けていたいと想っているときだった。

「四葉？…いる？」

保健室に人が入ってくる気配がして、司の声がした。

「おう。何か用か？」

「だいたい、できたよ！」

司はカーテンの中にいる女子と話すときのエチケットで、カーテンを開けたりせずに会話を続けている。本来なら、すぐにでも沙耶香は今の行為をやめるべきだったのに、やめたくなくて、やめられない。四葉の爪先を股間に受け入れながら、反対の爪先を吸っているのを、もしも見られたら、どう思われるかよりも、やめたくない気持ちが強くて理性が働かない。むしろ、興奮する。恋破れて司は四葉に告白してしまったし、四葉も受け入れている。それなのに今はカーテンの一枚向こうで、四葉の身体と絡まっているのは自分だという状況が倒錯的すぎて、二人の会話は耳に入らず、ただ腰をくねらせながら、四葉の足の親指を吸っていた。けれど、次の瞬間、四葉の足が乱暴に去り、

怒鳴り声が聞こえてくる。

「よくできた弟く〜?!」

カーテンが乱暴に開けられ、飛び出していった。そして、さつきまで沙耶香が舐めていた足が司を蹴っている。

「兄よりすぐれた弟なぞ存在しねえ!!」

「痛つ…あ、うわつ…、も、もしかしてジャギさんの方?!」

司は朝から学校を欠席して古川図書館に行っていたので入れ替わっている状況を知らず、四葉から頼まれたことを完成させた喜びで報告する中、兄貴には負けない、よくできた弟、という話題に触れたのだった。

「おのれの無力さを思い知らせてやるわ!!」

「痛いっ…うぐー! ご、ごめ! な、なんで?! な、なにが?!」

なぜ蹴られるのか、司はまったくわからない。わからないまま、四葉の素足が降ってくる。ガスガスと踏み蹴られる。けれど、見上げると、なぜか、四葉のスカート内はノーパンのようにも見える。見間違いかと思つて見直そうにも、激しい蹴りが降ってくるので、そうもいかないし、ノーパンでも、そうでなくても、見上げるのは四葉に悪いと思つて、ただ蹴られるのに耐える。もともと四葉の体重は軽いし、靴も履いていないので、それほど痛くない。蹴っている方も殺す気ではなくて、いたぶる気なので一発一発は強くない。さんざんに蹴った後、四葉の口が唾を吐いた。

「べっ…」

四葉の唾が、司の顔に降りかかり、沙耶香は一瞬だけ司が嬉しそうに頬を赤らめたのを見逃さなかったけれど、羨ましいという気持ちが生まれていたことを打ち消すように頭を振った。

「うち…さつきまで、…何を…危なかった…」

さつきまでのことが夢のように思える。けれど、あのままだったら危ないということもわかった。

「…宮水の巫女つて…酒蔵の天井に、ええ酵母菌がいるみたいにな…身体に、なにか、あるのかな…」

沙耶香は乱れた衣服を直しながらつぶやき、立ち上がる。

「そろそろ放課後やし。散歩でもしよ」

もう保健室にいて、変なことになるのは懲りたので、三人で学校の外に出た。なのに、一難去ってまた一難で、不良の集団に取り囲まれてしまった。

「総代、コイツです！」

昨日、四葉が不意打ちで倒した空手部の主将が、さらに自分より大柄な男子と、たくさん仲間を連れてきていた。

「こんなチッコい女にやられたのか、お前は」

「す、すみません。けど、気をつけてください。不意打ちで金的、狙ってきますから」

「かわいい顔して、怖いのお」

大柄な男子が四葉の顔を見て笑っている。四葉の唇が不快そうに歪んだ。

「なんだ、てめえは死にたいのか？」

「おお、怖い怖い。威勢のいい女の子だのお」

「宮水！ このお方の名を知っているかーっ！」

「知らねえよ」

「このお方こそは、岐阜県番長連合総代の…」

空手部の主将が言い終わる前に、四葉の回し蹴りが顔面に決まった。

ベギっ！

さきほど司を蹴ったときとは違い、筋肉の潜在能力を100%出した鋭くて重い蹴りで、一撃で気絶させている。そして、司が驚く。

「岐阜県って、いまだに番長連合とか、あるんだ…もう合掌造りと同じくらいの文化財じゃないのか…」

現役の高校生だったけれど、そんな世界があることは知らず驚いている。とくに県全体で連合しようと思うと、飛騨地方と美濃地方で、かなり集まるのが大変そうだった。もしかしたら、今日も、けっこうな遠征として、ここに来ているのかもしれない。

「かかれえ!!」

総代が命じると、たくさんの仲間たちが四葉を取り囲み、襲いかかる。

「フっ、降りかかる火の粉だ。あいつも文句はねえだろう」

ジャギはメツセージを少しは読んだので、暴力行為は控えていたけれど、もう遠慮しない。

「ぶっ飛ばすー！」

それでも殺さない程度に次々と蹴りを入れていく。ときには拳で殴りつけるけれど、もともと四葉の腕力なので100%を出し切っても、秘孔を避けると効率が悪い。攻撃の主体が蹴りになるのでスカートの裾が舞い上がり、四葉のお尻が丸見えになっていた。

「っ…なんで、四葉…パンツを…」

「っ…四葉ちゃん…あ…」

沙耶香は保健室から出るときに重ねて脱ぎ捨てられていたショーツを自分だけ着けて、四葉の分は、そのままになっていることに気づいて青ざめる。しかも、ブラウスも全開なので立ち回りすると、乳首も股間も何もかも露出してしまっている。このままでは、あまりに四葉が四葉に戻ったとき可哀想だった。ただ、ノーパン、ノーブラのおかげで相手の視線が誘導されて倒しやすくなっている。

「ぐわっ?!」

「げふっ!!」

「油断するなっ、…ごはっ!」

どうしても、女子相手に油断しないで戦おうと思っても、つい蹴りであがった脚の付け根に視線が落ちてしまい、一瞬のチラ見のために顔面にクリーンヒットを受けてしまっている。沙耶香が叫ぶ。

「そいつらの記憶が飛ぶくらい! 思いっきり蹴ってやって!!」

「おうよー!」

止められても止める気はなかったけれど、止められると思っていたジャギは心得たとばかりに立ち回る。もともと、リュウケンの指導を素直には聞き入れず、秘孔を正確に突くことよりも相手に打撃を与えることを重視していたので、秘孔を避けても楽しく戦える。またたく

間に、たくさんいた仲間たちをすべて倒した。

「ハアハア！ あとは、てめえだけだ」

「ほオ、少しはやるようだよ」

観戦していた総代が油断なく構える。

「だが、このワシはお前の色香になど惑わされぬぞ。なにしろ、ワシはゲイだからのオ」

「……ぺっー」

四葉の唇がアスファルトに唾を吐いた。

「ゲイって……」

司と沙耶香も言われてみると、どことなく総代にゲイの雰囲気を感じた。キレイに剃り上げられたスキンヘッドや学ランの刺繍など、やや身綺麗などころも、それを感じさせるし、すでに四葉の三連キックを受けてアスファルトに転がっている副総代らしき男子は長髪で唇にリップを塗っていたりした。

「ワシは、お前の汚いマンコに目を奪われたりせんからのオ」

「ハア、ハア……」

構え直そうとした四葉の細い足がフラついて膝がガクガクと震えた。

「ちっ……この身体、……持久力もねえのか……」

「脚にきとるのオ」

「貴様ごとき一瞬で倒してくれるわ！」

言い放った四葉が鮮やかな回し蹴りを放ったけれど、総代は蹴り筋を読んでいて、ぶ厚い手のひらで受けとめた。ずっと観戦していて戦い方を見極めていたようだった。

「おお、痛い痛い」

「ちっ、ならー」

蹴りを受けとめられた姿勢のまま、反対の脚で再び総代の首筋を狙って蹴ったけれど、これも受けとめられる。

バツ！

総代が四葉の足首をつかんで捕まえようとしてきたより一瞬早く後転して逃げ、体勢を整える。

「ハアハア！」

四葉の唇が荒い息を吐いて、汗が流れた。

「今度は、こっちからいくぞオ」

総代が相撲の突っぱりのような攻撃をしてくる。

ゴワツ：

奇抜ではない、ごく普通の突っぱりだったけれど、避けたくても脚がついていかない。

「くっ…」

四葉の両腕が顔を守るように交差して突っぱりを受けとめる。
ビシツツ！

か細い四葉の腕が、ぶ厚い掌を受けて折れそうなほど撓った。

「まだ、まだ、いくぞオ！」

次々と突っぱりを放ってくる。奇抜でない突っぱりなだけに隙も生まれず反撃の機会が無く、じわじわと体力を奪われる。うまく力を受け流してみても、勝機が見えない。

「…うぐっ！」

とうとう大きく弾かれてしまい転がったけれど、追い打ちされるのを避けて距離を取る。

「ハアハアハア！ 畜生が、ハアハア！」

「ぐふふふ。もう、おしまいかのオ」

「ちっ…」

四葉の舌が大きく舌打ちして、汚れたブラウスを脱ぎ捨てる。四葉の身体は上半身裸となった。

「お色気攻撃は無駄じゃと言ったはず」

そう言っただけ距離をつめて突っぱりしてくる総代にブラウスが目隠しとして投げつけられる。

「オラっ！」

四葉の爪先が総代の股間を狙って放たれたけれど、予想されていたように腿でガードされてしまう。それでも、反対の四葉の足が総代の腹部に蹴りを入れる。

ボゴツ…ブニユツブニユ…

ぶ厚い脂肪の層が四葉の足を受けとめていた。

「効かんのオ」

「くっ…」

再び離れようとしたけれど、四葉の足に腹部の脂肪がからみつき、手間取ってしまった。その隙に至近距離から突っぱりを放たれる。

バシイン！

「ぐうっ?!」

四葉の左腕が頭部をガードしたけれど、その衝撃は軽い体重を吹っ飛ばすに十分だった。

ドシャツ…

吹っ飛ばされて、立ち上がろうとした四葉の足がガクガクと崩れ、膝を着いた。

「このオレ様に膝を…、うっ…うえっ…」

脳震盪のためか、腹部にも衝撃を受けたのか、吐きそうになって四葉の右手が唇を押さえている。

「さて、裸にして二度と町を歩けないよう吊してやろうかのオ」

「ううっ…ううっ…」

もう四葉の脚は膝を着いたままで立ち上がる力がないように見えた。ここまで圧倒されて見ているだけだった司と沙耶香が叫ぶ。

「やめろよ！ もう警察を呼ぶからな！」

「四葉ちゃんのお父さんは、この町の町長なんよ！ あんたなんか刑務所行きや!!」

「はあっ?! それがどうした?!」

総代が叫び返してくる。

「ワシは先週シャバに戻ってきたけど、仕事なんか無いんじゃないやあ！
もう、どうなってもええわい!! また、タダ飯じゃア!!」

「っ…」

司と沙耶香が戦慄する。同じ世界に生きていても、生活してきた階層があまりに違いすぎて、もう価値観が違いすぎる。守るものがない相手に、何を言っても無駄だと思いきらされた。

「町長が、なんぼのもんじやい!! うおおおおおー!」

突進してくる総代の前に、フラフラと四葉は立っていた。

「四葉ちゃん、危ない!!」

「四葉、逃げてくれ!」

「……………」

四葉の瞳が、脳震盪でも起こしているように、ぼんやりと総代を映している。もう、目の前まで総代が迫っている。逮捕覚悟の破れかぶれの体当たりを受けては、四葉の身体では圧死してしまうかもしれない。沙耶香が悲鳴をあげ、司が間に合わないとなりながら駆けつけようとした次の瞬間、四葉の唇が含み針を吹き飛ばす。

プププツ!

針は正確に総代の目の回りへ命中した。

「なわっ?!」

「バカめ!」

さらに四葉の足が針の刺さった総代の顔を蹴りつける。

「あぎやああああ!!」

深々と針が刺さり、総代が悲鳴をあげている。

「オラっ!」

また四葉の足が総代を蹴る。もう戦意を失っている相手の股間を蹴り、そして側頭部に強烈な回し蹴りを入れて気絶させた。

「ペッ!」

最後に唾を吐きかけてフィニッシュにする。

「ハア…ハア…終わったぜ」

「四葉ちゃん…今のは…」

沙耶香は午前中にコンビニへ行ったとき、食べ物以外に裁縫セットを購入していたことの意味が、ブラウスのボタンや解れを直すためではなかったと悟り、そして、さきほど吐きそうになっていたのは演技で、その間に針を口の中に仕込んでいたのだとも、わかった。

「……………なんていうか……………宮水の巫女っぽい……………技といえば、そうやけど……………」

「これはオレ様の得意技よ。けっこう難しいんだぜ。こんなに巧く飛

ばせるようになるには、かなりの修行が必要よ。この女の口で、うまくできるか、不安だったけど、意外に鍛えてあるのか、思いの外、うまく飛んでくれて助かったぜ」

「……ま……まあ、……祭りにそなえて……練習はしてると思うよ……」

沙耶香はブラウスを拾って、四葉の肩にかける。

「おい、テツツー！」

「は、はい！」

「肩をかせ。もう、脚がフラフラだ」

「……うん……」

司はブラウスを羽織っただけの四葉を支えた。そして家路に着くと、一葉を心配させないように沙耶香が衣服を整えてやり、玄関でも靴を脱がせてあがった。

「四葉ちゃん、帰りました！」

「お邪魔しま〜す！」

やや心配なので沙耶香と司も、いっしょにあがる。一葉は台所で夕食の用意をしていた。孫娘を心配して連れてきてくれた二人に笑顔で頭を下げた。

「今夜は煮物やし、いっしょに食べておいでな」

「二ありがとうございま〜す」

遠慮する関係ではないので二人とも素直に礼を言い、スマートフォンを操作して自宅に夕食は宮水家でいただくと連絡している。三人とも居間に座り、寛いだ空気になった。

「おい、お前らが、ときどきいじってる、それ、なんだ？」

「え？ これ？」

沙耶香がスマートフォンを四葉に向ける。

「おう、それだ」

「スマホやけど」

「……スマホって何だ？」

「便利な携帯電話、かな……画面が大きい」

「電話……この地区は電話がつかえるのか？ それとも無線機か？」

しかも、それカラー画面じゃねえか！」

四葉の手が沙耶香のスマートフォンを奪い取り、見つめる。

「おお……この写真、この女とお前らか……」

「そうやよ」

「……すごいなあ……警察や軍隊も機能してるって話だしな……」

そう言いながら、疲れた脚を自分で揉もうとして、すぐに二人へ命じる。

「おい、お前ら、オレ様の足を揉め！」

「え……」

司が戸惑い、沙耶香が答える。

「わ、私が揉んであげるよ。テツツーは遠慮しとき」

「そ……そうだよね……」

「オレ様はお前らに命じた。オレは同じ命令を二度するのが大嫌いだ。左右同時に揉め」

「じゃ……じゃあ……ボクも……」

そつと司も四葉の足に触れる。

「もつと力を込めろ」

「は、はい」

沙耶香と司が疲れている四葉の足を揉んでいく。

「……………」

四葉の細くて白い足からは不思議ないい香りがする。

「……………」

「あ……疲れたアア……」

四葉の身体が横になるとスカートの裾があがってしまう。司と沙耶香はノーパンのままなことを思い出した。

「……………ゴクツ……」

二人が同時に生唾を飲み込み、赤面する。

「テっ、テレビでもつけよー」

おかしな空気になりそうだったので沙耶香がテレビをつけた。

「ほお……テレビまで……」

四葉の身体がテレビを見るために寝返りをうったので、スカートが

めくれてお尻が見えてしまう。沙耶香が慌てて直してやった。

「明日の中部地方のお天気は愛知県で晴れ、岐阜県では…」

テレビが天気予報を流している。

「天気予報までやるのかぁ……………」

四葉の瞳が眠そうにさまよう。その瞳が壁にかかっているカレンダーを見た。

「……………2020……………2020年だ?!」

「キャ?!」

「うわっ?!」

揉んでいた四葉の足が急に立ち上がった沙耶香と司が驚くけれど、四葉の手が司の胸倉をつかんだ。

「おい！今は何年だ?!」

「え？に…、2020年だけど？」

「いやいや、いくら何でも、そんなに進んでないだろ?! えっと…1、

2、3…………核戦争から冬も夏も、わかりにくいから…それでも…」

四葉の指が年数を数えている。

「せいぜい、よく進んでて98年とか、そんなもんじゃねえか？」

「……………」

司と沙耶香は、どう反応していいか、わからない。そこへ、一葉が煮物を持ってきた。

「まずは、お夕飯にしましょ。カレンダーの話は、そのあと」

「そうだな。腹が減ったぜ」

煮物の匂いに四葉の口が唾を飲み込んでから、微笑した。

第4話

翌朝、四葉は仮住まいの自宅で目を覚ますと、すぐに紙とペンを持ち、速記のような速さで体験してきたこと、覚えていることを書き記していた。日の出から書き始め、一冊の辞書になるほどの書き物をした四葉は7時頃、玄関に司の気配を感じて一階におりた。廊下で祖母が心配そうに声をかけてくる。

「四葉、朝ご飯、できとるよ」

邪魔にならないよう静かにしていた一葉は食事も風呂も用意していたけれど、四葉は謝る。

「ごめん、時間がないの。心配かけて、ごめんね。もう、そう長くはないから。でも、その分、時間がない気がするの。今日は長い一日になりそう」

「四葉……」

「昨日の私、ジャギさんの言動を、主なところを手短かに教えて」

そう言われて一葉は昨日のジャギの行動を伝える、とくに今が20年であることに気づいたような納得していないような状態になったことに、四葉は頷いた。

「彼にも協力してもらわないといけないから、そろそろ気づいてもらった方がいいわ」

「……四葉、あんた……雰囲気……。本当に、四葉なん？ つ…、変なこと言うて、ごめんよ」

「今日は、四葉だよ。お婆ちゃん」

相当に困難な事態に直面しているはずなのに、高校2年生とは思えないほど、しつかりとしていて静かに落ち着いて見える孫娘へ、一葉は思わず問うたことを詫びたけれど、四葉は穏やかに聖母のように微笑んだ。そして、祖母に背中を向けて、四葉は自分が書いた物を持ち、玄関にいる司に声をかける。

「おはよう。ありがとう」

四葉は司が手に持っている書き物へ、礼を言った。

「おはよう、四葉。言われたこと、やったつもりだよ」

「頼りになる人で嬉しいわ。ありがとう」

「っ…、そんな…」

あまりにもストレートに礼を言われて、司は照れくさくて目を伏せた。

「じゃあ、それを持って糸守神社へついてきて」

「え？ ああ、けど、学校は？」

司は早く四葉に完成した物を届けたくて、少し早めに来たのだったけれど、学校へ行くつもりが無さそうな様子に問い、四葉は平然と答える。

「欠席の連絡をいれてくれる？」

「わかった」

司は自分と四葉が欠席する連絡を学校と、あとで来るはずの沙耶香へも入れながら、四葉の隣を歩いて糸守神社に向かった。隕石落下で宮水神社は倒壊してしまったけれど、町にいくつかある神社の中で一番近い糸守神社へと二人で入った。

「本当なら身を清めたいけれど、せめて手と口だけ」

四葉は岩清水で作法通りに手を洗い、口を漱ぐ。なんとなく司も同じようにした。本殿に近づき、四葉は一般の参拝者は入れない奥まで入っていく。

「いっしょに来て」

「あ…ああ、いいのか？ ここ、入って」

「今は、いいのよ」

「わかった」

司は入ったことがない本殿の奥まで、四葉の後に続いて入った。本殿は30畳ほどの広さで、正面の扉にある格子から光が入ってくる以外は、薄暗い造りになっていた。四葉は中央に立つと、自分が書いた物を足下に置き、司が持っている紙束を受け取る。

「よくできてるわ。本当に、ありがとう。これで世界は救われるかもしれない」

「四葉……」

司は訊きたいことが山ほど生まれたけれど、四葉の邪魔をしたくないので我慢する。四葉は静かに受け取った紙束と自分が書いた紙束を畳に並べて置いていつている。司が書いたのは1962年から1990年代にかけての各国の軍事や政治、経済についての資料だった。

「このウクライナの資料、もう少し細かいことを知りたいわ。ここと、ここ」

「ああ、それなら」

ときおり四葉は資料を並べながら、追加の情報を要求してくる。司がスマホで調べて四葉に見せると、記号のような文字を書き加えていた。その記号のような文字は、四葉が書いた物には、びっしりと書かれている。司には、まるで読めなかった。

「それ、なんて書いてあるのさ？」

思わず、司が質問すると、少しだけ説明してくれる。ソビエト連邦を単にソと書いていたり、アメリカ合衆国をAとしか書いていないことや、戦闘機をキとしか書いていないことを教えてもらうと、少しは司にも意味が推し量れてくる。

「……QにソミB、62／10対Aキ54……これって、キューバにソ連がミサイル基地、62年10月対抗してアメリカが戦闘機54機を派遣、って意味？」

「……」

四葉が無言で頷いてくれたけれど、これ以上は話しかけないで欲しいという気持ちが伝わってきたので司は黙る。書くスピードを優先したために、ほぼ四葉にしか読めない紙片が円陣に並んでいくと、神聖な儀式にさえ見えってくる。二人が書いた物が所狭しと本殿に並びきると、司は本殿の隅までさがっていた。

「あとは、声を聞くだけ。糸の声を。歴史の糸の声を」

つぶやいた四葉は静かに立っていたり、歩き回って紙片を見たり、そんなことを2時間も、3時間も続けて、そして唐突に唾を吐いた。

「ぷっ」

「……………」

司には何をしているのか、まったくわからないけれど、四葉が吐いた唾は紙片に落ちて、そこには人名があった。

「ぷっ」

さらに四葉が唾を吐く。また、人名に落ちている。

「ぷっ」

三度目も人名に落ちていた。

「この三人のこと、調べて」

「え？ ……あ、ああ、わかった」

四葉が選んだ3名は、ロケット技術者と政府の高官、大企業家だった。言われた通り司がスマフォで調べると、四葉は調べたことを書き記してタメ息をついた。

「はああ……………終わった……………」

とても疲れた様子で座り込んでいる。

「大丈夫？ 四葉」

「ええ。今、何時？」

「えつと……………、11時20分だよ」

「もう、そんな時間……………いえ、間に合っただけ、よかったのかな……………。ねえ、こっちにきて、司」

四葉に呼ばれて本殿の中央へ行きながら、問う。

「なんで、テツツージャやないのさ？」

「テツツーっていう名前は、テツシーの2号、2番目って意味がこもってるでしょ。私は自分の伴侶をそういう風に呼びたくないの」

「はっ…伴侶…って…」

司が赤面していると、四葉が抱きついてくる。

「うわっ…」

告白はしたし、受け入れてもらえたような気もしていたけれど、あまりの進展の速さに、思わず司が一步さがる。さがった分だけ、四葉が近づいて見つめてくる。

「抱いて」

「え……………う……………うん……………」

抱きつかれている状態から、抱き返した。

「……………」

「……………」

そのまま抱き合つて、四葉は見つめてくるけれど、司は照れくさくて四葉の瞳を正視できない。大好きだった女の子を抱きしめている喜びより、急すぎる展開についていけず、また疑問も山ほどあるのに、四葉は抱きついていた手を自分のスカートへ入れて、ショーツをおろしていく。

「抱いて」

「そっ……そっちの意味で?!」

「うん」

「つて！ 待って、四葉！ ちょっと待ってよ！」

司は四葉の肩をつかんで引き離れた。

「どうしたんだよ?! 急に」

「……………」

四葉が困ったように目をそらし、少し考えて、もう一度、求めてくる。

「お願い、抱いて」

「四葉……そんな、急に言われても……」

「……………」。 ……ごめん……今の、なし……忘れて」

ものすごく悲しそうに、そして泣きそうな顔で四葉が諦めて離れていこうとすると、司も切なくなつて抱き留めた。

「待って、四葉！ せめて、少しは何か教えてくれよ！」

「……………」

「どうして急に?! それに、あの三人は、どうする気なんだよ?!」

「……質問は……しない約束……」

「それでもさ！ …… ……四葉は伴侶になる相手に、何も言ってくれないのかよ?!」

「っ……それは……」

四葉の瞳が迷っているように彷徨い、涙を零してから、まっすぐ見つめてくる。

「お母さんは、お父さんに何も言わなかった。私も、こうなるまで悟れなかった。ずっと、黙っているのは司に悪いよね」

「四葉？」

「……何から話せばいいのかな……とにかく、びっくりしないで聞いて……私のお母さんが、私が小さい頃に亡くなったのは知ってるよね」

「……ああ」

「私も、あのくらい短い命なの、きつと」

「っ?! どうして?!」

「それが宮水の巫女の宿命だから」

「…宮水の……、もしかして、それは三葉さんが時間を跳躍したかもしれない話と、関係あるのか?!」

「ええ」

「っ、やっぱり、そうなのか……彗星落下を……あのウワサは本当だったのか……。けど、あの話は、そもそもが、おかしくないか？」

「どのあたりが？」

「だつてさ、もしも、入れ替わりが時間を跳躍して起こっていたとして、彗星落下が感知できたから未来から過去へ危険を伝えたとしたら、その未来の方では犠牲者がいたはずで、そうでなければ未来から過去へ伝えようって動機が生じないし、かりに、うまくいったら、今度は、うまくいった未来から過去へ、伝えようって動機が生じないはずだろ？」

「うん、それは初歩的なタイムパラドックスのことですよ」

「そうだよ、パラレルワールドってことなら、そうなのかもしれないけど。そもそも、ボクが、いや、町の人たちが、そんなことをウワサすること自体、もう、おかしい話じゃないのか？」

「司、まず自分が認識している世界が、認識の通りだとは限らないって考え方、できる？」

「……太陽は地球の周りを回っているとか。地球は丸くない、大地は巨大な像が支えている、みたいな？」

「そう。人は見える世界を、観測できる事実を、それらが、すべてだと

思ってしまう」

四葉は髪を一纏めにしていた組紐を解いた。

「パラレルワールドっていう考え方は、時間軸を数直線のように想定して語られたもの。だから、どこかで分岐が生じると、そこから先は平行線。向こうは、向こう。こっちは、こっちで関係ない」

四葉は組紐を司に見せる。糸は複雑に絡み合い、見事な模様を造って紐になっていた。単なる糸の束であるよりも、組まれて紐になっていることで、はるかに強靱で便利になっている。

「けど、時間軸、いえ、世界の軸は数直線でもパラレルでもないの。むしろ、この組紐のようなもの」

「ひもっ？」

「二つ一つの世界は、一本一本の糸のようなもの。その細い糸が組み合わさって、太い紐、世界になっていくの」

「……………」

「紐だから、もしも一本の糸が切れても、紐でいられるの」

四葉が組紐の擦れて解れた箇所を見せる。

「途中で糸が切れても、他の糸が補完して、空いたところを分岐して埋めていく」

次に四葉は組紐の端を見せる。

「けれど、すべての糸が切れてしまったら、紐も切れてしまう。そして、糸と糸は、相互に干渉するの。良いことがあれば、良いことを。悪いことがあれば、悪いことを。どちらも隣接している糸へ影響してしまう。だから、一本の糸が焼き切れれば、その隣りの糸も焼き切れるかもしれない。さらに、それを放置しておけば、また隣りへ。そんな風に悪影響の連鎖が始まると、世界は終わってしまう。私たち宮水の巫女は、それを防ぐためにいるの」

「……………そんな……………」

「7年前、奇跡が起こった、そんな記憶が町の人たちにあるのも、糸と糸が影響を与え合うから、記憶に揺らぎが生じるの」

「だ……、だとしても……、だとしてもさ……どうして……四葉が長く生きられないんだよ?!」

「私たち宮水の巫女は、この奇跡を行う度に、残りの寿命の半分を失うの」

「っ……半分？」

「そう、半分」

「そんな……、いや、でも！ お婆さんは?! 一葉さんは、すごい長生きじゃないか！ 長生きする方法だって、あるんじゃないか?!」

「お婆ちゃんは一度も飛んでないの。ううん、正確には飛べない。そんな夢を見たことがあるくらいで、幸か不幸か、お婆ちゃんには、その力が、ほとんど無かった。お姉ちゃんも、そう、よく飛べて3年か、5年。それも、本人の能力に対しての自覚が薄いから、口噛み酒を造ったとき、寿命の半分を捧げるのかもしれないって感じてもないの。二人とも、ただの比喩だと思って口伝してる。けど、逆に私やお母さん、お婆ちゃんの母だった初葉さんは自覚がある。お母さんが死ぬ前に、私にだけ話してくれたこと、聞いたときは意味がわからなかったけれど、今になって世界が紐であること、自分が飛べること、命が長くないこと、わかってしまうの。そう、鳥が飛び方を、教わらなくても知っているように、蟬が来年の予定を入れないように」

「そんな……あんまりだ……ウソだと、言ってくれ」

「宮水の巫女に力があることは、他のことでも説明できるの。たとえば、司は酒税法って知ってる？」

「酒税法？ いや、知らない。消費税みたいなの？」

「知らないのが普通だよ。普通の高校生は知らない。けど、お姉ちゃんは知っていた。これは予知夢を見ていたから」

「予知夢？」

「宮水の巫女は、ときどき予知夢をみたり、予知、予感したりする。お姉ちゃんへ私が口噛み酒を商品化したら面白いよ、って小学校の頃に言ったときに、当時高校生だったお姉ちゃんは即答で酒税法違反だつて言ったの」

「そんなことがあったのか……」

「あの後、私も予知夢を見た。予知夢というより、ちゃんと酒税法違反にならないよう商品化したら、どうなるかなって考えて寝たら、商品

化は成功して爆発的に売れるんだけど、事業が軌道に乗り始めた頃、未成年の男の子が一人、食中毒で亡くなってしまふ。それをきっかけに食品衛生法違反で、私もお姉ちゃんも逮捕される。そんな夢を見たの」

「それは、ただの……」

「うん、妄想かもしれない。けど、小学生が、そんな夢を見る？ 高校生が酒税法を気にする？」

「……………」

「お姉ちゃんは以前に私と同じことを考えて、酒税法違反で逮捕される夢を見たんだよ。そして、私が再チャレンジしても、同じくバッドエンド」

四葉が思い出したく無さそうに首を振った。

「しかも、二人とも逮捕されて有罪判決。なんとか執行猶予はつくんだけど、亡くなった男の子の遺族から、ものすごい損害賠償金を請求されて。やめようと思っていた事業を継続して、お金を稼ぐことにした。今度は絶対に食中毒を起こさないように、口噛み酒を蒸溜して滅菌したり、健康食品の会社から依頼を受けて、私たちの唾液をもとにしたジュースが宮水還元水って商品名で発売されて、それが腸内フローラを整えて、多発性潰瘍性大腸炎なんかに効果があるって論文が発表されて……」

「すごいじゃないか……」

「でも、その健康食品の会社は論文データを改竄していて、私たちの唾液だけじゃなくて初めの身体検査のときに勝手に採取した腸内細菌を使っていたから、フローラが整えられただけだったし、そもそも販売の方法が強引なマルチ商法だったから、ものすごい批難をあげて連日、テレビカメラが私たちの家や学校にまで押しかけてきて……」

かなりの悪夢だったようで、四葉が頭を抱えて小さくなる。大メディアに連日追い回されたというのは、かなりのトラウマのようだった。

「マルチ商法の被害者の会が結成されて、また賠償金が膨れあがって、私たちは何も知らなかったのに毎日毎日、電話や手紙で脅されて。ひ

どいことを、いっばい言われて。なのに、健康食品会社の社長は韓国へ逃げて音信不通になるし、会社のお金は、いつのまにかキリスト教系の宗教団体に寄付されていて、金庫にも通帳にも残ってなくて。宗教法人という意味では同じでも、宮水神社には1円も入っていないのに疑われて、どんなに弁明しても信じてもらえなくて。注目されたおかげで、お父さんと勅使河原建設の癒着も、ささいな飲食接待くらいしかなかったのに針小棒大に週刊紙が報道して、そのうち、変電所爆破の件で社長の息子が逮捕、社長も危険物保管の不備で書類送検されて、中部電力から15億円もの賠償金が請求されて、産業らしい産業が勅使河原建設がメインだった町の経済は崩壊状態になるし、逮捕されたときに押収された雑誌が変な月刊誌が多くて、ムーとか、スカトロ倶楽部とか、唾液モノや嘔吐モノみたいなマニアモノばかりだったことに世間の注目が集まって、そしたら町の男性が、よく利用してる麓の市にあるビデオ店が、全国のマニアから知られる有名店で、普通のビデオ店は唾液モノとか、嘔吐モノなんてS Mモノの片隅に2つか、3つあるくらいなのに、棚が一つ丸ごと唾液と嘔吐もので埋め尽くされていて、週刊紙の記者がビデオ店から個人情報入手して、糸守町の男性の6割が、それらをレンタルしたり買ったことがあるって報道されて、もう海外からも取材にこられるくらい有名になって、私とお姉ちゃんは、どこにいてもカメラに追われるし、知らない男性が声をかけてきたり、追いかけてきたり、親切な人に見えたのに、うっかり差し出された食べ物を食べたら催吐剤が塗ってあって吐かされたり、洗濯物なんて、お婆ちゃんまで盗まれるし、外でトイレに入ることもできなくなるし、とうとう町の人でさえ絶対に入らない宮水神社の聖地の大石へ奉納した口噛み酒まで盗まれて、お婆ちゃんは先祖に申し訳が立たないって入水自殺して、お父さんも勅使河原建設の件で落選した後に首を吊って、お姉ちゃんと私は、ある日、後ろから袋をかぶせられて誘拐され、どこだかわからないところに監禁されて、毎日お客さんって呼ばれる知らない男性の命令をきかされるの。お腹いっぱいご飯を食べさせられた後に殴られて吐かされたり、逆さに吊されて鼻から水を入れられて吐かされたり、苦しくて苦しくて、

何年経ったのか、わからなくなった頃、鉄仮面のお客さんが15億円を積んで私たちを買い取ったの。そして生きたまま、身体のを少しづつ切り取られて、私の肉はお姉ちゃんへ、お姉ちゃんの肉は私の口へねじ込まれて食べさせられて、何度も吐いて、泣き叫んで、もう許して、いつそ殺してって懇願したら、鉄仮面の男が仮面を外して、火傷の痕を見せるの、そして言うの、この傷が痛むたびに貴様らへの憎悪を燃やしつものらせて生きてきたのだ！ って、その顔は奥さんが放火で焼け死ぬとき助けに行こうとして負ったものだって、そしてオレの名を言ってみろ、わかるか、って言われても火傷がひどくてわからない、でも、お姉ちゃんが勅使河原建設の社長さんだって答えて、したら、貴様らのせいで倒産しかけた勅使河原建設を再建するのが、どれだけ大変だったかを延々と語られながら切り刻まれて、姉妹お互いの肉を食べさせられて、そして私は、ああ、これは先祖代々受け継がれてきた神聖な口噛み酒を商品なんかにしたバチが当たったんだ、って意識を最後に発狂して…ハア…ハア…」

早口で語っていた四葉が過呼吸を起こしかけている。瞳が落ち着きなくキョロキョロと動き、冷や汗まで流している。まるで、その不幸な世界を体験してきて、フラッシュバックを起こしているかのような様子に心配になった司が話を中断させる。

「四葉！ 四葉、しっかりして！ 夢だったんだろ！ 夢！」

「…ハア…ハア…そう…夢…」

四葉は青ざめた顔で頷いている。あまりに怯えているので、あえて司は別の可能性を指摘してみる。

「その夢ってさ、本当にそういう可能性の世界があったのか、単に商品化なんて罰当たりなことを口にしたから、夜になって小学生だった四葉の無意識が見せた夢なのか、わからないじゃないか？」

「……………あつたの…」

「何が？」

「中学生になって、麓のビデオ店に行ったら、夢の中に出てきた記事と同じ棚が」

「……………」

言われてみると、司も兄が秘かに集めているコレクションが四葉の夢と酷似していることや、クラスメートの男子で貸し借りしている18禁DVDなどが、全国平均より唾液モノが多い気がしてくる。もともと、この町の男性は幼い頃から、あの祭りを見て成長するし、三葉と四葉も美人だけれど、二葉も相当な美人だったという話だし、一葉も今でも80代前後の男性から根強い人気がある。そんな環境で育てば、この町の男性の性癖がやや偏ってくるのも仕方ないのかもしれない。インターネットの普及で若年層の視聴傾向はウェブ上がメインになっていくけれど、18禁にアクセスできない高校生や中高年は今でもダウンロードより、ディスクを愛用しているのも事実だった。司自身、四葉とキスしたいと思う気持ちとは別に、四葉の唾液という言葉に扇情されないと断言できない。今も、四葉の唇と見つめると、キスをしたと思うのと同時に、話しているときに開いた口を濡らしている透明な液体にこそられるというのが正直な気持ちだった。

「ハア……ハア……ごめん、……この話は、するつもりじゃ……なかつたのに……思い出したら、止まらなくて……」

四葉が気持ちを入れ替えるように深呼吸する。

「ハアア……えっと、どこまで話したっけ？ たしか、宮水の巫女は、入れ替わりと予知ができる、そして入れ替わって歴史を改変すると、残りの寿命が半分になる、だったよね」

「あ、ああ」

「これまで、宮水の巫女は何度か、歴史に干渉してる」

「どうして、それがわかるんだ？」

「歴史の教科書を見ると、なんとなく感じるの。たとえば、南北朝の頃、天皇家が割れて大変だった時期に、楠木正成、新田義貞なんかの主立った武将が、あっさり敗死していたり、朝鮮への出兵にこだわった豊臣秀吉が病死していたり、徳川慶喜が奇妙なほど、あっさりと新政府軍に恭順したりね」

「……戦乱を治める方向に？」

「そう。一番大変だったと感じるのは、ひいお婆ちゃんの初葉さんと、

お母さん」

「ひいお婆さんは時期的に、太平洋戦争の頃？」

「そうだよ。あの日本の大敗戦で、何人が亡くなつたか知ってる？」

「300万人から500万人くらいじゃなかったかな」

「それは人口の何%？」

「一億として、3〜5%」

「あの破滅的な敗戦、徹底的な無差別空襲と原爆、なのに、悪い言い方をすると、たった3%しか、殺されずに済んだ。レーダーもない、いつ空襲があるか、わからないのに、人々は逃げ、生き延びることができた。私は、これ、絶対ひいお婆ちゃんが何度も何度も、たくさんの人と入れ替わって、危険を知らせたんだと感じてる」

「……………たしかに、……………あれだけの負け方で……………意外と少ないのかも……………でも、お母さんは？ その頃は平和だったはずじゃないか」

「冷戦を忘れたの？」

「冷戦……………」

「キューバ危機の前後にも、何度も緊張は高まったよ。けど、とうとう、今の私たちの世界では核戦争は起こらなかった。きっと、お母さんが寿命を削って世界を守ってくれたから」

言いながら涙が滲んだ四葉は瞬きして、涙を払った。会ったことのない初葉のことは、誇らしく思えても、母親のことは誇らしさより悲しさが、はるかに強いようで唇も震えている。

「本当に核兵器って最悪よ。言ったでしょ、一本の糸が焼き切れると、隣の糸も影響を受けて、そうなるかもしれない。今の私たちの世界だって明日、絶対にミサイルは飛んでこないって言える？ 1発のミサイルから始まって、応酬、そして破滅」

四葉が組紐を、もう一度、見せる。

「世界は紐のようなもの。糸と糸は、組み合わさるとき、その外周と内周で少しずれがあるよね。だから、1990年代の破滅が、2020年代に影響してくる可能性だって、大いにあるの。だから、放置しておけない」

「四葉……………まさか……………君も……………」

「お母さんは頑張ってくれた。だから、私も頑張るの。今回が成功しても、あと2回か3回は、私に入れ替わりが生じて、また頑張らないといけない時が来る予感はあるの。だから、私の寿命は……きつと、長くない」

「そんな……そんなのって……」

「ごめん。……こんな、早く死んじやう女で。……イヤだよ。お母さんは、お父さんに説明してなかったみたい。でも、私は言っておく。言ってしまうと、相手にしてもらえなくなりそうで怖いけど、黙っているのは悪いよね」

「四葉……そんな……でも、その運命は変えられないのか?! そうだ、さつき、揺らぎって言ったろ。過去を変えれば、当然、未来は変わる。そして、揺らぎがあるって。その揺らぎで、四葉の運命なり宿命なりを変えられないのか?」

「そんな代償なしに、成果だけなんて、ご都合主義は無理よ。揺らぎがあるっていつても、ほんの少し。たとえば、早耶香と沙耶香の名前を入れ替わってしまったりとか。もつと、古い過去の変え方が少し変わっていたら、お母さんが二葉じゃなくて、双葉になっていたりとか。そんな風に、揺らぎでは因果律は大きく変わらない。大きく因果を変えるのは宮水の巫女が意図して行うこと。揺らぎは、意図しなかった小さなこと、かな。人それぞれの決断のタイミングでも、未来は変わるよね。たとえば、進学先とか、結婚のタイミング。お姉ちゃんも、あんなに慌ててサヤチンさんの結婚式に合わせて挙式しなければ、もつと落ち着いて交際してからの結婚なら、うまくいっていたかもしれない。だから、私が1990年代の筋書きをかえることで、バタフライ効果のようなもので、今の世界も認識しているまま、認識している世界とは違っているかもしれない」

「それって、もしかして、ボクと四葉のことも、変わるかもしれないのか? だから、抱いてくれなんて、慌てたようなことを急に言い出しているのか」

「ううん、それは別の理由。私と司のことは、きつと変化ないよ」

「どうして、そう言い切れるんだよ?」

「だって」

四葉が指先で司に触れる。

「司の告白があつたから、今の私と司がいて、私の決断があるからよ。あんなに、しっかりと因果律を成立させてくれたら、変わらないよ。絶対」

「……よかつた……でも、じゃあ、どうして？ とても焦った風に、さつき……その別の理由って何だよ？」

「それはね……」

四葉が愛おしそうに自分のお腹を撫でた。

「今日、二人が結ばれれば、赤ちゃんを授かれる予感があるから」

「つ……あ、赤ちゃん？」

「私の寿命は長くない。だから、早く産んで、少しでも、この子と長く過ごしたいの。一ヶ月でも、一週間でも長く、いっしょにいたい」

そう言つて四葉が涙を零すので、司も胸が痛くなった。母親に早く去られたことが、どれほど悲しかったか、そして同じことを自分も繰り返すとわかっているので、せめて少しでも想う気持ちに目頭が熱くなる。

「四葉……」

抱きしめて頷く。

「わかつたよ。そうしよう」

「ありがとう、司」

礼を言つて四葉は、さげかけていたショーツを膝までおろした。そしてスカートを自分でめくつて下腹部を司に晒した。

「じゃあ、お願い」

「う、……うん……」

「早くかけて。時間がないの」

「……」

「早く」

「……、あのさ、四葉。この姿勢のまま、いきなりできるものでもないんだよ」

「そうなの？ じゃあ、どうするのっ？」

「えっと……」

司は何か勘違いしている四葉が学校で受けた性教育を思い出してみよう。ユキちゃん先生が課外として担当することになり、かなり恥ずかしそうに男女の身体の仕組みについて、プリントを読んでくださいます、くらしいの説明しかせず、あとはビデオを見せられた。ビデオの内容は鮭の一生で、川を上ってきた鮭が雄雌で産卵し、そこへ射精するというもので、たしかに生命の誕生ではあるけれど、人間の性教育としては、かなり抽象的で何も教えていないに等しい教育だった。それを、真に受けると男の子にかけてもらえば妊娠できるという誤解が生まれるのも、仕方ないとも思えた。宮水の巫女といえども、すべてのことが予知できたり、予感できるわけではないのだと、少し安心もするし、四葉を可愛くも思える。

「司……私だけ、こんな姿、恥ずかしい。……ニヤニヤして……イヤな気分……」

「ご、ごめん。……じゃあ……」

司もズボンのチャックを開けて男根を出した。四葉の下腹部を見ているので、すでに勃起している。

「……………」

「……………」

スカートをめくって下腹部を見せる四葉と、男根を出した司が向かい合って立っている。

「…………司？ まだ？」

「…………四葉…………、えっと、まずはキスから始めようか？」

「え…………キス…………」

四葉が困ったように唇を手で押さえた。その仕草でキスしたくないのが伝わってくる。

「司…………キスとかは、いいから、抱いて。早く」

「……………」

司が額に手を当てて考え込む。

「司？」

「四葉、時間がないって、あと、どのくらい？」

「40分前後くらいかな……たぶん」

「それで、何が起こるの？」

「お父さんから連絡が入る。あとは、その用件を進めないといけなない」

「そうか……40分。じゃあ、端的に説明するけど、四葉のイメージと実際のセックスは違うよ」

「どう違うの？」

「まず、かけるんじゃないかって、挿れるんだ」

「じゃあ、挿れて」

四葉が立ったまま少しだけ脚を開いた。ちょうど、司の男根と同じくらいの隙間が股間にできる。

「……うん、もう少し段階を踏んでから挿れるから」

「どんな段階？」

「キスをして、愛撫をして、それから挿れるんだ」

「……」

四葉がキスしたく無さそうに顔を伏せる。

「司……挿れるだけじゃダメ？」

「まあ、普通はダメだね。ボクとキスするのイヤ？」

「……そうじゃ……ないけど……」

「じゃあ、しようよ」

時間がないらしいので四葉の肩を捕まえると顔を近づけた。

「……」

四葉が唇をキュツと閉じて息を止める。

「四葉、そんなにイヤ？ 何か、理由があるの？」

「……だって……今朝……」

「今朝？」

「時間がなくて、歯磨きしてないから……さつき、口を漱いだけ……」

「なんだ。そんなことか」

「……う……」

四葉が顔を真っ赤にして恥じらっている。

「積極的かと思えば、こんなところは……」

ますます四葉が好きになって、やや強引にキスをする。

「あう……」

逃げようとした四葉の唇にキスをして、その唇を吸った。

「……………んん……」

四葉が、もうキスしたからいいでしょ、という意思を仕草と声で伝えてくるのが、わかるけれど男の本能が、ここまで強く刺激されると、止められない。

「……うう……」

四葉の唇に舌を入れて、その白い歯を舐める。歯磨きしていないといった四葉の歯は、ぬるりとして感じたことのない味がする。歯並びのキレイな前歯を舐めて、頬の奥へも舌を入れると、その味が濃くなる。

「……………うう……」

二度目の止めて、という意思表示で一度離れる。

「…ハア！ ハア…ハア…」

ずっと呼吸を我慢していた四葉が、こちらへ息を吹きかけないように横を向いて、吐いて吸い、吐くと、小さな唾液の粒が飛んだ。

「四葉っ！」

もう衝動のままに、またキスをする。

「んんっ……」

イヤなのに、という意味が感じられるけれど、それほど強くない。キスすると、勃起した男根の先端が、四葉の下腹部に押しあてられる。先走り液で濡れて、とても熱くなっている男根を下腹部の皮膚で感じると、四葉も本能が刺激されて、身体から力が抜けていく。このまま下腹部の皮膚に挿入されれば、ちようど子宮という位置を押さえているからか、子宮と膣が熱く疼いて、四葉も下腹部を差し出すように押してくる。グリグリと男根の先端で下腹部を押されて、四葉は甘い疼きと尿意を覚えた。そういうえば、起床してからトイレさえ行っていない。神がかった精神状態で空腹さえ覚えなければ、尿意は弱くない。

「……………」

四葉は残りの時間と、未体験の性交に要する時間、一度トイレに行ってから再開する時間を考えて迷うけれど、キスを続けられると思考がまとまらない。二度目のキスは、より深く、四葉の舌が吸われている。舌を吸われて、絡み合わされると、腰の力が抜けて立っているのが難しくなってくる。四葉の腰が落ちてくると、優しく抱き留められて、その場に座らせてもらった。

「四葉……好きだよ」

「うん、……私も……好き……」

そう答えて頷いたけれど、ブラウスのボタンを外されると、また四葉は難色を示した。

「ま……待って、何するの？」

「何って……愛撫だけど」

「……それ、何するの？」

「ん……おっぱい吸ったり、身体を舐めたり」

「つ……そ……それが普通なの？ 省略しちゃダメ？」

ボタンを外されてしまったブラウスを四葉が押さえている。胸を見せたくないように両手で守っている。

「う……省略すると、四葉が痛いと思うよ」

「……それって陣痛くらいに？」

「そういう言葉は知ってるんだ……。陣痛ほどじゃないと思うけど、けっこう痛いらしいよ。愛撫なしって普通は避けるかな」

「……我慢する。もう挿れて」

「……はじめてのエッチが、そういうのは、ちよつと……」

「愛撫を……したいの？」

「したい」

「………少しだけ……」

とても恥ずかしそうに、四葉がブラウスを少しだけ開いて乳首を見せてくれる。ここ数日、ときどき全開するのを見てきたけれど、見せ方に恥じらいが入ると、格段に魅力が増して、四葉の乳首に食いつくように吸いついた。

「はうー」

嫌がっていた四葉だったけれど、いざ吸われると、その感覚が驚くほど気持ちよくて喘ぎ声が漏れた。熱い男の唇に乳首が吸われるだけで、息が乱れるほど気持ちよくて、頭がぼんやりしてくる。もう座っていることもできなくて、その場に寝転がった。

「も…もう、いいでしょ。ハア…」

四葉がブラウスを元に戻そうとする。

「もう少し。反対の乳首もさせてよ」

「……………」

「どうして、そんなに嫌がるの、何かある？」

「……………お風呂……………ずっと入ってないから……………」

髪や身体のベタつき加減から、入れ替わりが起こり始めて四日目、ずっと入浴していない自覚がある四葉は消えそうな声でいった。

「……………こんな身体で……………ごめん……………時間なくて……………」

「謝らなくていいよ。四葉、忙しかったから」

「でも……………いくらなんでも……………四日も……………失礼だよ……………これじゃ……………」

「いいよ。四葉が好きだから」

そう言っで手で守っている乳首を吸う。

「ああ……………」

かすかな塩味がして、これが四葉の味だと思つと、余計に興奮する。反対の乳房も手で揉みながら、四葉の乳首を味わい、胸の周りも舐めてブラウスを半脱ぎにさせる。ここが神社の本殿であることは覚えていたので、裸にしてしまうのはやめて愛撫を続ける。四葉の首筋から鎖骨を舐めて、次に腋を舐めようとして、また抵抗された。

「いや……………腋はやめて……………」

「なんで？」

「だって……………、きつと、すごい匂いするから……………」

四葉はブラウスのボタンを外されてから、ずっと腕をしめて腋を閉じていた。今も舐められそうになって余計に力を入れて腋を閉じている。

「四葉の匂い……………嗅ぎたい」

「っ?!」

「四葉が好きだから、四葉の匂いも、知りたい」

「そ……………そんな……………恥ずかしいこと……………ヤダよ…」

「頼むよ、四葉」

「うう……………う……………少しだけ、だよ」

四葉が右腕の力を抜いてくれたので、手首をとって四葉の腋を開いた。ずっと閉じていたので汗が溜まって蒸れている。

「……………」

「じつと、見ないで…」

すぐに四葉が腋を閉じようとするけれど、手首を握って離さない。匂いを嗅ぐと、四葉の汗が蒸れて、桜餅のような不思議な香りがした。

「こんな匂いなんだ……………四葉…」

「も、もう、いい? 離して」

「味も知りたい」

「っ……………」

四葉の腋に舌を入れると、胸よりも強い塩味がして、美味しい。

「美味しいよ、四葉」

「……………うう……………変態……………」

そう罵ったくせに、四葉も舐められた感覚が快感みたいで身もだえしている。だから、もっと舐める。

ペロ……………ペロ……………」

四葉の匂いと四葉の味がして、四葉が喘いでる。

「はうん……………く……………くすぐったいから……………もう……………あつ……………あうん……………」

「今度は、こっち」

左腋も味わいたくて開かせようとしたけれど、また拒否してくる。

「左はイヤ……………絶対イヤ」

「絶対?」

「絶対」

「絶対知りたい」

「そんな……」

「右と何が違うのさ？」

「……………」

四葉の顔に知られたくない、恥ずかしいと描いてあるから、知りたくてたまらない。

「四葉、お願い」

「……………バカ……」

そう言ったけど、四葉は諦めて左腕の力を抜いてくれる。手首をもって腋を開かせると、右と同じように汗で蒸れていたし、四葉の匂いも同じだった。でも、同じじゃなかったのは、毛が4本、生えていたこと。

「毛……生えるんだ」

「つ……………バカ……………ずっと、お風呂に入っていないって言ったでしょ……左は少し生えるのよ……見られなくなかったのに……」

四葉の腋毛は4本、5ミリくらい伸びている。

「毛なんか、そんなに、じつと見ないでよ」

「これは、これで、可愛いね」

「……………」

四葉が顔を背けて怒ってるけど、両腕をあげさせて左右を見比べる。右腋の肌はすべすべしていて、真っ白で汗で濡れていても、毛は生えたことがないみたいだ。左腋も肌は白くて汗の滴も同じだけど、腋毛が4本だけ伸び始めてる。毎日、剃っていたみたいで右腋の肌にくらべて少しスベスベ感がなくて、肌が荒れてる。そのせいなのか、匂いも左腋が強い。

「左の方が、匂いするね」

「つ……………バカ……………バカバカ……………」

「味は、どうかな」

四葉の腋毛が伸びた腋を舐めてみる。強い塩味がして、腋毛がチクチクする。

「美味しいよ、四葉」

「……………変態……………。こういうエッチが普通なの？ ……あと、何をす
る気なの？」

「あとは、ここを舐めたら、もう挿入するよ」

そう言っつて四葉の股間に触れると、やっぱり拒否反応が返つてく
る。

「っ、こんなところ……………舐めるの……………私の、……………」

四葉が顔を真つ赤にして困ってる。

「ね……………ねえ、……………それだけは省略して……………もう挿れて」

「ダメだよ。それが愛撫の本番なんだから」

「うっ……………うっ……………」

四葉が真つ赤になった顔を両手でおおった。

「パンツを脱がせるね。足をあげて」

「……………」

素直に足をあげてくれるから観念したみたいだ。脱ぎかけで膝の
あたりまでさがってる四葉のショーツを脱がせる。

「脚を開いて」

「……………」

四葉は顔を隠したまま、脚を少し開いてくれるから、両膝を押して
完全に開脚させる。

「……………」

「……………」

四葉の膣が丸見えになって、濡れてるのもわかる。

「四葉のおまんこも、可愛いね」

「っ……………」

ずっと顔を隠して首を振ってる。

「じゃあ、舐めるよ」

「早く…、ううん！ 少しだけにしてー！」

早く舐めてと言いつつそうになって訂正してる。あんまりにも恥ずか
しがって可愛いから焦らしたくなってしまう。

「まずは匂いから」

「っ……………」

四葉が膝を閉じようとしたけれど、押さえているから閉じるのを諦めてくれる。顔を近づけて匂いを嗅いでみる。

「へええ……こういう匂いがするの、四葉のおまんこ」

「っ……はあ……はあ……」

恥ずかしさが頂点に達してきたみたいで、まだ何もしていないのに息を乱して、四葉の膣がヨダレを垂らしている。そのヨダレがお尻の穴まで流れていく。匂いも膣より強烈で、やっぱり四日も入浴してないから臭い。この匂いは拡がって四葉も自覚してるはずだから余計に恥ずかしがつてる。

「……はあ……はあ……」

「今度こそ、舐めるよ」

「……はあ……あっ！」

四葉のクリトリスを舐める。指で開いてクリトリスを剥いてみると垢が溜まっていて、ものすごく臭い。臭いけど四葉の匂いだと思うと、いい。すごく、いい。

「四葉のおまんこ、最高に美味しいよ」

「うう……んっ……」

舐められる快感で四葉が顔を隠したまま身もだえしている。舐める度に内腿と下腹部がピクピクするし、乳首が触って欲しそうに揺れている。四葉のクリトリスを吸いながら、腿の外側から手を伸ばして左右の乳首を指先でつまんだ。

「ああっ!!」

四葉が大きな喘ぎ声をあげて、ギョツと腿で頭をしめつけてくる。イキそうになってる。

「はあ……はあ……、も、……もう、いいから……へ……変に……なりそう……」

「まだまだ、だよ」

四葉の乳首をクニクニとつまんであげながら、クリトリスを舌先でグルグル転がした。

「ああああ!! はああああん! ダメ! 変っ! ああああ! 私、おかしくなりそう!」

「それでいいんだよ」

身もだえする四葉の腿が何度も頭をしめつけてくるし、舌を動かす度に下腹部が激しくピクピクして、もうイキそうだ。

「はああん！ あはんっ！ あはんっ！ ダメ……変……ハア……ハア……おしっこ、出そうなの……離して。あっあああ！ もう舐めちゃヤダ！ あああああっ！」

「ずっと顔を隠してないでさ。そろそろ四葉の顔を見せてよ」
「ハア……ハア………」

四葉が顔を見せてくれる。クリトリスを舐めながら四葉の顔を見ると、つまんでるおっぱいの向こうにトマトみたいに赤い、四葉の顔が見えた。目を潤ませて、唇からヨダレ垂れてる。

「ハア……ハア……あはんっ！」

「ねえ、四葉」

「ああっ！ あううん！」

「ボクの名を言ってみて」

「んんんうう！」

四葉のクリトリスを舐めながら、喋るときも離さないから、ずっと身もだえしてる。もう四葉の顔は蕩けていて、何度かイってしまったみたいだ。

「ボクの名を言ってみて。今、四葉のおまんこを舐めてるのは誰？」

「はあ、はあ……あああっ！ あああああん!!」

「さあ、ボクの名を。宮水四葉のおまんこを舐めて、気持ちよくさせてるのは誰？」

「ああああっ！ ああああっ！ つ……つか……んうううう！」

「四葉、ボクの顔を見て誰だか言ってみて」

「つ…… ああああん！」

「もう一度だけチャンスあげるね。ボクの名を言ってみて。ちゃんと、目を見て」

「言えるように舐めるのを少しやめた。」

「つ……司。ハア……ハア……あああん！」

「っ(褒美に、また舐めてあげる。」

「次は、ちゃんとフルネームで。誰が誰に何をして、どうなってるの

か。言ってみて」

「つ…司…：…てしがわ…：勅使河原…：…が…：…私の…：…」

「勅使河原司が宮水四葉のおまんこを舐めて気持ちよくさせてる、って言ってる」

「そッ…：…そんな恥ずかしいこと…：…」

「言うまで、舐めるの、やめないから」

そう言ってる四葉のクリトリスを強く吸って、口の中に入ってきた先端を舐め回した。

「あああああ!!」

四葉の背中が弓みたくに反ってる。また、イってるんだ。

「ハアハア、変なの！ 身体が…」

「早く言わないと、もつと身体が変になるよ」

「そ…：…そんな…、て、勅使河原つ…：…ああああ！ ああああんん！」

「ほらほら」

「勅使河原司が宮み…：…み…：…あああ！ ああああんん！ 水、四葉の!!

あああああ！ いいいいんっ！ おまんこっ！ こおおおお！

ハアハア、を！ あああつ！ ああああああ！ 舐めて！ きっ、…

き、んんんんっ！ 気持ちよくさせて!! なの!! ああああああ

!! ハア！ ハア！ ハア…：…ハア…：…

言いながら何度もイってた四葉が、ぐったりとしている。

「よく言えたね。これで愛撫、終了だよ」

「ハア…：…ハア…：…」

「いよいよ、挿れるね」

「うん…：…お願い…：…もう…：…気絶しそう…：…」

もう四葉は開脚したまま、ぐったりとして隠していた腋も見せてる。そんな四葉の上にかぶさって正常位で挿入していく。

「もし、痛かったら言ってる」

「…うん…：…うう…：…」

四葉の処女膜が少し抵抗するけれど、すぐに男を受け入れて、するつと膣が男根を包み込んでくれる。四葉の膣は熱くて柔らかくて、ものすごく気持ちがいい。

「いいよ、四葉。最高だよ」

「…んあああ…」

四葉も気持ちいいみたいで喘いでる。ここから、もっと気持ちよくさせてあげる。

「上下に動くから、痛かったら言って」

「うん…」

四葉が抱きついてくる。ゆっくりとピストン運動して、四葉の膣を突くと、熱くて柔らかい粘膜がからみついてくる。

「痛くない?」

「うん…」

四葉の心臓の鼓動が伝わってくるくらい、一つになってる感じがしてピストン運動を3回したときだった。

ビュル! ビユるうう! ビユ…ビユ…

「ううっ…」

「…ああああ…」

四葉は膣に射精されて気持ちよさそうにしてる。

「……………」

「……………」

射精した男根が急激に小さく萎えていく。すぐに、するつと膣から抜け落ちた。

「つ…………司?」

「……………」

「おちんちんが…小さくなってる…これで、終わり?」

「つ…………きよ、今日は、このくらいかな」

「…………そうなの? ……これで、ちゃんと赤ちゃんできる?」

「な、中に出したから。…出すのは、思いつきり中に出しちゃったから、あとは運次第というか、性交は成功した! なんて! あははははは!」

「……………」

四葉がジト目で見ってくる。どことなく満足してない感じで、とくに下半身が不満そうだ。

「愛撫って本当に必要だったの？ 挿入だけでも、よかったのに」

「あ、愛撫が無かったら、ものすごく四葉が痛いんだって！ こんなにスムーズに挿入が終わったのは愛撫のおかげなんだよ?! 気持ちよかったですか?!」

「……………気持ちよかったですけど……………身体が変だった……………恥ずかしかったです……………」

「それがセックスなんだって！ ま、まあ、ボクもさ、初めてだったから、ビデオとかの知識でやったから、挿入してからは、やや難しくって、四葉が早く終わって欲しそうだったから、早めに出したんだよ。うん！ 本当なら、もっと気持ちよくさせられるはずなんだ！ あえて早めに出したんだよ！」

力説する司の男根がプラプラとゆれている。

「そう。とにかく、ありがとう」

四葉は納得したようにブラウスのボタンを直そうとしたけれど、ブルッと震えた。

「四葉、どうしたの？」

「おしっこ、ずっと我慢してたから。ここ、トイレ、どこだっけ？」

四葉は両脚を擦り合わせながら、ボタンを留めて本殿を出ると駐車場の方にあるトイレへ駆け込んだ。

「うう……………ギリギリ、アウトだったかも……………」

駆け込む途中から漏らしていたけれど、ショーツを着けていなかったのて下着は汚れず、内腿を濡らしただけだった。社社のトイレは小さくて狭い和式だった。しゃがむ時間がなかったのでスカートの裾を持ち上げて、脚を開いて便器を跨いでいる。

「はああああ……………」

シヨワアアア……………」

朝から我慢していた尿意を解放すると、四葉は気持ちよさでタメ息をついた。

ドロ……………」

けれど、その気持ちいい顔が一瞬で凍りつく。

「えっ?!」

放尿しながら、膣に違和感を覚えて自分の股間を見ると、白い粘液が垂れ落ちてきている。

「っ！ これ、精液なんじゃ?!」

四葉は慌てて、垂れ落ちている精液を両手で受けとめる。

ビチャビチャ…

放尿中だったので、おしっこも両手に降ってくる。小水と精液を両手で受けとめながら司に助けを求めた。

「た、助けて！ 司!!」

薄い木戸のトイレなので、外に声は届いて、司が玉砂利を踏んで駆けつけてくれる気配がする。

「どうしたんだよ?!」

「助けて！ 大変なの！」

「開けていいのか？」

「開けて！」

四葉に頼まれて、司はトイレの木戸を開ける。鍵らしい鍵のない、一円玉や自転車の鍵でも開けられる木戸を開くと、四葉が半泣きになっていた。

「どうしたんだよ?!」

「うっ…うっ……赤ちゃんが……できないかも…」

四葉は両手に受けとめた精液と小水を司に見せた。

「おしっこしたら、いっしょに出ちゃったの……せっかく、司が挿入してくれたのに」

「……………」

「ううっ……もう一回、穴に戻したら、できるかな？ 赤ちゃん」

四葉が両手を股間へ近づけるので、司は止める。

「いや、それは、やめた方がいいよ。おしっこも混ざってるし、空気に触れると精子って活動を停止するらしいから」

「っ…、そんな…」

あまりにも四葉が絶望的な顔をするので司は失笑しそうになるのを我慢して慰める。四葉は不妊治療に200万円を投じて月経が来てしまった残り妊娠可能な期間の少ない女性のように、うろたえてい

る。小水が指の間から滴って零れ、精液だけになってしまい、大切に温めるように握りしめると、胸に抱いて泣きかけている。

「四葉、落ち着いて。もう一回、挿入しようか？」

「できるの?!」

「たぶんね」

「お願い！ あ、でも、時間が…」

「あと、何分くらい？」

「5分もないかも」

「5分か……」

司は境内を見渡した。誰もいない。平日の昼時で祭りも行事もない日のようで、さきほど本殿にいたときも誰の気配もなかった。高齢者の参拝は朝夕が多いし、子供は学校に行っている時間で、まるでエアスポットのように広い神社の境内には誰もいない。

「四葉、あそこのベンチに」

司が指したベンチに二人で駆け寄る。

「ボクに背中を向けて、そこに両手をつけて」

「こう？」

四葉は背中を向けると、ベンチの座面に両手をついた。前屈したのでスカートの裾があがるけれど、性器が丸見えになるほどではない。

「スカートをまくるよ」

「うん」

四葉のスカートをまくるとお尻と性器が丸見えになる。

「足を肩幅くらいに開いて」

「こ、こう？」

四葉は言われる通りにしているけれど、再び羞恥心が刺激されて顔を真っ赤にしてきている。お尻を突き出すようなポーズを真っ昼間の神社で巫女がしているのだから、当然だった。

「そうそう」

白くて細い四葉の足首からお尻までの曲線を見ると、司はムクムクと勃起した。

「いきなり、突っ込んでいい？」

「いい！」

ズブツ…

勃起した男根が、まだ濡れている膣に入っていく。処女膜から血が出た。

「うぐっ…」

「痛い？」

「平気」

「動くよ」

「早く出して」

「わかってる」

司が腰をふって四葉を突く。

パン…。パン…。パン！　パン！

後背位なので、突かれる度に四葉のお尻が音を立てて鳴る。

パン！　パン！　パン！

四葉はベンチに両手を着いて身体を支えたまま、振り返って問う。

「ま…まだなの？」

「二回目は、そんなに、すぐには出ないんだよ」

催促されて司は、より激しく四葉の膣を突く。まだまだ射精しそうにない。

パン！　パン！　パン！

突かれている四葉の白いうなじが少し紅潮してきた。

「…ああああ…」

再び性感が高まってきて喘ぎ声を漏らし始めた。突かれるだけだった膣の粘膜が男根にからみついてくる。

パン！　パン！　パン！　パン！

「あはんっ！　あはんっ！　ああんっ！　あうんっ！」

四葉の蕩けた喘ぎ声が境内に響き、より激しく突く。

パン！　パン！　パン！

「あふんっ！　あはう！　まだ?!　あはあっ！　また、私、身体が変に

！」

「もう少し！ ハア…ハア…」

「んんんっ！ あああんん！」

四葉のうなじが赤く染まっている。ぐっと腰をつかんで、ねじり込むように男根を膣の奥まで入れた。

「あああはああん!!」

四葉の膣がキュウと男根を締めつけてきて絶頂しているのがわかる。その時だった。

チャラツチャア〜♪ チャララタララチャチャタラタア〜♪

四葉のスマホオが鳴っている。

「ハア…ハア…」

四葉が姿勢を維持したまま片手をスカートのポケットに入れて電話に出る。

「もしもし…ハア…私」

「私だ」

父の俊樹だった。

「今、電話、かまわないか？」

「ええ…はあ…」

四葉は赤く紅潮した顔で、なるべく冷静な声を出しているけれど、どうしても熱っぽく息を吐いてしまう。

「声がおかしいけれど、大丈夫なのか、四葉？」

「大丈夫よ。用件をお願い。パパ」

「……………」

いつになく優しい声でパパと言われて、俊樹は少し嬉しかった。思い返せば、パパと呼ばれること自体、何年ぶりだろうか、町長になつてからも別に外では町長と呼びなさいと指導したことは一度もないのに、パパと呼ばれなくなった。

「ハア…ハア…」

「息が荒いようだが？」

「用事があつて走っていたの。ハア、用件を早くお願い」

「そうだな。北斗神拳について調べがついた」

「そう、よかった。ありがとう、パパ」
「うむ」

嬉しそうに俊樹が返事している。司は悪いニュースではないようなのでピストン運動を再開した。

パン！ パン！ パン！

「はうん！ ちよっ…」

四葉が送話口のマイクを押さえて、振り返る。

「司、今は…」

「もう少しで出そうなんだ。このチャンスを逃すと萎えるかも」

「…………。わかったわ。続けて」

「四葉？ どうかしたのか？」

「何でもないよ。パパ」

パン！ パン！

「…………。いつになく四葉の声が優しいな」

パン！ パン！

「頼み事を実行してくれた人に対する礼儀よ」

パン！ パン！

「お前も大人になったな」

パン！ パン！

「ええ。…んっ…」

四葉が身をよじって鼻声を漏らしながら、スマフォを持っている手の小指を自分で噛んでプルプルと震えた。再び絶頂してしまったように喘ぎ声をあげないように指を噛んで耐えている。

パン！ パン！ パン！

「…四葉？」

「お…お願い、早くして。ハア…ハア…」

四葉は父と恋人に懇願した。

「そ、そうだな。まず北斗神拳は暗殺拳だそうだ」

パン！ パン！

「諸説あるが1800年から2000年の歴史があると自称している」

パン！ パン！

「にせ、んっ…」

また四葉が絶頂して身もだえする。喘ぎ声を耐えるために嚙んでいる小指にヨダレが流れて、スマフォも濡らしている。防水仕様のスマフォなので問題はなかった。

「形としては寺院だが、宗教法人格はないようだ。檀家や信徒もおらず、ごく少数の弟子がいるようで、寺宝は巨大な阿吽の像だが、文化庁による年代測定を拒否している。作風から鎌倉期のものと思われるそうだ」

パン！ パン！

「代表者は？ あハア…」

「現在の伝承者は北斗ラオウというらしい」

「ラオウさん…んっ…。在籍者にジャギさんか、ケンシロウさんの名前はある？ ハア…」

パン！ パン！

「いや。手元の資料にはないな。本当に息が荒いな。大丈夫なのか？」

「んっ…、うんっ、…大丈夫よ…、っ、続けて」

パン！ パン！ パン！

四葉は突き続けられて、また絶頂する。

「あはっ…んんっ…」

喉の奥から喘ぎ声が溢れて、四葉は唾を飛ばしてよがった。

「ハアっ…ハア…」

パン！ パン！

「四葉、とても大丈夫とは思えないのだが…：…息が、それに声も…」

「は、走ってるの。…他にも用事があって…ハア…急いでハアるから…ハア…んっ…」

パン！ パン！

「それなら、あとにしようか？」

「ううん、パパとの…ハア…話も大切だから…ハア…お願い…続けて」

…ハア…」

パン！ パン！

「わかった。え〜つと…とても大きな馬を飼育しているらしい。…いや、これは、どうでもいいか。なにか、質問はあるか？」

「ハア…ラオウさんは今どこに？ ハア…連絡を取る方法はあるの？」

パン！ パン！

「東京の八王子に寺院があり、そこにいるようだ」

「八王子…たしかに、そのあたりなら都心が爆心地なら生き残れて…ハア…ハア…連絡は？」

パン！ パン！

「直接の連絡は難しいようだ。電話も引かれていない。ただ、八王子にあるトキ鍼灸院が窓口になっているそうだ」

パン！ パン！ パン！ パン！

「ハア…トキ鍼灸院…んっ！」

「ううっ！ 出る！ 出る！」

「んっ、んあああ！ あああ！」

喘ぎ声が絶叫になり、四葉は送話口を指先で押さえながら身もだえする。四葉の膣がキュウキュウと男根に吸いつき、射精を受けとめる。

ビュル！ ピュルルル！

膣の奥に大量に射精された。

「ハア…ハア…トキ鍼灸院ね…ハア…」

「…、ああ」

もう立ってられないので男根が抜けていくと四葉はベンチに座った。また精液を垂らしてしまうと悲しいので、スマフォを持っていない手で股間を押さえながら父親との会話を続ける。

「ハア…お姉ちゃんの容態は？」

「あのままだ。点滴はしているが、容態は悪い。医師は栄養補給のために鎖骨下静脈からの点滴が必要だと言うのだが、とても太い針を胸のあたりに刺さなければならぬ。そうすると三葉が精神的シヨツ

クで死んでしまうかもしれないとも言っている。だが、どんどん衰弱している。もう時間が残されていない」

「ドクターへリを呼んで」

「へりを？　だが、どこに搬送する気だ？」

「トキ鍼灸院よ」

「……東京だぞ？」

「東京だからへりなの。私も乗るわ。ラオウさんに会わないといけな
いから」

「それも、また、とても大切なことなのか？」

「ええ、お願い。パパもついてきてくれると助かるわ」

「……頼ってくれるのはいいが……、わかった。そうだな、そうするし
か、あるまい。お前は宮水の巫女なのだから」

「ありがとう。パパ」

「ただ、一つだけ言っておく」

「何かしら？」

「父親との電話口でセックスをするな！　お前は行動が二葉に、そつ
くりだ。いいところも悪いところもな！」

「うっ……ごめん……なさい。お父さん」

「わかったら、町のへりポートは知っているな？」

「はい。病院の裏駐車場よね？」

「そうだ。すぐに来いよ」

「はい」

電話を終えると四葉が頭を抱える。

「あくんっ……もお、どんな顔して、お父さんに会えばいいのよ?！」

「ご……ごめん。……けどさ、お母さんに、そっくりだってことは、同
じこと、してたってことじゃない？」

「あ、そっか……こうやって、私も産まれたのかな……ね、五葉」

お腹に語りかける四葉を見て、司は大変な一族に関わることになっ
たのかもしれないと思い、澄んだ空を見上げて深く考えないことにし
た。

第5話

トキ鍼灸院に近いヘリポートで着陸してから、救急車とタクシーで移動した四葉と三葉、俊樹の三人が目的地に到着したのは14時前だった。飛騨高山地方と東京の八王子は直線距離にして200キロ、時速300キロを超えるドクターヘリで移動すれば、フライトそのものは40分ほどだった。

「ここがトキ鍼灸院……」

三葉は雑居ビルの地下一階にあるトキ鍼灸院への下り階段を見下ろして、つぶやいた。古ぼけた雑居ビルでトキ鍼灸院の看板も手作りのように木の板にマジックペンで書いてあるものがドアへ釘で打ち付けられているだけだった。

「本当に、こんなところで三葉の症状は治るのか？」

俊樹が心配している。

「うう〜！ 痛い！ 痛いいい！」

三葉は担架に寝かされてドクターヘリを降りてからは東京都の救急隊員が搬送してくれているけれど、あいかわらず服を着るのも痛いので全裸だった。せめて、四葉と俊樹が左右で毛布を広げて通行人の視線からは裸体を隠している。

「とにかく、入ってみましょう」

三人と救急隊員が中に入ると、受付にいた男が挨拶してくる。

「ご予約の宮水様ですか？」

「そうだ」

俊樹が答えた。

「こちらの問診票にご記入いただき少しお待ちください」

「……わかった」

「急いでるの」

四葉が男を睨む。睨まれて男は目をそらした。

「すみません。トキ先生は先客の治療中ですので……」

「……」

「お爺ちゃんに何を?!」

「あ、いえ、その、こ、この世には病に悩む人間が、なん千なん万とい
る、わけで、この老人も、その一人というわけですよ」

「ふざけんじやないわよ! 訴えてやる!! お爺ちゃん、しっかりし
て!」

女性は痙攣する老人を抱き支えながら出て行った。ケンシロウが
治療室に入ってくる。

「今の方、治療費は、どうしますか?」

「ケンシロウ、お金だけがすべてではないぞ」

「そうですね」

「オレにはな、夢があるんだ。ケンシロウ、お前だけはわかってくれる
と思う」

「兄さん……ボクだけはわかっていますよ、トキ兄さん」

「ああ、わかってくれるのは、お前だけだ」

「四葉っ!!」

俊樹も治療室に入ってくる。

「お前は、こんな男たちに三葉を診せる気かっ?!」

「ううっ……」

四葉も困る。困っている四葉の肩へ、トキが優しく触れて、澄んだ
瞳で見つめてくる。

「お嬢さん、落ち着いて。もう大丈夫です」

「……」

「ご家族を心配する、あなたの気持ち、よく私に伝わりました。どう
か、私に任せてください。きっと、治してみせます」

「……トキ先生……」

優しくして穏やかで純粋な目で見つめられると、四葉は信じたくなっ
てしまう。

「と、とりあえず、診てもらおうよ。お父さん。いい人っぽいし……腕
前は、……。でも、他に方法もないし……」

「四葉……」

「ご安心ください。それで病人は?」

待合室から三葉が担架で運ばれてくる。

「痛いいいいい！ …お願い、そつと、そつとおろして…ううつ…痛いいいいい…」

「…これは…」

トキが一目見て驚き、それから悩む。

「これは、…えくつと…これは、何だったか…腰椎の…いや、胸椎の…ツボのような…ツボでないような…」

何かを思い出そうとして頭を絞っている。

「ん…なんだったか…」

「……」

四葉と俊樹、そして三葉が不安になってトキを見つめる。

「大丈夫、大丈夫ですよ。この身体を治すツボはこれだ！」

グリッ…

トキは三葉の両こめかみを左右から両の親指で強く押した。

「イキヤああああああああああああああああああ!!! ひでぶううううううううううううううううう!!!」

ほんの少し触れられるだけでも激痛が走って身悶えする状態なのに、グリグリと親指でこめかみを押されて三葉は聞いたことのないような悲鳴をあげて、のたうち回った。

「うむ……違ったか……では、これだ！」

トキは三葉の両わき腹に人差し指と中指を突き刺すように押しつけた。

「あべしいいいいいいいいいいいいい!!!」

また、三葉は奇声をあげて苦しんでいる。

「では、これかも…」

トキは三葉の左肩に人差し指を突き立てた。

「ううつ！ うわっ!! ひい!!! いっ、いっ！ いたあいいいい!! やめてええええ！ くださいそおなのおお!!」

三葉の左手は本人の意思に関係ないようにグーパーを繰り返している。

「あいいぎあが!! あがががくく!! たわばああああああ!!」

「これも違ったのか……」

「貴様っ!!」

俊樹がトキの胸倉をつかむ。

「これの、どこが治療だ?!」

「落ち着いてください。大丈夫、安心して」

乱暴に胸倉をつかまれてもトキの筋肉と体格は、ほぼ同じ年齢に見える俊樹より、はるかに大きいので微動だにしない。優しく微笑み返して、娘を心配する父親の瞳をまっすぐに見つめた。

「どうか、落ち着いてください。お父さん。私には、イメージがある。この病は、ほんの一つ、いいところを押せば、きつと、たちどころに治る。そんなイメージがあるのですよ。今ね、そこを探っているのです。ええ、お父さんが見えていてつらいように、私もつらい。ですが、一番苦しいのは娘さんです」

「ハアひっ！ ハアひっ！」

三葉はガタガタと震えて変な呼吸をしている。

「三葉……こんなに苦しんで……」

俊樹がトキから手を離れた。トキが新たな閃きをもつ。

「そうだ。やはり指圧ではなく、針。しっかりと皮膚にズブズブと入れた方がよいイメージがあります。しかも、あなた方は運がいい。ちやうど、鉄工所に頼んでおいた特注の針が仕上がっているのです。ケンシロウ、あれを」

「はい、兄さん」

すぐにケンシロウがステンレスバッドに入った大きな針をもってきた。それはトキの指と同じ形、同じ太さをしている。

「やはりね、人間の指では鋼鉄のように人の皮膚をズブズブと突けない。どんなに鍛えてみても人間の指は鋼鉄のようにはならない。そこで私は考えた、このような針を造って突けば、きつと、あらゆる病が治る」

「ハアひっ……ハアひっ……」

大きな針を見た三葉は逃げようとしなない。むしろ、愛おしそうに針を見上げた。

「ハアひっ……お願い……もう……ハアひっ……早く……」

「お姉ちゃん……」

四葉は姉の表情に既視感を覚えた。もう姉は死にたがっている、殺されたいと願っている。この苦痛から解放されるなら、死こそ甘美な結末として、この針を刺してもらえばシヨック死することが感じられても、逃げるどころか望んでいる。針を見つめる姉の目は、セックス好きの女が長い長い愛撫のすえに、ようやく男根を向けられたときのような、待ちわびた好色的な瞳になっている。

「早く……刺して……」

「あなたも、わかるのですね。これが効くと」

トキが心得たとばかりに頷く。

「お願い、早く」

「お姉ちゃん……」

四葉は既視感の正体に気づいた。姉の顔は、今までに見た予知夢の中でも最悪の悪夢だった酒税法を気にして口噛み酒を商品化したときの結末、監禁され切り刻まれていたときの最後に、四葉は発狂したけれど、姉は相手の顔に唾を吐いて怒らせ、わざと殺された。そのときのことを四葉は発狂していながらも、予知夢だったおかげで、どこか客観視もして覚えている。建設作業用のツルハシで頭を突かれる寸前、やつと死ねると感じていた姉の甘美な表情と今の顔が同じだった。

「さあ、いきますよ。むんっ！」

「待って!!」

四葉が叫ぶのと、俊樹が手を出すのは同時だった。

ずぶっ!

トキが三葉の胸を突こうとしていた鋼鉄製の指のように太い針は俊樹の手のひらを突き刺していた。

「ぐっ……」

「な……なぜ」

トキが悲しそうに俊樹を見つめる。

「これ以上、貴様に！ 指一本たりとも娘は触らせん!!」

「ハアひっ…お父さん…ハアひっ…、邪魔しないで…早く…早く殺してよ!!」

「お姉ちゃん…お父さん…っ?!」

不意に四葉は治療室にかかっている鍼灸師の免許証が目に入った。そこには氏名が表示されている。

「山田トキ…っ! 私は、大変な考え違いをしていたわ!!」

「お嬢さん、どうかしたのですか」

「あなたは北斗トキじゃない!!」

「え? あ、はい。山田トキですが、何か?」

「北斗は?! 北斗の人は、どこに?!」

「北斗…」

トキとケンシロウが困った顔をする。

「北斗に会わせて!! ラオウさんに!!」

「はて、何のことやら…」

「あ、そうか。紹介料! お父さん!」

四葉はヘリで移動中で読んだ北斗神拳に関する資料の中にあつた紹介料のことを思い出した。手を刺さされている俊樹が痛みに耐えつつ、問う。

「その話は、三葉の後ではないのか?」

「私が考え違いをしていたの。鍼灸院なんていうから期待してしまつたけど、この人たちは北斗であつて北斗でないの。もう記憶を失っているのよ!」

「四葉…お前の言うことは、なにがなんだか…まあ、いい、ここまできたら、お前を信じよう」

俊樹は負傷した手でスーツの内ポケットから百万円の札束を出した。

「これで、北斗に会いたい」
「……………」

トキの表情が変わる。今まで優しい瞳をしていたトキが冷たく悲しそうな目をして直立不動で構えた。

すーっ…

仏を拝むように両手を合掌して、俊樹が差し出す百万円を受け取る
と、流れるような鮮やかな動作で白衣のポケットに入れた。

「たしかに、頂戴いたしました。これより北斗へと、ご案内いたします。救急隊員の方は、お帰りください。担架は私とケンシロウが持ち
ます」

東京都の職員を帰して、トキとケンシロウが三葉をのせた担架をもち、トキ鍼灸院の玄関には休憩中の札がかけられて、再び移動する。商店街を通ると、大都会らしい強引な客引きがされていた。

「ただいまアミバ整骨院ではキャンセル中です！一回5万円の小顔矯正コースが、なんと回数券を購入すれば一回あたり2980円に！さらに、天才治療家アミバ先生考案の〇脚矯正サポーターを、お友達を紹介するとキャッシュバックキャンペーン中ですよ！頑張る君を応援したい、レッズゴーアミバ！」

怪しいものが多いので、四葉たちも、あまり目立たずに移動できる。トキとケンシロウは、すぐに裏通りへ入り、何度も路地を曲がって人間の方向感覚が不確かになってくる頃、大きな寺院へ四葉たちを導いた。

「こちらです」

「……」

四葉と俊樹が無言で頷き、トキが付け加える。

「ご契約の成立にかかわらず紹介料は返却いたしませんので、あしからず、ご了承ください」

五人が寺院に入ると、巨大な阿吽の像があり、その足下に一人の大きな男がいた。男は剃髪した僧侶のような頭で、僧衣を着ている。

「あなたが北斗ラオウさんですね？」

四葉が問うと、ラオウは頷いた。

「いかにも」

「私は宮水四葉、大切な用件が二つあり、ここへ来ました」

四葉は姉を指して頼む。

「まず、姉の三葉を治していただきたいのです」

「ほオ、これは……」

ラオウは三葉の様子を見ると、すぐに指を三本、立てた。

「3000万」

「……………お父さん、払える?」

四葉が不安そうに父を振り返る。

「払えなくはないが……………本当に、それで三葉は治るんだろうな?!」

「我にはできる。そして、我以外のこの世の誰にもできぬ」

「……………わかった。支払う」

「よかろう」

ラオウは三葉に近づくと、その裸体に軽く触れた。

「っ…、……………痛くない……………痛くない! ど、どうして?!」

ずっと苦しんでいた三葉が立ち上がり、自分の手を見て不思議がつている。そして歓喜に満ちた顔になった。

「治ってる! 私、もう、どこも痛くないの! お父さん!」

「三葉……………よかった」

俊樹と三葉は抱き合い、そしてスーツの上着を脱ぐと娘の裸体に着せてやった。四葉が礼を言う。

「ありがとうございます。ラオウさん、やはり、あなたが正統継承者なのですな」

「して今ひとつの用件とは?」

「私に北斗神拳の奥義を教えてください。今から日没までに可能なだけ」

「愚かな小娘だ」

もう話は終わったとばかりにラオウは踵を返して背中を向けると歩み去ろうとする。

「ラオウさん、ジャギさんという方を、ご存じですか?」

「ぬっ?!」

去りかけていたラオウが振り返って四葉を睨んでくる。

「小娘、その名を、どこで知った?!?!」

咆吼と喋っていいような詰問でラオウの背中から爆炎のような闘気が噴出し、奔流となって四葉を押し流そうとする。

「ひっ…」

「ううっ…」

その余波を受けただけの三葉と俊樹が気圧され、少し離れていたトキとケンシロウも数歩さがった。それなのに、四葉は動じることなくラオウを見据えていられた。

「我が闘気を受けて微動だにせぬとは……小娘、貴様、何者だっ?!」

「最初に名乗りました。宮水四葉、宮水神社の巫女です」

「ぬう……では、宮水、どこでジャギの名を知った?! 返答次第では、ここから生きて帰れぬと思え!!」

「私は巫女として時間を飛ぶことができます。そして、1990年代後半の世界にいるジャギさんと心と体が入れ替わったのです」

「世迷い言を!! 捻り殺してくれる!!」

ラオウの右手が四葉の顔に迫るけれど、寸止めだった。基本的に女の子に暴力は振るえないタイプのようで威嚇だけに終わっている。その威嚇に四葉は動じていない。

「たしかに、ものすごい闘気。でも、あの世界にいたケンシロウさんに比べても、ジャギさんに比べても、凄味も殺気も乏しいです」

「おのれエ」

ラオウが大きな手のひらで四葉の身体を握り込むと、持ち上げて顔を近づけて睨む。

「……………」

「……………」

二人の目と目が合い、瞳を見つめ合う。

「小娘……貴様は半分、神か? 天の者か?」

「そうなのかもしれない。使命を帯びているときは」

「バカなことを……もう一度、問う。ジャギの名、どこで知った?!」

「この2020年の私と、1990年代後半のジャギさんの心と体が、何度も入れ替わったからです。そして、こことは歴史の流れが違う1990年代の世界でジャギさんはケンシロウさんと激しく争っていました」

「ジャギとケンシロウが……」

ラオウがちらりと今ここにいるケンシロウを見る。見られたケン

シロウは有り得ないとばかりに首を振っている。

「お疑いなら、逆に問います。私の姉、三葉のさきほどもまでの症状、北斗神拳によるものではないですか？ あれはジャギさんが私の体に宿っていたとき、ほんの指先一つで突いただけで、あのようになったそうです」

「むうう……」

ラオウが呻り、四葉を床におろした。

「そして、もう一つ教えてください。ジャギさんは今どこにおられますか？」

「………………。おらぬ」

「どこに行かれたのですか？」

「この世のどこにも、おらぬ」

ラオウは指を立て、天を突いた。

「ジャギは天におる」

「天……それは……まさか……」

「あやつは我が殺した」

そう答えるラオウの瞳に深い悲しみの色が浮かぶ。

「ジャギ……その男の名は、かつて弟と呼んだ男」

「……………」

「あの男は北斗神拳継承の掟により、北斗神拳に関する記憶を奪うことに同意するか、拳をつぶすか、いずれにも抵抗しおったゆえ、我と戦い、我が殺した」

「つ……そんな……ジャギさんが死んでいるなんて……」

四葉がショックを受けて、膝をついた。何度も入れ替わった相手が今現在は死んでいるというのは、やはりショックが大きかったし、何より四葉が考えていた行動計画も狂ってしまう。

「…………ジャギさんが……」

「ジャギの死が悲しいか？ ならば、我を憎め」

「………………。憎しみの連鎖が、より大きな憎しみの連鎖しか産まないことを、さんざんに見せられて、ここにきているのです」

「では、どうするっ？」

「……………やはり、計画通り北斗神拳を私に教えてください」
「バカなことを。そんな細腕に何ができる」

「言ったはずです。私はジャギさんになる時間もあるのです。そのとき、北斗神拳を知っていれば、とれる選択肢は飛躍的に増えるはず」

「ジャギ……………あの男は我が倒した中で最強の男であった。後にも先にも、あれほどの男はおらんのだ。そのジャギにお前がなるというのか……………信じがたいが……………だが、お前の目はウソを言っていない」

「お願いします」

「しかも日没までにといいおつたな」

「はい」

「一つだけ方法がある。秘孔、心霊台。これをつけば、その後に我が教授する技、すべて一度で習得できよう。ただし、その習得した技は3日で消え、その後にお前の身体は今の半分しか筋力が残らぬ、歩くことはできても二度と戦うことなどできぬ身体になるであろう。しかも、心霊台を突いた直後、全身を激痛が襲う。その苦痛で、その場で発狂し死ぬやもしれん。それでも、やる覚悟はあるか？ お前の姉が受けていた苦痛を上回る苦痛が少なくとも1時間は続き、それは全身を切り刻まれるような痛みだ」

「……………3日……………」

四葉が悩み、そして決断した。

「それでも、かまいません。お願いします」

「四葉っ!!」

父と姉が止めてくるのはわかっていた。四葉は振り返って微笑む。

「どのみち、宮水の巫女として半分は捧げてるの。筋力の半分くらい、おまけみたいなものよ。赤ちゃんを抱っこする力くらい残るでしょう」

四葉がラオウを見上げて頼む。

「お願いします。今すぐに」

「よい覚悟だ。では…」

ラオウが、また指を3本、立てた。

「3億」

「っ……………、……………お父さん、払える？」

「3億とは……………また……………しかも、3日のことに……………」

俊樹が呻き、ラオウが足元を見てくる。

「北斗神拳の歴史は2000年、その奥義を知るに、わずか3億。おしくば、去るがよい」

「わずか3億ですか…」

俊樹が自分の額に指先をあて、トントンと触れた。

「たしかに、わずか3億、わが町の年間予算程度だ。ところで、北斗さん」

俊樹が逆にラオウの足元を見返してくる。

「お飼いになつてる老馬のお加減は、いかがですか？ ずいぶん高齢で、しかも癌を患っている。獣医への支払いも大変でしょうね」

「ぬう…」

「それに、お義父さんのリュウケンさんも有料老人ホームに入つておられ、月に36万ほど、ご入り用のようですね」

「貴様、どこで、それを…」

「いやはや、ちよつとした世間話ですよ、世間話」

俊樹は調べさせた資料にあつた内容からラオウの足元を見定めていく。多選の町長として交渉ごとは日常茶飯事で、相手の足元を見る眼力は拳法家をはるかに超えている。

「何より、この阿吽の像、そろそろ大規模な修繕が必要ですね。わずか3億では、こういったものは修繕できない」

「貴様、何が言いたい？」

「ご商売の方はいかがですか。暗殺、最近では受注が減っているようですね。平和な時代だ、需要そのものが減っている。たまに暗殺の注文を考える方がおられても、バイクと拳銃で、さつさと済ませる業者に仕事を取られたりね」

「我を愚弄するかつ?!」

「いえいえ、立派なお仕事だと思いますよ。ただ、少し将来性というか、持続可能な事業展開や施設の維持、ご家族の介護といった面から、

私にも協力できることが、あるのではないかな、と思考した次第ですよ」

俊樹が畳み掛けに入る。

「たとえば、ですね。有料老人ホーム、これを特別養護老人施設へ変更するだけでも、月々の支払いは3分の1で済みます。ただ、いかにせん待機者が多くて東京都では1施設あたり360人待ちだそうです。ひるがえって、うちの町でなら、私の顔もあって、なんとでもなる」

「……………」

「うちの町はね、山奥ですが空気はきれいだ。土地もある。長年、連れ添ってこられた愛馬にも、最後の時間を過ごしてもらうのに、広い牧場があれば、どんなに喜ぶことでしょう」

「……………」

「この阿吽の像、とても立派ですね。ですが、以前に文化庁から年代測定を打診されたとき、先代のリュウケンさんが断っておられる。これが、500年以上前のものであれば修繕に補助金をつけることが可能になります。そういった補助金も順番待ちという事情もあり、なかなか。だが、私はね、町長となる前は民俗学者なんかをやっていたね。その関係もあって文化庁に顔もきく、修繕の順番を決める分科会に参加している学識経験者には友人や後輩もいます。また、多選のおかげで全国市町村長会で副議長も務めております」

「北斗神拳の歴史は2000年っ！」

「はい、この阿吽の像、見たところ鎌倉期であることは確かでしょう」

「一子相伝！ 我以外に、なせぬ！」

「そうですね。うちの娘は相当にこだわっているようだ。ですが、父親の私としては、ここは止めたい。だって、そうでしょう。こんなに可愛い娘だ。筋力が半分になる？ なのに、効果は、たった3日？

その前に全身を切り刻まれ発狂し死ぬような痛み？ とんでもない話ですよ」

「……………」

「それにね、自分の娘だから、わかるんですが、この子はジャギさんが

亡くなっていたことで、頭の中で考えていた計画が狂っている。いわゆる計算違いというやつですな。なのに、とりあえず北斗神拳を身につけておけば、なんとかなるかもしれない、という当初の計画を捨てきれず、なのに先が見えない、いわばノープランな状態で突き進もうとしている。そんな顔をしています」

「う…お父さん…」

四葉は痛いところをつかれて、よろめいた。

「この子は、よく母親に似ている。だから、わかるんです。きっと、どう転んでも何とかするでしょう。だから、私個人としては3億も投じて娘に苦しい想いはさせたくない。ですが、娘が望むことであれば、かなえてやりたい気持ちもあります」

「貴様は何が言いたい?! 話が長いぞ!!」

俊樹からの言葉の拳が百烈してくるのに耐えかね、ラオウは不利なところで結論を急いだ。俊樹は勝利を確信したが、ほくそ笑んだりせず、誠実な顔で頼む。

「簡単な提案ですよ。3億ではなく、リュウケンさんの特養への入所、愛馬への牧場を亡くなるまで提供すること、阿吽の像の修繕を斡旋すること、この3つで手を打っていただけませんか。でなければ、この話はなかったことに」

「……………ぬうう……………」

ラオウが呻り考え、トキを見る。

「ラオウ兄さん、いい話ですよ」

トキが頷いた。

「そうか。いいだろう」

実弟の意見を長兄が採用するという形でメンツも立て、ラオウは了承した。

「では、始める。背中を向けよ」

「はい」

ラオウが四葉のブラウスを剥ぎ取った。お昼に司から射精してもらった精液と四葉の小水を抱きしめたために、胸のあたりにシミができていたブラウスが阿吽の像の足元へ投げ捨てられる。四葉はラオ

ウへ背中を向けているので、俊樹たちに乳首を向ける立ち位置になった。

「お父さん、お姉ちゃん、外で待っていて。大丈夫、必ず戻るから。切り刻まれるくらい苦痛なら疑似体験済みだし、その先が絶望じゃなくて希望があるなら余裕だと思おう」

「……わかった。行こう、三葉」

「四葉、頑張つて……四葉、なら、きつと……」

強がる四葉を残して、二葉の頃から、こうなったら引つ込みがつかないことを悟っている俊樹と、やっと苦痛の連続から解放されて、ほんの少しだけ状況がわかりかけてきた三葉が建物を出る。扉が閉まると背後からラオウと四葉の声が響いてくる。

「心霊台!!」

「くうっ!! うわあっ!! ああわあ!! はあつくう!! うわわっ!!

あ!! きゃあっ!! はあっ!! うあっひあああ!! わあく!! あ

かわわ!! んんんくく!!」

のたうち回る四葉の悲鳴に、三葉が振り返った。

「四葉……」

さつきまで似たような苦痛を味わっていただけに、同情の念が強い。俊樹が三葉の背中を押した。

「ここにいても仕方ない。ともかく、三葉の服を買いに行こう。四葉のブラウスも破られてしまったしな」

そう言いながら俊樹はスーツのズボンを脱いだ。

「これを着ていなさい」

「ありがとう、お父さん。ごめんなさい、そんなカツコにさせて」

俊樹が下半身は白いブリーフだけになってしまったことを謝った。

「娘が、つらい想いをするより、ずつといい」

「本当に、ありがとう」

下半身裸だった三葉は父親の配慮に感謝して、男物のズボンをはいて街に出ると最寄りの商店で、とりあえずの衣服を買う。丸四日間絶食だった上に激しい苦痛を受けたためか、ぽっちゃりとしていたウエ

ストが高校生だった頃のように細く戻っていたのは、ものすごく嬉しかったけれど、今は喜んでいる場合ではないので、四葉にもブラウスを買って戻った。道中で三葉は俊樹から、四葉が何かを進めていることと状況を聞き知った。そうして日没まで寺院の外で待っていると、扉が開き、四葉とラオウが出てきた。

「四葉！　大丈夫なの?!」
「うん」

四葉は微笑み、それから手を見せる。

「まあ、爪が3枚ほど飛んじやったけどね。そのくらいで済んだよ」

「四葉、まず服を着なさい。買っておいだから」

ずっと上半身裸で奥義を学んでいたことに、俊樹はラオウの配慮の無さを残念に思ったけれど顔には出さない。四葉はブラウスを着て、ラオウに礼を言う。

「ありがとうございます。ラオウ先生」
「うむ」

頷いて、初めての女弟子を送り出しつつ、付け加える。

「三千万と、さきほどの件だが」

「えっと……お父さん、どうなるの?」

「お金は1週間以内に、ご指定の口座へ振り込みます。さきほどの件も進めますが、こちらと連絡のつく電話番号を教えてくださいいただけますか?」

「ならば、トキ鍼灸院へ電話するがよい」

「わかりました。今後とも宜しく願います」

多選の町長らしく事後処理を進め、三人は寺院を出た。父が娘に問う。

「四葉、これから、どうすればいい?」

「糸守に帰ります」

「わかった。今からだと、明日の朝になるな」

俊樹が腕時計を見て言うと、四葉の顔色が凍り付いた。

「どうして?! 今日中に帰らないと困るの!!」

「そう言われても、ここは八王子だぞ」

「だって、来るときは40分だったのに！」

「それはへりだったからだ。電車なら東京駅に出てから新幹線で名古屋、もしくは山梨県の方から帰るのだが、そっちは列車の連絡が悪い。どちらにしても糸守に着くのは明日の朝になるな」

「それじゃダメなの!! 今日中に! 夜の12時くらいまでに帰りたいの!! ラオウ先生のところにいるのを日没までにしたのは、帰りの時間を考えてだったの!」

「そう言われても、うちの町が、どれだけ田舎か、知っているだろう。名古屋からタクシーを飛ばしたとしても……無理だ。12時は過ぎる」

町長として陳情のために東京に出向くことは多いので、どれだけ時間がかかるかは熟知している俊樹が言うと、四葉が絶望的な顔色になる。

「……そ……そんな……」

「お父さん、何とかしてあげられない? たぶん、入れ替わりにとって糸守の地にいることは重要な条件だと思うの。しかも、四葉は私みたいな不定期じゃなくて、確実に一日で入れ替わってるってことみたいだから、また今夜、変わるのよ」

経験のある三葉が言うと、俊樹も悩む。

「う……む……いや……しかしだ。……」

俊樹はスマホで乗り継ぎ検索するけれど、どのルートでも明日になる。

「いつそ、小松空港か、富山までフライトして……いや、それでも山道が……」

「へりはっ?!」

四葉と三葉が同時に問うた。

「ドクターへりは返してしまったよ。もう、誰も病気ではないのだ。いくら、私でも公私混同にすぎない。消防の方でも拒否するだろう」

「そんな……」

四葉が、また絶望し、三葉は大人だったので再提案する。

「民間のへりをチャーターすればいいじゃない!」

「それも難しい。費用は80万ほどだろうが、そもそも糸守のヘリポートはドクターヘリなどの緊急用だ。民需での離着陸は、よほどでない……、それだけ大事なことになるのか？」 四葉

「お願いします、お父さん」

すがりつくように娘に頼まれると、俊樹はノーと言えなかった。すぐに電話をかけ、そしてヘリを予約した。

「かなり無理を言って予約したよ。今夜は東京で花火があるらしい、おかげでヘリは出払うのだが、花火が終われば、もどってくる。それで帰れるよ。料金は150万と言われたがな」

「ありがとう、お父さん！」

四葉に抱きつかれると、俊樹は二葉の面影と重なって娘の頭を撫でた。

「本当に、お前らは……おい？ 大丈夫か？」

抱きついていた四葉が、ずるずると崩れていったので慌てて抱き留める。

「四葉、どうした?!」

「四葉、どうしたの?!」

「ご……ごめんなさい……目まいが……お腹が空いて……力が……朝から何も……安心したら、急に……」

「まったたく」

俊樹は四葉を抱き支えながら提案する。

「どうせ、花火が終わるまでは東京にいるんだ。しっかりした食事を摂りなさい。四葉が食べないことを、お義母さんも心配していたし、三葉も、ずっと食べていなかったろう。どこか、行きたい店はないか？」

「それなら私、 I L G I A R D I N O D E L L E P A R O L E に行きたい！」

「えく……あそこお……」

言の葉の庭というイタリア語を、ずっと覚えていた四葉が提案すると、姉は行きたく無さそうな顔になる。

「あそこ、美味しいけど……」

三葉は入れ替わっていた時にバイトしていたこともあるし、東京で暮らしているときにも何度か利用したことがあるイタリアンレストランへ、離婚した今となっては行きたくない気持ちだった。

「お姉ちゃんが食べた料理の写真はインスタで何度も見せてもらったけど、結局、私は一回も、行ってないもん！」

「うくん……」

東京暮らしの華やかな側面だけはSNSにアップしていたので、それを妹が羨ましいと思っていることの原因が、過去の自分であることにも自覚はある。俊樹が店の位置を調べて頷いた。

「利用するヘリポートにも、ごく近い。三葉」

「はいはい、わかりました。ご案内します！」

すぐに予約を入れて三人でタクシーに乗り、レストランで食事を摂る。四葉は朝から何も食べていなかったし、三葉は4日間も食べていなかったなので、行きたくないと言っていたけれど、いざ食べ始めると、黙々と食べている。

「少し電話をしてくるよ」

俊樹は席を外して喫煙所で電話をかける。町議選の最中で連絡事項は多いし、夜中に町の緊急用ヘリポートを使うことの調整もしなければいけない、娘たちに心配をかけないように、それらの連絡をしていると、この店のオーナーらしき男性もタバコを吸いながら電話していた。

「ごめん、ミキちゃん、やっぱり行けそうにないわ」

「ギリギリまで私を待たせておいて、ドタキャンする気なの？」

オーナーのスマホからは藤井ミキの声が響いてくるけれど、俊樹にとつては長女の結婚式で一度だけ挨拶したことしかないのも、もう忘れていて気づかない。俊樹にとつて重要な選挙戦の差配をツイッターで黙々と続けている。

「ごめん、ホント、ごめん。急に店に、奥さん来ちゃって抜けられないんだわ」

「ふーん……待ってるうちに、ワイン空けちゃったのよ」

「その支払い、オレのカードでしょってよ、ね？ もう一本いってもい

「いからさ」

「花火は、どうするのよ？　へり、チャーターしてくれたんではよ？」

「それも難しいんだよ。奥さん、なんか疑ってる感じでき。もう抜けられないわ」

「……………楽しみにしたのになあ。横から花火みるの」

「今からじゃキャンセルしても、キャンセル料100%だからさ、ミキちゃんだけでも見てきてよ。ね？」

「女一人で乗れっていうの？」

「いっそ、旦那でも呼べばいいよ。どうせ、二人分払ってあるし」

「司にへり代のこと、どう説明するのよ。たしか、58万とか言ってたよね。花火の日、特別料金でさ」

「懸賞に当たったとかさ。まあ、ボクの心の中ではミキちゃんを、ときどき借りてるレンタル料みたいな気持ちで支払っておくからさ。たまには夫婦で楽しんでみたら？」

「当日、いきなり？　司に朝、何も言っていなかったの？　っていうかさ、そういうウソからバレていくのよ。奥さんに疑われてるのも結局そのへんの甘さよ」

「あははは、痛いところつくね。じゃあ、2号くんは？　2号くんいるんですよ。え〜つと、あのタ…………タ…………タチ、なんとか君」

「タキよ。私に2号いるの勘づいてたんだ」

「そのへんは、ぬかりないさ」

「ふーん…………あいつ、ヒマかな？　当日の今で、来れるかな」

「きつと、ヒマだよ。だって、先週、うちに面接に来たから。なんか、再就職うまくいってないらしくて。もう一回、働かせてくれないかって。バイトでもいいからって」

「雇ったの？」

「まさか。うち、出戻りはお断りって言ったよ。まあ、ホントは彼、使いやすい方だったから、欲しかったけどさ、ミキちゃんと穴兄弟なんだから、発覚したとき店でトラブられてもイヤだし」

「賢明な判断ね。まあ、いいわ。今夜は許してあげる。お互い様だし」

通話が終わり、オーナーは舌打ちした。

「ちつ……だんだん凶に乗ってきたな。セフレ風情が、もう歳だし、切り時か。先週、かわいい女子大生も雇ったし。そろそろ更新時期かな」

オーナーは400万円するパテック・フィリップの腕時計を見て、厨房へ戻っていた。俊樹は選挙戦の指令とお願いをスマフォから送り続け、ずいぶんと時間が経ったので一度、テーブルに戻った。

「すまない、もう少し連絡事項があるんだ。二人で食べていてくれな
いか」

「はい」

四葉は素直に返事をしたけれど、三葉はナプキンで口を拭いて立ち上がった。そして父親に頭を下げる。

「ごめんなさい、お父さん。選挙のこと、いろいろ大変なんですよ」

「いや………たいしたことはない」

「ウソを言わないで。立候補者の私が四日も倒れて、選挙活動がストップしてるのに、大変じゃないわけじゃないもの」

「……………」

「今からは私も戸別電話、やります。電話なら東京からでもできるもの」

「大丈夫なのか？ 体調は」

「もう平気よ。四葉、一人で食べていられる？」

「小学生でも食べるくらい一人で食べてるよ。いつてらっしやい」

すっかり選挙モードになっている父と姉に手を振って、四葉は長年、話だけは聞かされ料理の写真だけは見せてもらっていたイタリアンを、ゆつくりと味わう。四葉が座っているテーブルの隣りには柄の悪い二人組の男たちがいた。

「兄貴、そろそろじゃないっすか」

「そうだな。いつもの、やつ、いくか」

二人は食事の途中で料理へ爪楊枝をさし込むと、店員を呼び、文句を言って無料にさせる。その一部始終を四葉は気づいていたけれど、

余計なトラブルは抱えたくないので黙って食事続けた。

「うまくいきましたね、兄貴」

「おうよ。この店は4年ぶりだからな」

「バイト、ほとんど入れ替わってオレらの顔を覚えてるヤツいない感じっすね」

「同じ店でやるのは最低4年あけないとな」

「爪楊枝一つあれば、三食、タダっすもんね」

「指先一つでえく、つてなもんよ」

「今夜も、あの技、またやるんすか。カッターナイフで、女のケツ肉を切らずに、スカートだけを斬る絶妙の神業。あれがデキるヤツは、そうそういないっすよ」

「そうだな、あの新人っぽい女子大生、かわいいしな。あいつのスカート、斬りたいなあ」

「よっ、待ってました」

「だがな、今夜のオレは今までとは違う。新たな技を身につけた。もうカッターナイフなんてものは使わねえ」

「じゃ、どうするんすか？」

「素手よ、素手。素手でスカートをバラバラに切り刻んで、パンツ丸出しのデイナーショーにしてやるぜ。素手なら、そこまで剥いても証拠がねえ。女のスカートが勝手にバラバラになったってことで警察沙汰にもならねえ」

「そりや、素手なら証拠は……けど、そんなこと、できるんすか？」

「ふふふ、オレはな、この4年、ずっと修行してきたのよ。シン師匠のもとでな」

「それってあれっすよね。健康体操みたいな拳法道場の。たしか、シン&ユリア美容学院とかで、どっちかというトエステのチェーン展開で成功してるユリア社長のが有名っすけど。拳法道場って、ついでじゃないんすっか？」

「それは表向きの姿よ。裏では本格的な殺人拳を教えてくれる。まあ、授業料は500万もして、タダ飯で浮いた金を全部、つぎこんだがよ。その甲斐はあるほどの拳法を教えてくれた。しかも、オレは筋

「がいてってシン師匠にほめられたんだ」

「兄貴のカッターナイフさばきは、けっこう超人的つすもんね。ケツ肉を切らずにスカートだけって、普通できないっすよ」

「お前の言う超人的ってのは、まだまだ常識の範囲、常人の範囲よ。オレは、もはや常人の域をこえた。見るがいい！ わが、南斗聖拳を！
シヤオオ!!」

ちようど通りかかった四葉ヘデザートを運んできたウエイトレスの臀部に触れるか、触れないかの間合いで、素早く手を振り下ろした。

パバリ…バラバラ…

ウエイトレスのスカートが直線的に切り刻まれ、床に落ちていく。

「っ、キヤーツ?!」

急に下半身が涼しくなって下を見ると、スカートが斬られていてウエイトレスが悲鳴をあげ、座り込む。

「す…すげえ…兄貴……すげえ…」

「ぎつと、こんなもんよ」

「最高っすね！ ひょー！ このレストランはいいな！ こんなシヨーマでしてくれんのかよ！」

大声をあげると、注目が集まり、ウエイトレスが混乱して泣き出した。他の店員がフォローに出てきて、泣き出したウエイトレスは奥へ連れて行かれ、オーナーが周囲に謝って営業を再開すると、四葉が手を挙げた。

「すいません、私のデザート、さつき落とされたんですけど」

「あ、すいません。すぐに、お持ちいたします」

オーナーが厨房に急ぐよう指示して、すぐ四葉はデザートを食べることができた。そして、食べ終えて再び手を挙げる。

「すいません」

「はい、どうされました？」

まだオーナーは二人組が帰るまではフロアにいるつもりだったので四葉に対応してくれる。四葉は二人組を指さして言う。

「さつき、あの二人、自分で爪楊枝をさし込んで店員さんに文句を言っていました。お店の責任では無いと思います」

「……………」

オーナーは4年前にも来た客でない客のことを、わかっていたし、さもしい飢えたノラ犬にエサをやった気分で、もう無料にして穩便に帰ってもらうつもりだったのに、女子高生が余計なことを言い出したので、接客マニュアルに無い対応を考えるため、黙り込んだ。

「ああん?!」

「んなつ証拠が、どこにあんだ?! コラっ?!」

オーナーの背後で、予想通りの反応が返ってくる。

「私の証言が証拠です」

「……………」

オーナーが悩む。

「おい、コラっ!! お嬢!!」

「このクソガキっ!! しばくど!!」

「それに、その男たちの身体を調べれば、次の犯行に使う爪楊枝もでてくるでしょうし、このレストランにある爪楊枝と仕入れ先や商品が違うのも、詳しく調べれば明らかにできることです」

「……………」 お客様、まあ、ここは穩便に」

オーナーは面倒なことを避けたかった。詳しく調べる過程も面倒だし、もう明日からの営業のことと、浮気に勘づきかけている妻への対応に専念したい。四葉は立ち上がって二人組に声をかける。

「外で、お話しませんか」

「お? ……お、…おう! いいだろう!」

「この女、アホっすね」

「お客様……………」

オーナーは心配になるけれど、外で起こることに店は感知しないのが基本だった。四葉は外に出ると裏路地まで歩いた。

「お嬢ちゃん、わざわざ、こんな人目の少ないところまで、ありがとうよ」

「マジでアホっすね」

「一つだけ質問に答えてくれますか？」

四葉が問う。

「ご飯をタダにただけで、満足すればいいのに、どうして、女の子のスカートまで斬る必要があるんですか？」

「お？ ……てめえ、見てやがったのか」

「話も、だいたい聞こえてました」

「そうか。そんなじゃ、教えてやらねえとな」

「お嬢ちゃんのアホさ加減をよお！」

弟分の男が襲ってくるのを、四葉はハイキックで撃退する。

「うあつ!!」

四葉の気合いとともにハイキックが相手の顔面に決まり、一撃で倒していた。

「この女……腕に覚えがあるようだな。どうりでスマしてやがると思った」

「質問の答えが、まだです。どうして、女の子のスカートまで斬るの？」

「ふっ……決まってるだろ！ 斬りてえからよ！ 斬りてえから斬った！ それ以上の理由なんざ、必要ねえ！ 最高だぜ、実にいい気分になる、今夜もグツときたぜ！ ヒヤッハーっだ！」

知りたかったことを教えてもらって四葉がタメ息をつく。

「はああ……こつちの世界にも、こんなクズがいるのね。いえ、もともとは同じ世界、一つの紐のうちの糸。東京だからかな……ううん、うちの田舎にも似たようなのがいたし、世界が、どうであつても、都会でも田舎でも、人口の一定層はクズってことなのかな。正直、うんざりするわ」

「なにを、ぶつぶつ言つてやがる」

「悪党どもに祈る言の葉は無いつて話」

「けっ、腕に覚えがあるようだが。ちよつとばかり相手が悪かったな。このオレ様は南斗聖拳の初歩をマスターした男よ」

「そう」

「お前はスカートだけじゃねえ、すっぽんぽんの裸に剥いてやるぜ！

ヒヤッハー!! 斬れる、斬れる、斬れるオ！」
男が襲ってくる。

ザウツ…

四葉と男が交差して、すれ違う。

「オ…オレ様の南斗聖拳をかわした…」

「つ…：…せつかく、お父さんに買ってもらったのに…」

四葉はブラウスの袖を切り落とされてノースリーブにされていた。

「それだけで済むとは、お前、何者だ?! なにか、拳法やってるだろ?!

お前の名を教えろ!!」

「もう死んでいる人になら、教えてもいいかもね」

四葉は構えを解いた。そして、考える。

「私の拳は北斗神拳、名は…：…そうね、北斗の末弟より末席の女、拳…

四葉…：…拳四葉でケンシヨウとでも、名乗るわ。本名は、やっぱり秘

密♪ 一応、暗殺拳だから」

「ケンシヨウ…：…お前、男か?」

「…：…。本名は、もつと可愛いから」

「まあいい、じわじわ素っ裸にして、本名さらしてやんぜ。うっ?

…：…なんだ、すげえ、気持ち悪い…：…ボディなんか、くらってねえの

に…：…」

「北斗巫娼拳の奥義、秘孔、咽倫義を突いたわ。すぐに、ああなる」

四葉が最初に蹴撃した男を指した。

「…あ…：…兄貴…：…た…：…たふけ…：…うげ! うええ!」

蹴られた男は口から内臓を吐き出していた。

「なっ…：…何をしやがったんだ?!」

「この秘孔は、地味に効くの。じわじわと吐き気が強くなって、そのうち自分の内臓を吐くわ。まずは小腸、次に十二指腸、そして胃、さらに食道を裏返しに吐く頃には、まあ、死でるわ」

「そ…：…そんな…：…バ…：…バカなことが、あつてたまるか…：…うっ…：…うっ…：…うえっ…：…うおおおえ!!」

小腸をズルズルと吐き始めた。四葉が説明を加える。

「しかも、頭や心臓を一気に破壊するわけじゃないから、しばらく苦しむよ。吐いて吐いて、窒息するか、消化器官の血管がちぎれたことで失血死するか、どっちにしても、とても苦しい」

「ひっ……いい、イヤだ！ た、助けてくれ!! うえええ！ うぐううう！」

「今日までタダで食べた御飯、全部、吐き戻して死になさい」

四葉は二人組が絶命するまで見ていた後、静かに立ち去ると、父に連絡を取り、ヘリポートへ向かった。そろそろ花火大会が終わり、豪遊していたカップルたちのヘリが戻ってくる時刻になっている。三人で手続きを済ませて、ヘリポートの待合室で待っていると、三葉は着陸したヘリから降りてきたのが、離婚した元夫と藤井ミキだったので驚いた。

「っ、タキっ?! どうして、ここに?!」

「え? うわっ?! お前こそ、どうして、ここに?!」

お互いに不意に離婚した相手に出会って驚いている。

「いろいろあるのよ! あなたには関係ないでしょ!」

「お前だって、もう関係ないだろ!! …うわっ、すっかりしてミキさん!」

いっしょに降りてきたミキはワイン2本を飲んでからフライトしたために泥酔に乗り物酔いが重なってフラフラしている。

「えく……大丈夫……大丈夫………花火、まだ?」

「終わってますよ。いっしょに見たじゃないですか?」

「あ、んく……うん、そう見た。横から! 花火! 見た! って、あれ、この女……えーっと、もと彼女……じゃなくて、ほら、……ド田舎の……誰だっけ?」

「モトカノじゃなくてモトヨメです。ほら、水」

水をもたらってミキは少し落ち着いて待合室の椅子に座った。

「お久しぶりね。三葉ちゃん」

「………あなたに、そういう風と呼ばれたくありません」

三葉は会話したく無さそうだったけれど、ヘリは燃料補給とチェツクのために、すぐには出発しない。ミキは酔いがひどいので、しばらく

く動けそうになかった。俊樹は娘が離婚相手と、どんな会話をするのか、気になったけれど、あえて遠く離れて聴かないことにしている。

「んで、三葉ちゃん、どうしてるの？ 彼氏とか、いる？」

「……………再婚してます」

「あく……………そっか、たしか、不倫したんだよね」

「くっ……………誰のせいだと思ってるの?!」

三葉が怒鳴った。

「あなたが結婚してからもタキに、ちよっかい出すから!!」

「それでケンカして出て行って親友の旦那と再婚でしょ？ ハッピー

エンドでいいじゃない」

「どこがっ?!」

「勝ち組、勝ち組。あく……………タバコ……………って、ここ禁煙か…」

「あなたこそタキの友達だった藤井くんと結婚したくせに、今夜だつて、どうしてタキといえるの?!」

「司つて、退屈なのよね。まじめで人並みの給料はもらってくるけど、ただ、それだけ。まあ、タキは今フリーターだけど。キャハッハ♪でも、今夜は懸賞で当たったヘリで花火横から見れて最高だったよね。このあとは、どうしよっかな」

まだ酔いが強いようでミキは饒舌に語りつつ、男にしなだれかか。不倫相手はコンビニでバイトしていたところを急に呼び出されたようで、バイト先の制服を着ていた。三葉が見たくないものから瞳をそらして問う。

「不倫なんて楽しいですか？ 私には後悔しかない」

「チンポ3本」

「は？」

「不倫するなら、3チンポもて。っていう、西原理恵子の格言、知ってる？」

「誰それ？」

「毎日新聞で連載漫画やってるよ。でね、女は不倫するなら、1本じゃダメだったこと。一つにだけウエイトを置くと不安定になるでしょ。」

三脚でも、そう。しっかりと立つには3本くらいが、ちょうどいいよ。それなら、そのうちの1本が急に消えても大丈夫、自分は安定している。ようはバックアップを持ってってことよ」

「くっ……こんな人に……私の新婚生活を……」

「お姉ちゃん、久しぶりだし、そして最期になるかもしれないんだから、彼と話しておいたら？ 私は、この人と話してみたい」

四葉がミキを誘う。

「少しだけ、お話しませんか。あちらで」

「ふうん……妹ちゃん？ よく似てるわね。いいわよ。お説教したそうな顔してる。女子高生が、どんなこと話すのか新鮮そうで聴いてみたいから、お誘いに乗ってあげるわ」

ミキが立ち上がって酔った歩調で歩き、四葉は待合室を出てへりの発着場で会話する。

「さつき話していた司って、旦那さんですか？」

「ええ」

「愛していますか？」

「クスツ……ええ、それなりに。初々しい質問ね、答える方が恥ずかしいくらい。クスクス……若いって、いいわあ」

「司さんは不倫のこと、知っていますか？」

「ううん。そんなへまはしない。あなたたちが告げ口するなら別だけど。あく……今夜は酔いすぎたわ、こんなことペラペラ話しちゃって。横から見た花火が、あんまりキレイだったから、かな」

「ご自分のされていること、許されると思いますか？」

「ええ」

「……………。その理由は、ありますか？」

「私が美人だからよ」

「……………」

「美人は何をしても許されるの。男は、そういうものよ。あなたも可愛いから、もう少ししたら、わかるかもしれない。もう少し長く生きて経験して、お化粧とかすれば、きつと輝くようにキレイになるわよ。せめて田舎臭いところを抜けば、いくらでも男がよってくる。電話一

本で犬みたいにダツシユしてくる。すーっと前を歩くだけで、私の残り香を嗅いで発情するの。私は確実に美しいもの」

「あなたは長く生きすぎた」

「はア？ お姉さんと、そんな変わらない歳…っ?! 何するのよ?!」

ミキは急に四葉が身体に触れてきたので一歩さがった。指先で強く突かれ、とても不快だった。

「何のつもりよ?!」

また一歩さがる。

「北斗神拳奥義、残悔積歩拳」

「はア?」

ミキは仕返しに四葉の肩を押しやろうと思ったのに、本人の意思に反して、また一歩さがる。さらに一歩、さがる。

「え? え? なに? なんで、足が勝手に?!」

「秘孔、膝限を突いたわ。あなたの足は意志と無関係に後ろへ進む!! 地獄まで自分の足で歩いていきなさい!!」

「な、何を言ってる…、こ、この先は、たしか!!」

ミキが振り返る。高層ビルの屋上にあるヘリポートなので手すりもなにもなく、このまま歩き続けると、地上まで真っ逆さまだった。

「うわあ!! と…とめてよ! あ…足を!! とめてよ!!」

「ほんの偶然だと思う。司なんて、よくある名前だから、ごく偶然に重なっただけ。なのに、こんなに腹立たしいなんて、いつのまにか、私は彼を強く愛している」

「何を言ってる…と、とめてよ! 助けて! 誰か助けて!!!」

もうミキは大声で叫んだけれど、ヘリポートにいるスタッフは花火の前後の混雑で疲れていたし、四葉たちの乗るヘリの準備に追われ、気づいていない。どんなに大声をあげてもアイドリングしているヘリの羽音にかき消されて四葉以外は誰も聴いていない。

「うわああああ! あわわあ!!」

あと落下するまで1メートルもなくなると、いよいよ恐怖で顔中が汗に濡れて、つけまつげがとれている。目の上下につけまつげをして

いたので、下のまつげが涙で流れ、上のまつげは目蓋の変なところに貼りついている。涙でアイメイクが解け、黒い涙を流して、ファンデーションが汗で落ちていき、顎に白い汁がダラダラと滴っている。

「い…いやよ！ たすけてえええ…：…な…なぜ、私が、こんな目に!!」
美人の、この私が、なぜええく!!」

とうとう爪先だけで立っている。

ジョワジョボジョボ!!

ミキは恐ろしくて失禁してしまい、漏らした尿がビル風とヘリが巻き起こしている旋風で舞い上がり、本人の顔や上半身を濡らしてリボ払いで買ったワインレッドのドレスが、ワイン2本を飲んで分解した臭い尿で染まっていく。

「あわ…」

最期の一步を踏み出して、ミキの身体が落ちていく。

「うわっ！ うわああ!! たわばああ…：…」

たすけて、わあ、と最期に言ったのか、もう声は聞こえなくなった。四葉が黙って待合室に戻ると、スタッフに呼ばれる。

「宮水様、3名様、ご出発の準備が整いました！ ご搭乗ください！」

お帽子やスカーフなど飛びやすい物は必ず手に持っていたかどうか、カバンに入れてください！」

四葉と俊樹が呼ばれた方へ進み、三葉も会話していた相手に最期の言葉を告げる。

「ごめん。結局、なにもかも、急ぎすぎたのが、いけなかったのかも」

「オレの方こそ、ごめん。未熟だった。君の気持ちを考えられなくて、ごめん」

「じゃあ。さよなら」

「ああ…：…さよなら…」

男に見送られて三葉は背中を向けると、ヘリに乗った。ドアが閉まると旅客向けのヘリなので会話できるくらいには静かになる。

「三葉、大丈夫か？」

俊樹が、不意に離婚相手と出会ってしまった娘を心配して問い、三葉は微笑んだ。

「うん。話せて、よかった。ずっと弁護士任せで離婚したから、会って話して気持ちがすっきりしたわ」

「そうか、よかったな」

気がつけば、もうへりは上昇していて、スカイツリーを見下ろす高度になっている。花火が終わった後の渋滞で道路は輝き、ビルやネオンも宝石のように見えた。

「東京……この街が……人を、おかしくしてしまうのかも……私、サヤチンに謝りたい。どんなに謝っても許されないとしても、謝りたい」

「……………」

俊樹と四葉も眼下を見下ろす。出発したヘリポートのあるビルの下に救急車やパトカーが集まり始めているのに気づいたのは四葉だけだった。

「東京、たしかに、こんな街、焼き尽くしてしまったら、とも……うん、それはダメ、なんとか防がないと……でも、疲れた。もうクタクタ……」

四葉は倒れ込みそうなほどの睡魔を覚えたけれど、頭を振って意識を保つ。

「ダメダメ！ 寝ない！ 寝ない！」

「ねえ、四葉、今夜も入れ替わるの？」

「たぶん、ううん、きつと。……眠い……ごめん、お姉ちゃん、寝そうだから、何でもいいから話しかけて」

「何でも、って言われると……あ、ほら、もう東京が終わるよ。空から見ると、あんなに小さい都市だったんだ」

三葉が窓の外を指した。キラキラと輝く人工の光りが途切れ、山梨県に入ると眼下は、ほぼ真っ暗だった。

「私たちの町も、上から見ると、こんなに暗いのかな？」

四葉の問いに俊樹が答える。

「その分、星がキレイに見えるさ」

「そうだね」

四葉は星を見ようとしたけれど、旅客ヘリの窓の構造上あまり上方は見えない。しかも、空は曇っていた。

「お客様」

副操縦士が客室と操縦室を隔てる戸を開いて声をかけてきた。

「山梨県から長野県にかけて濃い霧が出ているとの情報です」

「そうか」

「大変申し訳ありませんが、山梨県内にて着陸いたします」

「っ、それは困る!」

俊樹が声をあげ、四葉も叫ぶ。

「お願い! 岐阜まで飛んでください!」

「そうおっしゃいまして、きわめて危険ですから」

「どうしても戻らないといけないの!!」

「追加料金が発生してもかまわない! 飛んでやってくれ!」

「金額の問題ではないのです。運行規定違反になりますから、着陸いたします。料金は後日全額返金されますので、どうか、ご了承ください」

「そ……そんな……」

「どこに着陸するんだ?!」

「検討中です。どうか、お静かに」

そう言う副操縦士は戸を閉めてしまった。しばらくして、ヘリが山梨県内にある日本航空高校のヘリポートへ緊急着陸した。降り立ってみると、周囲は真っ暗で何も無い。コンビニの光りさえ、遠かった。

「……………あと2時間も、ないのに……………」

「四葉、しっかりして、顔色が悪いよ。まだ、方法はあるかもしれないから!」

三葉が励まし、俊樹が電話をかける。

「タクシーを呼ぼう!」

電話で呼んだタクシーが来るまでに30分を要して、中央自動車道を進むけれど、ヘリと違い、飛驒までは大きく山脈を迂回しなければ

到着できない。霧の濃い高速道路を運転手に無理を言つてスピードを出してもらつても、ようやく長野県に入り諏訪湖の近くを通る頃になつて、夜の12時になつてしまった。

「日付が……四葉っ?! 四葉、しっかりして!」

三葉は妹が、ぐったりとしていることに気づいた。

「寝ちゃダメなんでしょ?! 起きて!!」

大声で呼びかけて揺すつても反応がない。助手席に座っていた俊樹も心配して振り返る。

「四葉の様子は?」

「ぜんぜん反応がないの! 四葉! しっかりして! 四葉!!」

三葉が頬を叩いても反応が無いどころか、顎に力も入っていないくて口が開いてヨダレが垂れてしまう。目蓋にも力が無くて、閉じているというより半眼で瞳に動きもない。

「四葉……」

三葉はゾツと腹の底が喪失の恐怖で冷たくなる。もう四葉からは生きている様子が消えてきている。抱いている妹の全身には少しも力が入っていないくて、とても重たい。じわりと三葉はお尻が温かく濡れてくるのを感じた。触つてみると、同じシートに座っている四葉が小水を漏らしている。三葉は死んだように動かない妹の口元に耳をあてた。

「っ! お父さん! 四葉、息してない!!」

「なっ……」

驚いた俊樹は慌てかけたけれど、長女に言い聞かせる。

「こんなときこそ、落ち着きなさい」

「そんなこと言われたって!! 息してないのよ! 四葉が!」

「私も、どうするのが、いいか考える。お前も考えなさい」

すでに妻を亡くしたこのある男が静かに言うのと、三葉も少しだけ冷静になれた。

「……どうすれば……どうすればいいの……息が……息をつ!」

三葉は唇を妹と重ねると、大きく息を吹き込んだ。

第6話

四葉は肉体をとまなわず、意識だけが空を飛んでいるのを感じていた。濁った空と赤茶けた砂漠のような大地が見える。その大地にときおりコンクリートの建造物が墓石のように残っていて、ここが核戦争の後の世界だと思い知らせてくれる。空の高いところにあつた四葉の意識が、だんだんと降下していく。そして、地上200メートルのビル屋上を認識していた。

「ウワツハハハ！ どこに逃げようとも炎が貴様を追いつめる!! ここは地上200メートルどこへも逃げられんぞ!!」

四葉のすぐ近くでジャギが勝ち誇って哄笑している。

(あ、結局、拳法じゃなくて罨にしたんだ)

そう思っている四葉とジャギが重なった。

「うっ、痛い……けっこうダメージ受けてる。何だ？ オレの中に……」

一つの肉体に二つの意識が宿り、ジャギが頭を振った。

「うう、頭を振らないでよ、ものすごく痛い！ 何だ、これは、どうなつてやがる?! そうか、四葉とかいう女、お前だな?!」

ジャギが自問自答している様子なのをケンシロウは怪訝な顔で見ている。

「オレ様から出て行け！ ごめんなさい、私も、こうしようと思つてなつているわけじゃないの！ オレ様は今忙しいんだ！ とにかく、静かにしてやがれ！ ぶっ殺すぞ!!」

ジャギが殺気立っているので四葉はいながらにして静かに見守る。見守っているとジャギは屋上に火を放ち、ケンシロウを炎壁で囲むと、冥土のみやげと称して昔話を始めた。

「シンをゆきぶり消えかけた炎を再び燃え上がらせたのだあ!!」

(ジャギさん、ものすごく熱いです。そろそろ脱出しないと危険じゃないですか。私たちが立つてる、これ燃料タンクですよね)

四葉は声を出さずに意志をジャギに伝えてみたけれど、一喝され

る。

「うるせえ！　これからケンシロウのヤツを最大限に悔しがらせてから焼き殺してやるんだ。お前は黙ってる!!」

(はい、すみません)

再び四葉が静かにすると、ジャギは昔話を続け、高笑いする。

「ひゃあはは！　どうだ、悔しいか?!　悔しいかあ?!　はははあ!!」

ウアハハ！　オレ様は誰だ！　名を言ってみろ!!　オレは北斗神拳の伝承者ジャギ様だ!!」

(……自分に様付けするんだ……私が自分で四葉様って言ったら司とか、どんな顔するかな……)

「……。ウアハハハ！　貴様からすべてを奪いとり、そして今貴様の命も尽きるのだ！」

「ぬう!!」

燃料タンクの下にいるケンシロウが激怒している。

「うおお!!」

怒りのあまり盛り上がった筋肉でケンシロウが上半身裸になった。

「な?!」

(ジャギさん、そろそろ脱出を！　足、火傷してますよ!)

(そうだな。そろそろ……)

ジャギも声を出さずに四葉に意志を送ることができた。単に思っていることが、伝わってしまうようだった。チラリとジャギが脱出のために用意しておいたケーブルを見て確認したときだった。

「おお!!　ぬああ!!」

ケンシロウが雄叫びをあげ、そして屋上の床を殴りつけている。

ドコオツ!!

コンクリートの床がヒビ割れていき、そのヒビが燃料タンクの方まで走ってきた。

「な……なに……、ゲエ!!　うわあ!!　キヤーっ?!」

屋上が崩壊して燃料タンクごとジャギと四葉が落ちる。

「ゴホッ……な……なんてヤツだ……」

「ジャギ…オレの名を言ってみろ！」

ケンシロウが迫ってきた。

「待ってください！ ケンシロウさん！ バカめ！」

ジャギの手がケンシロウの顔を浅く斬った。寸前にジャギらしくない口調で発声したのでケンシロウに隙もできていない。

「…この技は!! 南斗聖拳!!」

ケンシロウが驚いているのでジャギは得意げに微笑む。

「フフフ…その通り、オレも昔のジャギではない」

（四葉、てめえ、次に余計なことしたら、マジでぶつ殺す。お前を殺せなくても、次に入れ替わったとき、沙耶香とテツツを八つ裂きにするからな）

（ごめんなさい、それだけは許して）

「だったら、黙ってやがれ！ 男同士の間に入るな！」

「……」

ケンシロウが会話のキャッチボールが成立しないので少し困っている。ジャギに沙耶香と司のことを持ち出されると、今度こそ四葉は黙って見守る。再びジャギとケンシロウが戦い、南斗聖拳でジャギが挑むけれど、すぐに押されていき、追いつめられた。

「うつくく…き…貴様、使ったな。北斗神拳の奥義、醒鋭孔を!!」

「そうだ…胸椎の秘孔、龍領を突いた！ 今、貴様の身体は、むきだしにされた神経で包まれている!! 指でふれただけで全身に激痛が走る!!」

ケンシロウが指先でパパパツと触れてきた。

「うぎやあ!!」

（うつくううう…痛うう…心霊台とは、また違う痛みで、これは、これで、きついでよ）

思わず四葉はラオウから習った対応する秘孔で痛みを取り去った。

（四葉、てめえ、また…）

（ごめんなさいっ、つい！）

（まあ、いい。ケンシロウのヤツ、驚いてやがる）

「な……なに……なぜ、お前が正統伝承者しか知らぬはずの秘孔を知っている?!」

「あ、そうだ！ お前、なんで知ってるんだ?! いつの間に北斗神拳を?!」

「……………ジャギ、貴様に訊いている！」

(2020年のラオウさんから教えてもらったの)

「兄者から……………なるほど、それで。いや、けど、そんな簡単に教えてくれるものか?」

うっかりジャギは声に出して問うていることにさえ、気づいていないほど驚いていた。

(3億円って言われたけど、お父さんが交渉してくれたの)

「3億円って、金か？ 金で、北斗神拳を売ったのか？ 兄者は?!」

「ジャギ!! 貴様は何を言っている?!」

もともと激怒していたケンシロウが会話が成立しないことに苛立って殴りつけてくるのを、四葉の言葉に気を取られていたジャギの意思ではなく、四葉の意思で回避した。

「二つ、その足運びは、ラオウ……」

ジャギとケンシロウが驚いている。これをチャンスと捉えた四葉が一気にお願する。

「お願いです！ 二人とも、どうか話を聞いてください！」

「……………」

「四葉、てめえ、余計なことを……、お願い！ 聞いて！ 私は2020年から来たの！ そこでは核戦争は起こらなかった！ こことは違う平和な世界があるの！ それが、どうした?! あっちは、あっち！ こっちは、こっちだ！」

「……………。あたたたア!!」

ケンシロウが蹴りを連発してくる。もう会話より戦闘を進めることに決めた様子 of 攻撃だった。

「くく!!」

ジャギが防御して間合いを取った。

(おい、四葉)

(はい、すみませんでした。どうか、司とサヤボボのことは…)

(そうじゃねえ。お前、北斗神拳が使えるんだな?! ラオウ兄者の)

(はい)

(なら、いいことを考えた。お前がオレの左腕を操れ、オレは右腕で南斗聖拳を放つ。そんな混成攻撃ならケンシロウのヤツも混乱するだろう)

(使えるものは、何でも使うんですね。そういうの好きです。では…)

ジャギと四葉が構える。

「南斗! 北斗!」

「……」

「ヒヤハツ! 剛掌波!」

ジャギが左右の腕で別々の攻撃を放った。

「な…」

ケンシロウの頬を斬り、胸を打った。

「どうだ、オレ様の拳は一人で二人分、北斗と南斗の合わせ技よオ」

「……。あいかかわらず、北斗神拳の真髄すら忘れたままか」

ケンシロウが構え直した。

「もう一度、そのくだらん技を見せてみる」

「フフ、お望み通り地獄へ送ってやる」

(ジャギさん、二度目は通用しない気がします)

(だからって、他に手はねえんだよ)

(含み針とかは?)

(アレは最初にやったけど、受け止めやがった。まあ、修行時代にも、やったからな。ケンシロウも二度目はくらわなかったんだろうよ)

(ってことは北斗南斗の合わせ技も二度目はダメなんじゃないですか)

(たしかに意表を突いただけで、ぜんぜん効いてねえからな。ヤツの目、明らかにカウンターを狙ってやがる)

「どうした。ジャギ、早くかかってこい」

(お二人が仲直りして共通の世界平和という目的のために協力してく

ださる、という私の提案は無駄ですか？)

(無駄だ。せめて、ケンシロウを倒してからなら、お前の話も聞いてやろう)

(ケンシロウさんを……、わかりました。私に作戦があります)

意外にもジャギが、とりあえずは話を聞いてくれる様子なので、四葉は仲裁を諦め、乱世のならいに従い、ケンシロウを倒すことにした。

(私がケンシロウさんに色々と話しかけます。その間に、ジャギさんは攻撃してください)

(なるほど、ヤツの集中力を奪う作戦だな。いいだろう。はじめろ！)

「ケンシロウさん、どうか聞いてください！」

「……」

「本当のあなたは、もっと優しい人のはずです！ もし核戦争が起こらなければ、あなたはトキさんの鍼灸院で平和な時間を過ごしていたのです！」

「トキ兄さんの……」

(くらえ!! 北斗羅漢撃！)

ジャギが放った突きの連続は防御されてしまったけれど、四葉もジャギも諦めない。

「西暦の2020年、私はケンシロウさんに出会いました。そのとき、あなたは言った。自分は人を殴ったり蹴ったりといったことは嫌いですから。暴力は何も解決しませんよ、お嬢さん、と」

「……………」

ケンシロウは激しいジャギからの攻撃と、四葉からの言葉を受け流している。

「今のあなたは本当のあなたではない！ あなた自身、望んでいなかった世界の、望んでいなかった自分なんです！ 私は、こんな世界を変えたい！ だから、もう一度だけチャンスをください！ 私に時間！」

喋っているのは四葉でも、声はジャギなので、とても気持ち悪い。

「ジャギ、寝言は地獄の底でわめいている！」
「うっ！」

(ぐう！ 強い、やはり昔のケンシロウではない…)

ジャギは反撃を受けて吹っ飛んだ。

(ううっ……これが、あのケンシロウさんなの……まるで、違う…)

(ああ、昔のヤツには、こんな凄味はなかった。この非情さ……乱世が、こいつを変えたんだ)

「最後に、これは…」

ケンシロウが鬼気迫る顔で近づいてくる。

「貴様によって、すべてを失った。オレの…」

「ケンシロウさん！ もう一度だけチャンスをください！」

「このオレの怒りだあ!!」

ケンシロウの渾身の怒りを込めた突きが、ジャギの胸を突いた。

「(うぐっ……この秘孔は、……新血愁)」

突かれたジャギも四葉も北斗神拳を知っているので、突かれた秘孔の効果もわかる。それでもケンシロウは説明してくれる。

「秘孔、新血愁を突いた。3日後、全身から血を噴き流して死ぬことになる!!」

さらにケンシロウは説明を追加する。

「貴様は、なぜか、秘孔、龍領に対応する秘孔を知っていた。だが、この新血愁に対応する秘孔は心霊台のみ！ たとえ、それを突いたとしても貴様の死は変わらぬ!! 今までの罪！ ぞんぶんに悔いるがい!!」

そう言い放つとケンシロウは去っていった。

「ゴホッ…、ゴホっ……クソ！ 痛てええ…」

(ごめんなさい、ジャギさん……)

「よりによって新血愁か……クソっ…」

(3日間……)

「クソっ!! ケンシロウめ!!」

(ううっ…痛い…)

「呻くなよ、余計に痛いだろ」

すでに秘孔による身体の変調が始まり、四葉とジャギは苦痛に震えた。

「ぐうう……」

（ううっ……今、この時代、この世界でラオウさんとトキさんは、どうしているんですか？）

「生きてるらしいくらいの情報しか知らねえ。携帯電話とかスマホみたいな便利なものは無いからな。それに、たとえ兄者たちに会えても、新血愁の効果は打ち消せねえ。それは、お前にもわかるんじゃないのか？　ぐふっ……」

（ケンシロウさんは、それをわかっていて突いたから……ううっ……）

苦しくて膝をつき、肩で息をしている。

「3日か、長えな……死ぬのか……クソっ!!」

（あああつ！……痛い……痛い……痛い……）

「そういや、お前、オレが死んだら、お前は、どうなるんだ？」

（わかりません。このまま、いっしょに死ぬのか、元に戻るのか。そもそも、ここに二つの意識があること自体、もう私の体は死んでいるのかもしれない。……赤ちゃん……いたかもしれないのに……ぐすっ……）

「泣くなよ、余計に痛みが増す！　四葉、お前、妊娠してたのか？」

（してたら、いいな、くらいに）

「相手はテツツーか？」

（はい）

「あのチェリーめ、しっかり決めやがって」

（私から誘ったの）

「なんだ、据え膳か」

（司……それに、赤ちゃん……五葉……）

「もう名前を決めてあるのか、単純なネーミングセンスだなあ」

ジャギが立ち上がった。

「くだらねえこと言ったら、だんだん痛みが治まってきたな」

(はい、今は少しだけ、という感じですけど)

「オレは死ぬとしても、四葉は戻れるといいな、あっちの世界によ」

(ジャギさん……)

「あっちの世界……よかったな、いろいろと……飯も美味かったし……」

(一つだけ、助かるかもしれない方法があります。無駄かもしれませんが)

「おっ、いいこと言うじゃねえか!」

(本当に、どうなるかわからない。ただ、何もしないよりマシというだけの可能性ですけれど)

「もったいぶらずに早く言えよ」

(この世界の岐阜県、飛騨高山に3日以内に到着できますか?)

「うくん……バイクで道路が崩壊してる箇所が少なければ、まあギリギリ」

ジャギが歩き出した。

(え、もう行くんですか? 私、どんな方法か説明してないのに)

「どうせ、やることねえしよ。ギリギリって言ったろ。まあ、バイクも乗りたい気分だしな」

ジャギが階段を下りていく。下に行く途中で、手下たちの死体を、いくつも見た。すべてケンシロウに倒されたようで北斗神拳による惨殺死体だった。

「こいつらにも貧乏くじを引かせちゃったな。逃げ延びてるヤツがいるといいが」

(ジャギさん……少し人が変わってませんか?)

「そうさなあ……もう死ぬって決まるとなあ……悔しいが今からケンシロウを追いかけて最後の決戦を挑んでも結果は見えてるしなあ……飛騨高山……いいところだったな。核攻撃を受けてないといいな」

外に出たジャギはバイクに跨った。

ドルウウン!

「最後のドライブだ。行くぜ」

(はい)

二人は関東平野を走り抜け、山梨県、長野県を駆けた。日付が変わり、長野県に入ると日本アルプスが見える。

(この世界でも山脈はキレイですね。雪が降り積もって)

「そうだな。雪化粧した山脈が人生のエンディングみてえだ」

(小川の水もキレイ……雪解け水が、すごく透明で……放射能さえ、なければ)

雪解け水が小川になっているけれど、周囲に植物はない。山脈も美しいけれど、森林限界以下の高度でも緑がない。強い放射性物質の存在を示していた。

「人にも出会わねえってことは、このあたりは住めねえ、移動もできねえ、つてくらい放射能がきついんだろ。オレらも3日の命じやなきや、通ろうって気にならないほどにな」

(それって変じゃないですか?)

「どこが?」

(核攻撃による放射線は7の法則で最初の49時間で100分の1になるはずなのに)

「ふーん……そういえば、避難したとき、そんな放送があったなあ」

(核戦争から、ずいぶん経つはずなのに、植物も生えないなんて……どうして)

「それは、お前、あれだよ。核の冬とか、なんとか。あと、このあたりに原発があつたんじやないか。そこにミサイル来てたら、しつこく放射能あるだろ」

(岐阜も、福井の原発が、すぐそこに……日本一の原発銀座だったから)

「まあ、風向きによってはヤバいかもなあ」

二人の不安は的中して飛騨地方に入ってから植物は生えておらず、生命の気配はなかった。

「あの婆アは生きてりや、今、いくつだ?」

(えつと……今が1997年だとすれば、お婆ちゃんは66才かな)

「婆アは婆アだなあ。四葉のオカンは？」

（お母さんは……26才だと思う）

「26才か、年頃だな。生きてるといいな」

（……………）

「黙り込むんじやねえよ。何か喋ってる。暗くなるだろ」

（年頃って何よ。エッチなこと考えてない？）

「沙耶香も可愛かったけど、お前は肉付きが足りないな。オレは、もう少しグラマーなのがいいんだ。しっかり成長した感じの女がよ。こうハイヒールが似合ってそうな脚でミニスカだよ。肩とか露出していると最高だな。髪もボリュームがあるのがいいな。ちよつと染めてくるくらいの。お前らの学校、ホントみんな黒髪ばっかだったな。本当に未来か？　すげえ保守的だったな」

（東京とド田舎の違いだと思うよ、たぶん）

色々なことを二人で話ながら、とうとう糸守町に到着した。町に核攻撃はなかった様子なのに誰一人いない。建物も半壊しているものばかりだった。

「誰もいねえな」

（うん……予想はしてたけど……やっぱり福井の原発のせいみたい。かなりの放射能汚染があつて建物もボロボロになってる）

「原発は攻撃目標になったからな。まあ、仕方ねえよ」

（都心だから危険、田舎だから安全なんて、核戦争に関係ない。どこもかしこも傷だらけ）

「泣いても、待っても、はじまらねえな」

（使用済み燃料まで最終処分せずに、いつまでも施設内においておくから爆撃されて舞い上がって。戦争を想定してない安全基準に何の意味があるの……）

「お前、いろいろ勉強してんなあ」

ジャギが感心しているのか、あきれているのか、半分半分で言ったとき、バイクの燃料が切れた。

「ここからは徒歩だな。あれ、四葉の家じゃないのか？」

（ううん、あれは隕石が落ちた後の仮住まいで、本当の家は、こっち）

「この町は、いろいろ大変なんだな」

(その危機はお姉ちゃんが見つけたから………ここが私の家)

宮水神社と宮水家に到着した。やはり半壊しているし、緑溢れる土地柄だったのに草一本生えていない。

(……………)

「入るのは、やめておくか?」

(ううん、見ておく。知っておくべきだと思うから)

「そうか。じゃあ、お邪魔するぜえ」

宮水家に入ってみる。家屋は雨戸がすべて閉じられ、玄関や窓にガムテープを貼った後があるけれど、もう剥がれていてボロボロになっている。戸も壊れていた。中に入ると見覚えのある間取りで、すぐに居間を見た。

「まあ、こうなるはな」

(予想通りね……)

「あんまり気落ちするなよ。予想してたことだ」

(うん)

居間には白骨化した遺体が2つ、寄り添うように並んでいた。体格から一葉と二葉だとわかる。死んでからも肉は腐らず、ミイラ化して、肉がボロボロになって白骨化したような様子で、死ぬ前に全身から出血していたのが、畳に残るシミで伝わってくる。

「避難する場所もなく、家の中で死の灰をやり過ぎそうとしたんだろ
う」

(核戦争があったのが、1992年だとしたら、お母さんは21才)

「それから5年ほどか」

(っ?!)

ずつと身体を動かす主導権をジャギに任せていた四葉が何かを見つけて柱に駆け寄り、手で擦った。そこには包丁で刻み記した文字があった。

「(ココハ…ホウシャセン…ツヨイ…ハヤク…イキナサイ…四葉)」

二葉が書き残したメッセージだった。

「……うつつ……お母さん……うつつ……、泣くなよ、オレの身体でよお、オレが泣いてるみたいだろ、バカ野郎……ぐすつ……」

溢れてきた涙をジャギが拭った。

(ジャギさん、もう目的地へ急ぎましよう)

「そうだな、もう身体がもたねえ」

涙には血が混じっていたし、口の中も血の味がする。これが新血愁によるものなのか、放射線によるものかは、すでにどうでもいい。残り時間が少ないことだけは確かだった。宮水家を出ると、早歩きになり、ご神体のある山地へ向かい、駆けた。

「ハア……ハア……ぺっ！……ここか？」

血の混じった唾を吐いて、ジャギが問い、四葉が答える。

(はい、この巨石の中なの)

巨石の奥へ進むと、そこに奉納された口噛み酒があった。

「意外と、ボロボロじゃねえな」

封印は数年を経て古ぼけているけれど、町の荒廃に比べると放射線の影響は少ないようで形を保っていた。

(そっか……この御石様が放射線から守ってください……)

「なるほど、こんだけぶ厚い石ならシエルター並みかもな」

ジャギが口噛み酒を手に取り封印を解いた。

「これを飲めばいいんだな？」

(はい、お願いします)

「酒か……オレは下戸だからな。まあ、もう、どうでもいいが」

そう言つてジャギが二葉が造った口噛み酒を飲んだ。

「……もう味は感じないな……オレの舌がダメになつてやがるのか……」

(お母さん……お願い……)

「………何も起こらねえな」

(………ごめんなさい、ジャギさん……)

「いや、もう期待してなかったからいいぜ」

ジャギは外に出る。もう新血愁を突かれてから3日が過ぎようとしている。

「ダルいし、痛いし、もうダメだな」

(はい……すみません。無駄足をさせて)

「もう、いいって言ってるだろ。ぐっ……」

バフオツ!

ジャギの右肩が血を噴き出し、棘のついた肩パットが飛んでいく。

「痛てえな……クソ……」

(はい、痛いっ……ものすごく……これが北斗神拳……)

「オレ様の死に場所……ちようど、墓石にいいかもな」

そう言ってジャギは巨石の上に登り、寝転がった。

「痛てえ……この痛みとも、あと少しで、おさらばよ……」

ジャギがマスクを取り去り、左前頭部を撫でた。

(とても痛い……苦しい……寒気がするのに熱い……)

「ああ、そんな感じだな……」

(これが北斗神拳で殺される人の……ううっくう……最悪の痛み

……、核兵器も、北斗神拳も、本当に最悪の存在……)

「そうだな、そうかもな……なんで、オレ、こんな拳法、はじめたんだっ

け。ああ、そうか、家が貧乏でクソリユウケンとこ養子にやられて

……ああ、やばい、走馬燈きた」

ジャギが天へ手をかざした。

「死兆星が見えやがるぜ。あんなに、はつきりと」

(死兆……ううっ!)

「ぐあああ!!」

(ああああ……痛い、痛い……)

「痛てえな……クソ……けど、よお、四葉……お前といっしょで、よ

かったぜ。なんか、痛み、半分って気もするからよ」

(半分……ジャギさん……あぐっ?!)

「あくおっ!」

ジャギの全身から血が噴き出していく。

「(うわあああああ!!)」

いっしょに絶叫し、そして肉体が飛び散る。

「(ばわっ!!)」

血と肉片が巨石の上に拡がった。

(……………)

ふわりと四葉は意識が上へ登るのを感じた。

(……………ジャギさんは……………)

四葉は半透明のジャギを見つけて、手を握り、そして手を引いた。

ジャギは布団の中で目を覚ました。

「……………なんか悪い夢だった気がする……………けど、女も出てきたような」

寝返りをうち、身体の痛みを思い出した。

「痛てえ、リュウケンめ。あんな突きをくれやがって」

起き上がって状況を思い出した。訓練中に突きを受け、気絶して寝ていたのだった。

「クソ……………」

洗面台で顔を洗って、鏡を見た。

「……………オレ様の顔……………」

一瞬だけ、左前頭部が秘孔を突かれて破裂しかかった顔を見たような気がする。

「クソ、頭も打ってるのかもな」

「ジャギ兄さん」

ケンシロウが声をかけてきた。

「大丈夫ですか？ ひどく魘されていましたが」

「ケンシロウ、てめえ!!」

ジャギはケンシロウの胸倉をつかむ。

「てめえ……………てめえ、何だっけ……………なんか、すごくケンシロウがムカつく気がしたんだが……………何だったか……………」

「勘弁してくださいよ」

「……………。貴様、なぜ、ここにいる?!」

「夕飯が、できたこと伝えに来ただけです」

「そ……そうか……飯か…」

ジャギは手を離れた。部屋を出て食堂に向かいつつ問う。

「おい、ケンシロウ、今年は何年だ？」

「え……さあ、あまり、そういうことを気にしないので、すみません」

二人で食堂に入ると、トキとラオウ、リュウケンもいた。

「兄者、今年は何年なんだ？」

「……」

ラオウが無視して食べ始め、トキが答えてくれる。

「元年と呼ばれるだろうね」

「がんねん？」

「1年ということだよ、ジャギ」

「1年、2001年なのか？」

「ジャギ……さきほど、ひどく頭を打ったようですね」

「ジャギ兄さん、かなり魔されていましたよ」

「そんなことはいいから、今は何年なのか、教えてくれ！」

「今年が平成元年となるよ」

「平成……西暦でいうと？」

「1989年です」

「1989年……」

「いったい、どうしたというのです？」

「あ……いや……何だっけ……」

ジャギは頭を撫でながら着席した。テーブルには大きな丼が置いてある。

「ケンシロウ、お前、またこれか」

「すみません。時間がなくて」

「けっ、まあいい」

ジャギは丼を食べ始めた。

「このよオ、魚肉ソーセージ丼よオ、安っぽい味だよなあ。テキトーに切った魚肉ソーセージとよ、卵とタマネギで親子丼みたいにしてよオ、ほんの少し鰹節がかかってよオ。飛騨牛コロツケとはいわねえ

「からよオ、もう少しなんとかならねえのかよ」

文句を言いながら食べるジャギの両頬が涙で濡れた。

「ジャギ兄さん、どうして泣いているのですか？」

「ああん？」

言われて頬に触れてから気づいた。

「オレ様が……なぜ……」

トキが心配そうに見てくる。

「さきほどの模擬戦で、秘孔に影響があったのかもしれない。食事が終わったら私の部屋に来なさい」

「お……おう」

ジャギは食事が終わるとトキとラオウの部屋に入った。部屋にいたのはトキだけでラオウの姿はない。

「ラオウ兄者は？」

「筋トレの続きをしているよ」

「頑張るなあ……」

「そこに座りなさい」

トキが指した椅子に座った。

「こちらを見て」

ジャギは素直にトキと目を合わせる。

「……うむ、とくに異常はないようだ。秘孔の影響も見られない」

「そうか。よかったぜ」

「だが、今夜は早めに休みなさい」

「あいよ」

ジャギは言われたとおり、早めに寝て、いつも通りに起きた。

「……夢だったのか……変な夢だった」

「ジャギ兄さん、夕べも魘されていましたよ」

二段ベッドの上にいるケンシロウが眠そうな目で教えてくれる。

「かなり大声で何度も……おかげで、眠れなかった」

「オレは何か言っていたか？」

「えーつと……四葉、とかなんとか」

「四葉……そう……四葉……って何だっけなあ……」

もう記憶が曖昧でわからない。けれども一週間同じような夢を見たジャギは再びトキに診てもらおう。

「ほう、毎晩、同じような夢を」

「ああ、これっくらいの小せえ女だ。そいつが何度も何度も、何かをお願いしてきやがる」

「どんなことを？」

「いや、それを忘れちゃうんだ。かなり大切なことみてえで泣いて頼みやがる」

「なるほど」

一通りにジャギを診たトキは優しく頷き、義弟の両肩に触れた。

「ジャギ、それは愛というものだ。この病は私には治せない」

「……」。そ、そうか？ 違うような気がするぜ、トキ兄者。ケンシロウといっしょにするなよ。あいつ、毎晩、ユリアに手紙を書いてから寝てやがるんだぜ」

「うむ、ともかく身体に異常はないよ。どうしても気になるなら起きた直後にでも夢の内容をメモしてはどうだろう？ 枕元に紙とペンを置いておくといい」

「メモねえ……」

ジャギは半信半疑だったけれど、部屋に戻るとケンシロウが手紙を書いていたので命じる。

「おい、オレ様にも紙とペンをよこせ」

「はい、どうぞ。誰かに手紙を書くのですか？」

「余計なことは気にしなくていいんだ！」

とりあえず秘孔を外して蹴りを入れた。

「ううっ……、もしかして、四葉さんにですか？ ……」

ケンシロウが探るような瞳でジャギを見てくる。

「なんだ、その目は?! それが兄に対する弟の目か?!」

もう一発殴ると詮索を止めて静かになった。

「ったく」

ジャギは二段ベッドの下へ潜り込むと、トレーニングで疲れた身体

を休めた。翌朝、ジャギは見慣れない字で書かれたメモを見た。びつしりと細かい字で用紙いっぱいに書かれている。それを読み終わったジャギは立ち上がった。

「……………」

荷物をまとめているとケンシロウが起きる。夕べも眠れなかったように眠そうな目をしていた。

「ジャギ兄さん、どこかへ？」

「少し行くところがある。必ず戻ると兄者やオヤジたちに伝えておいてくれ」

「わかりました。……四葉さんのところですか？」

「……………」

ジャギが視線を送るとケンシロウは防御の構えをとる。

「似たようなものだが、違う。じゃあ、オヤジたちによるしくな」

ジャギは義弟の頭をポンポンと叩いた。

「ケンシロウ、お前は、その甘い感じがいい。今まで、けっこう何発も蹴ったり殴ったりして、すまなかつたな。じゃ」

「ジャギ兄さん……………」

ケンシロウを置いてジャギは出発した。

五ヶ月後、ジャギはビジネスホテルの一室でテレビを見ていた。テレビはニュースを伝えている。

「米戦艦アイオワの砲塔爆発事故で乗組員47人が死亡した件で当局は乗組員の一人が自殺をはかるため爆発物を仕掛けたのが原因と発表しました。続いて、アフガニスタンからソ連軍が撤退を完了したニュースです。9年あまりにおよぶソ連の軍事介入からボリス・グロモフ駐留軍司令官が最後の部隊を率いてアフガンとの国境を流れるアマダリア川にかかる友好の橋を渡り撤退いたしました。ソ連軍の介入は79年から10万3000人の兵力を常時投入、アフガン政府軍と協力してムジャヒディン・ゲリラと戦闘、約1万5000人の戦死者を出したほか、アフガン市民を含めた9年間の死者は100万人をこえるもようです」

ジャギはベッドで寝返りを打った。

「四葉、これで、お前の狙い通りなのか……オレには、さっぱりだ」

「またカンボジア領内に侵攻していたベトナム軍の残存部隊2万6000人が撤退を開始し、78年以来10年にわたるカンボジア侵攻に終止符がうたれるとのことです」

「さてと、そろそろ帰らねえとリュウケンに殺されるな」

ジャギは潜伏していたビジネスホテルを出ると、まっすぐに八王子の寺院へ戻った。中に入るとリュウケンとトキがいた。

「どこへ行っておった。この愚か者が」

「ジャギ、どこへ行っていたのです？」

「どこだろうと、オレが破門になることに、かわりはねえんだろ？」

「……………」

トキが厳しい目で質問してくる。

「ジャギ、よもや、遁走中に北斗神拳による暗殺を行ってはいまいな？」

「ああ、掟は破ってねえよ」

ジャギは平然とウソをついた。四葉の依頼を受けて政府の高官、大企業家、ロケット技術者を3人、自殺や事故にみせかけて殺していた。ただ、ジャギとは無関係の人間で、金銭の動きもない、バレるはずがないと堂々としている。

「オヤジ、もう伝承者は決まったのか？」

「決めた」

リュウケンが答え、ジャギが頷いた。

「やっぱり、ラオウ兄者か」

「いや、トキに決めておる」

「つ……歴史が……揺らいでやがるのか……」

「今の世にラオウでは激しすぎる。ケンシロウでは甘すぎる。トキが、ちょうどよいのだ」

「そうかい」

「北斗神拳伝承の掟により、ジャギ、貴様は北斗神拳に関する記憶を消

すことに同意するか、でなければ拳をつぶすか、また北斗を名乗ることも許されん」

「ケンシロウとラオウ兄者は、どうした？」

トキが答える。

「ケンシロウは記憶を消すことに同意してくれたよ。ラオウは……姿を消してしまった」

「そうか……」

「ジャギ、私はお前と戦いたくはない」

「トキ兄者なら、そういうだろうな。ああ、オレも記憶を消す方で頼む。名も……ケンシロウは、どうした？」

「田中ケンシロウとしている」

「……田中……オレは、どうなるんだ？」

「山田か、それとも希望があれば多少は融通する」

「山田もイヤだなあ……うくん……宮水もオレには似合わねえし……飛騨も画数が多くて書くとき面倒だな。そうだ、高山というのはどうだ？」

「高山ジャギか。お前が、それでよければ、そうしよう」

「ああ、頼む」

「では、ジャギ、こちらへ」

トキが促し、ジャギが近づく。

「今から北斗神拳に関する記憶を奪う。頭の中で北斗神拳に関することをすべて考え、思い浮かべるようにしなさい。うまくいけば一度で済みますが、失敗すれば完全に消えるまで何度も突くことになる。下手をすると、ジャギ、自分が自分であることも忘れてしまう。だから、素直に北斗神拳に関する記憶を消すと念じなさい」

「ああ、わかった」

ジャギが目を閉じるとトキが秘孔を突く。

「むんー！」

ジャギの側頭部を4本の指で突いた。

「ぐっ……」

「ジャギ、どうですか？」

「どうと言われても……痛かった……」

「構えてみなさい。戦いの構え、お前の得意な攻撃で」

「オレの………」

ジャギが構えをとる。それはケンカのような構えだった。

「蹴つてきなさい」

「いいのか？ トキ兄者」

「さあ」

「……おら!!」

ごく普通の蹴りだった。

「うむ。秘孔というものを知っていますか？」

「非行？ タバコを吸ったりとかか？」

「一度で済んだようです」

トキがホツとしたようにリュウケンを見て、リュウケンも頷いた。

「で、これからオレは、どうすればいい？ なんか、いろいろ大事なことを忘れちゃった気がするんだが」

「私は、この寺院を守る傍らで整体院を開設するつもりです。この世には病に悩む人間がなん千なん万という。そんな人たちの役に立てたら、と」

「で…」

「そこで受付を募集しているのですが、ケンシロウといっしょに働く気はありませんか？」

「ねえな。くだらねえ」

「そうになると、支度金と新しい高山姓の住民票を渡しますので、ここから出て行っていただくことになります」

「おう。それがいい」

「わかりました」

トキが義弟の進路相談を終え、リュウケンが懐から出した封筒をジャギに渡した。

「ジャギ、これまで…」

「あばよ」

ジャギはリュウケンの別れの言葉を聞かず、背中を向けた。寺院を出て八王子の街を歩く。とりあえず、封筒を開けてみた。

「……一万円かよ……リュウケンめ……」

文句を言いながらトンカツ店に入り、食事を摂る。

「トンカツ定食大盛り、お待ちどう」

「ようやく、あの魚肉ソーセージ井とも、おさらばだな」

ジャギは美味そうにトンカツを頬張り、食事を終えると爪楊枝を使う。

「……………」

爪楊枝を使っでいて、ふと思いついた。

「プッー」

勢いよく爪楊枝を噴き出した。狙い通りに飛び、紙ナプキンに刺さった。

「うむ、3本くらいでもいけるかも」

今度は3本の爪楊枝を口に入れる。

「プププッー」

狙い通りには飛んだけれど、1本がテーブルに当たり、どこかへ飛んでいった。

「オレ、こんな特技があるんだな。これは使えそうだ」

とりあえず爪楊枝を10本ほどポケットに入れておく。ジャギが伝票を持って立ち上がったときだった。

「店員さん、この味噌汁に爪楊枝、入ってるんすけど」

男子高校生が店員にクレームをつけている。

「あらあら、ごめんよ。どっから入ったのかねえ。すぐ交換するね。あと今日はね、タダでいいから許しとくれよ」

「え？ ヤッターア！ マジで?! おばちゃん、サンキューー！」

「これに懲りずに、また来とくれよ」

「兄貴、ラッキーっすね！」

「ついでな、今日ー！」

男子高校生が後輩と喜んでいる。ジャギは自分のせいかな、と思っただけで黙ってレジの前に立つ。

「おあいそ」

「あいよ」

支払いを済ませると所持金が8320円になった。再び爪楊枝を咥えつつ街を歩く。

「これから、どうするかな……岐阜でも行くか……って、なんで、オレ、岐阜なんかに興味があるんだ……あんなド田舎……しかも、この金じゃ、もう行けねえだろ」

目的地も今夜の泊まるあてもなく歩いていて、ふとプロレスのポスターが目にとまった。見てみれば、ちょうどプロレスジムの前だった。

「プッー」

爪楊枝を嘔くと、ポスターに突き刺さる。

「……………オレ、意外と鍛えてるな……何してたんだっけ……」

自分の腕を見ると、かなり太い。胸筋も腹筋もキレている。

「寮あり、飯つきか……やってみるか」

ジャギはジムの入口へと進んでいった。

五年後の1994年、ジャギは高級ホテルのスイートルームで、お気に入りのキャバ嬢たちとノンアルコールのシャンパンを開けていた。

「乾杯だー！」

自分の勝利を祝いながら、今夜の試合の録画を大型ブラウン管テレビで見ている。

「さあ、はじまりました。注目の一戦！ 高山ジャギVS馬場ジード、総合格闘技界のトップを決める一戦、プロレスから転向してきたジャギ選手と、対するはボクシングからのジード選手。この二人、どうでしょう」

「ジャギ選手はプロレス時代、相当に卑怯な勝ち方をしてきましたからね。含み針のジャギという異名もあるほど。ですが、総合格闘技に入るにあたって、そういった卑怯技を封印して、ごくまっとうな戦い方に変化しているようですから、これは、わかりませんよ」

「このジャギ選手ですが、プロレス以前は、どこに所属していたか不明でありながら相当な力量があったとのことですね」

もう終わった試合なので、それほど真剣に見ていない。キャバ嬢たちと談笑しながら、乳房を揉んでいると、1ラウンドで試合終了となり、テレビのチャンネルを変えた。

「3日前に落馬事故で亡くなったと報道されました北海道すすきのクラブ・ユダに所属していた人気DJラオウこと北斗ラオウさんの死因について、北海道警察は遺体に殴り合った後などの闘争痕跡が見受けられたことから、詳しく調べ、東京八王子の整体院経営、北斗トキ容疑者を全国に指名手配しました。二人は養親からの相続で以前から争っており、事件当日にJR北海道から東京八王子駅まで移動する北斗トキ容疑者が、複数の監視カメラで確認されており、また殴られたものとみられる打撲傷や出血もカメラに映っており、警察では殴り合いの末にラオウさんを殺害、その後、落馬事故にみせかけて逃走したものとみて、手配しています」

「……兄者たち……」

ジャギがテレビに見入っていると、手下の一人が声をかけてくる。

「ジャギ様、お電話が入っております」

「おう」

ジャギは300グラムほどの携帯電話を受け取ると、発信元が公衆電話からだったけれど、すぐに出た。

「オレだ」

「ジャギか……私だ。テレビは見たか？」

トキの声だった。

「ああ、たった今」

「そうか……私は伝承者として大きな過ちをおかしてしまったのかもしれない」

「伝承者？　って、何の？　あの寺のか？」

「ああ、そうか、そうだった。そうだったな。ジャギ、私は警察へ行く前に、お前に会っておかねばならない」

「おう、いい弁護士を紹介するぜ」

「いや、そういうことではなく、とにかく会って話そう。二人きりで」

「……わかった」

ジャギは電話を終えると、トキが指定した埼玉県の山寺へ向かった。行ってみると寺は無人で夜中なので暗い。

「兄者アア！ いるかあ！」

ジャギが大声で呼ぶと、気配もなく無から生じたようにトキが現れた。

「うわっ?! ビビった。急に足音もなく……」

「これは無想転生、哀しみを知った者のみ体得できうる北斗神拳の究極奥義だ」

「ほくとしんけん？」

「今からジャギ、お前の記憶を戻す」

「記憶を……？ たしかに、オレには、なにか、忘れちゃいけないことを忘れてるような、そんな感じはあるが……」

「ジャギ、私を信じ、目を閉じて、忘れていることを、大切なことを思い出す気持ちを頭にめぐらせ、念じていてくれ」

「……わかった。兄者は触れるだけで人を治したりするからな、まあ、信じるぜ」

ジャギが目を閉じるとトキは指先で頭部を突いた。

「……………っ……………四葉……………ケンシロウ……………、そうか……………そんな世界も……………」

ジャギが深い哀しみを瞳に宿した。

「兄者……………すべて思い出したぜ。すべて、な」

「そうか。では、これより北斗神拳の伝承者のみに知らされている秘孔と奥義を伝授したのち、お前が私の記憶を封じよ。そして、私を警察に」

「……………わかった。意外と便利に記憶を封じたり、戻したりできるんだな」

「北斗神拳の歴史は2000年、一子相伝、ある程度のバックアップが

なければ、続かなかったことでしょう」

「それも、そうだな」

夜明けまでトキと過ごしたジャギは埼玉県警に義兄と出頭すると翌日、岐阜県飛田高山の糸守町へ新幹線で向かった。迷うことなく宮水家を訪ねてみた。

「すいません、ここに、宮水二葉って人、いますか？」

「こんにちは」

二葉が待っていたように庭で出迎えてくれる。まだ23才のうら若い女性で、よく四葉に似ていた。

「私が四葉の母です」

「そうか……あんた……未来がわかるんだな。オレが今日、ここに来ることも」

「すべてではありませんが、ある程度わかります」

「じゃあ……自分が……」

「自分の寿命のことも知っています」

「……少し身体を診せてくれないか」

「ありがとうございます、でも、無駄です」

二葉は礼を言い、無駄とも言いつつも、ブラウスを脱いで上半身を見せてくれた。しばらく診てジャギが詫びる。

「……すまねえ……オレには何もできねえ。たぶん、トキ兄者でも」

「ご厚意は感謝しますよ」

そう言いながら二葉がブラウスを直していると、俊樹が家から出てきて驚いた。

「二葉?! その男は?!」

「お客様です。大切な」

「いや、でも、お前、今、服を……」

俊樹は35才にしては、少し老けた顔で新妻が見知らぬ男に肌を見せていたことを詰問しようとしたけれど、ジャギと目があって、おそろしく体格が立派なので穏便に済ませることにする。

「……こんにちは」

「ああ、こんにちは。えっと、町長の旦那だっけ……」

「は？ 私は学者ですが」

「ジャギさん」

二葉が少し怒った顔で見つめてくる。

「ああ、そうか……そうだな……黙ってなきや……」

「あなたにお願いがあります」

「お、おう！ 何でも言ってくれ！」

「今から26年後……」

二葉は話しかけて俊樹の視線に気づいて告げる。

「俊樹は少し離れていて。私たちの声が聞こえないくらいの距離に」

「……けど……二葉……」

さつきまで肌を見せていた新妻と見知らぬ男が密談をすることに強い抵抗を覚える俊樹だったけれど、二葉は容赦ない。

「離れていて。あと、ジャギさんとの話の次には、俊樹とも大切な話があるから、どこにも行かないで待っていて」

「……わかった」

俊樹が離れていくと、二葉は話を再開する。

「今から26年後の2020年10月18日、この町の病院に入院して3日目になる四葉の意識が戻るよう北斗神拳で刺激を与えてください」

「わかった。……あなたは北斗神拳のことまで、知ってるのか……」

「リュウケンさんには何度か、暗殺を依頼したことがあります。安くないので大変でしたが」

「……そんな顔して殺したいヤツがいたのか……」

「1万人を助けるために一人なら、初歩的なマキャベリズムです」

「……まあ、そうかもな……四葉は、たった3人で億単位だった。天使様みたいなもんだ」

「私たち宮水の巫女は半神半人です。半分は人、半分は神、人として心が痛みもしますが、報いは寿命の半減で受けてもいます」

「そうだな……えっと、10月18日だったな」

ジャギは忘れないようにメモをする。メモが終わると、二葉は糸守

町の観光マップを差し出した。

「キャバクラはありませんが、キレイな水なら、たっぷりありますよ」

「そいつはいい」

「あとで案内します」

そう言っつてジャギと別れると、二葉は俊樹を呼ぶ。

「俊樹」

「ボクに話っつていうのは？」

「次の次にある町長選挙に立候補して町長になっつて」

「は？」

「今から近所に愛想良くしたり、子供ができたらPTAの役員とかも積極的に引き受けておいて」

「いやいや意味不明なんだけど！ ボク、学者だよ！ 民俗学者！

二葉も知っつてるよね?! 政治学、経済学とかじゃない、民俗学だよ！」

「私と婚約したとき、言っつたよね。理由は説明しない。ただ実行しっつて」

「けどさ、民俗学からっつて進路として無茶だよ……」

「それはそれで役に立っつから、とにかく準備しておいて」

「………どんな役に立っつんだよ？」

「俊樹に権力がある方が、私たちの子供に役立っつでしょ」

「………それっつて子供が間違っつた風に育たない？」

「いいことになっしか使われないはずよ。たとえ周囲が理解しっつてくれなくっつても、胸をはっつて生きられる子に」

「………わかつつたよ………町長っつて………ヤダなあ。責任重そうだし………しがらみとか、面倒そう………学者のままがよかつつたなあ………」

ぼやいてる夫を置いて二葉は、せっつかく訪ねてくれたジャギを歓迎するのために飛騨牛コロツケが美味しい店を教えに行っつた。

第7話

2020年10月18日の夕方、市町村合併の是非を問う糸守町町議会議員選挙の投票日に、三葉は夫の勅使河原克彦と選挙事務所に行った。事務所は普段は農業倉庫になっているけれど、俊樹が町長選挙のさいに使うこともあって選挙事務所としての立派さは他の候補をしのいでいる。多数のパイプ椅子が並び支持者と運動員が談話しつつ時間を過ごしている。テーブルには本来は公職選挙法違反の疑いもたれる寿司の出前やヤカンに入ってお茶のようにカモフラージュされている酒もあり、すでに軽い飲み会の雰囲気になっていた。

「……………」

ひな壇の上に置かれたパイプ椅子には三葉と克彦が座っていて、まるで結婚式を思い出すような位置関係だったけれど、これが結婚式ではないのは背後が金屏風ではなく、必勝と書かれた応援メッセージと三葉の笑顔を撮って修正加工もした選挙ポスターが並び、片目のダルマが鎮座していることで痛いほどわかるのに、それでもやっぱり町民たちは結婚式のことを思い出してヒソヒソと会話している。話題は東京で結婚式をあげた四人が、すぐに離婚してしまい、今は三葉と克彦が夫婦となっていることで、これまで何度も何度も世間話の話題になったことだった。町の人間全員が三葉と早耶香、克彦の三人が子供の頃から仲が良かったことを知っているし、不倫のことも知っている。

「あと一時間か」

俊樹が腕時計を見てつぶやいた。夜8時で投票は終わり即日開票となる。人口の少ない町なので1時間もなく当確が出るはずで、定数7に対して8人が立候補し、うち三葉を含む4人が合併に反対、残り4人が賛成という、まさに町を割る選挙だった。事前の予想では合併反対が8割を超えるものの、三葉の不倫や俊樹の多選に対する批判票と選挙運動中の入院などの不安要素が大きくなっている。

「長い一日やな……………」

克彦が居心地悪そうにパイプ椅子から立ち上がり、やや離れたところにいる俊樹に近づいて耳元で問う。

「お義父さん、ずいぶん豪華な寿司が並んでるけど、腐敗や言われんでしょうか」

「それは大丈夫なはずだよ。他の候補もやっていることだから。三葉だけ吊し上げるわけにはいかないから、問題にすれば、すべての候補が選挙違反ということになる」

「…………それを腐敗、言いませんか？ 何年前か前、富山県の議員もえらいことなつて、辞職の連発でしたやん。ヤカンの中、お酒なんですよ？」

「うむ、あれは誰かが勝手に持ち込んだもので、私たちは感知していない。持ち物検査をしているわけではないからね」

「えええ…………裏で、オカアが日本酒を入れてるの見たんですけど」
「見間違ひ、記憶違いだと思いなさい。田舎の選挙とは、こういうものなのです。胸を張って堂々としていれば大丈夫」

俊樹の表情は穏やかなのに目が怖いので克彦は黙ることにした。克彦がパイプ椅子に戻ると、動いたことで町民たちの話題も克彦のことになる。

「テッシー、お前、なんで、そんなボロボロなん？ 夫婦喧嘩でもしたんか？」

かつての同級生が笑いながら訊いてくる。克彦は顔や腕、全身にアザがあり、どう見ても殴られたり蹴られたりしたような様子で絆創膏などを貼っていた。

「階段で転んだだけや」

本当は4日前の朝、登校中だった四葉とすれ違ったささい、眉毛が気に入らないという理由でタコ殴りにされたのだったけれど隠している。ただ、すれ違っただけなのに四葉は、貴様のその眉毛が弟に似ている……と忌々しげに言ってきた。義妹から弟に似ていると言われて、何が何だかわからないうちに立てなくなるほど打ちのめされていた。むしろ、克彦と司は兄弟なので顔は似ているけれど、眉毛だけは違うというくらいで、太い眉の克彦と細めの司は有名だったのに四葉は

蹴ってきた。克彦は蹴られながら、たぶん三葉と不倫の末に再婚したことが気に入らないのだと解釈して誰にも被害は訴えていない。克彦の反応が面白くないので町民たちの話題は別のことへ移る。

「それはそうと最近、四葉ちゃんの様子おかしなかつたかいな」

「しーっ…3日前から入院しようよ。意識不明やて」

「あれま？ 入院しようとは三葉先生の方やないとか？ 今は座ってはるけど、やつれてはるし。選挙ちゅーんはプレッシャーなんやねえ」

「やつれはつて高校生やったころみたいにシユーとしてはるね。この前までは、ちよつと太りすぎやったけん選挙ポスターも修正されとるけど、今なら無修正で絵になるわ」

町民たちはヒソヒソと話しているつもりだけれど、なんとなく何を言われているか、三葉たちの耳にも響いている。

「三葉先生、いつときは危篤やてドクターへリが来とつたらしいよ」

「ああ、あのときのへリ」

「ほんで、次は四葉ちゃんが入院て、かわいそうにねえ。お母さんも早かったし。家系なんかねえ」

「いやいや一葉さんはピンシヤンしてはるし。そういや一葉さん、やつぱり事務所に顔だしはらへんね。町長選のときも知らん顔しはるし」

「四葉ちゃんも姉ちゃんの立候補が気に入らん顔してはつたらしいよ。えらい荒れてたて」

「まあ、高校生ちゅーんは、そんなもんじやろ。三葉先生かて、その時期はツンとしてはつたし」

「四葉ちゃんの荒れようは、ひどいらしいて。男の子とまでケンカしたり、うちの子が言うてたけど、授業中も机に足あげて教師を睨んでたて」

「あの子て、学年トップやんね」

「勅使河原さんこの司くとトップ争いしとうくらい賢い子ね」

「よっほど、姉ちゃんの立候補が気に入らんかねえ」

「立候補だけやのうて、不倫ちゅーのが若い女の子には許せんやろ。」

「気難しい時期やもん」

「いやいや、ここだけの話、うちの爺さんが見よつたんやけど、糸守神社で、その司くんと四葉ちゃんがチヨメチヨメしとうたらしいで」

「チヨメチヨメか？」

「チヨメチヨメや、神社で」

「ええのお、巫女さんとかあ」

「あんだ、なにアホなこと言うてんのー！」

少しでも面白い話題は、すぐに町全体に広まる。こんな風が集まって時間をつぶすことしかできないときは、とくにだった。

「……………」

三葉は黙って前を見ている。今は選挙の結果より、四葉の容態が気にかかる。息をしなくなった妹へがむしやらに人工呼吸したおかげなのか、すぐに自発呼吸は取り戻してくれたけれど、いまだ意識は戻らない。もう3日になる。入れ替わりのようなものなら、せめて24時間で回復してくれるかと期待したけれど、2日目になっても、3日目になっても呼びかけても、頬を撫でても起きてくれない。当初、何かと戦っているかのように手足をバタつかせて殴ったり蹴ったり掌打を放つような動作がみられたけれど、今は手足に力はなく、ぐったりと動かなくなっている。

「……………四葉……」

毎日、少しは見に行っているけれど、選挙期間中ということもあって一葉と沙耶香、司が見ていてくれる。今も見に行きたい気持ちを耐えて座っている。そして、もう一つ、駆けつけたいところがあった。

「……………サヤチン……」

謝りたい。謝りに行きたい。高校時代に入れ替わった男性と東京で再会した日、感極まってキスをして、キスをするうちにお互いの服を乱し合って、路上で性交しかけていたところを通りがかりの女子高生に笑われて、最寄りのラブホテルで交わった。その日のうちに結婚しようと言い合って式場巡りもしたけれど、東京の素敵な式場は予約が埋まるのが早くて見つからなかった。そんなとき、すでに予約して

いた克彦と早耶香が、いっしょに挙げないかと提案してくれた。二人も占いでは来年に延ばした方がいいと言われたらしいけれど、東京のせわしなさや冷たさ、それぞれに部屋を賃貸する家賃の高さに疲れていたこともあって早めていた。四人で最高に幸せな結婚式をして、その翌日に克彦と早耶香はハワイへ発つたけれど、三葉たちはパスポートが間に合わず、予算的にも厳しかったので、来年行こうね、と約束して、それぞれの会社へ出勤した。そして三葉は寿退職する都合もあって帰りが遅くなり、10時過ぎに新居へ戻ったら、タバコの匂いがした。あえて質問はしなかった。けれども翌週にも同じことがあって追求するとミキが遊びに來ただけだと開き直られた。その後記憶は、あまりない。日に日に険悪になっていく夫婦関係と生活リズムや習慣の違い、ろくに交際期間もなく同居を始めたので、すぐに二人とも口をきかなくなった。必要なことは朝夕にメモを残して伝え、入れ替わっていた時よりも意思疎通しなくなった。最後のメモは乱暴な字で、出て行け、と書かれていて返事は書かずに飛び出した。行くあても現金もなくして相談した早耶香と克彦のマンションに泊めてもらった。二人とも優しかった。

「……私は……最低だ……」

優しい二人に甘えて何泊もするうちに、早耶香がいなくて克彦と手を握り合ったり、キスをした。昔から好きだったと言われて嬉しかった。あの日、変電所を爆破するほどの決断をしてくれたことも今も忘れていない。だから、早耶香が帰宅してきた気配が玄関からしてもキスを続けた。口で言うより、見せた方が早い、そんな計算をして。

「……刺し殺されたって……おかしくない……」

キスしていた二人を見たときの早耶香の目は脳裏から消えない。驚きと怒り、深い哀しみ、そして諦め、その瞬間から早耶香は声が出せなくなった。罵られたり怒鳴られたり泣かれたりするかと覚悟していたのに、何も言われず、あとは弁護士に任せて終わった。

「8時になりました。皆様、今しばらくのお付き合いをお願いします」

俊樹が投票が閉め切られたことを告げた。

「三葉、お前も何かご挨拶を申し上げなさい」

「……はい」

三葉は立ち上がってマイクを持ち、支持者たちを見る。町の運命がかかった選挙なので有権者には票割りがされている。合併反対派の候補について町を4区画にわけて票割りがなされているので、ここにいる支持者は三葉個人を支持しているわけではなく、糸守町の合併に反対している人たちという方が正確だった。逆に、ここにいないということは賛成派で、すなわち町を売った人間というレッテルが貼られることになるので、通常の町議選よりも何倍も人が集まっている。ただ、近所に家のある名取家の人間は、さすがに誰もいない。そのことについて、誰も批判しないし、名取家の代表者は他の反対派候補の事務所にいるという話は聞いている。

「みなさん、こんな私を支持していただいて……」

常套句で始めた三葉は下を向いた。

「こんな私を……」

「三葉」

俊樹が小声で指示を送ってくる。もつと胸を張りなさい、と仕草で示しているけれど、三葉は深く頭を下げる。

「本当に私は最低です」

さすがに謙遜としても表現がおかしいので事務所内が少しざわついた。

「みなさんもご存じの通り、私は名取さんに対して、何の申し訳も立たない、最低の女です」

「三葉、そんなことは、今はいいから……」

「いえー！ 今！ 今すぐ！ 私は彼女に謝りに行きます！ 許されな
いとしても、謝りに！」

そう言ってマイクを置いた。そして事務所を出て行こうとする娘の手首を俊樹が捕まえた。

「これから開票というのに、何を言ってるんだ!! だいたい、どうせ謝るなら選挙中にすればいいだろうに！」

「そうやって何もかも選挙につなげて考えるから！ 8時までには謝りに行ったら、また選挙向けのパフォーマンスだつてなるでしょ?! だからよ!!」

父親の手を振り切つて三葉は事務所を飛び出した。小さな町なので名取家まで200メートルもない。走つて辿り着くと、庭に湯上がりで涼んでいた沙耶香と、犬の散歩から戻ってきた早耶香がいた。

「ハアっハアっ…」

「……」

早耶香が三葉に気づき、沙耶香も気づいた。

「何しに来たのよ?!」

沙耶香が詰問して、姉を守るように背中にかばった。

「ハア、ハア、…ご…ごめんなさい!! ごめんなさい!」

三葉が頭を下げて謝り、膝が震えて座り込むと土下座になる。

「本当に、ごめんなさい!! 私最低でした!! ごめんなさい!!」

「ちよっ…今さら…」

沙耶香が不倫関係についての当事者ではないので対応に困り、姉を振り返った。

「……………」

早耶香は土下座している三葉を静かに見ている。

「ごめんなさい!! どうか、謝らせてください!! 本当に、申し訳ありませんでした!!」

「……………」

「ごめんなさい!! ごめんなさい!! 本当に、本当に…」

三葉が地面に額を擦りつけて謝っている。早耶香が口を開いた。

「それで許すとしても、思うの?」

「っ、いえ、許されるなんて思つてません。ただ、ずっと謝りたかつた! ごめんなさい!! どうか、どうか、この通りです! 申し訳ありませんでした!!」

土下座を続ける三葉と、それを見下ろす早耶香と沙耶香、そんな光景に近所の町民や、さきほどまで事務所にいた支持者たちも野次馬と

して遠巻きに視線を送ってくる。三葉は涙を零しながら謝り、早耶香は静かに見下ろしている。三葉を追ってきた克彦も土下座を始めた。

「すまなかった!! 申し訳ない!! どうか、どうか、三葉のこと許してやってくれ!! オレのことは憎んでも、どうか、三葉のことは!! この通り!」

「だから、許すわけないやん。どれだけのこと、自分ら私にしたと思ってるの?」

「……………」

もう言葉が出なくなつて三葉と克彦は、ただ地面に額を押しつけている。早耶香が震える手で力一杯に三葉の肩をつかんだ。

「許さへんよ。一生」

「……………」

「ずっと、ずっと許さへん。一生恨み続ける」

早耶香が言いつのる。

「この先、ずっと。来年も、再来年も、私が誰かと結婚しても、ずーっと、恨み続けて言い続ける。この町で顔を合わす度に、この町で暮らして、この町で歳をとつて、80歳になつても、90になつても。もう、ええ加減許してよ、つて言う頃になつても、ずっと、ずっと、ずっと、あの時ひどいことしたね、つて語りぐさにしてやるんよ。だから、覚悟しておき」

そう言うとき早耶香は肩をつかんでいた手を離した。

「二人とも顔をあげてみい」

「二つ、はいっ…」

三葉と克彦が涙と嗚咽でグチャグチャになった顔をあげた。心から詫びて、泣いている顔だった。

「クスッ…、アホみたいな顔して」

「ううっ…うあううっ、ごめんなさい、ごめん、ごめん」

「うぐうっ、ごめんよ、ごめんよ、オレが悪かった! あぐうっううう!」

「泣きたいのは、こっちやのにね」

早耶香が二人から目をそらして空を見上げたときだった。

「こちらは糸守町選挙管理委員会です。開票の結果、当選者は糸田邦男さん。守田六左右衛門さん。古川誠さん。大和茶太郎さん。勅使河原三葉さん。帰雲白乃介さん。遠藤半径さんの以上7名となりました。繰り返します…」

名取家の長女の声で放送が流れ、そこに三葉の名前があった。当選者の構成も合併反対派が多数を占め、安堵の空気が流れる。早耶香がタメ息をついた。

「ハアア………とりあえず、当選、おめでとう」

「さ……サヤチン……」

「もう立って。事務所に戻って、せいぜい胸はって挨拶してき。そんな泣き顔、もう見てとうないわ」

トンと背中を押されて、三葉はヨロヨロと事務所へ戻っていく。克彦も申し訳なさそうに頭を垂れてついていき、遠巻きに見ていた野次馬も事務所での飲食を再開するために戻っていく。人がいなくなつて、早耶香が姉に問う。

「お姉ちゃん、あんなんでいいの？」

「さあ………どうやろうね………よう、わからんよ」

「………」

「ただ、こんな小さな町で、これからも暮らしていくのに通りで顔を合わせる度に、こっちは無視して見ないふり、むこうは頭さげて小さくなってやりすごす。そんな関係つづけるくらいなら、正々堂々イヤミの一つも言える。挨拶くらいする、そんな方がええから」

「お姉ちゃん………大人なんやね………」

「ここまで気持ち落ち着けるのに、ものすごい時間かかったから」

またタメ息をついて、そして妹に告げておく。

「あんたは後悔せんようにね。司くんのこと好きなんやったら、ちゃんと言うくらい言うた方がええよ」

「っ……」

早耶香が赤面して目をそらした。

「言うなら早めにね。アホのテッシーみたいに、もう言うたらアカン

ときになってから言うてるようでは歴史の繰り返しやわ」

「……………」

もう遅いよ、と沙耶香は思った。そして時間を見る。

「もう9時前、病院に行かないと」

入浴を早めたのは病室にいる四葉を見守りに行くためだった。父と姉が忙しく、一葉は高齢なので昼間付き添い、夜間は若い沙耶香と司が行っている。さつと身支度をして沙耶香は病院に向かい、玄関口ビーで司に出会った。

「よう」

「早いね」

「四葉の姉さん、当選したな」

「……。その言い方は、うちの前での事件、知らんね？」

「何かあったの？」

「うん、まあ……………」

どう言うべきか、迷っている。

「何があつたんだよ？」

「謝りに来はってん。四葉ちゃんのお姉さん。うちのお姉ちゃんに」

「……………あの件で？」

「それ以外に無いやん」

「そっか……………このタイミングで？」

「そう！ そうやんね！ やっぱ、そう思うよね！」

「う…うん、まあ…そんな力説しなくても…、そんなことより、あ、いや、そんなことってわけでもないんだけど、四葉、今日こそ意識もどるかな……………」

司が心配そうにすると沙耶香も胸が痛くなった。選挙の結果も不倫の結果も、四葉の安否に比べれば、二人にとつて些事だった。

「四葉ちゃん……………きつと、何かのために頑張つて、それで……………うまくいったのかな？ うまくいかなかったのかな？」

「どうだろう……………四葉は、うまくいっても、うまくいったことがわからないかもしれない、とも言つてたから。ただ、ボクらが、こうして生

きてるってことは……うまくいってると思いたい」

「そうだよね。でも、そのために四葉ちゃんが……犠牲になったんじゃない……」

沙耶香が思い詰めた顔を見ると、司は優しく頭を撫でた。

「そんな顔するなよ。きつと、大丈夫、きつと大丈夫だつて」

そう言つて励ます司の顔にも不安が強く浮かんでいる。もう3日、まったく意識が戻らない。医師は原因不明だと言うし、ジャギとしてさえ目覚めてくれない。このまま、ずつと意識が戻らないのではな
いか、という不安は司も沙耶香も持っているし、一葉や三葉も口にし
ないけれど、考えていないわけではない顔を見せている。

「四葉ちゃん……」

「きつと大丈夫だつて……ううつ……」

励ましていた司の方が泣きそうになってしまい、沙耶香が背中を撫でる。

「男が泣いて、どうするのよ」

「泣いてない」

「泣いてるじゃん……ぐすつ……」

強がっている司の肩へ、自分も泣きそうになってしまい顔を隠すために沙耶香が額をつける。司が涙を乱暴に拭いた。

「もう病室に行こう。お婆さん、疲れてるだろうし」

「……うん、そうだね。ちゃんと、お昼寝してきた？ 明日は、学校あるから仮眠も交代でとらないとね」

「ああ、周りに心配かけないようにしないとな」

二人とも選挙活動とは無関係なので日中に休み、これから一葉と交代する。病室に入ると、一葉が四葉の手を握っていた。四葉は意識がなく、心拍と呼吸を診るためのモニターが胸に装着され、左腕には点滴がされ、食事の代わりになる栄養を与えるためのチューブが鼻の穴から胃まで挿入されているし、当初ひどく暴れたこともあって医師の判断で身体と手足を精神病患者などの拘束に使うベルトで固定されている。

「こんばんは。お婆さん、交代するから、もう休んでください」

沙耶香が声をかけると一葉が顔を上げ、礼を言う。

「ありがとうよ。四葉、お友達が来てくださったよ。はよう起きてあげなさいよ」

祖母が話しかけても四葉は何の反応もしない。

「……………」

三人が、つい黙り込むと雰囲気は暗くなる。司が気を遣って言う。

「お婆さん、もう帰って休んでください。お婆さんまで倒れたら大変だから」

「そうやね。ありがとう。ほな、頼むね。四葉、私が代わってやれたら…………二葉のときも、どんなにか思ったけど、まだ高校生の…………」

それ以上を口にするると泣いてしまいそうになった一葉は愛おしそうに四葉の頬を撫でると、病室を出て行った。

「……………」

「……………」

「何か話せよ。サヤボボ」

「黙ってるより賑やかな方が、四葉ちゃんも起きてくれるかもしれないもんね」

沙耶香が四葉の左側に座り、司は右側へ座って、なるべく楽しい話題を選んで会話する。病室は先日まで三葉が入院していた院内で一番高価な個室なので夜に談話していても問題はなかったし、宿泊の付き添いも可能だった。

「四葉、そろそろ起きろよ、な」

司が握っていた四葉の右手を撫でる。沙耶香も握っている四葉の左手を撫でた。

「……………」

「……………」

いくら楽しい話題を選ぶといっても限界があり、夜も更けてくると黙りがちになってしまう。心配そうに四葉を見つめる二人が少し眠気を覚えた頃だった。

スーーーーっ…

音もなく気配もなく存在感さえも曖昧に、ジャギが無想転生を使いながら入ってきた。二葉との約束通り四葉の意識を戻すため、北斗神拳による刺激を与えるためだった。

(久しぶりだな、沙耶香、テツツ)

ジャギにとつては30年以上を経ての再会だったけれど、二人は無想転生のおかげでジャギに気づかない。すでにジャギは初老といつていい年齢で、頭髪を剃り僧衣を着ていた。

(とくに沙耶香、お前のおっぱいも変わってないな。そうか、そういえば、沙耶香に似てる女ばかりだったな……オレ、けつこうお前のこと気に入ってたのか)

ジャギは北斗七星にちなんで7人のキャバ嬢との間に39人の子供をつくっていたけれど、その7人が沙耶香と似ていることに今さらながらに気づいた。

(とはいえ、二葉さんとの約束だからな。もう、お前たちには関わらない。でないと、糸がからまって毛玉になるとかなんとか。会えば必ず不幸になって、くつついても磁石が反発するみたいになるとか言ってたし。まあ、時間を隔てて入れ替わってた人間関係で、本来、結ばれちゃいけないってのは常識で考えても、どんなアホでも、なんとなくわかりそうなもんだからよオ。あれだけの厄災をチャラにできただけで、満足しとくべきだよなあ。にしても、無想転生は都合がいいぜ)

ジャギは二人に認識されないまま、四葉の頭部に触れる。

(こんなもん……かな……弱めにしとこう。いまだに、この手の手加減は苦手だからな。最後の最後に四葉を殺しちまったら、シャレにならねえし。じゃ、あばよ、四葉。テツツ、沙耶香)

やや弱めに秘孔を刺激してジャギは立ち去った。

「え……、ちよつと、テツツ、今、私のおっぱい、触った?」
「どうやってボクがサヤボボのおっぱいを触るんだよ」

司はベッドを挟んで反対側にいるので物理的に不可能だった。

「けど、今、確かにモミモミって……ハア……」

沙耶香が熱っぽい吐息を漏らした。ほんの2回だけの愛撫だった

けれど、かなり絶妙な手業だったので身体が熱くなってしまった。
「気のせいとは……思えんけど……。四葉ちゃんの手は握ってるし……」

沙耶香は四葉を見つめる。

「まだ起きないの？ 四葉ちゃん」

耳元で囁きかけてみる。顔を近づけると四葉の匂いがした。もつと顔を近づけて、沙耶香は耳にキスするほど接近すると、小さな小さな声で問いかける。

「あんまり寝てると、私がテツツを盗っちゃうかもよ？」

その声は確かに四葉の耳には届いたけれど、やっぱり反応はない。司には聞こえていないので、不思議に思っ問われる。

「サヤボボ、何をしてるんだよ？」

「四葉ちゃんと内緒話♪」

「ふーん……じゃあ、ボクも」

司が四葉の右耳へ囁きかける。

「起きないと、おっぱい揉むよ」

「……テツツ、内緒話は、もう少し小さな声でいいな」

「うっ……聞こえてた？」

「おっぱいの話してたやろ」

「うう……」

「意識のない女の子にセクハラって最悪やん」

「うぐっ……、いつそセクハラついでにキスしたら起きないかな？」

「眠り姫のセオリーではあるけど……。二人って、そこまで関係進んでたの？」

「……うん……まあ……」

「じゃあ、神社でエッチしてたってウワサ、本当なんだ？」

「っ?! なんて、知ってるのさ?!」

「………わかりやすい反応、ありがとうございます」

「くっうう……。自分こそ、保健室で四葉と変なことしてたろ？」

「っ……べ、別に、何も」

「あのときジャギさんだったけど、何をしてたんだよ？ 二人のパン

ツ、置いてあったし」

「蹴られながら、そんなこと見てたんや」

「で、何をしてたんだよ」

「……………だから、別に。何も」

「何もないのに二人ともパンツ脱ぐって、どういう状況だよ？」

「……………うー…あ、そうそう！ トイレに行ったとき女の子は、どうすればいいかを教えたの！」

「それ今、思いついた言い訳っぽいけど」

司は疑いつつ、四葉の耳元に囁きかける。

「四葉、早く起きないと、またサヤボボに変なことされるよ」

「テツツーこそ、キスしようとか言うてたくせに」

「キスか……………それで起きてくれるなら……………キスしてもいいか？ 四葉」

「……………それは、ダメ」

「なんでだよ？」

「だって……………一回、エッチしたかもしれないけど、だからって意識のないときに勝手にキスなんかされて女の子が傷つかないとも思うの？」

「……………サヤボボだったらイヤか？」

「私は……………相手による」

沙耶香が目をそらして、それから思いついた。

「いっそ、私とテツツーがキスするフリしたら、四葉ちゃん、それはダメっ！ って慌てて起きるかもよ」

「サヤボボと……………」

「フリよ！ フリ！」

言い募って、恥ずかしくて司を見ていられないので沙耶香は四葉に言う。

「いつまでも寝てると、テツツーとキスしちゃうよ」

ついでに頬をつついたけれど、やっぱり四葉は起きない。病室のドアが開けられて看護婦が入ってきた。

「キスとかエッチとか、友達が生きるか死ぬかってときに、のんきなも

んね」

「……………」

司と沙耶香が廊下まで声が漏れていたことを深く後悔して下を向く。看護婦は医療材料を載せたカートを押してベッドまで近づくと、点滴の残量を確認して、心拍のモニターを看護記録に書き込む。ごく事務的に作業をしていると、ナース服のポケットにあったスマホが鳴った。

「もしもし、っていうかさ、仕事中に電話してくるなって言ってるじゃん」

そう言ったのに電話を終えず話し続ける。

「うん、そう、これから夜勤。いやいや、飲み会とか無理だって言ってるじゃん。私、お酒は一滴も飲めないの。飲んだら吐くの。なのに、割り勘じゃ合わないしパスパス。じゃあね」

電話を終えると、また事務的に四葉の腋に体温計を入れる。

「はい、じゃあ、身体を拭いて、オムツも替えるから。見てたいなら、どうぞ。この子のウンチって超臭いよ。吐くほど臭い」

「……………」

追い出すように言われて司と沙耶香が立ち上がった。意識不明なのでオムツに排便することは仕方ないとしても、そんな姿を親友や恋人に見られたくないだろうというのはわかる。そして、この看護婦がやたらと刺々しい理由も知っている。看護婦は顔の真ん中に大きな絆創膏を貼っていた。入院初日に四葉が左腕で急に掌打を放ち、運悪く看護婦の顔面に直撃し、鼻の骨にヒビが入ったと聞いている。イヤミの一つも言いたくなる気持ちと、事務的な看護なのもわからなくもない。

「……………」

少し心配そうな顔で司と沙耶香が病室の外へ出て行くと、看護婦は周囲を見回した。高価な個室なので広いしソファも液晶テレビも机もある。

「……………隠しカメラとか無いね。最近、虐待してると撮られてるらしいから…」

室内を見回したのは隠しカメラを気にしたためで、一葉が居たときと変化があったのは司がコンビ二で買ってきていた夜食用のオニギリくらいでカメラや録音機の類は無かった。

「よし」

心おきなく虐待できるとなり、まずは身体を拭くための熱いタオルを四葉の顔に投げつけた。

ベシツ：

熱いタオルが鼻へチューブが挿入されている四葉の顔に命中して拡がる。火傷するかしないか、通常は少し冷ましてから身体を拭くためのタオルが四葉の顔を覆い、呼吸を妨げる。四葉は右の鼻の穴へチューブを挿入されているので、左の鼻の穴でしか呼吸ができない。それがタオルで邪魔されると、苦しくなるはずなのに四葉は苦しがる様子もなく動かない。

「……………このままだと死ぬかな…」

だんだん脈拍が早くなり、手足の血色も悪くなっていく。さすがに死亡すると虐待が発覚するかもしれないので、タオルをどけた。

「はい、顔、終了」

きちんと顔を拭くのではなく、タオルを投げつけただけで終わり、手と足も見えるところだけ軽く拭いて本来は拘束具を解いて全身くまなく拭かなくてはいけない手間を省いた。

「オムツは…………」

看護婦は寝間着をめくって四葉の股間を見る。四葉が着けている大人向けSサイズのオムツは股間が膨らんでいて排泄物が溜まっているように見えた。

「ゴイツのウンコ、マジで臭いのよね。大腸癌の婆でも、ここまで臭くないってくらい。久しぶりに排泄看護で吐いたし」

手袋をした指先でオムツを引つ張って中を見ると、べったりと四葉の大便がオムツと尻の間に付着していた。

「う……………汚…………」

息を止めていた看護婦はオムツを交換せずに、グリグリとオムツの上から四葉の股間を押してねじった。おかげで柔らかかった大便が

四葉のお尻と女性器の方にまで付着していく。

「このまま朝まで、ほっとけば、ひどいオムツかぶれになって傑作よね」

すでに少し赤くかぶれかけているのに、あえて放置する虐待を選択し、さらに証拠が残りにくい虐待を続ける。四葉の若々しく上を向いた乳房を握ると、指先で絞るように捻った。

「これ、めっちゃ痛いはずなんだけど」

同じ女性なので、乳房を潰すように絞られるのが、どれだけ痛いか想像はつくのに、まったく四葉は表情を変えない。

「あく……顔、殴りたい。鼻、折ってやりたい」

やっぱり自分が殴られた鼻を思いっきり殴りつけてやりたいけれど、さすがに事件になることはわかる。何より痛めつけても、まったく反応がないと虐待のやりがいが無い。思いっきり頬を叩いたり、腹を殴ったりしたいけれど、アザが残ってしまう。

「アイアンクロウ〜！」

せめて、グリグリと頭部を拳で押した。たとえばアザができても頭髪で見えないはずなので、容赦なくグリグリと押し、たまたま偶然、ジャギが弱く刺激したところも追加で押した。

「うう……」

「え？ 意識が……」

「……、ここは、どこ？」

四葉が目を開けて問うてくる。

「意識がもどって。先生に……」

当直の医師に報告しようと駆け出そうとして、看護婦は思いとどまった。せっかく意識を取り戻したのだから、何か虐待したい。

「あの、ここは、どこですか？ 私は宮水四葉ですよね？」

「……」

「今は何年ですか？ 2020年？」

「……」

「私は、どうして動けないの？」

四葉は精神病者を拘束する頑丈なベルトで固定されていて、手足は

おろか首も動かさせない。真上を向いていることしかできないでいる。眼球だけ動かして看護婦を見つけ、質問してくるけれど、とても不安そうだった。

「あの、すみません。私は……誰ですか？」

「誰なんでしょうね」

意地悪く看護婦が微笑むと、ますます四葉は不安そうになる。

「わ、私は……す、すみません。鏡を見せてもらえませんか」

「顔が見たいの？」

「はい」

「………………。見ない方がいいわ」

「ど、どうして？」

「……………」

医療従事者に意味ありげな沈黙をされると、四葉は不安で胸が張り裂けそうになった。

「……そ……そんな……どうなって……全部、ちゃんと終わったと……思ったのに……ここはどこ?! 今は何年なの?! 私は誰なの?! 戻ってないの?! 全部っ全部っちゃんとやりきったと思ったのに! どうして?!」

もう、なんとなく入れ替わりは起こらない感覚があり、おかげで神がかった精神状態から、ごく普通の高校2年生に戻っているのに、看護婦の冷たい対応と拘束された身体のおかげでパニックを起こしかけている。

「ハア……ハア……ううっ……、すみません。この鼻に入ってるの、何ですか? うう……」

四葉の視界には病室の天井と自分の鼻に挿入されているチューブくらいしか見えない。そのチューブは鼻の穴から奥で喉まで曲がり、さらに食道を通り過ぎて、胃に直接栄養を運ぶ医療器具だったけれど、意識が戻ると異物感が大きくて、どうにも苦しい。激しく話したせいか、喉にひかかって嘔吐衝動が湧いてきた。

「ううっ……うえ! ……う……く……苦しい……う……うえ! す、すみませ……うえ!」

「吐くと窒息して死ぬから我慢しなさい」

「うううっ…あううっ…うえ！ うえ！ うげえええ！」

とうとう嘔吐するけれど、チューブから流動体を送られていたのは夕方では胃に何も無い。胃液だけが食道を逆流してきて、喉に溢れる。

「ゲホツうえっうう！」

しかも横を向くこともできないので喉と口いっぱい胃液が拡がり、息もできない。

「うええう！ ゲホッ！ ヒュツ…ゲホツ！ うええおうええ！」

ヒュツ…ゲホツ！」

嘔吐し続けながら四葉は短い変な呼吸をしている。気管にも胃液が入って焼けるように痛い。せめて下を向いて嘔吐しきれば楽になるのに、上を向いたまま、手足を動かすこともできないので苦しくて苦しくて意識が再び無くなってしまいそうだった。

「この拘束と経鼻栄養管の組み合わせて、医療事故で訴えられたら負けそうね。判断したのは医師だから、私の知ったことじゃないけど」

もう四葉は聞いていても認識できていなさそうな様子なので、看護婦は冷笑しながら窒息しかけているのを楽しみ、とうとう四葉の身体から力が抜けていく。わずかに動かせた手の指でシーツをつかんでいたのに、その指からも力が抜け、涙を流していた目からも光りが消えていく。

「はいはい、死なないですよ。ドレーンしてあげるから」

看護婦が別のチューブを四葉の口の中に突っ込んでくる。

ズズズズウズ!!

歯医者で血や唾液を掃除機のように吸ってくれるのと同じ種類の機械で四葉の口と喉にあった胃液と唾液が吸い取られ、呼吸が確保された。

「ハッ！ ゲホッ！ ハア！ ハアア！ ヒュツ！ ヒハッ！」

死にかけていた四葉が呼吸を取り戻した。けれども、まだ鼻から挿入されたチューブは胃まで伸びている。喉に異物がある感覚のため

に、また嘔吐衝動が襲ってきた。

「うええっ！ おえええ！ た：助け：おええ！ これ抜いてくださ
…うえええ！」

今度は胃液もない、嘔吐衝動だけの空嘔吐をしている。

「おえおえおえええ！ 死、しぬ：おええ！ うえええ！」

「ドレーンしてるから息はできるでしょ」

看護婦は四葉の喉に胃液と唾液が溜まると機械で吸い取ってくれ
るけれど、鼻から挿入しているチューブはそのままなので空嘔吐が続
いて死ぬほど苦しい。

「うげおおえうええ！」

「きやははは♪ 面白い声」

「うえおええ！ ヒュツ：おえええ！ うおえええ！」

あまりに苦しくて四葉は発狂しそうになってくる。わけがわから
ない。なぜ、こんな目に遭っているのか、ここが、どこで、いつで、自
分が四葉である自信もない。もしかして、これは夢なのか、タチの悪
い予知夢なのか、また口噛み酒を商品化してしまった世界に似た地獄
のような末路なのか、あのときも鼻から水を入れられて死ぬほど苦し
かったし、あれは溺れるような苦しみだったけれど、今は嘔吐地獄で、
なにより、もう思考がまとまらない。ただ、鼻から喉にあるチューブ
のために嘔吐だけを繰り返して下水口が逆流して溢水しているよう
な音を吐いている。

「おえ…おえ…うえ…うおええ…」

もう腹筋に力も入らなくなってきた、嘔吐さえ弱々しくなってい
た。

「…おえ…うえ…うう…うえ…」

だんだんと喉の粘膜がチューブがあることに慣れてきて嘔吐衝動
が消えてくる。

「ハア…ハア…ひっ…ひっぐ…ハア…」

あまりにも苦しかった時間が終わって、四葉は泣けてきた。

「…ハア…ひっ…ひうう…ハア…」

「あ、もう慣れた？ 残念」

そう言うと看護婦はカートから別の薬剤を出してきた。それは単なる生理食塩水の入った汎用パックだったが、涙も拭けない四葉の目には、はつきり見えない。

「あなた、もう死になさい。これ、薬に死ぬるお薬だから、このチューブから流し込んであげるね」

「っ?!」

驚いている四葉は何の抵抗もできない。看護婦はチューブを接続し直して、生理食塩水を流し込んできた。

「ひっ…イ…イヤー!」

四葉の目にチューブ内を流れ落ちてくる透明な液体が見える。それが死ぬような薬だと言われていると、恐怖で顔がひきつっていく。

「きやはははは♪ 死んじやえ」

「ひっ…ひィィ…」

逃げたくても身体を動かすこともできず、飲まないようにしようと思っても勝手に鼻から喉を冷たい感触が流れて込んできて、胃に拡がる。吐きたくても、今度は嘔吐するための筋肉が疲れ切っていて吐けない。四葉は恐怖してガタガタを小刻みに震えて泣いた。

「……た……助けて……イヤ……お母さん……お母さん……」

「クスっ…カアさんカアさんってリアルに言うヤツはじめて。きやはは♪」

「ひっ……ひくっ……ううっ…」

「そろそろ死ぬかな」

わざとらしく看護婦はペンライトで四葉の涙で濡れた瞳を覗き込む。

「まだ生きてる。あ、薬を間違えたからね。ごめん、ごめん、ただの水だった。殺す薬は、こつちだったわ」

看護婦はカートから本来流し込むべき栄養剤を取り出した。オレンジ色のペーストがパックに入っていて、ビタミン、ミネラル、カロリーすべて補給できる理想的な栄養剤で意識不明や嚥下障害などで食事がとれない病人に与えるものを毒薬と称して四葉に流し込む。

「イヤ！ イヤ！ やめて！」

ゆつくりとチューブ内をオレンジ色のペーストが降りてくると、とても怖い。しかも手順では体温と同じくらいに温めてから流し込むものなのに、あとで四葉が下痢でも起こせば面白いと考えているので、常温のまま使用しているおかげで、降りてくるのが遅い。

「ひっ！ ひいー！」

首を振って逃げようとしても、それさえできない。がっちり顎や頭部が革ベルトで固定されていて数センチも動かせない。さきほどの透明な生理食塩水よりもオレンジ色のペーストは見た目が恐怖心を強く刺激してくる。

「もうすぐ死ぬね」

「い……イヤ……なんで……どうして……私……一生懸命……頑張ったのに……世界の……ために……」

「世界のため？ また、そんなこと言ってるんだ。頭のおかしさは姉といっしょね」

「姉……？ やっぱ、私は四葉なの？」

「ちっ」

うっかり情報を与えてしまったことで看護婦は舌打ちした。

「……ここは、どこなの？ 病院？ 町の病院？」

「……。いいえ、警察病院よ。あんた逮捕されたの。わけのわからないこと言って暴れるから」

「警察……病院……」

「あんた姉と同じで人格障害あるでしょ。覚えてないかもしれないけど、連続殺人やって捕まったの。通行人へ言いがかりをつけて次々殺して逮捕よ」

「っ……そんな……ジャギさんが、そんなことするはず……ない……」

「もう一人の人格はジャギって言うの。ふーん……どうでもいいわ。ということまで死刑執行」

看護婦はペーストの入っているパックを強く握った。なかなか降

りなかったペーストがチューブ内を一気に進んでくる。

「っ……イヤ！ イヤあ!! 助けて!! 誰か助けて!!」

「四葉っ?!」

「四葉ちゃん?!」

病室に司と沙耶香が駆け込んでくる。

「ちっ……」

「司っ?! サヤボボ?! いてくれたの?! ここ、どこ?!」

「町の病院だよ!」

「今は何年なの?! 二人がいるってことは2020年だよね?!」

「2020年だから安心して。四葉ちゃん、意識が戻ったんやね!

よかった!」

沙耶香と司は喜んでいられるけれど、四葉は必死に頼む。

「これを抜いて!! 私、殺される!!」

「え……これって?」

司が何のことかわからず迷う。もうチューブから胃に何か拡がっている感触があるので四葉は青ざめている。

「この鼻に入ってるチューブを! 早く抜いて! お願い!!」

「………これは……栄養を入れるチューブだって聞いているけど?」

「毒なの!! 早く早く抜いて!!」

「………」

司が看護婦を睨むと、お腹を抱えて笑い出した。

「きゃははははは♪ ウケるう! 超ウケる!!」

「四葉、落ち着いて。このオレンジ色のは、栄養だから害はないよ」

「だって、さつき、この人が……」

「きつとウソだよ」

「ウソ……」

「四葉、ここは町の病院で、四葉は3日間、意識がなかった。今は10月18日だよ。この看護婦は……まあ、ちよつと意地悪だけど……それには、少し理由があるし……」

司が言葉を濁したので、沙耶香が四葉の耳元へ囁く。

「四葉ちゃんが意識をなくした後、少し暴れることがあって運悪くこの看護婦さんの顔を殴ってしまったらしいの。それで、すごい怒ってはるの」

「顔を……」

言われて看護婦が大きな絆創膏を顔に貼っていることに気づいた。今までは半分パニックだったので、業務として着けているマスクなのかと思っていたけれど、しつかり見ると鼻全体を覆うように絆創膏が貼られている。おかげで人相も表情もわかりにくいので怖い。

「それは……すみませんでした。ごめんなさい」

「ちっ」

舌打ちして看護婦はカートを片付けて出て行った。

「四葉ちゃん、意識が戻ってよかったあ」

「ああ、四葉、おかえり。よかったよ」

「うっ……うっ……ごめんね……心配かけて……ごめん……よかった……私、どうなってるのか、わからなくて……二人がいてくれて、よかったです」

「ごめんな、ほんの少し離れてる間に……怖かっただろ？ 毒なんて言われたらビビるよな」

「うっ……あうっ……はうっ……」

慰められると安心したおかげで泣けてくる。沙耶香がハンカチで涙を拭いてくれる。

「目が覚めて何もわからへん、この状況で毒とか言われたら最悪やんね。いくら何でもひどすぎるわ」

「うっ……あうっ……ぐすっ……」

四葉の鼻水も拭いてやってから、司と相談する。

「テツツー、四葉ちゃんの意識が戻ったことの連絡どうしょ？」

「今は11時過ぎか……お婆さんには明日の朝の方がいいだろ。電話したら起きて来るだろうけど、けっこう疲れてる様子だったし」

「お父さんとお姉さんの方も今頃は祝勝会やんね。……明日の朝の方がいいかな」

「あの二人も相当に疲れてる様子だったから、連絡すれば祝勝会の後、

無理してでも顔を出すだろうけど、お父さんの方は、とくに年齢もあるし、やっぱり二人への連絡も明日の朝の方がいいかも」

「そうやね」

「ううっ…ぐすっ…はううっ…」

まだ四葉は泣いている。すべてが終わったと感じて目が覚めたのに、地獄のような目に遭わされて殺されるかと思ったので、かなり深く傷ついている様子だった。

「よしよし、もう大丈夫やよ。それにしても、このままやと可哀想やね。これ、外せへん？」

沙耶香が拘束具に触れると、司も触ってみる。

「うーん…ダメみたいだ。金具の重要なところに鍵がかかっていて外せない」

四葉の手足と胴体、頭部を拘束している革ベルトは鍵が無いと外せないようだった。

「しようがない。ナースコールしようか。あまり気が進まないけど」

「そうやね」

「ぐすっ…ううっ…これも抜いてほしい」

四葉が鼻に挿入されたままのチューブのことを言う。喉の粘膜は慣れてくれたものの、常に違和感はあるし、何より鼻の穴に挿入された姿を恋人と親友に見られているのも苦痛だった。司がナースコールを押し、別の看護婦が来てくれることを三人で期待したけれど、あの看護婦が入室してきた。

「何か用？」

普通は高価な個室にいる患者には、へりくだった対応をするはずなのに、この看護婦はスマフォをいじりながら面倒臭そうに訊いてくる。司がムツとしつつ言う。

「これ外してやってよ。もう意識も戻ったから」

「無理」

「なんで?!」

「また暴れるかもしんないじゃん」

「もう四葉だから大丈夫なんだよ」

「は？ そんな保証が、どこにあんの？ コイツ、ちよくちよく人格が変わるってカルテにあったし」

「もう大丈夫なんだって！ な、四葉？」

「うん、すべてが終わったと思うから。もう入れ替わりは起こらないはず」

「はず、とか言われても、私、ただのナースだし」

「じゃあ、先生を呼んでやってくれよ」

「今夜の当直はK医科大卒のバカ医者だよ」

「うっ……あそこか……」

司が困った顔を見ると、沙耶香が問う。

「なにか問題があるの？」

「私立医大で全国一の偏差値が低い医大なんだよ。その分、学費が6千万くらいして、大金持ちか開業医の息子しか入らない。一応、偏差値50以上ではあるけど、だいたい想像がつくだろ、どういう人材か」

「ふくん……でも、その先生しかないなら頼むしかないんとちゃう？」

「……まあ、……サヤボボの言う通りだけど……。先生、呼んでもらえますか？」

「はいはい」

面倒そうに看護婦が消え、しばらくして医師と戻ってきた。

「何？」

医師はPSPをいじりながら訊いてきた。響いてくるBGMから信長の野望というゲームだと司にだけはわかったけれど、どうでもいい。

「……。この拘束してるのと、栄養チューブを外してあげてほしいんです」

「あく……ボク、眼科志望なんだよ。精神科とかイミフ」

「イミフって……いや、もう意識も戻ってるから」

「ふーん……君、どう思う？」

医師は看護婦に問い、看護婦は顔の絆創膏を指した。

「この患者に殴られました」

「うわっ、怖っ」

「危険だと思います」

「だね。はい、継続。経鼻管は……君、どう思う？」

「明日、担当医が判断されるのを待った方がよいかと思います」

「だよ。じゃ、ボク、忙しいから。……さて、帰雲城の防御を……」

若い医師はPSPを操作しながら消えた。

「ほらね」

看護婦が勝ち誇ったように言い、沙耶香が悔しそうにつぶやく。

「完全に誘導しとるやん」

「こんな町の夜間当直にくる医者なんて、あんなもんよ。あいつ、国家試験に合格したから、もう勉強しないって決めてて、あとは夜勤バイトか、コンタクトレンズ屋の隅っこでゲームして一生過ごすプロニートになるのが夢らしいよ」

「プロニートなのか、それ……努力と怠惰の配分がすごいというか……人生を本気で舐めてかかる気満々というか……他に先生はいないのかよ？ K医科大だつて、いい先生は、いいだろ」

「あれだけ。むしろ、この町に夜、医師がいるだけラッキーな夜。死亡診断書なら書いてくれるよ。ちなみに看護婦も私だけ。だいたい意識不明なんて状態なのに、この町の病院に入院するって言い張ったのは、この子の家族だし。普通、麓の病院に入れるよ。案外、この子の家族も、ちゃんとした治療を望んでなかったのかもね。精神病患者の家族には、よくあることだけど」

「……………」

四葉たちには俊樹や三葉、一葉が町の病院にこだわってくれた理由はわかるけれど、それを看護婦に説明する気力もなく黙る。

「じゃ、よっぽどのことでない限り呼ばないでよ。私も忙しいから」

そう言つてスマホをいじりながら消えていく。

「四葉……………めん」

「四葉ちゃん……ごめんな」

「ううん……二人が悪いわけじゃないから……」

不自由なまま四葉が微笑をつくり、憐れに思った沙耶香が問う。

「せめて、何かしてほしいことある？」

「そう言われても、この状態で……」

四葉は何もできない状態で、お願いしたいことを考えてみて、股間の痒さに気づいた。

「……………」

気づいてみると、とても股間が痒い。

「何でも言うてよ」

「……………」

背中や頭なら搔いてもらいたいけれど、さすがに股間を搔いてほしいとは言えない。けれど、気づいてしまうと股間の痒さは猛烈で我慢できなくなってくる。

「……ハア……ふ……」

少し身じろぎしてみても、自分がオムツを着けられていることがわかった。この痒さは、そのオムツが汚れていることからくるものだとわかる。女子なので毎月の月経でナプキンをあてたときも汚れてくると痒くなるのは体験しているけれど、その痒さと比にならないほど強烈に痒い。

「……うう……ハア……くう……」

「四葉ちゃん、どうかした？」

「四葉、大丈夫？　なんか顔が赤いけど」

「平気……何でもない……」

「……………」

「……平気……」

二人に知られるのも、あの看護婦にオムツを替えてもらうのもイヤなので隠して耐えようとするけれど、どんどん痒くなってくる。まるで股間を何百回も蚊にさされたように痒い。それを我慢していると、さらに股間がチリチリと痛いくらいに痒くなってきて四葉は小刻みに身じろぎして、手でシーツをつかんで耐える。

「四葉ちゃん……大丈夫に見えないけど……どうかした？　どこか痛い？」

「……大丈夫だから……今、何時？」

「12時だよ。四葉、本当に大丈夫？　顔が苦しそうだよ」

「平気……平気……う……ハア……ハア……」

このまま朝まで我慢すれば看護婦も交代してくれるはずと思うけれど、とても耐えられない。痒みが痛みと熱に変わってきて、まるで股間を炙られているような気さえする。お尻の穴まわりだけでなく、女性器の方まで熱く痒い。膣のあたりやクリトリスにまで大便が着いているようで痒さは股間全体に拡がっていて、あと8時間も耐えるとなると気が遠くなってくる。

「……ああ……うーっ……」

もう声が出てしまうほど痒くて痛い。赤ん坊がオムツが汚れたとき、大声で泣く理由がよくわかって、自分が母親になったら絶対に気づかってあげようと誓うものの、今は自分の痒さが、どうにもならないほどで四葉は身じろぎを続ける。それを見て司と沙耶香は心配になってくる。

「なあ、絶対、大丈夫じゃないだろ、これ」

「そうやね。……どうしよ」

「うーっ……平気……何でもないから……二人とも、もう遅いから帰っていいよ。私も寝るし……あくあつ……」

「四葉を一人にしたら、あの看護婦に何をされるかわからないよ」

「うん、あの人、ひどすぎやもん」

「……う……く……」

「もしかして、鼻のチューブが痛いのか？」

「……うん、そう！　それでナースコールして！」

四葉はオムツのことを知られたくないのでチューブのことにしてナースコールしてもらおう。

「気が進まないけど、仕方ないよな」

司がボタンを押すと、5分以上してから看護婦が現れた。

「何か用？」

「鼻のチューブが痛いみたいですよ」

司が説明したけれど、四葉は看護婦が顔を覗き込んでくると、目くばせしてオムツが汚れていることを伝えてみた。

「……」

それは、すぐに伝わったけれど、もともと看護婦は四葉のオムツが何時間も前から大便で汚れているのを知っているし、わざわざ痒くなるように性器にまで押しつけている。思春期の少女が恋人と親友に知られたくなくて、たとえ意地悪な看護婦でも同性なのだから悟ってくれるかもしれないと最後の望みを託して頼ってきたのを感じ、そして無視する。

「別に異常はないみたいよ」

「っ……う……」

「明らかに苦しがつてるから」

「そう言われてもねえ……宮水さん、どこか痛みますか?」

わざとらしく問い、潤んだ四葉の瞳を見る。

「……う……ハア……」

四葉は目線で伝えようとするけれど、やっぱり無視されてしまう。

「何もないみたいですよ」

「あうう……」

思わず四葉は言葉にならない声をあげた。

「クスツ……そんな赤ん坊みたいな声を出して。たしか、高校生ですよね?」

「……う……」

「言いたいことがあるなら、ちゃんと書いて意地悪く微笑んだ、わかりませんよ」

言いたくないのがわかっていて意地悪く微笑んだ。

「宮水さん、どうかさされましたか? どうもしないなら戻りますよ」

「……あ……あの……」

このままでは看護婦が去ってしまいそうなので、四葉は言葉を選んで言ってみる。

「…か…身体が…汚れてる…みたい…なんです」

「身体なら、さつき拭きましたよ。入浴は先生の許可がないと無理です」

「い…いえ…そうじゃ…なくて…」

四葉が涙目になつて真つ赤になる。

「そうじゃなくて、何？ 私、忙しいんですけど。早く言ってくれない？」

「…オ…オムツ…」

「オムツが、どうかしたの？」

四葉が小さな声で言ったのに看護婦は大声で問い返した。

「つ…オムツが…汚れてる…みたい…なんです」

「汚れてるみたい、つて自分のことですよ。ウンチしたの、オシッコしたの？ オシッコなら3回は吸収できるから、すぐ交換は無理ですよ」

「…すぐ…お願い…します…」

「ウンチなの？ ウンチもらしたの？」

「…はい…ひつく…ううっ…ううっ…ぐすっ…」

恥ずかしくて四葉が泣き出すと、司と沙耶香が気づいてあげられなかったことを後悔しつつも、看護婦に対して怒りが湧いてくる。

「そんな言い方ないだろ」

「女の子なのに、ひどいやん」

「何が？ 人間、ごく普通のことですよ」

「そうかもしれないけど、配慮とかあるだろ」

「四葉ちゃんの気持ちを考えてあげてくださいいよ」

「はいはい、いい友達がいてよかったですね。そんなに言うなら、あなた達が替えてあげればいいじゃない。この子のウンコ、すっごい臭くて最悪なのよ」

「っ、うっううっ…うううっ…」

容赦ない看護婦の言葉は四葉の羞恥心と自尊心を握りつぶしていく。まるで熟れたトマトを握りつぶすように、ぐしゃりと乙女心が圧壊されて汗が垂れるように涙が流れる。

「四葉ちゃん……こんな看護婦、明日にでも町長のお父さんに言うて、追い出してもらおな。この病院が町立なこと、忘れん方がいいですよ」

「ボクの方でもオヤジに言うておくよ。いくら顔を傷つけられたからって、あまりにひどい対応だから」

「うるわしい友情と彼氏の優しさってところ？　けどさ、あんたたち二人、この子が目覚めるまで、キスとかエッチとか言うてイチヤイチヤしてたよね？」

看護婦は四葉のオムツを交換するために脚を拘束している革ベルトの鍵を開けて調節する。まっすぐに寝ていた状態の脚をM字に開脚させて再固定して鍵をかける。膝を立てると病人用の寝間着がはだけてオムツが丸見えになった。司は病室を出ようかと迷ったけれど、看護婦を放置しておけないので四葉の身体から目をそらして残り、反論する。

「イチヤイチヤなんてしてない。四葉が目を覚ましてくれるように、面白い話をしてただけだ」

「そうよ、そうよ」

「はいはい、よくあるのよね。病院では。若い子が事故や病気で意識不明で運ばれてくるとね、お見舞いが同性だけのときは平穩に終わるけど、彼氏や彼女がいてさ、毎日お見舞いに来て、けど、他にも異性がいっしょに見守るパターンだと、だんだん意識の戻らない人より、手近な二人でくっついちゃうパターン。残念だったね、こんなに早く目が覚めて。とくに、名取の末娘、あんた、好きなんですよ、こいつが」

「っ…で、でまかせ言わんといてよー」

沙耶香が赤面して怒るけれど、看護婦は淡々と四葉の両脚の再固定を終えて、新しいオムツとウェットティッシュを出している。

「ホント、おしかったね。あと二日、いえ、あと一日でキスくらいできそうな雰囲気にもってきけたのにな」

「何の根拠があつて、そんなこと言うのよ?!　私が四葉ちゃんを裏切るようなマネするわけないやん!!」

「だってほら、玄関ロビーで抱き合ってたでしょ。交代のとき準夜勤のナースがラインで送ってくれたよ。私たち、二人が何日でくつつくか賭けてるから」

看護婦はスマホを操作して画像を見せつけてくる。その画像は病院の玄関ロビーで司と沙耶香が出会ったとき、なかなか意識の戻らない四葉のことを心配して不安になり、それを慰め合ったときのもので、沙耶香の手が司の背中にあったり、司の肩へ沙耶香が頭をつけていたりして、抱き合っているように見えなくても写真だった。それを天井を見ることができない四葉の眼前につきつけて嗤う。

「ほらほら、いい雰囲気でしょ？ きやははは♪」
「っ……」

濡れていた四葉の瞳が画像を見て凍りつき、沙耶香と司は慌てて否定する。

「こ、これは違うんよ！」

「誤解しないでよ、四葉！」

「……うん……、……二人を……信じてるから……ううっ……ひっく……」

そう言いつつも涙が溢れるのを看護婦が嗤う。

「きやはは♪ 信じてるなら泣かなくていいじゃん。ホントはもう半信半疑っていうか、ほぼ黒だと感じて泣いてるくせにさ。だいたいパターンで、ここまで来ると、もう捨てられるよ。結局さ、男って病気でガリガリの女より、健康で元気な女の子の身体を選ぶからおっぱいも段違いだしね！」

「っ……司には……私より……うぐっ……はうっ……ううっ……うわあああん！」

四葉が声をあげて泣き出した。意識が戻ったとき、ちゃんと達成感もあつたはずなのに看護婦から地獄のような虐待をされて、さらに今は股間が痒くて気持ち悪くて、知られたくなかったのにオムツへ大便を漏らしていたことを知られて、なのに司と沙耶香が仲良くしていた写真を見せられて、司のためには長生きできない自分より沙耶香の方がいいのかもしれないと考えたりもするけれど、それでは自分があま

りに報われなくて苦しくて、そして手足も首も動かせずにM字開脚で固定されてオムツ姿を晒されている状況が発狂しそうなほど苦痛だった。そんな四葉の心が、とうとう折れて大声をあげて泣き出している。もう、泣くことしかできなくなっていた。

「うわああん！ ああああん！」

「四葉ちゃん、ごめん！ ごめん！」

「謝るってことは認めるんだ」

「っ、違う！ 違うから、四葉ちゃん！」

「うえええん！ ふええええ！ ふええええ！」

「きやはは♪ ホント赤ん坊みたい！ ウケるう！ ウンコ漏らしてビービー泣いて。そりや彼氏も引くって」

「お前いい加減にしろよ！」

女性に暴力を振るうタイプではない司が怒り心頭で看護婦の胸倉をつかむ。つかまれて看護婦は薬剤の入っていない注射器で司の首を刺した。

「痛っ?!」

思わず司は手を離す。看護婦は最後の仕上げに入った。

「えらそうに彼氏ぶるなら、彼女のオムツ交換ぐらいしてみなさいよ。臭い、気持ち悪いって投げ出さなければ、ちよっとは信じてあげるよ。できるかな？ ボクちゃん」

「するさ!! お前にさせるより、ずっといいい!!」

「はい、どうぞ。オムツ交換は医療行為じゃないから、あんたらにさせてもOKなの。よろしくね」

これが狙いだった看護婦は素早く司に新しいオムツを押しつける。もう司は引っ込みがつかないし、何より四葉にとって最大に恥ずかしくて苦痛なのは、病院のスタッフや同性である沙耶香に交換されるよりも、彼氏である司にオムツを替えられることだとわかつていての誘導だった。

「ほら早くしてあげなよ。かぶれて気持ち悪いって」

「うええええ！ うええええん！」

もう四葉は泣いているだけで何も言えず、何も考えられない。

「四葉、泣かなくていいよ。ボクが優しく替えてあげるから」

「私も手伝うよ」

司と沙耶香がオムツを外すために、サイド部分を破いていく。看護婦は唾いながら見ている。

「臭いよ。超臭いよ。マジで吐くほど臭いから」

「四葉ちゃん、すぐにキレイにしてあげるからね」

沙耶香がオムツを開いて四葉の陰部を丸出しにした。べったりと柔らかい大便が股間全体に貼りついていて。茶色い大便が四葉の白い肌を汚して、わずかな陰毛にもからみつくように貼りつき、陰唇の中にまで入っている。肛門のまわりは、とくに大量の糞塊が溜まっていて、お尻は赤くなっていた。オムツを開いたことで匂いが部屋中に拡がる。

「うっっ…臭っ…最悪…ホント、異常に臭い。…うっ…吐きそう…オエ…あと、よろしく」

四葉を蔑むための演技ではなく本当に青ざめた看護婦は口元を押さえながら出て行った。

「あいつ、職場放棄しやがった」

「プロ意識がないよね。っていうか、そんなに臭くないし」

司と沙耶香は優しくウェットティッシュで四葉の股間を拭いていく。拭いていくと、うっかり手に四葉の大便が着いてしまったりするけれど黙々と続ける。

「ふええ…うっ…うっ…ぐすっ…ひっく…」

大泣きしていた四葉の涙が少し止まりつつある。

「もう少しやよ。四葉ちゃん」

「ぐすっ…ごめん…ごめんね」

みじめな気持ちでお尻を拭かれている四葉は、せめて二人に謝った。

「ええんよ」

「ああ、四葉の意識が戻って本当によかったよ。こんなことくらい何でもない」

四葉のクリトリスにまで着いている大便を拭き取り、完全にキレイ

にすると新しいオムツを着ける。

「四葉ちゃん、お尻を少しあげて」

「うん…」

ほとんど胴体も動かせないけれど、四葉は身じろぎしてお尻をあげた。司と沙耶香がタイミングを合わせてオムツをお尻の下へ滑り込ませる。

「はい、いいよ」

「…ごめんなさい…ぐすつ…」

「だから、謝らんでええよ」

「そうだよ。ボクは平気だから」

「平気どころかテツツ、さつきからエツチなこと考えてるみたいよ」

沙耶香がジト目で司の股間を見るとズボンの前が、もっこりと勃起して膨らんでいる。

「しよ、しょうがないだろー！」

「……司の……バカ…」

四葉は別の恥ずかしさを覚えて赤面する。沙耶香がオムツを閉じてサイドを止めた。

「はい、おしまい」

「ぐすつ……ありがとう…」

「鼻も拭いてあげよ。目も」

四葉の顔は涙と鼻水で濡れているので、ティッシュで沙耶香が拭いてやる。

「他に、どこか気持ち悪いところ、痒いところある？　遠慮せんと言うてよ」

「……」

四葉が迷う。

「はい、その顔はあるんやね。どこ？　恥ずかしがらんと言うて」

「……ありがとう……耳の中、……涙が入って、気持ち悪い」

「了解よ。私は左、テツツは右を拭いてあげて」

「わかった」

二人で四葉の耳の穴もキレイに拭いた。股間も顔もキレイに整え、沙耶香と司は達成感を共有しつつ四葉を見下ろした。

「うん、キレイな可愛い四葉ちゃんになってるよ」

「そうだね。いい感じだ。……っていうか、オムツ姿の四葉も、なんか可愛い」

「クスツ…それ私も思った。四葉ちゃん、小柄やし不思議とオムツ似合ってる」

「四葉、赤ちゃんを産むって張り切ってたけど、四葉が赤ちゃんみたいで可愛いよ。それに入れ替わりが起こってから神さまみたいな雰囲気だったのが、もう普通に戻ってるのも安心したし」

「うん、一時は、ものすごい上から目線でお父さんにまで命令してたもんね。それが、さっきは赤ちゃんみたいにフエフエって泣くんやもん。もう、すっかり普通の女の子やね。四葉ちゃん、可愛いでちゅよ」

「っ…二人とも、ひどいよ！ からかわないで、こんな姿、どれだけ恥ずかしいと思ってるの?!」

「ごめん、ごめん、つい」

謝りつつもクスクスと笑ってしまう二人の顔が酔ったように赤くなっている。

「あの看護婦、吐くほど臭いなんて言ってたけど、ぜんぜん平気だったよな」

「うん、むしろ慣れてくると、甘い匂いやったかも」

沙耶香が四葉の開脚されたままの左膝に触れる。

「四葉ちゃんの身体って、不思議と美味しそうな匂いするよね」

「そうそう、ボクも、そう思う」

司も四葉の右足首に触れた。

「この匂い。私、けっこう好きよ」

沙耶香が左膝から内腿を触っていく。

「ああ、ボクも大好きな匂いだ」

司が足首から爪先まで触っていきキスをする。沙耶香も左膝にキスをした。四葉は自分の下半身を見ることができないので何をされ

ているのか、皮膚感覚で知ることしかできない。どう感じても爪先と膝にキスをされている気がして訊く。

「ちよつと、二人とも私に何してるの?」

「ん、四葉ちゃんの味見い」

「四葉から、あんまりいい匂いがするから」

もう単なるキスではなくて、二人の舌がペロペロと舐めてくる。

「く…くすぐったいから、やめて。私の身体、ずっとお風呂に入っていないから汚いよ」

四葉は逃げたいけれど、少しも動けない。そのうちに沙耶香が膝から腿まで舐めてくるし、司は足の指を吸ってくる。

「あんつ…く、くすぐったいから…二人とも聞いてる?」

「美味ちゅ」

「四葉の足、すごく不思議な味がする」

「やめて、司。ホント汚いから。たぶん、私、一週間もお風呂に入っていないよ」

思い返せば月曜日から入れ替わりが始まり、今日まで丸一週間、ちゃんと入浴したことはない。四葉の足は看護婦が雑にしか拭いていないので指のまたに垢が溜まっていたし、内腿も汗や垢でベタついている。なのに二人は熱心に舐め回してくる。

「四葉ちゃんの味って最高だよ」

「うん、すごく美味しい」

もう二人とも酩酊したような口調で四葉が嫌がっているのにやめることができない。そして、舐められているうちに四葉も身体の奥が熱くなってくる。開脚したままの恥ずかしい姿勢で親友と恋人に舐め回されていると、不本意ながら息が乱れて膣が熱くなってくる。

「ハア…ハア…もう、やめて…んっ…」

さらに四葉は困ったことに気づいた。オムツ交換のために下半身を丸出しにされたためなのか、それとも点滴が続いているからか、オシッコをしたくなってくる。

「ううっ…」

尿意を我慢するために内腿に力を入れているのに、沙耶香と司が力

が抜けそうなほど舐めてきて困る。

「あううっ……やめて……おしっこ出そうなの……」

「しちやえばいいよ。オムツなんだし」

沙耶香がオムツの上から下腹部に触れてくると圧迫されて尿意が高まる。

「はっううう！ 出ちゃうから押さええないで！」

「無理に我慢しないで出しちやえば。そのためのオムツなんよ」

「そ、そうだけど……」

言われた理屈は合っいても羞恥心が尿意を堰き止める。

「せっかく二人に替えてもらったばかりなのに、また汚したら申し訳ないよ」

「また替えてあげるよ。さあ、出して」

二人が何か期待したような顔で言ってくると、余計に我慢しないといけない気がして四葉は抜けそうだった力を頑張って入れる。

「ハア…ハア…うう…」

「もしかして、四葉ちゃん、オムツにシーシーするの恥ずかしいのかな？」

「そうみたいだね。でも、いつまでも我慢できるものじゃないよ、四葉」

「うう…」

「四葉ちゃんの力が抜けるように。お耳をペロっしてあげる」

そう言っつて沙耶香は脚を舐めるのをやめて、今度は四葉の左耳を舐めてきた。

ペロ…

「はう…」

四葉が逃げようと反射的に首へ力を入れたけれど、まったく動けない。沙耶香の舌先が耳の穴まで入ってきた。

ぬちゅ…ちゅぱちゅぱ…

「ああ…ああ…」

四葉は背筋がゾクゾクとして声を漏らして、オシッコも漏らしそうになっている。そんな様子に沙耶香が耳元でクスクスと笑う。

「四葉ちゃん、耳が弱いよね。さつき掃除してあげたときもビクンって何度もなったから、すぐわかるよ」

「や…やめて…おしっこ…出ちゃう…」

「出していいんだよ、四葉」

司も沙耶香の真似をして四葉の右耳に囁いてくると、舐めてきた。

ぬちゃ…

「あううう！」

男の舌は沙耶香の舌とは、また感触が違って大きくて動き方も違って繊細な沙耶香の動きと大胆な司の舌使いは四葉を敏感にさせた。

「はあっ！ はう！ 漏れちゃうからやめてえ！」

「クスっ、四葉ちゃん、可愛い。もう一回」

ぬちゅ…ちゆるる…

また沙耶香が耳へ舌を入れてくる。司も続けているので四葉は左右から耳の穴へ舌を入れられて声だけでなく少し尿も漏らしてしまう。

ジヨツ…

両耳を舐められて力が抜けて、四葉はオシッコを一噴きしてしまった。そのまま全部漏らしてしまいそうになるのを必死に我慢して止める。

「ああっ…くううっ…止まってえ…」

もじもじと四葉が身じろぎして尿意に耐えている。開脚したままなので、とても我慢しにくい。四葉の内腿に筋肉の筋が浮いてプルプルと震えていた。

「フフ、四葉ちゃん、チビったのかな？」

「オムツの中から音がしたよね。四葉はオシッコの音まで可愛いな」

「ハア…ハア…」

「でも、四葉ちゃん、何のために我慢してるの？」

「わ…わかんないよお」

もう四葉自身、どうして我慢しているのかわからない。全部出してしまえば楽になったのに、羞恥心が邪魔するのか、歯を食いしばって額から汗が流れるほど頑張って我慢している。沙耶香は囁きながら息を四葉の耳へ吹きかける。

「力を抜いて」

フー…

「あうう…」

唾液で濡れた耳の穴が少しヒンヤリして四葉は身悶えする。いつのまにか、左の乳首を沙耶香の指先がつまんでくるし、司まで寝間着に手を入れて右の乳房を揉んできている。

「困ったねえ。なかなか出ないねえ。四葉ちゃんが素直にオムツにシーシーできるよう、私が魔法をかけてあげる。私の声で魔法をね」

「ハア…ハア…」

「私の名前は名取沙耶香だったよね。パパとママが沙耶香にするか、早耶香にするかで、名前の取り合いをしたから、名取りなんて冗談を言われるけど本当は違う。名取家だって宮水家と勅使河原家とともに、この町を守ってきた御三家の一つ。この話はね、私たちが20歳になったら聞かされるけど、私はお婆ちゃんがお姉ちゃんに話してるのを聞いてしまったの。でね、宮水家に巫女としての力があつたり、勅使河原家に金運があつたりするみたいに、名取家には声に力があるの。声って大切だよ。歌も放送も口伝も、みんな声の力。かけ声も鬨の声も。こんな山奥の村が2400年も前から、ずっと途絶えないで生き残ってこられたのは御三家が協力していたから。巫女と金運と声、その三種の神技で」

「ハア…ハア…サヤボボ？」

「そう。私たちは家族の間でも本名で呼び合ったりしない。サヤチン、サヤボボって別の名前を使う。だって、お互いの声に力があるから、本当の名前なんて呼び合ってケンカしたら大変なことになってしまう。ね、宮水四葉」

沙耶香がフルネームで呼びかけてくると、四葉は不思議な力を感じ

た。よくわからないけれど、自分のすべてを沙耶香の掌にのせられたような感覚がする。

「名取家は、声で人の名を取ったり、ときには声で勇気を与えて名声を取らせたりする。だから、名取。今から宮水四葉の名前を取ります」

「え？ え？」

「もう、あなたは宮水四葉じゃないの。ただの……そう、ミーちゃん」

「……みー……」

「もう今のあなたはミーちゃんだから、何をしても大丈夫。恥ずかしいことがあっても、それはミーちゃんに起こること」

沙耶香の美声が耳元で囁いてくると、四葉は脳が痺れるような気がした。もう言われるまま、身を任せたくなる。沙耶香はオムツの中へ手を入れて四葉のクリトリスに触れた。そこは、すでに小水以外の粘液でも濡れていてクリトリスも勃起している。ずっと司は四葉の身体を舐めているし、沙耶香も囁きながら指先で乳首を刺激していたので自然な反応だった。

「さあ、あなたの名前は？」

「……みー？」

「そうだね。ミーちゃんだね。いい子、いい子」

「ミー♪」

四葉は頭を撫でられると嬉しそうに鳴いた。

「さあ、ミーちゃん。ずっと、おしっこを我慢していると、つらいから、もうしてしましましょうね」

「ミー……」

「大丈夫。ミーちゃんはオムツをしてるから、シーシーしても平気だよ。ううん、平気なだけじゃない、とつても気持ちいいの」

沙耶香が囁きながら、四葉のクリトリスを指先で擦る。

「あ……みー……みーんっ……」

四葉が気持ちよさそうに喘いだ。もう人間の言葉を使うと脳が恥ずかしさを思い出すので、幼児か猫のようにミーミーと声をあげるだ

けになっっている。

「可愛いね、ミーちゃん。さあ、とつても気持ちいいオシッコしようね。私がね、こうやってミーちゃんのクリトリスをクルクルしてあげてるから、ミーちゃんはオシッコすると同時にイってしまうの。私は指でミーちゃんのおシッコを少し押さえてクリトリスに当たるよう流れを変えるから、ミーちゃんは自分のオシッコシャワーでイクの。イキまくるの。オシッコが止まるまで何度も何度も」

「…ミー……ハア……ハア……」

「うん、期待してる顔してるね。気持ちいいオシッコして何度もイこうね。もう、ミーちゃんは私の掌の上。指先で踊るの。名取の力、言の葉の庭は言葉で人の心を庭のように掌握する。さあ、もう出ちやいそうだよ。我慢するのつらいよね」

「ハア……ハア……うう……」

「あと10秒でミーちゃんに限界が来る。おもらしまで、あと9秒」

「ハア……はう……ミー……」

「8秒。まだ出しちゃダメ。我慢して、7秒」

「ミー……ミーんっ……」

「もう、あと6秒。気持ちいいよ。さあ、5秒。ずっと我慢してたオシッコ全部しちやおうね。4秒」

「ハア……ハア……ハア……」

「3秒。もう出る。出ちやう出ちやう、2秒。さあ、オムツにおもらし、しちやおうね。赤ちゃんみたいにシーって。あと1秒。何度もいつちやうエツちなミーちゃん、おもらししなさい。ゼロ」

「はミー……いんっ!!」

絶叫すると同時に四葉の尿道から、オシッコが噴き出してくる。

「しよわああああ!!」

その熱い奔流を沙耶香は指先で押さえて流れを変え、クリトリスへ当たるようにした。

「ビビッビイビイ！」

「みううん!!!」

自分の小水が激しくクリトリスを責めてくる。満杯だった膀胱が

ら放尿する快感と、クリトリスを熱い放水で打たれる快感が重なり、四葉はブルブルと震え何度も絶頂していく。あまりの快感で嬉し涙が零れ、口が半開きになってだらしなく笑っているような表情になり、目が恍惚としていく。

「はああああはあああ」

「イってる。イってる。もう何回目？」

「ハア…はあああ…あ！ あはああ！ あああ…ハア…ミイイ…」

「ミーちゃんのアへ顔、可愛いね。熱いオシッコが私の手に当たってるよ。こんなにいっぱい出して、よく我慢したね、えらいえらい」

「…ハア…ハア…ああ…」

ようやく小水を出し切り、ぐったりと四葉は弛緩する。ずっと頑張って我慢していた緊張から解き放たれ、快感まで与えられて、もう頭が真っ白になっている。

「さあ、ミーちゃん。そろそろ元に戻ろうね」

沙耶香が少し意地悪な声で言う。今までと声のトーンを変え、やや男性のように問いかける。

「君の名は？」

「…え？ ……ミー…」

「違うよね。君の名は？」

「……………」

四葉の瞳が質問から逃げるように左右へ彷徨う。

「さあ、君の名は？」

「……………」

「君の名を、言っようか」

「……………」

四葉がイヤイヤするように首を振ろうとして動かさないので瞳だけが揺れる。

「さあ、教えてよ。オムツに、たっぷりおもらした、君の名は？」

「……………」

四葉が顔を真っ赤にして恥じらって誤魔化そうとしている。

「ミーじゃないよね。本当の君の名は？」

「…………ぐすつ…」

泣きべそになって四葉が唇を尖らせている。

「言えないのかな？」

「…はい…」

「そうだよね。言えないよね。高校生にもなつてオムツにおもらししたなんて。しかも、おもらししながらイっちゃったよね。何度もエッチなくせに、おもらしなんて赤ちゃんみたいなこととして、なのに何度もイっちゃって」

「はうう………」

四葉のオムツは大量の尿で膨らみ、重くなっている。沙耶香はオムツの中から手を抜くと、四葉のオシッコで濡れた手をペロリと舐めてから、四葉のオムツを外から押さえてみる。

「ほら、こんなに大量に」

オムツを押さえつけられると、まだ温かい濡れた感触が股間に押しつけられ、おもらしした実感を強制的に味あわされた。四葉は恥ずかしくて涙が流れる。

「うう………」

「君の名は？」

「……………お願い……………許して………」

「ミーのままでもいいの？」

「うん」

「そうだよね。恥ずかしすぎるよね。宮水四葉」

「つ………」

四葉がギョツと目を閉じた。けれど、沙耶香は言葉責めをやめない。

「宮水四葉。おもらししたのは宮水四葉」

「あうううううつ………」

「あうあう赤ちゃんみたいな声で誤魔化してるのも宮水四葉。高校生なのに、あうあう言ってます」

「つ………」

「誤魔化さないで、ちゃんと言いなさい。君の名は？」

沙耶香は問いながら、手で司の肩を叩いて意思を伝える。それだけで司も悟り、いっしょに反対の耳から問いかける。

「君の名は？」

「……うう……」

「学年トップだったよね」

「しっかり者の妹さんだよね」

「町でも評判の」

「学校でも高評価」

「神社の巫女様」

「みんなのアイドル」

「……ゆ……許して……もう許して……」

しっかり者に育ったのは母を早くに亡くしたこともあれば、姉が頼りなく高卒で出て行つてからは神事の多くをこなしてきたこともあり、けれど本当は甘えたりせずに育った心理を知っている二人から言葉責めさせると、四葉は羞恥心と自尊心と誰かに甘えたい気持ちが綱い交ぜになつていく。

「君の名は？」

「ああ……ち……違うの……これは……ミー……が……」

四葉は目を閉じて、耳も塞ぎたいけれど、耳は塞げない。その耳に沙耶香と司が言ってくる。

「宮水四葉」

「ううっ……」

「おもしろしたのは四葉ちゃん」

「四葉のおもしろ可愛かった」

「さあ、自分でも言いなさい。おもしろしたのは宮水四葉です、って」

「っ……そんな……」

「言わないと、終わらないよ」

「ううっ……」

「さあ、君の名は？」

「君の名は？」

「……………み…みや…む、無理……………もう許して…お願い」

「そう。じゃあ、もう少しだけ優しくしてあげる。赤ちゃん言葉で言ってみようか、おもらちしちやったのは宮水四葉でちゅ、って」

「あううっ…」

「うん、いいよ。あうあう言ってもいいの。だって、今だけは四葉ちゃんには赤ちゃん」

むしろ、ハードルをあげた沙耶香は、もう冷たくなってきたオムツを再び四葉の股間に押しあてる。

「ほら、言いなさい。おもらちしちやったのは宮水四葉でちゅ」

「あううう…」

「はい、おもらちしちやったのは？」

「……………四葉……………でちゅ…」

「クスッ、もう一回」

「……………うう…」

「おもらちしちやったのは宮水四葉でちゅ。クスクス、私の声で囁かれると、どンドン恥ずかしくなるよね。言葉にして声に出されると、人の心に深く入り込んでいく。いいのかな？ ちゃんと言えるまで終わらないよ。何度も何度も、私は言っておけるけど、いいの？」

「あううう…」

「さあ、おもらちしちやったのは、誰でちゅか？」

「…うっ……………ううっ……………お……………おもらち……………しちやったのは……………み

……………宮水…………………………四葉……………でちゅ……………あああ！ ああああ

！」

恥ずかしくすぎて四葉は叫んでしまう。沙耶香は満足したように微笑み、また問う。

「さあ、そろそろオムツを替えてあげないとね。どっちがいい？ 私か、それとも」

沙耶香が司を指した。同性の自分がいいか、交際を始めたばかりの司がいいか、あえて本人に選ばせている。

「……………うう……………」

「そのままですと、また痒くなるよ」

「四葉、ボクが替えてあげようか」

「……うう……」

どっちも恥ずかしいので答えが出せないでいると、また沙耶香が言葉責めしてくる。

「おもしろい上、自分の意思も言えないなんて、本当に学年トップなのかな？」

「あうう……」

「また、あうあう言う。赤ちゃんのままだいい？」

「……うう……」

「学校でも町でも、しつかり者で有名な宮水四葉が本当は、こんな赤ちゃんみたいなんて、みんな知ったら、どう思うかな？　言っちゃおうかな。放送しちやったりして」

「っ……言ったらイヤだ！　ヤダよ!!　絶対言わないで!!」

「クスツ……言わないよ。私たちだけの秘密」

やや意地悪な声だった沙耶香は一転して優しく囁きかける。

「可愛い可愛いミーちゃんがいることは私たちだけの秘密」

「……本当に誰にも言わない？」

「安心して」

「……ぐすっ……」

「はい、じゃあ、二人でオムツを替えてあげるね」

「…………お願いします」

動くこともできない四葉は身を任せて二人にオムツを交換してもらう。沙耶香と司の手でオムツが開かれた。濡れたオムツから、ふわっと匂いが立ち上った。

「……いい匂い……」

「……なんて香りなんだ……」

沙耶香と司が陶然として四葉の股間に顔を近づける。四葉は二人から股間を舐められて驚いた。

「ちよっ?!　イヤだ！　舐めちゃダメ！　汚いから！」

「汚くないよ、美味しいよ」

「うん、すごく美味しい」

「二人ともお腹壊すよ！ ヤダよ、もう！ 正気に戻って！ おかしいよー！」

四葉が怒っても二人とも舐めるのをやめない。やめないどころか舐め続けてくるので、そのうち四葉も甘い快感に負けて何度も絶頂させられてしまう。沙耶香と司は何を言っても四葉を舐め続けてくる。両腕を固定されて動かせない四葉の腋へも舌を入れてきた。

「ハア…ハア…ヤダよ…一週間もお風呂に入っていないって…言ってるのに…イヤな匂いするでしょ…毛も伸びてるからイヤなの…」

「美味ちいよ」

「四葉の身体は、どこだって最高だよ」

もう二人の目は酩酊しきっていて四葉は自分の身体に何か二人を酔わせる成分があるのかもしれないと考え、もう満足するまで舐めていてもらおう、どうせ動けないし、気持ちいいし、と諦めて思っていたけれど、お腹が不穏な音を立てた。

キュルゴロゴロ！

「ううっ…痛いっ…」

お腹が痛む。四葉の腹部が激しく痛み、鳴った。

「ハア…ハア…こんなときに…」

四葉は動けないまま鼻に挿入されているチューブを見上げた。ずっとオレンジ色のペーストが一定速度で落ちてきていたけれど、もうパックは空になっている。すべて四葉の胃に流し込まれていて、おかげで空腹感はないけれど、お腹が痛くなっている。

「ううっ…ふ、二人とも聞いて！」

今にも肛門から排泄してしまいそうな腹痛に襲われながら、沙耶香と司が股間を舐めているので告げる。

「お腹が痛いの！ たぶん、この栄養剤のせい！」

看護婦が温めずに流し込んだために四葉は下痢になりかけていた。

「だから、そこから顔をどけて！ オムツをはかせて！」

「ミーちゃん、オムツをはきたいでちゆか？」

「サヤボボお願い目を覚まして！ 今にも出そうなの！ ううっ！
うっ！」

「クスっ、四葉の我慢してる顔、可愛いな」

「司、ひどっ…ううっ…ハアハア！ 聞いて！ 私の筋力、たぶん半分
に落ちてるの！ もう3日経ってるから！ さっきもオシッコ我慢
してて感じたけど！ 身体に力が入りにくいのに！ きつと、北斗神拳
のせいで筋力が半減してるの！ だから…だから、ああ！ ううっ
！ もう無理…ハアハア！ 出ちゃうの！ 見ないで！ 舐めな
いで！ オムツをはかせて！ あっ！ あ！ ああああっ！」

筋力が落ちていることもあって肛門の括約筋も、すぐに腹痛に負け
てしまった。

ブリッ！ ブブリブリイ！ ぼたぼた…

四葉の肛門から軟便が吹き出し、沙耶香と司の顔にかかった。

「…美味ちい」

「あ…うまい」

二人が自分の便を口に入れたり舐めたりしている気配がするので
四葉が困惑する。

「ちよっ、ちよっ?! 何してるの?! ねえ！ まさか、食べてないよ
ね?!」

見えないけれどペチャペチャという音や、汚れたお尻を舐められる
感覚でわかりたくないのに、わかってしまう。

「やめて！ そんなもの食べないで！」

いくら四葉が叫んでも二人は食べ続け、残らず食べきってしまった。
た。

「もうないの?」

「また出してよ、四葉」

催促するように肛門を二人が舐めてくる。

「ううっ…ごめん…私の身体に変な成分があって…きつと二人
を、こんな風に…」

「四葉、もう無いならさ。今度は、これ」

司がズボンのチャックを開けて勃起した男根を出した。

「司……うん、それならいいけど」

自分の大便を食べられるより、ずっといいので四葉も了承したけれど、司がポケットからコンドームを出すと残念そうな顔をする。

「司、そんなの使わなくていいよ。それって中学のとき習ったけど、たしか妊娠しなくなる物だよな?」

「使わなくていい?」

「うん、無しで直接、お願い」

「わかったよ」

司はコンドームをポケットに戻すと、もう開脚したままで準備OKな四葉へ正常位で覆い被さりつつ、男根を四葉の肛門に挿入する。

「あうっ?! ち、違う! 司、そっちじゃないよ!」

「四葉のこっちの処女もほしいんだ」

「司……」

四葉が見上げて司の瞳を見ると、やっぱり酔っているような色合いが残っている。四葉は直腸に入ってくる男根を感じつつ、まあいいか、と思った。

「司、こっちの穴なら、さっきの使ってくれた方がよかったかも」

「ううっ!」

司が3回目のピストン運動で射精してくる。

ビュルビュル!

四葉は腸内に、かすかに温かい感触を覚えつつ、男根が萎えていくのも感じた。

「……………」

「……………」

四葉と司が黙っていると、沙耶香が淋しそうに四葉の爪先を自分の股間にあてがってくる。四葉は足の親指が沙耶香の膣に包まれた感触がしたので驚く。

「ちよっ?! サヤボボ?! 何してるの?!」

「だって二人だけ……私も気持ちよくなりたいんやもん」

沙耶香はスカートのまま四葉の足を跨いでショーツをよって膣で爪先を啜えている。

「私の爪先なんか大事なところに入れちゃダメだよ！」

「四葉ちゃんの親指ちようどいいよ」

「そういう問題じゃなくて…ううっ！」

また四葉に腹痛が襲ってきた。

ゴロゴロ！ キュルル！

「うううっ！」

「また出るの？」

「また出るんだ」

沙耶香と司が期待した目で問うてくる。

「ダメ！ ダメだから！ 変なもの食べないで！」

「四葉ちゃんのウンチ、最高に美味しいよ」

「四葉のウンチは変なものじゃないよ」

「ううっ…正気を…取り戻して、お願い…ああっ…くううっ…力が…」

二人に食べられたくないので我慢しようとしても筋力が半分になつていて力が入らない上、沙耶香と司が両手で四葉の尻肉を拡げてる。下痢便を我慢しようとしている肛門を4つの手で開くように拡げられると、開脚している四葉はなすすべなく失禁した。

「イヤ…出ちやう…あああっ！」

ブリ！ ブブブ！ ぼた…ぼた…

軟便と司の精液が噴き出してきた。

「わああ、美味しそう」

「…ボクの…」

自分の精液が混じっていた司は引く。沙耶香が一人で食べ始めた。

「あああ！ 美味しい、美味ちにゃ〜」

四葉の大便と司の精液を舐めとって飲み込み、幸せそうにしている。

「……………」

「美味ちにゃ〜」

沙耶香が正気を失った笑顔で食べ終えたときだった。病室に再び

看護婦が戻ってきた。

「臭っ……ホント臭いわね」

看護婦はエアコンを最大換気モードに操作してから、四葉たちを見る。司は気づかれないように男根をズボンに片付け、沙耶香もショーツを脱いでいなかったなので、そのまま座り直して誤魔化した。けれど、看護婦は液晶テレビの近くに目立たないように置いておいたスマホを手に取ると、データを確認して、ほくそ笑む。

「きゃははは♪ 信じられない！ やっぱ勅使河原の血筋って変態よね！ ほら、見て見て」

看護婦が四葉にスマホを見せてくる。そこには四葉たち3人が映っていた。ちょうど最初のオムツ交換を始めるときから、今までの動画が盗撮されていた。

「まさか……スマホを……ずつと……」

四葉が問い、看護婦が冷笑する。

「そうよ！ エロガキどもが何かするかと思って置いておいたの！ まさか、ここまで変態だとは思わなかったけど！ いい映像が撮れたわ！ これ週刊紙に売ったら最高よね?!」

「……………」

「あとさ、あんたのオヤジ、東京に出張へ行くとホテルにデリヘル呼んでるよ」

「……………」

「ほら、証拠写真もあるし」

看護婦がデリヘル嬢と俊樹がビジネスホテルへ入っていく写真も見せつけてくる。娘として少し残念だったけれど、あまりショックを受けていない様子の四葉に、看護婦も残念そうにしたけれど言い募る。

「このネタで叩けると思って週刊紙に売り込んだのに掲載されないから、もっとインパクトあるの狙ったら、ここまで変態プレイするとは思わなかったわ！ いい！ 最高よ！ これ週刊紙よりユーチューブにあげた方が世界中に広まっていいよね?! これで勅使河原も宮水も終わりよ！ ついでに名取も！ 御三家全部、終わらせてやる!!」

「きゃはははははは!!」

「……………あなた……………誰なの?」

明らかに三人のことを知っている看護婦の口ぶりに四葉が問うと、看護婦は笑うのをやめて迫ってくる。

「私の名をいってみなさい」

「……………」

四葉が看護婦の顔を見る。大きな絆創膏のおかげで目くらいしか個人を判別するヒントがない。鉄仮面をかぶった状態で自己誰何するよりマシだと思うものの、わからない。四葉だけでなく、換気されたおかげで正気に戻った沙耶香と司も状況を認識して、看護婦が誰なのか考える。

「……………私……………この人、見たことあるような……………」

「ボクも……………そんな気が……………」

「それは私もなの」

四葉も見ることがある気はするけれど、思い出せないでいる。

「もう一度だけチャンスをあげるわ。私の名をいってみなさい」

「……………」

「そう。社会的に死にたいのね。この動画、アップしたらどうなると思う?」

「そ、そんなことしたら、お前だってクビになるぞ!!」

司が脅し返しても、看護婦は引かない。

「いいわよ、どこか遠くで再就職するから!」

「くっ……………お、お願いだ! 待ってください! さっきのボクらは、どうかしてんだ!」

司が土下座して頼むと、沙耶香も土下座する。

「どうか待ってください! お願いします!」

「フフ……………いいわ。最高に気分がいいわ。勅使河原と名取が私の足元にひれ伏してる。なんて、いい日なの」

「あなた、本当に誰なの? なぜ、私たちを恨んでいるの?」

動くことのできない四葉が問い直すと、看護婦は顔の絆創膏を剥がした。

「この顔の傷、3日経っても治るどころか、まだ膨らんで疼くのを」
看護婦の顔には四葉の掌打を受けた傷があり、そこは肉が内部から破裂しかけたように膨らんでいる。

「医者には単なる打撲だっていうけど明らかに変よね。この傷が治らなかつたら、どうしてくれるか」

「……………ごめんなさい」

四葉は北斗神拳による傷跡を見て、あまりに申し訳なくて謝ったけれど、看護婦は唾を吐きかけてきた。

「ごめんで済むかつ!!」

看護婦は美人というわけではないけれど、年齢は三葉と同じくらいで女性の顔にある傷跡としては、あまりに痛々しい。動けるなら四葉も土下座して謝りたい気分になったけれど、M字開脚で下半身裸のまま何もできない。

「さあ、この顔を見ても誰だかわからないの?」

「え……………でも、それは3日前に私が当てた傷で……………あなたが私たちを恨んでいるのは、もつと前からじゃ……………」

「そうよ! だから、この傷がない顔を思い出してみなさい! 私の名を!!」

「傷が無かったら……………あ! えつと!」

「ボクも思い出した!」

「私も!」

三人が看護婦を思い出した。

「えつと……………あの……………ほら、お姉ちゃんと同じ学年の……………」

「そうそう、お姉ちゃんと同じ学年の……………えつと……………」

「兄貴と同じ学年だったはず……………名は……………えつと、……………名前は……………」

小さな町なので、お互いに知っているはずなのに名前が思い出せない。看護婦が業を煮やしたように足元にいる司を蹴った。

「あんたら家持ちは、いつもそうだ!! 私らを人間と思ってない!!」

「うぐつ……………」

「とくに御三家!! あんたらに私たちは顎で使われ、この町で生きてきた!!」

そこまで言われて沙耶香が気づいた。

「あなたは、町営の…」

「町営の子?! それって名前?!」

「……すみません……」

この町では町営住宅に住んでいる住民のことを、単に町営と呼んだり、その子供を町営の子と習慣的に呼んでいた。田舎なので、ほとんどが広い一戸建てに住む中で、町予算による補助があつて家賃が割安だけれど、狭くて長屋造りの町営住宅に住む階層は生活保護受給家庭だつたり、母子家庭だつたり、父親が居てもアル中だつたりと事情のある世帯ばかりで、町の人間も付き合い方を選んでる。あまり関わらないし、関わっても可哀想なので野菜を施したりする程度だつた。町の治安は良く空き巣などないので、どの家も鍵をかけないのが普通だつたけれど、町営住宅から100メートル以内の家では鍵をかけているし、町営の子が遊びに来ると、ほぼ無意識で町民は財布などの貴重品をさりげなく管理している。そして、町で唯一のコンビニで万引きが起きてパトカーが来ると、ほぼ100%町営の子が捕まつていった。

「思い出した。あなたはお姉ちゃんと同じ学年で……お父さんの選挙のとき……」

四葉も小学校時代のエピソードの一つを思い出した。父の選挙のさいに登校中、三葉と克彦がそろって登校していることを、土建屋と町長はその子供も仲がいい、と揶揄してきたグループにいた子だと気づく。学生の時期は一見して平等で、むしろ家柄のいい子の方がおとなしく、町営の子が何でも言えるけれど、大人になって町内で就職すれば、もう勅使河原にも宮水にも逆らえない、それが本能的にわかっていて、せいぜいの野次を飛ばしていただけた一人だつた。

「さあ! 私の名を言ってみなさい!」

「……すみません……知りません」

この小さな町で名を知らないというのは、相手にしてない、人と思っていないということと同義だつた。それぞれに家のある町民同士は名字で呼び合う、宮水の旦那、勅使河原の息子さん、と家族内の

ポジションで親しく呼ぶ。けれど、町営住宅に住む人間のことは一括して町営、そして子供は町営の子だった。町内会組織でも、それぞれの集落は仲良くしているけれど、町営住宅だけは役場直轄でゴミ捨て場も別、子供会も別だった。そのために四葉たちも意図して差別しているわけではないけれど、ごく自然に看護婦の名前は知らなかった。その無自覚の差別が許せないように看護婦が沙耶香も蹴る。

「ぎゃっ！」

「私らにだって！ 名前はあるんだよ！ とくに御三家！ 調子に乗りやがって！！ 私たちと何が違うっていうのさ！！」

町のヒエラルキーの中で経済は勅使河原家、宗教と政治では宮水家が頂点に立ち、名取家はサポートとして声かけ役をしている。お金の流れも、まずは地方交付税交付金が町役場に入り、町長が差配する。その中で旨味の多い土木建設系の随意契約などは、勅使河原家に振り分けられ、その勅使河原家が下請けや孫請けに、ごく当然にピンハネして仕事を与える。そして宮水家には氏子からの集金と賽銭、祈祷料、各事業所からの上納金が入り、名取家は町役場勤務の職を回してもらえる。底辺の町営の住民には日雇いの交通整理や危険な高所作業が回ってくるだけで、それもピンハネを繰り返した挙げ句の末端被用者なので旨味は何もない。炎天下に一日立って7300円、目のくらむような山間の崖で作業して1万6500円だった。完全に固定化された格差社会が小さな町の中にできている。たとえば、努力して資格をとっても差はなかなか埋まらないし、大きく出世して大手ゼネコンに就職しても、町がからむ仕事だと地元理解の名の下に、なぜか下請けになるはずの勅使河原建設に頭が上がらないという力関係で格差は永遠だった。

「私の親は、あんたらの親にこき使われて生きてきたんだ！！ 搾取されまくって！」

さらに看護婦が司を蹴る。

「それがイヤで私は看護師になったの！！ 高校卒業した途端に母さんの生活保護を打ち切りやがって！！ バイトしながら資格とるのがどれだけ大変かわかる?! なのに就職してからも奨学金の返済!!」

夜勤しないと生活していけない!! あんたらと私で何が違う?! なに東京で優雅に学生してんの?! あんたらの金だって、もとは税金でしょ?! 宮水!! お前なんか乞食と同じよ!!」

「あなた、あのときも……」

そう言われて四葉は子供の頃にあつたことを思い出した。大晦日の夜、年越しの神事が終わり、午前1時頃に御賽銭箱を開けてお金を集めているときだった。この看護婦が他の男子とグループでやってきて5円玉を三葉の肩に投げつけながら言った、お前らって乞食と同じだな、この金ネコババできていいな、と姉は反論して、きちんと集計して神社のお会計に入れています、ご参拝ありがとうございます、よいお年を健やかにお過ごしください、と目を伏せて静かに言っただけ、じゃあお前らが喰ってる飯代や生活費はどうなってるんだよ、と追求され、お給料として神社のお会計からいただいています、と答え、結局ネコババといっしょじゃん、と罵られるともう姉は黙ってお金を専用の箸で集めていった。そばにいたお年寄りが三葉を可哀想に思っ、あれは町営の子らやから相手にせんととき、と励ましてくれた。それが言葉として、町営の子を四葉が認識した最初だった。まだ子供だった四葉にとって、いまだ忘れていない記憶だったけれど、やっぱり看護婦の名前は知らない、そういう人間関係だった。

「この乞食が!!」

看護婦が動けない四葉の腹部を殴ってきた。

「うっー!」

ブリ…

お腹を殴られると、わずかに残っていた軟便が肛門から零れた。

「なにが巫女よ! 同じ人間じゃない!! 奇跡なんか起こせない!

ウンコ垂れのゲロ女! ゲロ酒でも造って売ってる! この売女!」

もう虐待の発覚など気にしなくなった看護婦が四葉の顔面を狙って殴ってくるのを司がかばって背中を受け止める。女性の手で男の背中を殴ることになったので、むしろ看護婦の方が痛いけれど興奮しているので止まらない。司の背中を殴り続ける。

「この変態ども!! この町の頂点から引き摺り下ろしてやる!!」

「司……」

「大丈夫……このくらい……」

「もうやめてください!!」

沙耶香が看護婦にとりついて止めるけれど、振り払われる。

「ゲロ酒であきたらずウンコまで喰う手で触らないで!! 気持ち悪い!!」

「お願いです、どうか、やめてください! 私たちが何をしたっていうの?!」

「何をしたか?! 何もしないで優雅に暮らしてるヤツらに私らの苦勞がわかるもんか!! お前ら毛布2枚で冬が越せるかア?! いつも小便を便器でしてるヤツらに!! 水道代の節約だって言われて住宅の外に追い出される女の子の気持ちかわかる?! 小川で済ませるミジメさが!! 指さして笑いやがって!! 人を人とも思わないお前らに復讐してやる!! この動画を世界中にバラまいて!! ド変態の御三家を! この世界から消し去ってやる!!」

幼い頃から色々と町社会に不満をためて成長してきた看護婦は、沙耶香と司への暴行を続け、動けない四葉は泣きながら謝ってやめたと頼みただけれど嘲笑される。

「きやははは♪ いいカツコね! ザマアミロ!!」

「ううっ……うっ……」

「このオオボラ噴きのキチガイが!!」

看護婦が四葉の鼻へ挿入されているチューブを痛いようにグリグリと動かしてくる。

「ううっ!」

「お前も! お前の姉も! 母親だってそう!! この町を救ったとか! 意味不明なことを垂れ流して!! 町民も騙されて!! ただのゲロ女が調子に乗りやがって!!」

「ゴホッ! ケハッ! うええ!」

鼻から喉、胃まで挿入されているチューブを乱暴に動かされると苦しくて咳き込むし、再び嘔吐しそうにもなる。

「ただのキチガイ家系のくせに!!」

「うつオエえ! ゴホツ! ゴホツ! んああ! 痛っ!」

「お前の母親なんて死ぬ前に何度も人格が変わって、狂い死にしたみたいなものでしょうが!! お前もきつとそうなる!! 人格障害は遺伝するのよ!!」

母親を侮辱された瞬間、四葉の目の色が変わる。

「お母さんを悪く言うなア!!」

四葉が怒鳴り、手足に力を入れて拘束具から抜け出そうとする。

「きやははは♪ 無理無理! それはね、薬中のジャンキーが暴れても千切れない丈夫なヤツなんだから! きつと、お前の母さんも、こんな風に拘束されてたんだよ! キチガイゲロ女ども!!」

「ぬああああああああ!!」

筋力が半減している四葉が雄叫びながら怒り狂うと、筋肉がモコモコと海綿体のように膨らんでいく。

ブチブチ!!

四葉の腕が筋肉で隆々になり頑丈な革ベルトが千切れていく。

「なっ…」

「うわああああああ!!」

さらに首や胴体、脚を固定していた革ベルトも引き千切る。四葉の腹筋が割れるほど隆々になり、脚の筋肉も何倍にも膨れあがった。点滴の針が皮膚から飛び出し、鼻に挿入されていたチューブを引き抜くと、すでに寝間着も破れ飛んでいて、全身筋肉隆々の四葉が全裸で立っていた。胸に装着されていた心拍を診るモニターの痕は、まるで北斗七星のように並んでいる。

「…あ…あの…拘束ベルトを…千切るなんて…バカな…」

驚いている看護婦の前に四葉が立った。

「北斗巫娼拳、撫那死目路!!」

ズンツ…

四葉が指先で看護婦の頭部を突いた。

「秘孔、末岳を突いた。あなたは自分の名前も忘れるほどの認知症になる。どんな記憶も3分と続かない。恨みも逆恨みも、妬み嫉みも喪

い、忘却の恍惚を彷徨うといい」

「え……？」

「あなたの名は？」

四葉が問うと、看護婦は首をかしげる。

「私の名……名前……あれ、……何だったかしら……？」

「今は何年？」

「え……？ ……何年だったかしら……ねえ？」

「ここは、どこ？」

「どこ？ ……どこなのかしら……」

何もかも忘れていた様子を見ながら、四葉は廊下の方へうながした。

「さようなら。この部屋から出て行って」

「あ……はい……さようなら」

看護婦は老婆のような足取りで病室を出て行った。

「よ……四葉、その筋肉は……」

司が驚きつつ問い、四葉も考える。

「あれから3日……筋力は半減していたけど……北斗神拳のことは忘れてない。秘孔もわかる。たぶん、ずっと意識不明だったから身体に定着してくれたのかも……」

「そ……その身体は、そのままなのか？」

司が筋肉隆々の四葉の身体のことを問い、四葉も自分の手を見る。胸筋も肥大化していて、もともと乳房が小さめなので、おっぱいが胸筋のオマケのようになってる。

「うーん、たぶん、あと少して元に戻る感じ。元というか、半減状態に」

「そっか……よかった……」

「さてと、あと一人、懲らしめなければならぬ人がいるよね」

四葉が拳をバキボキと鳴らしながら、沙耶香に近づくと、

「え？ え？ な、なんで?! わ、私？ と、と、友達だよ？ わ、私たちさ！」

青ざめた沙耶香は後退りしたけれど、そう広い部屋ではないので、

すぐに壁に追いつめられた。

第8話

筋肉隆々になった四葉に迫られて沙耶香は壁際に追いつめられていた。

「ま、ま、待って！ な、なんで?! ど、どうして、私?!」

「自分の胸に訊いてみたら?」

「あつ…、で…でも…ち、違…:…あれは違うの!」

沙耶香が否定しても、四葉は看護婦から奪っておいたスマフォを眼前につきつけてくる。そこには抱き合っているように見えなくもない沙耶香と司が写っている。

グシャツ!

四葉が圧倒的な握力でスマフォを握り潰すとバラバラに落ちた部品を踏みにじってから、再び沙耶香を睨む。

「こんな気持ちになるなんて思わなかった。友達を本気で殴りたい、力任せに何度も何度も殴ってやりたい、こんな真っ黒い気持ちになるなんて」

「ひっ…ひいいい…」

今の四葉に殴られると瞬殺されるとわかるので沙耶香は腰が抜けて座り込む。

「これが嫉妬…:…最悪の感情」

「四葉、待って! 違うんだ! 誤解だよ!」

「司は黙っていて、これは女同士の話だから」

「うっ…:…でも、暴力はダメだよ。暴力は」

「…:…ええ…:…友達を殺したくはないから。でも、実際、よくサヤチンさんは耐えたと思うよ。お姉ちゃんを殺さなかった…:…だから、私も…:…すーっ…:…はああ…:…」

四葉が深呼吸すると膨張していた筋肉が細くなり、元の四葉に戻った。

「…:…:…」

それでも本気で怒っている顔で沙耶香を見下ろしている。

「…ご…ごめん、四葉ちゃん…でも、違うんよ。あれは…」

「まだ言い訳する？」

「っ……」

「私の目を見て答えなさい」

「は、はい」

「私の意識が無い間、一度も司を盗ろうと思わなかった？ 一度も」

「……」

沙耶香が無意識で目をそらして右下へ瞳が動く。

「目、そらしたね」

「ち、違う…：そ、そんなつもりじゃ…」

「どんなつもりでも、あんなな写真を見せられた私の気持ちがわかる？」

「………ごめんなさい…」

「くっ…ごめんて許せると、いいねッ！ この真っ黒い気持ちをさア
!!」

四葉が手を振り上げて、それから暴力を思いとどまって手を下ろす。

「仕返しはする。っていうか、後顧の憂いをなくしておく」

四葉は病室にある机に近づくと、そこにあつたボールペンとメモ用紙を手に取り、沙耶香に突きつける。

「はつきりさせたいから書いて」

「……何を？」

「司にラブレター、きっちり司に気持ちを伝えて」

「っ…わ、私は、別に…」

「もう今さら誤魔化さないで卑怯者」

「うっ…」

「さあ、書いて！ 去年、私に見せてくれたよね?! エープリルフルにこんなラブレターを渡したらテツツ〜どんな反応するかな、って。あれって遊びっていうより、私への予防線だったでしょ？ 司が私のこと好きなの気づいてて、自分は司のこと好きかもしれないって私には教えておく。そうすれば、司が私に告白したとき、振ってくれるか

もしれない。そんな計算してさ」

「…あ…あれは……」

「司、たぶん、サヤボボが男として司を意識したのは中学の修学旅行のときだよ。あのとき外国人に道を聞かれてサヤボボが困ってるのを司が英会話で助けてあげたでしょ。たぶん、それがキツカケ」

「そんなことあったかな……」

「記憶に残らないような、ちゃっちいエピソードだから」

「……ひどい……四葉ちゃん……ひどいよ……」

「悔しかったら司が心変わりするようなラブレター、ちゃんと書いてみたら？」

そう言いながら四葉は全裸だったので着る物を探すと、一葉が用意してくれていた着替え一式を見つけた。さらに病室に専用シャワー室があることに気づいて父親に感謝しつつ入っていく。

「私がシャワーを浴びてる間に完成しておきなさい。最後のチャンスよ」

「……………」

病室に残された沙耶香と司に重い沈黙が訪れる。書く前からネタバレされたラブレターを書かされる沙耶香と、それを待たなければいけない司。

「……………」

「……………」

「……ボク、何か、飲み物でも買ってくるよ。3人分」

「うん……ありがとう……」

一人にしてもらった沙耶香は意を決して書き始める。

本当に今さらだけど、

どう伝えようか、

とにかく、

私は、

「……………う……」

書き出しが決まらない。それでもペンを取る。

気持ちを伝えることが怖い、ずっと想っていたけれど、私たち三人

の関係を壊したくなくて、

私、名取沙耶香は勅使河原司くんが好きです。

ずっと、いえ、四葉ちゃんが言ったとおり、あの修学旅行のときから好きになり、それから、ずっと好きです。

司くんが四葉ちゃんを好きなのも知ってた。

今、こうなつて強制的に、

こうなつたから伝えるわけじゃなくて、いつか、伝えたいと想つていて、それが今になつて、

今から伝えます。

好き。

司くんが大好き。

テツツーが大好き。

この気持ち、知るだけでいいから、知つてください。

ううん、知るだけでは、やっぱり、淋しいけど、もう四葉ちゃんと

テツツーは、

「……………これじゃダメ」

そこまで書いて丸めて捨てる。

私、名取沙耶香は司くんが好きです。

きつかけは、もうバラされてしまったけど中学の修学旅行のとき外人さんに道を訊かれて困っていた私をカッコよく助けてくれた、あの

瞬間、大好きになつたよ。

あれから、ずっと好き。

ずっと司くんが大好き。

だから、私のも見てほしい。

私の気持ちを知ってほしい。

これからも、ずっと好きでいるから。

勅使河原司くんを名取沙耶香は大好きでいます。

「……………ああ……………」

赤裸々に気持ちを書きつけたために頬が熱くなってしまい、沙耶香は顔を両手で覆う。シャワー室のドアが開いて、四葉が出てきた。

「書けた？」

「……うん」

「そう、見せて」

「え……四葉ちゃんに？」

戸惑っている四葉は机にあったラブレターを勝手にとって黙読していく。

「う……」

呻りつつ、沙耶香は四葉を見る。四葉はシャワーを浴びて髪を整え、可愛らしいツインテールに結っていたし私服も着こなしてる。さつきまで一週間も入浴できていなかった姿から完璧に身支度を調えた女の本気がうかがえる姿に変わっていた。それが沙耶香にも伝わってくる。

「じゃあ、次は私への手紙を書いて」

「え？ 四葉ちゃんに……」

そう言われて沙耶香は全裸だった四葉の身体やクリトリスの形、四葉の匂いと味を思い出して赤面するけれど、四葉は冷たく言ってくる。

「何、赤くなってるの？」

「だって、四葉ちゃんにラブレターって、それって、どういう意味……」

「バカじゃないの。謝罪の手紙に決まってるでしょ。私と司は付き合ってたよね。目の前で見てたはず。なのに、ちよつと意識がない間に盗ろうとした。そのことについて、きちんと謝って」

「……ごめんなさい」

「口先だけじゃなくて、きちんと書いておいて」

「……はい、わかりました」

「で、司は、どこに行ったの？」

「みんなの飲み物を買に行くって。自販機、すぐそこなわりに遅いから、たぶん、時間をつぶしてくれてるんだと思う」

「そう。……。私も行くから、戻ってくるまでに書いておいて」

「はい」

沙耶香が返事すると、四葉は病室を出て行った。

「……謝罪の手紙かあ……」

再び沙耶香がペンを持つ。

「ごめんなさい、四葉ちゃん、
四葉さん、

私は四葉さんに、ひどいことをしました。

でも、どうか信じてほしい、あれは誤解なの。

あの写真は抱き合っていたわけじゃなくて、四葉ちゃんの意識がなかなか戻らないから、私もテツツーも心配になって、泣きそうになって、それで慰め合っていただけ。それを盗撮されて、あんな風に見せつけられて、どんなにか四葉ちゃんが傷ついたかと思う。

ただ、盗もうなんて気持ちは少しも、

「……少しも……ない……わけじゃ……ないって四葉ちゃん見抜いて……」

沙耶香は隣りにある完成したラブレターと見比べる。そして、書きかけの謝罪の手紙を丸めて捨てた。

私は卑怯な女です。

四葉さんの意識がない間に、あわよくば司くんと仲良く、

いえ、もつと振り返ると、私たちのお姉ちゃんたちのこともあって、盗ったり盗られたりも男女の

「……これじゃ、責任転嫁……最低だ……」

破いて捨てた。

私は最低なことを考えていました。

意識がない四葉さんのことを心配する一方で、ずっと好きだった司くんと同じ時間を過ごせることに喜びを感じていなかったといえはウソになります。

だって、急に二人が付き合うことになって、四葉ちゃん、もともとテツシーのこと異性として意識してる風じゃなかったのに、

「……あく……違う」

また捨てる。

ごめんなさい。

意識がない四葉ちゃんのお見舞いに来ているうちに、司くんを好

きつて気持ちが抑えられなくて、もしも、四葉ちゃんの意識が戻らなかつたら、この先どうなるんだろう、つて考えたとき、私の中に悪い心が生まれました。

とても悪い心です。

でも抑えられなかった。

このまま四葉ちゃんが眠ったまままでいるなら、私が、司くんと、そう考えてしまつて、

私は最低です。卑怯者です。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

四葉ちゃんを深く傷つけたこと心からお詫びします。

どうか、こんな私ですが、これからも友達でいてください。

「……………これかな……………」

ようやく頷けるものが書けた頃、四葉と司が戻ってきた。司はペットボトルを3本、四葉は5本もペットボトルを持っている。

「おかえりなさい。どうして、そんなに買ったの?」

「仕返しするから」

四葉が5本のペットボトルを沙耶香の前に置いた。

「これ、全部、飲んで」

「これ全部……………」

沙耶香の前には500ミリリットルのボトルが5本も並んでいる。

「早く飲みなさい」

「はい……………」

司のこと以外でも四葉は怒っているようで、沙耶香は諦めて大量のペットボトル飲料を飲んでいく。

「……………はあ……………ううっ……………」

1本目は飲めても2本目から胃が膨らんでくるし、3本目になると苦しい。それでも時間をかけて5本を飲みきった。おかげでウエストがきつくなり、スカートを少し緩めた。

「……………ううっ……………」

沙耶香が飲んでいる間に手紙へ目を通していた四葉は謝罪の手紙をつきつけてくる。

「まずは、これから、そこに立って読んで」

「はい」

沙耶香は部屋の中央に立つ。四葉と司はソファに座った。司は心配そうな顔をしているけれど、女性同士の人間関係に踏み込めず、四葉から何か指示されているようで黙って座っている。沙耶香が音読を始めた。

「ごめんなさい。意識がない四葉ちゃんのお見舞いに来ているうちに、司くんを好きって気持ちを抑えられなくて、もしも、四葉ちゃんの意識が戻らなかつたら、この先どうなるんだろう、って考えたとき、私の中に悪い心が生まれました。……とても悪い心です。でも抑えられなかった。このまま四葉ちゃんが眠ったままにいるなら、私が、司くんと、そう考えてしまつて、……私は最低です。……卑怯者です。ごめんなさい！ ごめんなさい！ 四葉ちゃんを深く傷つけたこと心からお詫びします。どうか、こんな私ですが、これからも友達でいてください。ううっ……ぐすっ……ごめん、四葉ちゃん、ごめんなさい」

読んでいるうちに泣き出した沙耶香が頭を下げているけれど、四葉は冷たく怒った顔のまま、今度はラブレターを指した。

「次」

「……え……今？」

謝罪の手紙の後に、赤裸々に想いを綴った手紙を読めと言われて戸惑う。このタイミングでは読み上げにくい内容なのに、早く読みなさい、と四葉は目線で語りつつ、並んでソファに座っている司の肩に頭をもたげ、腕を組む。これでは沙耶香が想いを伝えたところで、どうにもならない陣形で、ただ単に想いを空費させるだけの、絶対的に四葉が有利で沙耶香が不利な戦況だった。

「さあ、読んでみてよ。大きな声で」

「……………」

「早く」

「……………はい……………わ…私、名取沙耶香は……………司くんが……………す
……………好きです。……………」

「続きは？」

「……………きっかけは、もうバラされてしまったけど……………中学の修
学旅行のとき外人さんに道を訊かれて困っていた私を……………か……
カツコよく助けてくれた、あの瞬間、大好きに……………なったよ。
……………あれから、ずっと……………好き。……………ずっと司くんが……………大好
き。……………だから、私のことも……………」

「最後まで全部」

「……………み……………見てほしい。……………わ…私の気持ちを……………知って
ほしい。これからも、ずっと……………好きでいるから。勅使河原司くん
を……………名取沙耶香は……………大好きでいます。ううっ……………ああっ……………」

沙耶香が手紙で顔を隠して泣く。ぽろぽろと涙が手紙に降ってい
く。大切な想いを告白させられているのに、その対象の司はソファの
上で四葉と座っていて、沙耶香から目をそらしている。答えは聞くま
でもないし、聞きたくない。四葉が冷厳と言ってくる。

「じゃあ、もう一回、謝罪の手紙、さつきより大きな声で」

「え……………もう一回？…なんで？」

「ふーん、一回で謝罪の気持ち伝わるとでも思うの？」

「……………いいえ……………もう一度、読ませてもらいます」

沙耶香が手紙を持ち替えて音読する。

「ごめんなさい。意識がない四葉ちゃんのお見舞いに来てい
るうちに、司くんを……………好きって気持ちが抑えられなくて、もしも、四葉ち
ゃんの……………意識が……………戻らなかつたら、この先どうなるんだろう、つ
て考えたとき、私の中に……………悪い心が生まれました。……………とても
……………悪い心です。でも抑えられなかつた。このまま四葉ちゃんが
……………ね……………眠ったままでいるなら……………私が……………司くんと……………
そう考えてしまつて、私は最低です。卑怯者です。ごめんなさい。ご
めんなさい。四葉ちゃんを深く傷つけたこと心からお詫びします。
どうか、こんな私ですが、これからも友達でいてください」
「なんか、さつきより気持ちがこもってない感じ」

「……ごめんなさい」

「ラブレターも、もう一回」

「……………どうして？」

「もう一回」

「はい……………私、名取沙耶香は司くんが……………好きです。きつかけは、もうバラされてしまったけど中学の修学旅行のとき外人さんに道を訊かれて困っていた私をカッコよく助けてくれた、あの瞬間、……………大好きに……………なったよ。あれから、ずっと好き。ずっと司くんが……………大好き。だから、私のことも……………見てほしい。私の気持ちを知ってほしい。これからも、……………ずっと好きでいるから。勅使河原司くんを名取沙耶香は……………大好きでいます。……………」

もう熱い想いではなく絶望と徒労感のこもった声だった。それでも四葉は容赦ない。

「また謝罪の手紙。ちゃんと反省の気持ちで」

「はい……………」

沙耶香が震える手で読み始めると、司が可哀想になって四葉の背中を静かにトントンと触れて目線で、もう許してやれよ、と伝えただけ、四葉は司の瞳を見つめ返した。

「……………」

「……………」

四葉が無表情に瞳の奥を見つめてくると、司は後ろめたいことはないはずなのに後ろめたい気持ちになって目をそらした。沙耶香の朗読が続く。

「…抑えられなかった。このまま四葉ちゃんが眠ったままで…」

読み終わっても、また四葉が冷たく言う。

「次、ラブレター」

「……………はい…」

もう沙耶香も涙が出なくなつて、静かに赤裸々なラブレターを読んだ。

「謝罪の手紙」

「…はい…」

「……」

司は四葉の表情を恐る恐るうかがう。表情は無く、まだ一欠片も許す気持ちは生まれていない様子で、司は女の嫉妬による怒りの怖さを知った。謝罪とラブレターを何度も繰り返し返し朗読させるといふ精神的リンチが続く、沙耶香の目も声もうつろになつていく。一時間以上も朗読を続けさせた頃、沙耶香が尿意を覚えて懇願する。

「トイレに行かせて」

「そこから一歩でも動いたら謝罪の気持ちさがゼロだつて見なすから」

「うう……」

沙耶香が膝と膝を擦り合わせて尿意に耐える。四葉は看護婦が残していった医療カードを指した。

「オムツがほしいなら言つて、取つてあげる」

「……」

「早く朗読を続けて。休まずに。あ、喉が渴いたなら、これ飲んでいいよ」

四葉は司が持っていた3本のうち1本を沙耶香の足元に置いた。

「あなたが大好きで私から盗ろうとした司が、あなたの分として買つてくれたお茶だから、どうぞ」

「……」

長い朗読のために喉はカラカラだったけれど、膀胱は満杯で今にも漏らしてしまいそうだった。

「朗読」

「…私は最低です。卑怯者です。ごめんなさい。…」

再開した朗読が5分もしないうちに止まり、沙耶香がブルブルと震えて前屈みになる。

「うっ…うっ…」

「一歩でも動いたら許さない」

「…うっ…」

よろめいている沙耶香は右手で強く股間を押さえた。もう手で押

さえていないと、オシッコが噴き出してきそうに立っているのもつらいのに、一步も動けない。

「朗読」

「…外人さんに道を訊かれて…うっ…困っていた私を…ううっ！
カッコよく助けてくれた、あの瞬か…ああああ！」

押さえていた沙耶香の股間が濡れていく。スカートの色が変わって内腿を薄黄色い尿が流れ落ちていき、靴下と靴も濡らして足元に水たまりをつくっていく。

ぴちやぴちや…

「ひっ…ひっぐっ…ううっ…」

沙耶香が啜り泣きだしたのに、四葉は言い放つ。

「朗読、休まないで」

「はひっ…、あの瞬間…だ…大好きに…うっうっ…わううっ…」

ぴちやぴちや…

まだ、おしっこを漏らしているのにラブレターを読まされるという拷問だった。

「早く朗読」

「…ひっうっ…なったよ。…ううっ…あれから、…ずっと…好き。…ぐすっ…ずっと司くんが…大好き。ぐすっ…だから、私のことも…見てほしい」

「見てほしいらしいよ、司。おもしろしてる姿。クスツ…バカみたい、オムツを使えばいいのに」

「四葉…そろそろ許してあげようよ」

「朗読」

「…ぐすっ…、私の気持ちを…知ってほしい。…」

ほたほた…

もう、おしっこが終わり、だんだんと下着とスカートが冷たくなってくる。気持ち悪く濡れた靴下と靴も冷たいけれど、四葉は氷のように冷たい。

「オシッコの匂い、臭いね」

「っ…ううっ…ぐめんなさい…」

「朗読」

「……これから、ずっと……好きでいるから。勅使河原……司くんを……名取……沙耶香は……大好きでいます。……ううっ……うわああ！ ひううっ！」

みじめすぎて号泣し始めたのに四葉は自分の分のペットボトルを一口飲むと、次を求める。

「ほら、次は謝罪の手紙でしょ」

「ううっ……ぐすっぐすっ……」

「もう謝罪の気持ちは無くなったの？」

「あっ……あります……読みます……ごめんなさい。意識がない四葉ちゃんのお見舞……」

四葉は朗読を聞きながら、おしっここの水たまりが拡がってペットボトルを汚してしまわないように沙耶香の足元から机の上に移動させ、それからゴミ箱を探った。ゴミ箱には沙耶香が書きかけてボツにした手紙が何枚も入っていた。それを拡げて目を通していく。

「本当に今さらだけど？ 本当に今さらよね」

「っ?! それは!」

沙耶香が手を伸ばそうとすると一睨みされて動けなくなる。四葉は推敲段階の沙耶香が心に浮かべて廃案にした考えを拾って晒していく。

「気持ちを伝えることが怖い、ずっと想っていたけれど、私たち三人の関係壊したくなくて」

「や、やめて、四葉ちゃん、それは、考えてる途中のものなの!」

「司くんが四葉ちゃんを好きなのも知ってた。今、こうなって強制的に? 強制的にねえ」

「お願い……やめて……」

沙耶香が両手で耳を塞いだ。

「テツツーが大好き。この気持ちを、知るだけでいいから、知ってください。ううん、知るだけでは、やっぱり、淋しいけど、もう四葉ちゃんとテツツーは、……って。わかっていて盗るって、どういう気分なのかな。うちのお姉ちゃんもやったけど……ひどい話だよね」

「ううううっ…」

四葉はラブレターの廃案分から謝罪の廃案分へと移る。

「私は四葉さんに、ひどいことをしました。でも、どうか信じてほしい、あれは誤解なの。…誤解って便利な言葉ね」

「読まないで、お願い！」

「慰め合っていただけ。それを盗撮されて、あんな風に見せつけられて、どんなにか四葉ちゃんが傷ついたかと思う。ただ、盗もうなんて気持ちは少しも、…少しも？　少しもないのに、謝罪の手紙を書いているの？」

「それはボツなの!! 違うの!! 読まないでよ!!!」

「え？　なんで私、怒鳴られるの？　怒られてるの、どっち？」

「……………お願いします、それは読まないでください」

「こつちの方が本音っぽいよね」

「違う！　そんなこと思っていないから！」

「思っていないこと、どうやって書いたの？　別人格？」

「……………」

沙耶香が黙り、四葉は破いてあった手紙もつなぎ合わせて読む。

「私は卑怯な女です。四葉さんの意識がない間に、あわよくば司くんと仲良く」

「っ?!　それだけはやめて!!」

「いえ、もつと振り返ると、私たちのお姉ちゃんたちのこともあって、盗ったり盗られたりも男女の……………男女の、何って書くつもりだったの、これ？　盗ったり盗られたり、当たり前前ってこと？」

「……………それは……………書き損じです」

「これって最低の責任転嫁じゃないの。ようするに、うちのお姉ちゃんが盗ったから、妹の私から盗ってもOKってこと？」

「……………そんなこと思っていないません」

「そうとしかとれない」

「……………誤解です」

「私がいなくてで姉のひどい悪口を言ってるのは知ってる。それは当然だと思う。けど、それと同じことを自分がするって、どうなの

？」

「……………同じ？ ぜんぜん違う!! お姉ちゃんは結婚してたのに盗られた!!」

「結婚してない私からは司を盗ってもいいってこと？」

「そんなこと言ってるじゃない!! ぜんぜん違うから取り消して!! お姉ちゃんが、どんな思いをしたか!! あんな盗撮写真の比じゃないのに!!」

「……………。どうして、私が怒鳴られてるの？」

「ハア…ハア…取り消して、でないと許さない」

「……………そう、じゃあ、取り消すわ。で、あなたの謝罪は？」

「……………あと、どうすれば許してくれるのよ?!」

「何その言い方」

「……………」

「朗読、再開して」

「ごめんなさい。意識がない四葉ちゃんのお見舞いに来ているうちに、司くんを好きって気持ちを抑えられなくて、もしも、四葉ちゃんの意識が戻らなかつたら、この先どうなるんだろう、って考えたとき、私の中に悪い心が生まれました」

やや棒読みになった沙耶香の朗読が再開され、すぐに謝罪の手紙が終わり、またラブレターになる。さらに謝罪の手紙になり、再びラブレターになり、その繰り返しで30分も続け、また沙耶香は尿意を覚えた。たつぷり2・5リットルも飲まされたので一度で排出しきれていなかった。

「ううっ……………トイレ、行かせて、また漏らしちゃう」

「オムツでも着ければ」

「……………」

「朗読は？」

「…とても悪い心です。でも抑えられなかった。このまま四葉ちゃんが眠ったままにいるなら、私が、司くんと、そう考えてしまって、私は最低です。卑怯者です」

また沙耶香は膝を合わせて我慢するけれど、すぐに限界が近づいて

くる。さきほど酷使した尿道括約筋が二度目の圧力に、すぐに負けてチビチビと漏れてきた。

ぼた…ぼた…

まだ濡れていた下着とスカートに少しずつ吸収され、そして浸潤して膝の裏を流れたり、ショーツの股間から直接に滴って床の水たまりに波紋を拡げている。

「あっ…くうっ…」

少し漏らすと膀胱が反応して一気に収縮をはじめ、あっさりとは括約筋が開いてしまう。

「ジョワアアア！」

熱い尿が股間とお尻にまで拡がって、沙耶香は身悶えする。

「あああ…ハア…ハア…」

「気持ちよさそうに漏らして」

「…四葉ちゃんを深く傷つけたこと心からお詫びします。どうか、こんな私ですが、これからも友達でいてください」

「サヤボボってさ、おしっこもらして気持ちよくなるでしょ？」

「…別に」

「さっき私を変なイかせ方してくれたよね。おしっこをクリトリスに当ててさ」

「……………」

「ああいうこと、自分でもやってるの？」

「……………」

もう脳が疲れ切っていた沙耶香は誤魔化す知力が働かず、目をそらしただけだった。

「やっぱり。あんなこと急に思いつかないよね、普通」

「……………」

「そんな変な癖がついたのも、あの修学旅行の帰りでしょ」

「……………」

「あの日のこと、ずっと秘密にしてくれると思ってたのに…」
「思い出すよね。帰り道の東海北陸自動車道が大渋滞してさ。あそこって一車線になる手前だっけ？ サヤボボがバスの中で中学生にもなって、おもらししたの」

四葉は拘束されていたときの仕返しのように、今は一步も動けない沙耶香の耳元に囁きかけ、フーと吐息も吹きかけた。シャワーを浴びたときに歯も磨いた四葉の口から甘い香りがして、沙耶香は目を細める。

「……………かばってくれた恩は忘れてないつもりよ……………今になってバラされると思わなかったけど……………」

沙耶香がチラリと司を見る。司は女の戦いを黙ってみているけれど、申し訳なさそうで居心地が悪そうだった。四葉が囁きを続ける。

「そうだよ。こんな小さな町で中学生になって、おもらししたら高校になってもメンバー変わらないから言われ続けるもんね」

「……………私の代わりに四葉ちゃん……………」

「うん、まあ、とっさに隠してあげようと思って、自分の喉に指を突っ込んで、サヤボボのスカートに吐いたから、おもらしは隠せたよね。その代わりに私が車酔いで吐くにしても、隣の人に吐きかける非常識な女って思われたけど」

「あのときは、ごめん、ありがとう」

「でも、本題はあのとき、おもらししてるサヤボボの顔、なんか気持ちよさそうだったんだけど？ ずっと我慢してた開放感もあったかもしれないけど、イってなかった？」

「それを話したら、もう全部、許してくれる？」

「ううん、半分まで許してあげる」

「半分……………」

「で？ イってたの？」

「……………うん」

沙耶香が恥ずかしそうに頷いた。四葉は楽しそうに微笑む。

「で？ あれから変な癖に目覚めて、自分でやってるの？ おしっこを指で押さえてクリトリスに当てたり」

「……………うん」

「司のこと考えながら？」

「……………うん」

「変態だね、それ」

「ううっ……お風呂場でしか、しないもん」

「保健室でしたでしょ。さつき私のスマホを見たら、先生から正直に言えば怒らないし秘密にもするけどベッドにオシッコしましたか、体調はどうですか、つてメールが着てた。一応、また濡れ衣かぶってあげたけど、絶対サヤボボだよね？」

「あ……あれは……ジャギさんだった四葉ちゃんが指で、龍なんとかっていう場所と、ホクト有情なんとかって……おかげで私、……バーズンを四葉ちゃんの身体に奪われた感じなんだよ。気持ちよすぎて、オシッコ出ちゃったの」

「ジャギさん……北斗神拳を、そんなことに使ったの……たしかに龍領と有情拳なら加減すれば、女の子を……ごめん、サヤボボ」

「この件で、もう半分も許してよ」

「うくん……どうしようかな、もう少しイジメるつもりだったけど」

「もう十分痛めつけられたよ。あと、どんなことするつもりだったの？」

「私がされたみたいに左右の耳から言葉責め。司にも内容は指示してあるよ。で、ラストは宮水スペシャル」

「……………どつちも怖いんですけど」

「龍領と有情拳もしてあげようか？」

「あれ、女の子の意思とか完全無視だしヤダ。快感だけど快感地獄だもん」

「四葉、そろそろ夜が明けるよ」

さつきまで怒鳴り合っていたかと思えば、急にヒソヒソと仲良さそうに会話されて司は女性の人間関係がわからなくなってくる。すでに3時を過ぎて4時になろうとしていた。

「司、こっち来て」

「あ、うん」

呼ばれて司も近づいた。

「サヤボボ、もう手紙は捨てていいから両手を頭の後ろで組んで」

「……………うっっ」

言われたとおりに沙耶香は後頭部で手を組む。沙耶香はキャミソールを着ていたので両腋が露出された。

「お見舞いにキャミソールで来るって盗む気まんまんだよね」

「うぐ……もう許してよ。ごめん、四葉ちゃん」

「司、言っておいた、あれやるよ」

「あれ、か……」

司は気が進まなさそうに少し顔を赤くした。そして司と四葉が顔を近づけて沙耶香の両腋の匂いを嗅ぐ。

「ちよ……、ヤダ！ 何してるのよ?!」

「仕返し♪」

「ううぐ……四葉ちゃんみたいに、いい匂い、しないもん」

「どんな匂いだったか、司と耳元で囁いてあげる」

「絶対ヤダ!!」

「キャンセルしたい?」

「お願いだから、もう許して!」

「じゃあ、宮水スペシャルいきます」

「それも嫌な予感しかない」

「予感や予知ができるようになったら一人前だよ」

そう言いつつ四葉は夜食にと買われていたコンビニのオニギリを開けると、半分に割った。

「はい、これを口に入れて、よく噛んで」

「……………やらないとダメ?」

「ダメ♪」

「……………」

諦めて沙耶香が口を開けると、オニギリの半分が挿入される。

「飲み込まないで、よく噛むんだよ」

「……うぐ……うぐ……」

「よく噛めたと思ったら、自分の両手に出してみて」

「……………あ……」

でろり、と咀嚼物が沙耶香の両手に落ちる。白米と海苔、沙耶香の唾液が混じり、少し泡立っていて見た目にキレイとは言いにくい。

「じゃあ、私も」

今度は四葉が残りの半分を口に入れて噛む。

「ん〜♪」

ほどよく噛むと、自分の両手に吐き出していく。

すーっ…

咀嚼物はキレイに噛み込まれ、白米と海苔の混じり方もあざやかで、唾液は泡立たずに艶やかに光っている。

「おおっ……さすがプロ…」

司が感心している。二人の咀嚼物は、まるで寿司職人が握った物と、素人が初めて握った物が違うように雲泥の差があった。こんなことにも技術の洗練があるのかと、驚くほどの違いがある。

「こんなに差があるのか……」

「こんなことさせて、どうする気よ、これ」

沙耶香が困った顔で咀嚼物を手で包んでいる。かなり見られたく無さそうだった。

「司に食べてもらおうの」

「ええ?!」

「はい、どうぞぞ」

四葉が笑顔で差し出すと司は赤面しつつ、四葉の咀嚼物を四葉の手から食べる。

「フフ、くすぐりたい」

「……ぐちそうさま」

「美味しかった?」

「……うん……けっこう…」

実は子供の頃から食べてみたいと思っていたので、無表情を装おうとするものの顔が嬉しそうだったし、ズボンの股間が勃起で膨らんでいる。

「はい、サヤボボの番」

「わ、私の……え、でも……こんな汚い……」

沙耶香が戸惑っている。

「司、さっきのラブレター、率直に、どうだったの?」

「それは……まあ……嬉しかったというか……女の子に好かれて、悪い気はしない、というか……ありがとう、というか……まあ……そんな感じ」

「だってさ」

「四葉ちゃん……」

「ほら、手を出して、司に食べさせて」

「……うく……汚いよ、こんなの……それに……間接キスに……」

「食べるか、食べないかは司しだい。さ」

四葉が沙耶香の手首をもって咀嚼物を司の方へ向けさせる。

「司、どうする？ 食べる、食べない？」

「……じゃあ」

司は沙耶香の咀嚼物を沙耶香の手から食べた。

「……テツツ……」

恥ずかしいのに、ものすごく嬉しくて沙耶香が涙を浮かべた。

「司、感想は？」

「これも……美味しかった」

赤面しながら司が飲み込む。やはり、やや勃起している。

「……四葉ちゃん……どういうつもりなの？」

「バックアップっていう考え方も、悪くないかなって」

「バックアップ？」

「もしもさ、私がお母さんみたいに早く死んじゃったら、残された司って淋しいでしょ？ お父さんも東京で済ませてるみたいだけど。」

「……そ他人より友達の方がいいかなって」

「……女として、それでいいわけ？」

「たった一つしかないパンをめぐって殴り合うか、分け合うか。ほんの小さな島一つをめぐって核戦争をするか話し合うか。かけがえのない男の子をめぐって、かけがえのない友達をなくすか、仲良くするか。答えは、そう難しいことじゃないと思うよ」

「……」

「こういうものも、あるしね」

四葉が司のポケットからコンドームを出して見せた。沙耶香が悩

む。

「うくん……………少し考えさせて」

「何年でも、どうぞ」

朝日が昇って病室に光が入り、四葉に後光が差したように見えた。

一ヶ月後、高校の五時間目に、きちんとツインテールに結い上げた四葉は窓際の席で授業を受けていたけれど、なにかが起るような気がして窓から空を見上げた。

「……………入れ替わり？　じゃ……………ない……………何かな……………」

空は良く晴れていて平穏だったし、再び誰かと入れ替わるような予感でもないのに、なんだか胸騒ぎがする。

「うくん……………」

頬杖について胸騒ぎの理由を考えてみる。その次の瞬間、胃袋が突き上げられるような強烈な吐き気が襲ってきた。

「うっ?!」

これは我慢できない、吐く、とわかるほど強烈だったので四葉は立ち上がってトイレに走ろうとしたけれど、間に合わない。

「うっ……………うええええええええ!」

ぼたぼた……………

さつき食べたばかりの昼食が嘔吐物になってドロドロと四葉の両手に広がる。机や教科書を汚さないようにと両手で受けている。

「ううっ……………おええっ!　えぼっ!　うええええええええっ!」

ぼたぼた……………ビチャビチャ……………

小さな手では受け止めきれず、零れて制服の袖を汚し、机にもビチャビチャと嘔吐物が落ちる。クラスメート達が気の毒そうに四葉を見ている。先月、入院していた話は全員が知っているのです、まだ体調が回復しきっていないのに無理して登校していたのかな、と可愛らしい女子が嘔吐物で汚れていくのを生温かい目で見つつも、やっぱり何人かは宮水神社の祭りのことを思い出している。ユキちゃん先生と保健委員はバケツと雑巾を用意するために走り、沙耶香と司が心配

そうに歩み寄る。

「おええっ……おええっ……うえええっ……」

もう胃が空っぽになっても四葉は吐いている。苦しくて涙がにじみ、咳き込んで鼻水も垂れる。

「ハアハア……おええっ……うっ……うええっ……ケホツケホ！」

「四葉」

「四葉ちゃん……」

司が心配して背中を撫で、沙耶香は誰にも聞こえないほどの小声で四葉に囁く。

「本当に気持ちが悪いの？ それとも、みんなの前で嘔吐プレイしたいの？ 昨日、さんざんミーちゃんオムツに気持ちよくおもらしさせてあげたから、今日は私の順番だと思って朝からオシッコ我慢してるのに、順番飛ばしなの？」

「うっ……うええっ！ ……ほ……本当に……うえっ！ おええ！ 気持ち悪い……おええ！」

胃が空っぽになっても、指を喉に入れているわけでもないのに、嘔吐が終わらない。

「うええっええ……げえ……ケホツ……ハア……ハア……く、苦しい……息が……うえ！ うええ！ ひーハア！ うえええっ！」

大きく舌を出して吐いてみても、唾液と鼻水が垂れるくらいで何も出てこないのに、それでも四葉は吐き続けて、呼吸が苦しいのと腹筋が何度も強く収縮するために、オシッコも漏らしてしまう。

「ジョー！ ジョわ！ ジョジョ！」

四葉が嘔吐するのと同じタイミングで小水が噴き出して、前屈みで嘔吐しているのでショーツで吸収しきれなかった尿失禁が内腿を濡らしたり、ショーツから滴って床に落ちるのが、よく見える。気の毒そうに見ていたクラスメートが、ますます気の毒そうに見てくれる。今は嘔吐が苦しいだけで本人も必死でも、それが終われば羞恥心で苦しむことになるだろうと同情してくれている。ほとんどのクラスメートが同情している中でも、町営の子はニヤついて見ている。スマフォで四葉の姿を撮影しようとして、ユキちゃん先生に怒鳴られてい

る。

「こんなに苦しんでる女の子の姿を撮るなんて!! 人として最低です!!」

「あ、差別発言」

「そういう意味じゃありません!! 撮るのをやめなさい!!」

「おええっ! うええっ:ハア:ハア:うっ:うええ! ゲホツ:ゲホっ:ううっ:おえ:おええっ!」

引き続き嘔吐が苦しすぎて四葉は嘔吐物を受けていた手で胸を押さえてしまい、制服全体がビチョビチョに汚れる。さらに空嘔吐が続いて大便まで失禁してしまう。

ブブっ! ブリっ! ブリっ!

大便も嘔吐と同じタイミングで肛門から出てきて、音が響いて、匂いも拡がり、四葉の白いショーツが茶色く染まり、モコモコとお尻のあたりが膨らんで、受け止めきれなかった分がショーツの横から溢れ出して腿を汚しながら床に落ちていく。

「ハアハア! うえ! うう:おええ:ハアーひ:ハアーひっ:おえっげえええ!」

四葉は涙もポロポロと零して、また空嘔吐する。

「おえっ:おおええ:」

クラスメート達は心底気の毒そうに四葉を見守る。盛大な嘔吐の上に大小便まで教室で垂れ流してしまい、もう不登校にでもなるかもしれない、と同情していた。けれど、町営の子は嗤っていた。そして、ごく少数の生徒で歳の離れた姉が妊娠したことがあったり、大きく歳の離れた弟や妹がいる者は、女性が大小失禁するほど嘔吐し続ける姿を見たことがあって思い当たることがあった。

「ハアーひっ:ハアーひっ:ぐすっ:ぐすっ:」

やっと嘔吐衝動がおさまってきた四葉が羞恥心にさいなまれて泣き出すかと周囲は思っていたのに、幸せそうに微笑んで嘔吐物と糞尿にまみれた身体で自分の胸を抱き、下腹部を優しく撫でた。

「司、赤ちゃん、できたみたい」

汚れた顔なのに笑顔が誇らしくて輝いて見える。

「なっ……マジ、で…」

「あつ、あとね。言い忘れてたけど、お姉ちゃんが勅使河原姓になったんだから、司は宮水姓でお願いね。どっちの家も絶えないように」

「………わかったよ、もう、何もかも、四葉の思うとおりでいいよ」

「四葉ちゃん………私はお妾さん、つてことなのね………」

司と沙耶香は遠い目をして、飛騨山脈を見上げた。そして、全身嘔吐物と糞尿まみれでプロポーズした女の子のことよりも、それを受諾した司のことが、ゲロ養子と言われて長く語り継がれた。

大晦日、ケンシロウは年越し派遣村に辿り着いていた。

「……み……水……」

水を求めて手を伸ばし、ガクつと崩れる。薄汚れた毛布のような物をマントのように身体に巻いて寒さをしのいでいる。

「よかったら、どうぞ。公園のトイレの水道で汲んだものだけ」

まだ20代の青年が同じような境遇にいて、同情して声をかけてくれる。

「あ……ありがとう」

礼を言ったケンシロウは使い古されたペットボトルに入った水を飲む。

「ありがとう……生き返ったよ……」

「いえ、別に……」

「自分は田中ケンシロウ。君の名は？」

「名………名前か………もう長いこと、バイト君とか、ハケンさんって呼ばれてき。もう自分の名前なんて、意味ないのかなって」

「こんな時代でも希望は捨ててはいけない」

「へっ、オッサンこそ、いい歳だろ………すんません。つい、心がすさんで………勢いを増した向かい風の中を、進んでるような、時代に嫌気がして」

青年は配給された毛布を寒そうに掻き寄せた。ケンシロウが問う。

「君は、なぜ、ここに？」

「テイヤマト特需が終わって急に職が減ったのは、みんな知ってるでしょ。それっすよ。まあ、生活保護って手もあるんですけど、オレ、オヤジが霞ヶ関とかに勤めてて、そんなん申請したら一発で連絡いくし。オヤジに、そんな目で見られるのイヤだし。今はマイナバーなんてかで、離婚した相手にまで連絡いくし……そうなるくらいなら死んだ方がマシっすよ」

青年は痒そうに頭を掻いた。そこへ、大柄な男が駆けつけてくる。

「おい！ 探したぞ、ケンシロウ！」

「ジャギ兄さん……」

「お前にいい仕事がある」

「格闘技とかは、もう……、組織で行動するのも苦手で……」

「ああ、そう言うだろうと思っただけ。ごく普通の交通整理の仕事だ」

「運転免許も持ってないから、そういう仕事も……」

「大丈夫だって！ 片側通行にしてるとき、片方を止めて、もう片方を流す。で、しばらくしたら、反対を流す。それだけだ。今は不況だけだよ、ちようど後援会に入ってくれてる建設会社の社長がよ、空きがあるからって話だよ。やってみろよ、な？」

「……やってみようと思いますが……彼も、仕事がないようなのです」

ケンシロウが青年を指した。

「なんだよ、友達か。若いな」

「さつき、水をください」

「お前、あいかわらず甘いな。それだけで恩に着やがってよ。そこまで甘いと、こんな時代でも生きていけねえぞ。まあ、いい、あと一人ぐらい、なんとかなるだろう」

「ありがとう、ジャギ兄さん。君、いつしよに行こう」

「……オレっすか……」

「ああ」

「……嬉しいっすけど……」

「君の名は？」

「……………立花瀧つす」

瀧が涙を滝のように流しながら微笑んだ。

二ヶ月後、放課後の高校の進路指導室でユキちゃん先生と四葉が向かい合っていた。

「宮水さん、言いにくいことですけど、あなた、妊娠されていますよね」

「何も言いにくいことはありませんし、妊娠しています。それが何か？」

「……………まだ、高校生じゃないですか」

「この国の法律は16歳から結婚できるはずですよ」

四葉は身体を冷やさないようにストロブのそばへ、パイプ椅子を移動させてから、まだ教師は立っているのに先に座った。

「それで、先生のお話というのは？」

「……………今の時期、三年生からの進路を決定していくのですが、宮水さんのご意向をうかがっておきたくて」

「つわりもおさまってきたから、出席日数が足りれば、この高校を予定通りに卒業して通信制の大学で歴史を学び、育児の段階を見て、神職の資格を取る大学を目指します」

「……………おうちを継がれるのですね」
「ええ」

「た……………ただ、ご出産が、……………いつになりますか？ 三年生のうちですよね」

「予定日は8月で、ちょうど夏休みなので麓の病院で出産します」

「……………。……………いい……………言いにくいことなんですけれど、妊娠中の安静を保つためにも、一度、ご家庭に入って、それから通信制の高校などを卒業されるのは、どうでしょうか？」

「校長と教育委員会に自主退学してもらえって指導されたの？」

「……………」

生徒にウソはつきにくいのでユキちゃん先生は目をそらして沈黙し、大人らしく否定も肯定もせず切り口を変える。

「つわり、まだ残ってますよね。ときどき教室で吐いたりして、恥ずかしいでしょう？ 一部の心ない男子から汚いなんて言われてイヤな思いをしていませんか」

「放射性物質の汚さ、しまつの悪さに比べたら、嘔吐物なんて身体に塗ってもいいくらい、汚くも何ともないですよ。本当に汚いものは10万年も浄化にかかる。それに、先生の論法は一部の心ない男子が言い立てるので、私は登校しない方がいいという、むしろ彼らの理屈を受け入れるものです。恥ずかしい、恥ずかしくないという話でも、私は妊娠を誇らしく思っていますから、何一つ恥ずかしいと思っていない」

「……………。……お相手は、勅使河原くんでしたよね」

「ええ」

「校則では不純異性交遊は禁止されているんですよ」

「純粹に子供がほしくて挿入してもらいました」

「っ、…そ…」

「挿入も禁止されていますか？」

「……………」

ユキちゃん先生は赤面して、また切り口を変える。

「体育も大変ですよ。三年生は体育祭で組み体操もあるし、マラソンも妊婦さんには危険じゃないかと…」

「ごく少数ですが、他県では妊娠した生徒に配慮して無理のない範囲で体育に参加させ、単位を認めて学業と妊娠を両立させて卒業させている例もあるそうです」

「……………うちの学校では前例がないので……………」

「私が最初の例になれば済むことです」

「……………、……………」、校長先生から、他の生徒に悪影響があるから……言われて……るんですよ」

「私の存在は悪ですか？」

「……………そういうわけじゃ……………」

本人の説得が難しそうなので、また切り口を変えてみる。

「お父さんは何とおっしゃっていますか。……懐妊のこと」

「お前の好きなようにしなさい、と。父のところにも校長と教育長がそろって町長室に来て何か言ったらいいですね。お姉ちゃんから聞いています」

「……………」

この土地での最高権力者の娘に、どう言って自主退学してもらうか、いい案が浮かばずに黙り込んでいると、四葉がまっすぐに瞳を向けて問う。

「どうして同じ女なのに、一度のおめでどうもなく追い出す話ばかりなんですか？　まず一度、この子と私に、おめでどう、って言ってもらえますか」

「…………すみません。…………おめでどうございます」

「じゃ、もういいですね」

四葉が勝手に話を終わらせて席を立った。

「遅くなる前に帰ります」

「あ！　いえー！　でも、まだ！」

「まだ、何か？」

四葉が睨みただけれど、ユキちゃん先生も強い気持ちを込めて四葉を見つめてくる。

「もう一つ大事な話があります」

「どうぞ、手短かに」

「宮水さん、あなたは名取さんをイジメていますよね？」

「いいえ」

「……………」

即答されて出鼻をくじかれたけれど、問題がイジメなので引かない。

「複数の生徒からの証言があります」

「どんな？」

「最近、名取さん、ときどき授業中や休み時間に失禁してしまうことがあって、その前に宮水さんがお茶やジュースをペットボトルで飲ませていたって。とても悪質なイジメですよ、それは」

「ああ、その話ですか。あれは学校のトイレが汚いから、あまり使いた

くないね、って二人で言ってるから。飲み物をおごったり、おごられたりするのには、ごく普通のことですし」

「そんな言い訳が通ると思うの。昨日だって私の授業中に名取さん、失禁してしまって、とても可哀想だったのに、あなた、友達を心配してあげるどころか、なにか囁きかけて嗤っていましたよね」

「気にしないでいいよ、って言っただけです。スマイルで」

「今後、名取さんが失禁することがあったら、あなたがイジメていると断定します」

「……………」

「妊娠の件も含めて、あなたとは何度かお話し合いが必要なようですね」

「……………はああ……………」

四葉がタメ息をついて、うなだれ、そして自分のスカートをめくってみせる。

「先生、これ、見てもらえますか」

四葉はスカートの中に大人用のSサイズのオムツを着けていた。

「私も漏らすことがあって、オムツしてるんですよ」

「……………あなたも、誰かにイジメられてる被害者なの？ トイレを使わせないとか、そういうことをしている人たちがいるの？ それなら先生、協力しますよ」

「何もかもイジメで考えないでください。単に学校のトイレが汚くて使うのがイヤだから一日我慢してると、たまに失敗するじゃないですか。私はオムツを着けるけど、サヤボボ、名取さんはオムツは好きじゃないみたいで。まあ、私の場合、子宮が大きくなってきて膀胱が圧迫されるから括約筋が弱いのもあってクシャミくらいで漏らしたり、吐くと必ず漏らしてるから、その対策っていうのもありますけど。とにかくイジメじゃないです、これで納得してくれましたか」

四葉は少し赤くなった顔をしてスカートを戻した。

「二人とも悩んでるの？ たしかに、あまりキレイなトイレじゃないですけど、だからって…………オムツを着けていたり、おもらししてしま

う方が恥ずかしくくないの?」

「恥ずかしいですよ……今だって……もう我慢の限界……あ、もう無理……」

四葉は括約筋の力を抜くと、オムツの中に放尿していく。

「ジヨボボボボボ……」

勢いよくオムツに尿が当たる音が響いて生徒が失禁してしまったのがわかるので、かなり困惑した。

「み、……宮水さん、……」

「ぐすつ……ほら、先生が、いつまでも、おうちに帰してくれないから……ぐずつ……もらちちゃった。今日は我慢できゆと思っちゃの……ひっく……うう……漏らちちゃったよお……先生のせいで……うう……」

四葉は嘘泣きしながら両手で顔を覆った。

「ご、ごめんなさい。言ってくればトイレに行ってもらったのに」

「うう……だかや、そのトイレがヤなお……おうちに帰ってしちやいの……あううつ……」

「そんなに泣かないで、宮水さん」

「ぐすつ……ひっく……このままじゃ恥ずかちくて帰えないよ……先生、オムツ替えてくだちやい」

四葉はカバンから替えのオムツとウェットティッシュを出した。

「替えがあるの……よかった。……」

とはいえ、身体に不自由のない高校2年生のオムツを交換してあげる必要性に疑問を覚えていると、また四葉が泣く。

「気持ち悪いよお……かゆくなるよお……ひっ……ひっく……早く替えてくだちやい」

そう言つて四葉は机の上に寝転がると、M字に開脚してオムツ交換の姿勢になる。スカートがめくられて尿で膨れあがったオムツが丸出しになった。

「ぐすつ……ひっく……ううつ……早くう……うつ、うえええん! うえええん!」

「宮水さん……」

まるで赤ちやんみたい、と言いそうになって、この生徒が母親を早くに亡くしていることを思い出した。父親とも別居していると生徒記録にあった。甘えたい年頃に両親から離れていて、なのに成績は学年トップで異常に妊娠にこだわることも合わせて、いびつに成長した心理を想像させてくる。さつきまで反抗的だった思春期らしい女子高生から一気に幼児語を話す児童になり、もう今は乳児のようになっている。

「うええええん！ ふええええん！」

「わ、わかりました。すぐに替えてあげますから、泣かないで。ほら、よし、よし」

保育士免許はもっていないけれど、オムツ替えくらいはできそうなので四葉の濡れているオムツを開いて脱がせる。

「…ぐすつ……先生…ありがとお……ぐすつ……」

「……………」

オムツを開くと、ふわりと四葉の尿が匂いを立ち上らせてくる。それは甘い匂いで、ユキちゃん先生の目が酔ったような色合いに変わっていく。

「……………」

「……………」

ウェットティッシュで四葉の陰部を拭こうとしていた手が止まり、その匂いに魅せられて、まるで蝶が花へ吸いつくように四葉の陰部を舐めてしまう。

ペロ…ペロ…

強い匂いが立ち上っている間、まるで酔ったように四葉の股間を舐め続け、しばらくして正気に戻ったユキちゃん先生はスマフォを向けられていることに気づいた。

「え……………」

「今のはセクハラですよね」

四葉は動画を撮り終えてスマフォを見せつけてくる。

「…わ…………私…………何をやって……………」

茫然自失で首を振っているけれど、四葉は追い込む。

「同性でも、こんなところ舐めてくるなんて」

「ち、違……わ、…私は…」

「去年から法改正があつて、教員の生徒へのセクハラは全国ネットで情報が共有され、名前を変えて遠方でも再就職できなくなりました。教育界から永久追放されるそうです」

「っ、ま、待って！ 違うの！ これは何かの間違い！」

「三つ条件があります。一つ、私が卒業できるように体育や出席日数など、十分に配慮されるよう全面的に協力してくれること。二つ、つわりが始まった日に私が吐いてる動画をユーチューブにあげている生徒がいるみたいです。これを探し出してデータを抹消させ、テキストな理由をつけて退学にすること。三つ、今後は校内でのスマホなどによる動画の撮影を原則として禁じる校則を提案すること」

「……………」

「三つの条件が達成され、私が卒業証書を受け取ったら、あなたの目の前でこのデータを消してあげます」

「……………」

「もう、こんなことに時間を取らせないください。私は人生の時間、一瞬一瞬を大切にイキたいんです」

四葉は教師からの返事を待たず、新しいオムツを自分で着けると進路指導室を出て、外で待つてくれていた司と沙耶香に合流して帰宅した。

「二人とも今夜は、うちで食べて行ってよ。お婆ちゃんと協力して作った煮物があるから。食べる人間が二人だと、なかなか減らないの。私、あんまり食べると吐くし。お婆ちゃんは年相応に食が細くなってるから」

「二人が作った煮物か、それは、うれしいな」

「うん、おおきに。私も何か手伝うよ」

四人での楽しい夕食を終え、一息ついてから司と沙耶香を見送るために、みんなで外に出たときだった。一葉が星空を指して言う。

「今夜は、あの星が見えるねえ」

「どの星のこと？」

四葉が問い、一葉は北斗七星の傍らに輝く星を指した。

「ほれ、あの7年前、町のみんなが見える見えないで話題になった星よ」

「それって……」

「あの北斗七星の少し横に。今夜は、よう見えるよ。7年前にも見えた気がするような、見えなかったような、あの星が」

一葉が指している星は、ティヤマト彗星落下の年、町民の多くが見ていたけれど、落下後には見えなくなった星のことだった。

「みんなで、見えるの、見えないの、言うた、あの星、今夜は、よう見えてるよ、四葉にも見えるかい？」

「……………」

四葉は北斗七星を見て、まだ見えない星が祖母には見えているのだと知り、そつと抱きつくくと下腹部を一葉の手に擦り寄せる。

「五葉、一葉お婆ちゃん…ひいお婆ちゃんの声、聞こえてる？」

「きつと聞いてくれてるよ。それにしても、今夜は星空がキレイで、まるで、ほしのこえが聞こえるようやね」

山奥の田舎、それも真冬なので星空は盛大だった。四葉が涙を零さないように言う。

「死兆星…その、ほしのこえは、あと5年、ううん、せめて3年、聞かないでほしかった」

そして四葉は90歳になった祖母と自分の身体が冷えないうちに家に入った。

副題 「新世紀救世主伝説 北斗の拳四葉（ケンシヨウ）」完